
魔法少女リリカルなのは○○○

永遠の仮面戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは○○○

【Nコード】

N3883P

【作者名】

永遠の仮面戦士

【あらすじ】

一通りコアメダルを手にした仮面ライダー○○○はヤミーとの戦いで発生した黒い空間に吸い込まれて魔法少女リリカルなのはVidの世界へ飛ばされる

設定資料・銀梓コアメダル編（前書き）

これはタイトル通り、セントやバンク達のメダルです。ネタバレも
あります

注意してください

設定資料・銀梓コアメダル編

紫・幻獣系メダル（セント）

ユニコーンメダル

ユニバガス専用メダル。頭部に巨大な角を持つ

バイコーンメダル

ユニバガス専用メダル。両腕に二又ジャベリン、デュアルスピアを天より召喚する

ペガサスメダル

ユニバガス専用メダル。脚にペガサスの翼、ペガウイングスが付いており、それを巨大化させ飛翔する事が可能

赤・鳥系メダル（バンク）

ホウオウメダル

炎を制御する力を持つ。頭部から生えている髪のような長い鳳凰の尾には烈火の力が宿っている

カラスメダル

メダグレンバーを使用する為には必要なメダル。巨大な漆黒の翼カラスウイングを備えており。飛翔して敵を貫くこともできる

ペンギンメダル

マグマの上でも歩けるようになる。かかとはペンギンの嘴をもした突起がついており、かかと落としを繰り返せば大ダメージを与える

緑・虫系メダル（ドル）

カブトメダル

鋭い角で敵を突くことが可能。角には常に雷が流れている

トンボメダル

トンボトンファーを出現させるメダル。トンファーについたトンボの羽を広げるで強力な一撃を繰り出す

クモメダル

足の裏にクモの巣が付いており、地上のあらゆる物に吸着できる

黄・犬系メダル（ポンド）

ハイエナメダル

地上で鼻が良くきき、ヤミーの臭い等を一瞬で覚える

キツネメダル

キツネクローを装備するメダル

オオカミ

チーターと同等かそれ以上の脚力を備える

灰・げっ歯系メダル（バーツ）

コウモリメダル

暗い空間などで見えぬ敵を音波を発して探る事が可能

モグラメダル

モグラドリルを出現させる。ダイヤモンドを砕くほどの硬さがある

ムササビメダル

脚にムササビの羽を広げる事で、空気の抵抗を無くす

青・水棲系メダル（フラン）

サメメダル

コアメダルとセルメダルの臭いをかぎ分ける事ができる

エイメダル

エイスティングを出現させる。エイスティングにはヤミーやグリーンに対して毒の要素が埋め込まれている

イカメダル

左右の足に合計10本の足と、つま先にイカの頭をもした槍がついており、伸縮自在に伸び縮みする

橙・爬虫類系メダル（ユーロ）

ハブメダル

額と顎の2カ所にハブのキバがついており頭突きをすれば対象者に毒を回らせる事ができる

クロコダイルメダル

初期は肩になんでもかみ砕くクロコファングが装備されており、手まで移動し、あらゆる物をかみ砕く事ができる

トカゲメダル

足にエリマキトカゲのエリマキをかかるとトカゲの尻尾を持ち、足払い等の攻撃を得意とする

黒・ヒト（ウォン）

全てが謎のコアメダル。全21種類の銀枠のコアメダルの集合体。3枚揃いし時所持者の真の欲望が発動する

設定資料・銀梓コアメダル編（後書き）

以上がメダルの設定資料です

おかしなところなどがあれば感想に書いて教えてください
それでは失礼します

設定資料・オリキャラグリード編

ドル、フラン、バーツ、ポンド

ドル（津田健次郎）…カブトムシ×トンボ×クモ

銀粹の虫系グリード

短気な性格で、よくキレる。フラン、ポンド、バーツにとってはリーダーのような存在であり、オーズやウォン達とは敵対している。

武装はセルメダルでランスの創造と、両手のクロー

現在は、フラン、ポンド、バーツを取り込みオーズやウォン達から各コアメダルを回収しようとしている

ヤミータイプ・セルメダルを対象に投げ込み、対象の欲望を糧としヤミーを作り出す。3人と融合してからは全員の方法で作り出す事が出来るようになった

フラン（浅野真澄）…サメ×エイ×イカ

銀粹の水棲系グリード

お姉さんキャラで仲間3人とは仲がいい。サブリーダー的な存在。

武装は得になく、腕から水を発射する事ができる

ヤミーのタイプ・対象となった人間にヤミーの卵を生み付ける。大きさより数のタイプ

バーツ（渡辺久美子）…コウモリ×モグラ×ムササビ

銀粹の齧歯類グリード

悪ガキのような性格ではあるが、4人の中で一番仲間思いなグリード
武器は両腕の巨大な爪である

ヤミータイプ・ドルと同じで対象にセルメダルを投げ込んだの創造と、自らにセルメダルを挿入して自分のヤミーの創造の二種類を使用できる

ポンド（山口勝平）…ハイエナ×キツネ×オオカミ

銀枠の犬系グリード

巨大な針を複数召喚し敵を貫くことにたけている

主力武器は弓であるが、1対1や1対複数の戦いでは使用しない

脚力に優れ、敵を翻弄させることもできる

ヤミータイプ・対象にセルメダルを投げ込みヤミーを寄生させる。

だが、カザリよりも弱く、グリードなら無理矢理に剥がすことができる

管理局、オーズ一派

セント（遊佐浩二）…ユニコーン×バイコーン×ペガサス

銀枠の幻獣グリード

馬のデザインの物をよく着用する。封印から解放されてからの数日後、ドル達の総攻撃を受け品塩状態になるも、ユーノに救われる。

その後管理局に職付をし司書から司書長、現在は執務官となっている。IQは300くらいと自負している。が、キレると超怖い

現在はウォン一派を倒すためにPROJECT INP、Arcana（プロジェクト、アルカナ）や魔力を使ったカンドロイド等も彼の作品

ヤミータイプ・無機物にセルメダルを挿入して一匹のヤミーを創造する。だが、彼は滅多なこと以外ヤミーを造らない

バンク（川澄綾子）／ルーヴィーズ…ハウオウ×カラス×ペンギン
銀枠の鳥系グリード

冷静な性格で、何事にも動じない精神力を持つ。実は800年前にセントと求婚しており、現在はセントと共にユーノの家で生活中。元はウォン一派に潜入しウォンの企みをセントに報告する役目を受けていたが、自らの娘のような存在のリン（ペンギンヤミー）をウ

オンの気まぐれで殺され怒り狂い襲い掛かるがユーロの妨害で彼女と戦う事になり戦闘のさなかユーロに3枚のコアメダルを奪われ海に落とされてしまう。ちなみにセントやアंकの事になると性格が少し変わる。彼女は赤いコアメダル5枚で変身する事の出来る、仮面ライダーブルーヴィーズという存在でホウオウ、カラス2枚、ペンギン2枚で基本フォームから、タカ、クジャク、コンドル、カラス、ペンギンで最強フォーム、インフェルノフォームへと変身可能。武装はルーヴィーズ時の主力武器、メダグレンバー。メダジャリバーと同等かそれ以上の切れ味を持つ。別名、不死鳥のエクスカリバーやミイタイプ・自らにセルメダルを挿入しヤミーを作り出す。バンクの作る鳥系のヤミーは特殊で知能が高く、グリードのように人の姿にも変身する事が出来る

ウォン一派

ユーロ（喜多村英梨）…ハブ×クロコダイル×トカゲ

銀枠の爬虫類系のグリード

銀枠のコアのグリードで1番腹黒い。現在すべてが謎で、ウォンを閣下と呼ぶ。彼女の作るヤミーは特殊で一定期間ヤミーの中でセルメダルを熟成させると単位の枚数を使用することで異次元の扉を出現させる事ができる

彼女は体の一部だけ部分展開して戦うことができ、ほとんど怪人体にはならないのは、その姿を嫌っているためである

ヤミイタイプ・対象にメダスロットを出現させセルメダルを挿入する。その後対象の人物に爬虫類の痣を浮かせ、ヤミーの親となった人間は意識をそのヤミーに宿す事になり、親の悪望を叶える

ウォン（神谷浩史）／グリーズ…ヒト

存在するはずのないヒトのグリード。63枚全ての銀枠のコアメダルを吸収することで真の姿と力を得る

グリードとしての姿はなく、仮面ライダー暴君^{タイラント}として戦う

武器であるメダガブリューのティラノザウルスの頭の変りに角が生えた髑髏になっている斧、メダスカラーを使用する

メダスカラーは合計4種類の必殺技を発動できる、破壊の刃

^{グリード・クリエーター}

欲望創造という能力を持ち1度だけ、グリードを創造できる（ただし、存在したグリードのみ）

ヤミータ입・別のグリードが作ったヤミーを上書きして新しいヤミーを作り出す。その後生贄となったヤミーの前世の記憶は消滅する

カウント・ザ・メダル1000と始まりと黒い空間（前書き）

これは仮面ライダー000と魔法少女リリカルなのはViViDと
のクロスオーバーです

楽しく読んでいってください

カウント・ザ・メダル1000と始まりと黒い空間

仮面ライダー000こと火野映司

彼は欲望を持たず、少しのお金とパンツがあればいいとゆう変わり者だと皆は思うだろう

だが彼は人の欲望から生まれた怪物グリードと奴らが生み出す下僕ヤミーと今日も戦っていた……

【クスクシエ・屋根裏】 15…36

そこにはコアメダルの枚数が少ないため完全復活することが出来なかった、グリードの鳥系幹部のアंक

彼は完全復活出来なかったためにカマキリヤミーが起こした事件で瀕死の重傷を負った刑事、泉信吾の右腕に取り付き彼の精神と肉体を完全に支配したグリードである

アंक「ん？これはヤミーかメダルを稼ぐチャンスだな」

そしてアंकは下の階にいる映司を連れヤミーの元に向かった

彼らは自動販売機型のメカ、ライドベンダーにセルメダルを投入しバイクに変形させ現地に向かった

そこにはヤミーが一体暴れていた

見た目は蝙蝠の形をしている

映司「アंकあれか例のヤミーって？」

アंक「ああ、だがなんだあのヤミー俺達の中にあんなタイプを出せる奴はいないはずだ。まあいい映司とつとあいつかたずけてメ

ダルに両替してやれ」

アंकは右腕から赤のタカのコアメダル、黄のトラのコアメダル、緑のバッタのコアメダルを1枚ずつわたした

映司「わかってる」

映司は手にオーズが変身のさいに装着する物オーズドライバーを腰にセットした
ドライバーに3枚のメダルをタカ・トラ・バッタの順番でセットし
右の腰に付いているOの形をしいていオースキャナーを手に取り
3枚のメダルをスキャンするようにしスライドさせそれを胸の元に
持ってくる

映司「変身!!」

オースキャナー『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!
!タ・ト・バ!!!!!』

と歌が流れた
そうこれが上、中、下三種類の特製を持つライダー、仮面ライダー
OOOである

そしてコウモリヤミーとの戦いが始まった

オーズ「はああ!」

コウモリヤミー「ぐああ!」

コウモリヤミーが横転するとすかさず起き上がる

コウモリヤミー「きいいい……」

そしてコウモリヤミーは空へ飛び空中から攻撃を仕掛けてきた

オーズ「おわあああ」

慌て逃げるオーズ（以後・映司）

アंक「たく、世話が妬ける。映司！」

アंकの手には黄緑のカマキリのメダルが持っており、それを映司に向かって投げた

オーズ「サンキュ、アंक」

アंक「その足でたたき落としてそいつで切り裂け！」

映司はカマキリメダルとトラメダルを入れ替えオースキャナーを取りだしもう一度スライドさせた

オースキャナー『タカ！カマキリ！バッタ！』

オーズの姿が変化する爪のトラアームから鎌のカマキリアームへそして映司はバッタレッグを変化させ飛び上がった

そしてカマキリアームで切り付けた

コウモリヤミー「ぎゃ！」

転がり落ちるコウモリヤミー

そしてオースキャナーをもう一度取りだしもう一度スライドさせた

オースキャナー『スキヤニング・チャージ！！』

と発音しオーズがカマキリアームにチャージしこのコンボの必殺技
ラタギリバスラッシュを放った

オーズ「はああああ!! セイヤー!!」

コウモリヤミー「がああああああ!!」

コウモリヤミーが爆発し予想以上のセルメダルが出現した

アंक「よくやった映司!」

映司は変身を解除したその瞬間

映司の足元から黒い空間が出現し映司は吸い込まれていった

映司「わああああああ」

アंक「映司!!」

アंकは手を伸ばすがその手からコアメダル映司が持っていた物を
含めた15種類とコウモリヤミーを倒した時に出たセルメダル半数
以上そしてライドベンダーがその空間に吸い込まれていった

アंकは慌てその手を引き戻す

アंक「くっ、コアメダルをかなりの枚数持って行かれた、映司:

映司ーーーー!!」

アंकが雄叫びを上げるが映司はもうその場所にはいなくなっていた

カウント・ザ・メダル1000と始まりと黒い空間（後書き）

次回魔法少女リリカルなのは〇〇〇

スバルのアパートの前に倒れている映司

スバル「大丈夫ですか?!」

映司「お腹空いた」

スバル「へ？」

ギンガ「スバル、彼が昨日あなたが保護した人？」

そして始まる模擬戦

ノーヴェ「私は手加減しないからな!」

映司「うんわかった、こっちも本気で行くよ」

オースキャナー『クワガタ! カマキリ! バッタ! ガータ・ガタ・ガタ・キリバ! ガタキリバ!!!』

枚数2保護とナカジマ家とガタキリバ

カウント・ザ・メダル2保護とナカジマ家とガタキリバ（前書き）

クライマックスヒーローズオーズやってます

オーズが一番使いやすいです

得にラトラーターコンボが1番いいですね

なのはA Sのゲームも新作出るのも欲しいです
はい

カウント・ザ・メダル2保護とナカジマ家とガタキリバ

魔法少女リリカルなのは〇〇〇

前回の3つの出来事

1つ映司がこの小説で初めての変身

2つアंकが見たことのないヤミーとの戦闘

3つ映司が黒い空間に吸い込まれミッド・チルダへ飛ばされる

ここは魔法文化が進化した世界ミッド・チルダ

その世界のとあるアパートの入口付近

スバル「あしったからお休みだ〜どうしようかな〜、そうだそういえばギン姉もノーヴェ達もお休みって言ってたし久しぶりに帰ってみようかな」

そこにはテンションが上がっているナカジマ家4女スバルが歩道を歩いていた

そして自分が借りているアパートに入ろうとすると

そこには黒いバイクとだいたい20歳前後の男性が倒れていた

スバルはすぐその男に駆け寄り

スバル「大丈夫ですか?!」

反応がないどうすればいいと困っているとその男が

映司「お腹すいた〜」

スバル「へ?」

一応スバルはバイクを駐車場へ男を自分の部屋へ連れていった

翌日

【スバルの部屋】 6時頃

映司「ここは？」

映司はソファで横になって上からはタオルケットがかけられてある
すると何かを焼いているような臭いが漂ってきた

映司は身体を起こしその臭いの元へ向かったそこには

スバル「あっおはようございます」

映司「あっおはようございます……」

スバル「昨日のこと覚えてます？実はこのアパートの入口で倒れて
たのでここまで運ばせていただきました。と言ってもここ私の部屋で
すけど」

映司「あ…ありがとうございます」

スバルは出来上がった朝食をテーブルに並べた
すると映司の腹の虫がなった

スバルは微笑みながら

スバル「良かったらどうぞ」

映司「では、お言葉に甘えて」

2人は席に着くと

映司・スバル「いただきます」

そして朝食を食べ始めた

スバル「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は時空管理局防災市長スバル・ナカジマです」

映司「あつ、えつと俺は火野映司です」

お互いが自己紹介を終えると

映司「えつと時空管理局ってなんですか？」

スバル「えつ時空管理局をご存知でない？（まさかこの人次元漂流者かな？ならまずはいえつとおあなたの出身世界を教えてくださいませんか？）」

映司「ん？、出身世界？えつと国は日本です」

スバル「えつ日本？！地球の方なんですか？！」

映司「地球の方ってまさかここ、どこかの別の星い？！」

映司は混乱し始めた

スバル「いえ違いますよ。でもどうしよううん」

腕を組み悩むスバル

スバル「そうだ！」

映司「どうしました？」

スバル「えつと来てもらいたい所があるので一緒に来て下さい」

映司「は、はい」

そして朝食を食べ終えた映司とスバルはスバルに案内され一緒にナカジマ家に来ていた
もちろん映司はライドベンダーに乗って

時計の針は10時を廻ったところでナカジマ家に着いた
スバルが実家の扉を開けスバルの後に続き映司も中へ入る

スバル「ただいまー」

すると奥の部屋からナカジマ家長女ギンガが来た

ギンガ「スバルお帰りあらその方は？」

映司が頭を下げ挨拶する

映司「あっどうも初めまして火野映司です」

ギンガ「ギンガ・ナカジマです」

スバル「ギン姉、彼次元漂流者みたいだから」

ギンガ「て事はスバル、彼が昨日あなたが保護した人？」
スバル「うん」

2人がコソコソと話していると

映司「あのー」

ギンガ「ごめんなさいね映司くんこんなところでの立ち話はなんだし
中へどうぞ」

映司「はい、お邪魔します」

そして部屋に入ると中には10代くらいの女の子が4人

ディエチ「ん？ギン姉さんお客さん」

ギンガ「ええこちら火野映司さん」

映司「どうも火野映司です」

ディエチ「初めましてナカジマ家3女ディエチです」

チンク「次女のチンクだよしく」

ノーヴェ「5女のノーヴェです」

ウェンディ「であたしが末っ子のウェンディっスよろしくっス」

映司「うん、よろしくね」

ギンガ「それでは時空管理局の事をお話しますこちらへ」

映司「はい」

そしてギンガが時空管理局の事を大まかに説明し映司の事も一通り把握したところでお昼の時間になった

映司「すみませんなんかお昼までいただいちゃって」

チンク「いや気にするな食事も大人数で食べた方がいい」

ギンガ「そういう事♪」

ナカジマ6姉妹が映司を旅人だと知ると回ってきた国の事とかを聞かれ映司は快く話した
するとノーヴェが

ノーヴェ「あ、そうだったギンガ今日昼からちびっこ共の稽古に付き合う約束してるからちよっと出てくるね」

映司「稽古って何かやってるのノーヴェは？」

ノーヴェ「ストライクアーツっていうミッドのマイナーな格闘技」

ギンガ「ちなみに私とスバルはシューティングアーツっていう格闘技をやってるの」

映司「へえ」

感心している映司にノーヴェが

ノーヴェ「そういえばチンク姉とウェンディ、ディエチも見学に来

るんだっけ？」

ディエチ「たまにはおねーちゃんがちゃんと無茶しないよう見張っとかなきゃ」

えっ へんというポーズをとるディエチ

チンク「ま、そういうことだ」

スバル「じゃあたしもいつていい？」

ギンガ「そうね私も行こうかな。映司くんはどうする」

映司「え？ いいんですか？」

ノーヴェ「ああ、来ても大丈夫だから来いよ」

スバル「じゃご飯食べたらレッツゴー！！」

映司・ナカジマ6姉妹「おーー！！！！」

そして昼食を食べ終えた7人は管理局の防災訓練をしている倉庫へ集合していた

ヴィヴィオ「あ、師匠！」

そこには4人の女の子達がいた

ノーヴェ「よっ皆揃ってるな。」

ヴィヴィオ・リオ・コロナ「はい！！」

ノーヴェ「始める前にこいつは火野映司先日スバルが保護した奴だ」
映司「火野映司ですよろしくね」

優しく声をかける映司に

ヴィヴィオ「はじめまして映司さん私高町ヴィヴィオです」
リオ「リオ・オズウェリーですよろしく願いします火野さん」
コロナ「コロナ・ティミルですよろしく願いします映司さん」
アインハルト「初めましてアインハルト・ストラトスです」

4人が自己紹介を終えると

ノーヴェ「よしお前ら稽古に入る前に準備運動始めるぞ」
ちびっこ4人「はい！！」

映司「平和でいいね」
ウエンディ「そっスね」
ディエチ「そうだね」

映司「こんなに平和ならオーズに変身しなくてもいいしな」
ウエンディ「オーズってなんスか？」

映司「オーズっていうのは俺の変身した姿で俺の世界にいたグリーン
ドという怪人が生み出すヤミーっていうのと戦う時の姿だよ」
ディエチ・ウエンディ「へえ」

するとウエンディがニタアと笑う

ウエンディ「ノーヴェ！映司くんがノーヴェとタイマンしたいって
言ってるっスよ」

映司「えっ？」
ディエチ「な？」

突然の事に驚く2人

映司「ちよっと何言ってるの」

ウェディ「いいじゃないスカ！私オーズっていうのも見てみたいし」

ディエチ「ちよっウェンディ！」

ウェンディを叱ろうとするディエチに映司が

映司「別にいいど」

ディエチ「いいの？」

ウェンディ「やったー」

チンク「だがお前は魔法を使えないのだろ」

映司「大丈夫だよ。俺にはそれなりの物があるから」

スバル・ギンガ・チンク「ん？」

そしてちびっこ達を見学チームの元へ待機させ

映司とノーヴェが向き合った

ノーヴェ「最初に言っとくけど私は手加減しないからな！」

映司「うんわかった、こっちも本気で行くよ」

そしてノーヴェ自らの愛機ジェット・エッジを取りだしバリアジャケットを装着した

ノーヴェ「じゃ始めようか」

映司「うん」

映司は閉まってあったオーズドライバーを取りだし腰に装着するとポケットからタカ、トラ、バッタのメダルを取りだし3枚を入れた

そして右の腰に付いているオースキャナーを取りスライドさせ胸元に持ってくる

映司「変身!!」

オースキャナー『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!
!タ・ト・バ!!!』

と再び音楽が流れた

それを聞いた外野の皆様方は

ウエンディ「あっはははなんスカタ・ト・バっておかしっスあはは
はは」

チンク「ぷっ、ウエンディ失礼だろ…笑うなんて」

ギンガ「そうよ…きつと…彼は真面目にやってるんだから」

スバル「分かってるけどギン姉、あははははは」

ディエチ「……………」

スバル・ウエンディは腹を抱え笑い

ギンガとチンクは口では言っときながら内心爆笑である

ディエチはそんな4人を見ている

ちびっこ4人は微妙にひき気味である

ノーヴェ「まあなんでもいいや始めようぜ」

オーズ「行くよ」

オーズの手にはメダジャリバーが握られてあるそして

チンク「それでは……………始め!!」

チンクの掛け声で戦闘が開始された

オーズ「はああ！」

オーズがメダジャリバーを振り下ろす
それをすかさず交わすノーヴェ

そして振り下ろした手に向かって膝蹴りでメダジャリバーを落とす

オーズ「強い！ けど！」

そして映司はトラのメダルを取りだし

オーズ「パワーにはパワーだ」

そしてゴリラのメダルを真ん中にいれオースキャナーをスライドさせた

オースキャナー『タカ！ ゴリラ！ バッタ！』

オーズのコンボの一つタカゴリバにコンボチェンジした

ノーヴェ「腕が変わった？」

そしてノーヴェは映司に殴り掛かる
がゴリラアームでパワーが上がっている映司はそれを右腕で受け止め左腕で殴る

オーズ「はあああ！」

ノーヴェ「くっ！」

がそれを受け止めるノーヴェ

ノーヴェ「くっ強だったら、エアライナー！」

ノーヴェのI・Sエアライナーを螺旋形で発動し上に向かって疾走する

オーズ「くっどうしようこれ上って行くしかないよなうゝん、あっだったら」

映司はタカ、ゴリラのメダルを抜き取りクワガタ、カマキリのメダルと入れ替えオースキャーで再びスキャンさせた

オースキャナー『クワガタ！カマキリ！バツタ！ガータ・ガタ・ガタキリバ！ガタキリバ！！！』

オーズの緑のメダルのコンボ、ガタキリバグリードの1人ウヴァの持つコアメダル3種類で変身できるコンボとなりエアライナーの上を駆け上がっていった

一方外野

ウェンディ「あははははははガタガタってガタガタってあははははは」
チンク「あはははは姉上済まないもう堪えられないあはははははは」
ギンガ「あははははあはは反則よ映司くんあははははは」
スバル「あははガタガタってあははははは」
ディエチ「……………」

ディエチはそんな爆笑している4人を白い目で見ていた
ヴィヴィオ、リオ、コロナ、アインハルトは

ヴィヴィオ「すっすっ…」

アインハルト「すごい戦いです……!」

そして上空では

ノーヴェ「ここまで来れば何とかなんだろう。さあ来い!」

と構えていると

下の方からオーズが走ってやってきた

ノーヴェ「いいいい?!!」

そこにはガタキリバコンボのオーズが複数駆け上がってきた
ガタキリバコンボの特製は分身生成すなわち分身したオーズがやってきたという事になる

同様しているノーヴェ

そして分身しているオーズ全員がオースキャナーをスライドさせ必
殺技ガタギリバキックをエアライナーに放った

オースキャナー『スキヤニング・チャージ!!』

オーズ「はあああああ!!」

ノーヴェは足場が消えたせいで下に真っ逆さまだったが

バツタレッグを変形させ消えかけのエアライナーの破片に飛び移り

ノーヴェを抱える

そして空中でバツタのメダルとゾウのメダルを入れ替えオースキャ
ナーをスライドさせた

オースキャナー『クワガタ!カマキリ!ゾウ!』

オーズは足のメダルをゾウに入れ替えガタキリゾウコンボにチェンジした

そして強化された足で思いっきり着地したがその周辺に地割れが起きている状態となった
ノーヴェはオーズの手の中で目を回している
そして

チンク「勝者、火野映司!!」

この場にてオーズVSノーヴェの決着が着いた

カウント・ザ・メダル2保護とナカジマ家とガタキリバ（後書き）

次回魔法少女リリカルなのは〇〇〇

ナカジマ家にいる映司

チンク「火野起きたか姉は心配したぞ」

聖王教会へ向かう映司達

オットー・デード「お久しぶりです陛下」

そして流れるミイラ男の噂

ウェンディ「兄に知ってるっスか、ミイラ男の噂？」

枚数3 居候と聖王教会とミイラ男

カウント・ザ・メダル3居候と聖王教会とミイラ男（前書き）

久しぶりで皆さんそして

諸君！！ハッピーニューイヤー！！！！あけましておめでとう！！！！
諸君はお年玉はもらえたかね！！なにももらった、素晴らしい！！その
ものは自らの欲望を最大限にいかすがいい！！そしてもらえなかつた者達はこの小説を読んで元気をだしてもらいたい以上だ！！

とまあオーズのある人のテンションでやってみましたが無駄使いはダメだよ

カウント・ザ・メダル3居候と聖王教会とミイラ男

前回のノーヴェとの模擬戦でコンボを使い果たした映司はその後倒れて速攻でナカジマ家に搬送された

日時は前回の模擬戦から1日後。時計は昼を過ぎている

映司「ここは、どこだろう？」

映司は身体を起こし周りを見回す。部屋は畳が敷いてあり映司はそこに敷いてある布団の内にいた
一通り見回すと襖が開く

チンク「火野起きたか。姉は心配したぞ」

襖を開いたのはナカジマ家2女のチンクだった

映司「チンクさん。ここは？」

チンク「安心しろ我が家だ。私はこれから仕事だから少し出てくるがノーヴェが」

チンクの横からひよいと出てくるノーヴェ

ノーヴェ「よう火野元気か？」

映司「うん、なんとかね」

ノーヴェ「そうか。これから私とディエチとウエンディとヴィヴィオとで教会に行くけどお前もついて来るか？」

映司「俺なんかがいつて迷惑になったりしないかな？」

ノーヴェ「大丈夫だよ。向こうには知り合いのシスターと執事もい

るし」

映司「うんわかった、ならいってみようかな」

ノーヴェ「おう、じゃ30分後に出発な」

チンク「気をつけて行くんだぞ」

それから数時間後聖王教会本部の入口にいた

オットー・デイド「お待ちして下りました。お久しぶりです陛下」
セイン「久しぶり〜」

聖王教会執事オットーと同じく聖王教会のシスターデイド、セインが迎えてくれた

ウエンディ「久しぶりっスね3人共」

ディエチ「元気してた」

デイド「はい。えっと姉様方そちらは」

デイドは映司に視線を向ける

ディエチ「ああ、彼は次元漂流者で今家に居候^{うち}している」

映司「火野映司です。よろしく」

デイド「はい。私は聖王教会でシスターをしているデイドと申します」

オットー「同じく執事のオットーです」

セイン「でっ、あたしがシスターのセインだよ。よろしくね」

セインは映司の手を握りブンブンと振る

映司「よっ、よろしく」

セイン「えっと、ヴィヴィオとノーヴェはイクスのとこだよね」
ヴィヴィオ「うん、よろしくねセイン」

セイン「オツケー」

3人は教会の奥へいった

オットー「では、我々はティータイムにしましょう」

ディード「そうですね。では案内します、ついて来てください」

そして5人も場所を移動し中庭へ

中庭には白いテーブルと椅子、その上にはティーポットとクッキー等といったお菓子類が配置されてある

ウエンディ「おいしっスねえ」オットーの焼いたクッキーは「

オットー「ありがとうございます」

ディエチ「ディードの入れる紅茶もおいしい」

ディード「ありがとうございますディエチ姉様」

こんな感じの雰囲気のといるとウエンディが話題を変えた

ウエンディ「ねえ、兄にい」

映司「ん？それって俺の事」

ウエンディ「そうっスよ。いい呼び方だと思うんスけど、いやっスか？」

映司「別にそんなことないよ」

ウエンディ「やったー」

映司「それで何？何かあったから詠んだんでしょ？」

ウエンディ「えっと兄にいが変身の時に使ってたメダルちよつと見せてほしいっスよ。ダメっスか？」

映司はポケットからコアメダルを全て取り出し各クラスごとに並べた

ウエンディ「へえ、いろんな種類があるんスね」

ディエチ「本当いっぱいある」

映司「うん、これはコアメダルって言ってオーズに変身するときに使うメダルなんだ。他にも白い色のセルメダルがあるし」

ウエンディ「へえ、すごいんスね」

ディード「あの……ディエチ姉様」

ディエチ「ん？なに？」

ディード「オーズというのは何でしょうか？」

ディエチ「オーズっていうのは彼が変身して、彼の世界の怪物えっとなんだっけ？」

ウエンディ「グリードっスよ」

ウエンディがディエチの忘れていた言葉のピースをはめる

ディエチ「そうそれと戦うときの姿でしかあのノーヴェを圧倒したんだよすごいよね」

ウエンディ「それになんといってもあの……プッ……あの歌はありえないっスよ」

ディエチ「また今度映像データ送るね」

ディード「はい。ありがとうございます」

ディードはポットの紅茶を空になったウエンディのカップに注ぐため取りに行くとオットーがなにか難しそうな顔をしていた

ディード「オットー、どうしたの？」

オットー「いや、火野様の持っていたメダルに似た物をどこかで見たような気がするんだ。えーと、ドクターのアジト……？違う、無

限書庫だったかな。いずれ思い出すさ」
デイド「そう、ならいいんだけど」

5人がワイワイやっているとギンガからディエチ宛てに通信が入った

ギンガ『ディエチ？今いい』

ディエチ「ん、なにギン姉さん」

ギンガ『実はもう食料品のストックが少ないの買い物してきてくれるかな』

ディエチ「了解、じゃあ、これから買い物して帰るね」

ギンガ『お願い、私もお父さんも6時頃までには帰れると思うから。じゃあね』

ディエチ「うん、それじゃ」

お互いは通信を切る

ディエチ「てっ訳で今から買い物行くことになったから私達はこれで」

デイド「はい、姉様方またいずれ」

ウェンディ「ノーヴェ達には先帰ったって言うといてほしっス」

オットー「はい、かしこまりましたウェンディ姉様、火野様」

映司「うん、じゃあねオットーさん、デイドさん」

オットー・デイド「はい」

そして3人はミッドのスーパーへ向かうのであった

その頃ミッドのとある公園では少年が1人泣きながらベンチに座っていた

少年「くそ、あの野郎ちよつと喧嘩に強いからって僕の事イジメやがって。ヒック……僕にもっと力があつたら」

泣きじゃくる少年に怪人が近寄る

??? 「その欲望解放しろ」

怪人は少年の額にコインを入れる口を出現させそれに向かってメダルを投げる

すると少年の背中からミイラ男のような怪人が現れ少年はグツタリとベンチに横になる

??? 「俺のコアを探せ取り返してこい」

ヤミー「あああああ………」

その頃買い物を終えた映司達は歩きながら帰宅の途中だった

ディエチ「いや助かるよ。手伝ってもらって」

映司「ううん、大丈夫だよ。こんな事ならなんでも言つてよ」

ディエチ「………ありがとう」

ウエンディ「そういえばディエチ、兄にい知ってるっスか、ミイラ男の噂？」

映司「ミイラ男？」

ディエチ「なにそれ、都市伝説？」

ウエンディ「いや、本当の話らしっスよ。なんでもそのミイラ男が

歩く度チャリンチャリンと音がし更に深夜、誰もいない飲食店の食料が突然なくなっていたり、あるのは白っぽいメダルが数枚だけっていうちようどあんな感じの」

ウェンディは目の前に突然現れたミイラ男を指差するしばらく沈黙が続いた

ディエチ・ウェンディ「でたあああああああ！！！」

2人のはこんな反応をしていたが映司は

映司「ヤミー?!なんでこの世界に?とにかく早く倒さないと」

映司はオーズドライバーを取り出し腰に装着しタカ、トラ、バツタのメダル3種類をセットしオースキャナーをスライドさせ胸元に持ってくる

映司「変身!!」

オースキャナー『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!タ・ト・バ!!』

そしてオーズに変身した映司はまだ脱皮していないヤミーと戦闘を開始した

オーズ「はあああ!!」

オーズはトラアームを展開しその爪でヤミーを切り裂くとヤミーの身体からメダルが飛び出し転がる

ヤミー「あああああ………」

ヤミーもたたき付けるようにし腕を振り下ろすがそれも軽々かわしメダジャリバーを取りそれにセルメダルを3枚装填しオースキャナーでメダジャリバーをスライドさせる

オースキャナー『トリプル！スキヤニング・チャージ！！』

メダジャリバーにセルメダルが発しているエネルギーをチャージし空間もろとも対象を切り裂く必殺技オーズバッシュを放った

オーズ「はあああああ！！セイヤー！！」
ヤミー「うおおおおお」

そしてヤミーは爆発しセルメダルが弾け飛んだそれを見ていたディエチとウエンディは

ウエンディ「やったーミイラ男を倒したっス！」
ディエチ「はあああ、怖かった……」

映司は2人に親指をグツと立てる

オーズ「なんでこの世界にヤミーが………？」
「……」「それはこの俺が出したヤミーだからな」

3人は声のした方を見るとそこにはカブトムシとトンボそしてクモを混ぜたような怪人がいた

「……」
「邪魔すんなよヴィーズせつかく復活してひと暴れの前にセルを大量入手しようと思ってたのにだいなしだな、おい」

オーズ「まさかお前は……グリードなのか？」
ドル「おう、俺はグリードのドルってんだよろしくなあ、新しいヴ
ィーズよお」

カウント・ザ・メダル3居候と聖王教会とミイラ男（後書き）

次回魔法少女リリカルなのは〇〇〇

ドルとの戦いが始まる

ドル「はあああああ！！そんなものか！お前の力は？！」

なのは「管理局です。武装を解除して速やかに投降しなさい」

そして奪い取るドルのコア

ドル「貴様！俺のコアを！！！」

オースキャナー『クワガタ！カマキリ！クモ！』

枚数4桜色と欲望と新コンボ

カウント・ザ・メダル4桜色と欲望と新コンボ（前書き）

今月の下旬に発売のタジャスピナー楽しみです
なんと言ってもクジャクとコンドルのコアメダルです
早く発売しないかな

カウント・ザ・メダル4桜色と欲望と新コンボ

魔法少女リリカルなのは〇〇〇

前回の3つの出来事

1つ映司が聖王教会へ行く

2つミッドにヤミーが出現

3つそのヤミーを創ったグリードが登場

ドル「おい、新しいヴィーズ。お前持ってたろ俺のコアをだつたらよこせ、タダで渡せばなんもしねえからよ」

オーズ「俺君の持ってないよ」

映司は本当に知らなかったなぜなら彼が変身しているのはオーズであって、彼が言っているヴィーズではない

ドル「おいおい、白々しいなだったら何だその姿はよお」

ドルはオーズに飛びかかり首をつかみビルに叩き付ける

オーズ「ぐあ……」

ウェンディ「あっ！」

ディエチ「火野さん!!」

ドル「フツ、この程度か。あ？」

ドルはオーズの腰のオーズドライバーに視線を向ける

ドル「メダルが3枚……しかもこのコア俺のコアじゃなくウヴァのじゃねえか。てえこた、お前オーズか。よくも騙してくれたな！」

！」

ドルは拳を怒り怒りに任せオーズを殴りかかろうとした瞬間
ドルを包围するようにし桜色の魔力球が出ていた

ドル「ああ？なんだこりゃ」

ドルは視線を上空に向ける

なのは「管理局です。武装を解除して速やかに投降しなさい」

ドル「んだ、てめえ…」

ディエチ「なのはさん！」

そこにいたのは管理局のエース・オブ・エースの高町なのはだった

ドル「わりいがそんな訳にはいかねえんだ！」

ドルは右腕にスピアを出現させそれをなのはに向かって投げ飛ばした

なのは「！！」

なのはは軽々とかわしたが

ドル（曲がれ……）

スピアに密かについていたクモの糸を引っ張り矛先がなのはの背中
へと向かう

それに気づいたディエチとウェンディが声を上げた

ウェンディ「なのはさん！」

ディエチ「後ろ！」

なのはも振り返る

なのは「!!！」

ドルの頭になのはの背中が串刺しになるイメージが浮かび上がったが

オースキャナー『クワガタ！トラ！バッタ！』

その機械音になると同時に雷がスピアと糸に当たり糸は切れスピア
はセルメダルへとバラけた

ドル「貴様いつの間に……………」

オーズ「はあはあ、悪いけどさっき、彼女に気を取られている間に
これだね」

オーズはチーターのコアをドルに見せる

ドル「チッ、カザリのコアか……………まあいい、てめえらはまとめて
ぶっ潰す」

なのは「助けてくれてありがとうございます。ですが……………その姿は
……………」

オーズ「説明はあっ後でします」

映司は慌ててなのはに言う

ドル「クソがあ!!！」

ドルは両腕にクローでオーズに切り掛かかりオーズもトラアームを展開する

ドル「あああああああ！」

オーズ「うおおおおおおお！」

2人のクローがぶつかり合い火花を散らし突風が起きる

ウエンディ「くっ、すごい風……！」

ディエチ「目も開けてられない……！」

のんな中なのはは

なのは（くっ、凄い何？一体どこからこんな力が……）

そしてオーズとドルが一定の距離を取り飛び上がる

そして2人の拳がお互いの体に接触する

オーズはドルの腹部へ

ドルはオーズの顔面へ

お互いは飛ばされドルは着地しオーズは背中から落ちた

オーズ「いた！」

ドル「はあ！そんなものか！お前の力は？！」

するとドルの足の鎧を構築しているセルメダルが飛び散った

ドル「どういう事だ……まさか」

ドルはオーズの手を見る

オーズ「グリードだからコアメダルあるかと思ってやってみただけ。なんとか1枚取れた」

オーズの手の中には色が緑でクモ柄縁取りが銀のメダルがあった

ドル「貴様！俺のコアを！！」

オーズ「はあはあ、線の数はずつて事は左側かな」

映司はクモのコアメダルの裏を見る
使うつもりだ

ドル「貴様、まさか！！」

映司はバッタのメダルを取り出しクモのメダルをセットする
そしてオースキャナーをスライドさせた

オースキャナー『クワガタ！トラ！クモ！』

そしてオーズはガタトラモへとなった方がいいが

オーズ「あれ、うまく立てない…」

ドル「そりゃそうだ同系のメダルじゃあない、虫のコンボなら制御できるかもしれねえな」

オーズ「じゃ、これなら」

カマキリのメダルを取り出す

ドル「貴様ウヴァのコアを全集持ってんだと……。まずい、潰す！
！」

ドルはオーズに向かって飛び出すがドルの足元になのはのアクセルシューターが当たる

なのは「させない！」

ドル「チッ、貴様！」

オーズ「ありがとう」

なのは「うん」

そしてオーズは立ち上がりトラのメダルを取り出しカマキリのメダルをセットし再びオースキャナーをスライドさせる

オースキャナー『クワガタ！カマキリ！クモ！』

オーズ「さっきより全然楽」

ドル「くっ、まずい……！」

オーズはガタキリバのように分身作りだしたが1つ違っていたそれはビルの壁面にもオーズが引っ付いているから

これはクモのメダルの固有能力は足の裏を自らの意志で接着することができるという品物である

全てのオーズは一斉にオースキャナーをスライドさせる

オースキャナー『スキヤニング・チャージ……！！』

オーズ全然がドルに向かって飛び蹴るが突如水しぶきが巻き上がりオーズは本体のみを残し全て消滅する

ドル「フランなんでお前が？」

ドルの前にサメ、エイ、イカの混ざった怪人がいた

フラン「何ってあんたを迎えに来たんだよ。ほら帰るよ」
ドル「チッ、仕方ないじゃあなオーズこの決着はいずれ」

2人は路地裏に入り姿を消した

そして数時間後舞台はナカジマ家へ移動しナカジマ家の面々に加え
なのは、フェイトそしてオーズの戦いを直接見たヴィヴィオが顔を
出していた

フェイト「彼方にはこれからあの怪物についてとそのメダルについ
てそして、オーズについて聞きたいことがあります」

映司「はい」

フェイト「私たちの答える事、全てに正直に答えてください」

映司「はい」

フェイト「でわさっそく、あの怪物について知っていることは？」

映司「えっとあの怪物の名前はグリードといって欲望の怪物です」

フェイト「欲望ですか？」

映司「はい、えっと彼らはそれぞれが9枚コアメダルを持っていま
す」

映司はカザリのコアメダル3枚をフェイトに渡す

フェイト「えっと、これはライオンですか？」

なのは「それにトラとチーターかな？」

フェイトの手の中的コアをなのはがのぞき込む

映司「はい。他にもタカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマキ
リ、バッタ等々。あっ」

スバル「どうしましたか？」

映司は立ち上がり

映司「ちょっと待っててください」

玄関へ向かったそしてポケットからセルメダルを数枚程取り出し玄関においてあるライドベンダー自販機モードにセルメダルを連続投入しボタンを押す

ベンダー『タカカン！タコカン！バッタカン！トラカン！ウナギカン！』

ベンダーからカンドロイドを取り出す

映司「こんなものかな？」

映司はカンドロイドを抱えて部屋にも戻る

映司「おまたせ」

なのは「お帰り。ん？何それ」

なのはは映司のカンドロイドを見て言う

スバル「ジュースですか？」

映司「ううん、違うよこれはね……」

そして映司はタカカンの蓋を開け変形した

ギンガ「あら、何これ可愛い」

スバル「ほんとだ」

フェイト「火野さんこれは？」

映司「うん、これはカンドロイドって向こうの世界で鴻上さんにもらった物なんだ。このメダジャリバーも」

フェイト「鴻上さん？」

映司「鴻上さんはメダルを使ってオーズをサポートしてくれたりしてくれるいい人だよ」

フェイト「そうですか。で次にオーズについて聞きたいことがあるんですが」

映司「オーズっていうのは、えーとまずグリードについて。グリードっていうのは、約800年前に当時の科学者が人工の命を作り出そうとして様々な生物の力をメダルに凝縮して作ったのがこのアメダルです。最初に作られたメダルは何の意志も持たなかったんですけどそれぞれ持っていた10枚のコアメダルを1枚抜いた9枚の数字になったとたんそれを満たそうとする欲望が生まれてその欲望がすさまじい進化して意志を持った、それがグリード。全部鴻上さんから聞いたことなんだけど」

全員が息を飲む

映司「そしてオーズっていうのは抜き取ったコアメダルからその力を使い封印したのがオーズらしいんだ」

ノーヴェ「なるほど、道理で強い訳だ……」

なのはとフェイトがノーヴェに振り向く

なのは「戦ったの！！」

ノーヴェ「ええ、まあ」

ヴィヴィオ「すごかったんだよ、いろんな姿に変身して」

フェイト「へ、へ………」

フェイトの口元が引きずっている

デイエチ「でもさ、何でミッドにいるの」

映司「さあ？」

ウエンディ「それにヴィーズってなんスか？」

映司「それもわからない」

ウエンディ「そっスカ。なら仕方ないッスね」

しばらく考え込む

スバル「考え込んでも仕方ない。なのはさん」

なのは「ん？何」

スバル「ついでですから、来週の訓練合宿の打ち合わせでも」

なのは「そうだね。じゃ合宿の事考えようか。よければ映司さんも行きますか？」

ウエンディ「おっいいいッスね」

デイエチ「そうだね。私たちも一緒に行くし」

ノーヴェ「行こうぜ、火野！」

映司「わかった、じゃ行くよ」

来週の初めから1週間の訓練合宿に映司もついて行くことになった
向かう世界は以前リオやコロナそしてアインハルトもともに行った
アルピーノ邸がある世界へ

その頃ルーテシアは

ルーテシア「ふっふっふ、こんなところかな」

ルーテシアは自分が作った物を見て不適な笑みを浮かべていた
そしてルーテシアはくるりと1回転し

ルーテシア「ああ、自分の才能が怖い」

するとそこに砂煙が舞った

ルーテシア「なに?!」

そしてガリユーを連れてその場へ向かった

そこには見た目は思いつきりチンピラのような見た目の男だった

アंक「いってえ。たく、俺のメダルがある世界にはそのグリードと惹かれ合うって鴻上の奴もしも映司のヤローいなかったら、承知しないぞ」

ルーテシア「えっと、彼方だれ………?」

アंक「あ?なんだお前?まあ何でもいい。ところでお前アイス持っていないか?」

アंकは右手を本当の自分の手に戻してルーテシアに突き出す

ルーテシア「へっ?」

カウント・ザ・メダル5合宿と鳥と馬の幻獣

なのは達と訓練合宿に行くことになり映司達はすでに合宿先であるアルピーノ家へお越しになっていた

メンバーはなのは、フェイト、ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ、ナカジマ家娘たちティアナそして映司だ

映司は他の方々が女性だったため荷物持ちし両手いっぱい荷物を抱えながら

映司「へーいいところだね。ノーヴェ」

ノーヴェ「ああ、ここはいい空気だしミッドみたいにビルもない綺麗な世界だ」

チンク「それもこれもルーお嬢様のおかげだな」

3人がゆっくり歩いているとアルピーノ廷が見えてき中から女性が1人出てきたルーテシア・アルピーノの母メガーヌ・アルピーノだ

なのは「メガーヌさん、お久しぶりです」

メガーヌ「本当、お久しぶり」

フェイト「今回もお世話になります」

メガーヌ「うん。こちらこそ1週間よろしくね。あら、なのはさん彼が連絡にあった」

メガーヌは映司の事をなのはに聞いた

なのは「はい。映司くんちよつといい?」

映司「はい」

映司は荷物を置いてなのはの元に行く

なのは「こちらメガーヌさん」

映司「あつ、どうも初めまして、火野映司です。よろしく願います」

メガーヌ「初めまして、メガーヌ・アルピーノです」

お互い頭を下げあう

フェイト「あのメガーヌさん」

メガーヌ「なに、どうしたの？」

フェイト「エリオとキャロはまだついてませんか？」

メガーヌ「あゝあの2人なら1時間程遅れるって連絡があったわよ」

なのは「それにはやてちゃん達も明日までには来る予定だしね」

メガーヌ「そうね、今回は前にも増して大人数だから腕になるわ。」

なのはさん達は着替えて訓練よね」

なのは「はい。ヴィヴィオ達はきつと川辺かどこかで練習したいでしょうから」

メガーヌ「そう、わかったわ。映司くん荷物を運ぶの手伝ってちょうだい」

映司「あつ、はい」

なのは「メガーヌさん、そんな」

メガーヌ「いいのよ私もやりたいからやってるんだし」

なのは「ありがとうございますメガーヌさん」

メガーヌ「いえいえどうもいたしまして」

そして管理局所属組はルーテシアがつくったアスレチックで訓練の準備をし映司とメガーヌは荷物を運び終わっていた

メガーヌ「ふう、終わったわね」

メガーヌは額を拭いながら言う

映司 「そうですね」

メガーヌ「一息いましょ」

映司「はい」

2人は食堂へ向かいつつその道中こんな話を話し合っていた

メガーヌ「映司くんはお茶菓子何がいい和菓子とアイス」

映司 「えっ、いや俺は、うゝん」

メガーヌ「あー、けどアイスはもう無いかも。ルーテシアが拾ってきたんだか、チンピラみたいな彼にもう食べられてるかも」

映司「チンピラ？」

メガーヌ「そうなの、ちょうど4日程前に私の娘がアスレチックで
みつけて連れてきたんだけど、口調も悪いしアイスばかり食べて
いるしその逆に鶏肉は絶対食べたがらないし機械ばっかいじってて
なに言っても聞かないし手なんかたまに変な人形みたいなのどこか
らか出てくるしホント彼にはビックリ」

食堂の前に着き扉を開きメガー又は台所へ向かう

アंक「おい、もうアイスない……の……か」

映司「あつ、アアアアアアアンク！！」

アंक「えっ映司!!!」

アंकは映司に飛び掛かりアゴを掴む

アंक「おい！ いったいお前どいまでこで何やってた！」

映司 「ちよつと落ち着けてアंक」

アंक「落ちていてられるか！お前コアメダル1枚もなくしてない

だろうな！」

映司「大丈夫だってほら」

映司はしまつてあるメダルホルダーをアंकに渡す

アंक「ふん、なんとか全部あるようだな」

アंकが一通り見回すと顔が険しくなった

アंक「おい、このコアいったいどこで手に入れた！」

アंकは映司の胸元を掴んだ

映司「えっ？コアって？」

アंक「惚けんな！このクモのコアだ！」

映司「ああこれ、これはえっとドルっていうグリードから取ったものだよ」

アंक「なんだとドルが」

アंकは掴んでいた手を離す

アंक「ドルの奴がこっちの世界にいやがるのか。チッ、厄介だ」

映司「そういえばあのグリード、アंक達の事知っているみたいだったぞどういう関係なんだよ」

アंक「ああ、あいつらは800年前、俺達が生まれ前に創られたプロトタイプのグリードだ。プロトタイプで創られたグリードは全部で5体いる。お前が戦ったドルもその1体だ。ん……………？なんだこの感覚はまさか！！！」

アंकは部屋を飛び出す

映司「ちよつとアंकどこ行くだよ!!」 映司はアंकを追いかける

メガーヌ「映司くん緑茶と紅茶どっちに……あれ? いない……」

映司とアंकはアルピーノ邸から出るとそこにはキャップを被りジャケットを着てUNIユニコーンCORNと刺繍されたTシャツを着ている

???「やあ、久しいねアंक」

アंक「お前は、まさか!!」

映司「アंक誰だよ知り合いなのか」

アंक「ああ、さっき説明した5体のグリードの1体、セントだ」

映司「えっ?!」

映司はオーズドライバーを取り出す

セント「まあ、待って今日は戦いに来た訳じゃないんだから」

アंक「なにい?」

セントはメダルに包まれ真の姿を現す

その姿は西洋甲冑に身を包まれたような騎士の姿で幻獣の一角獣ユニコーン、二角獣バイコーンそして天馬ペガサスを混ぜたような姿をしている

セント「僕はコアが6枚が揃っている。他のグリードとぼくは別行動だから現在の彼らの状況はわからない。おそらく3枚以上は抜き取られているだろうね。ぼく達の封印を解いたのはきつと奴だね」
アंक「奴、誰の事だ?」

セント「君もまだ鈍いね。わからないかな。それぞれのぼく達のコ

アが3枚つつ没収されているこの状況が、君も知っているはずだけであの禁断のコアメダルの存在に」

アंक「禁断のコア？まさか！」

セント「そうさ、究極のグリード。ウォンがね」

しばらく沈黙が続く

映司「なんだよ禁断のコアって、それ究極のグリードって？」

そして茅の外の映司が入り込む

セント「やあ、君がオーズかい頑張っているみたいだね。僕のコアが欲しいかい？でも渡せられない代わりにこれをあげるよよくじゃ使えないからね」

そう言うときセントは人間体に戻り懐から何かを出しアंकに投げる

アंक「なんだこれは？」

セント「それは今までよく達を封印し禁断のコアを破壊する存在ヴィーズさ」

映司「これが！」

セント「それは使用者を選ぶ楽しみにしてなよ。じゃあね」

そしてセントは姿を消す

映司「おい、アंकどうゆう事だよ禁断のコアって！」

アंक「俺も詳しくは知らんが、そのコアが蘇るとこの世界全てを破壊しかねないって事ぐらいだ。そして今回セントの奴は敵じゃないやな。映司アイス喰いながら今後の対策を練るぞ」

そして2人はアルピーノ邸に入る
そこから少し離れた地点

??? 「臭う、欲望の臭いだ」

欲望の怪物が息を潜めていた

カウント・ザ・メダル5合宿と鳥と馬の幻獣（後書き）

次回魔法少女リリカルなのは〇〇〇

リオにせまる欲望の影

リオ「あなた誰……………」

???「ふっ、その欲望解放しろ」

そして現るヴィーズ適合者

アंक「映司！あいつにメダルを渡せ！」

そして現れる6枚のメダルを使ったライダー、仮面ライダーヴィーズ
ヴィースキャナー『タカ！トラ！バツタ！タカ！トラ！バツタ！タ・
ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！！！！』

枚数6リオに迫る影と適合者と6枚メダルの覇王

カウント・ザ・メダル6リオに迫る影と適合者と6枚メダルの覇王（前書き）

オリジナルライダー登場

変身キャラのヒントはタイトルに出ていますです

カウント・ザ・メダル6リオに迫る影と適合者と6枚メダルの覇王

セントが映司の前に現れて6時間後管理局組は訓練を終え映司と一緒に夕飯の準備に取りかかっていた
その頃アंकは

アंक「今更だが、セントの奴こんな物置いてきあがって」

アंकは机のヴィーズドライバーに目を向ける

アंक「こいつ、本当に使えるのか」

子供達は汗を流していた

リオ「じゃあ、私、先上がるね」

ヴィヴィオ「うん、着替えてちょっと待てて」

リオ「うん」

リオは風呂から上がり自室へ向かう廊下を歩いていた

リオ「はあ、結局今日はヴィヴィオ勝てなかったな。うーんちよつと悔しいな。出来れば1勝したいな（でも、楽しかったな）えへへ」

リオは笑顔を浮かべる

すると目の前にオールバックの青年が現れる

リオ「あなた誰………?」

おびえた声でリオは訪ねると青年は不適に笑い右手にセルメダルを

握る

??? 「ふっ、その欲望解放しろ」

そして青年は怪物の姿を現しリオの額にコインスロットを出現させ投入すると同時にリオが悲鳴を上げる

リオ「きゃあああああ!!」

その悲鳴は全体に聞こえていた

ギンガ「なに、今の悲鳴」

なのは「今の声リオちゃんだよね」

するとアंकが飛び出てくる

アंक「映司ヤミーだ。この中にいる」

映司「ヤミーが！俺が見に行きます！」

ギンガ「お願いします」

映司「はい！」

アंक「行くぞ」

映司「うん」

そして2人はリオの元へ向かうとそこにはうずくまっているリオの肩を支えているヴィヴィオとコロナ

ヴィヴィオ「リオ！リオ、大丈夫！」

アインハルト「どうしたんですか」

うずくまっているリオはうめき声を上げながら

リオ「苦しい助けてヴィヴィオ、コロナ……………」
コロナ「大丈夫！リオ、リオ！！」

そんな中アंकと映司が駆けつける

映司「大丈夫、リオちゃんどうしたの？」
コロナ「それがさっきからずっと……………」
アंक「ちっ、どけ」

そしてヴィヴィオ達をどかしリオを仰向けに寝かとりオの体には包帯のような物が巻き付いている
映司はそれを見る

映司「アंकこれって！」
アंक「ああ、カザリと同じタイプだ。だがカザリよりも弱い無理矢理はがせる」

アंकはリオに巻き付いた物をつかみ無理矢理はがすと包帯に巻かれたヤミーが出現しオオカミの姿に脱皮する
そして映司はオーズドライバーを取り出す

映司「アंक、メダルだ！」

アंकはタカ、カマキリ、チーターのメダルを取りだし映司に渡しメダルをセットしオースキャナーをスライドさせる

映司「変身！！」

オースキャナー『タカ！カマキリ！チーター！』

オーズはタカキリーターへ変身する

映司「みんなリオちゃんの事お願い」

オーズはヤミーを捕まえ外へ連れ出すとアंकとアインハルトがその後を追う

ヴィヴィオ「アインハルトさん!!」

外に出たオーズがオオカミヤミーと戦闘を繰り広げていた

オオカミヤミー「グルル!」

オーズはカマキリソードを展開しチーターレッグで走り連続で斬りかかる

オーズ「はあああああああ!!」

そしてひるんだオオカミヤミーにオーズはオーススキャナーをスライドさせ必殺技を放とうとした瞬間オーズに無数の針が飛んでオーズに命中する

オーズ「うわああ!」

変身が解除されその針を放ったのは犬系グリード、ポンドだ

ポンド「邪魔するなよ、オーズ」

アंक「お前!」

ポンド「やあ、おひさ〜アंक800年ぶりだね」

アंक「ほざけ、そのヤミーはお前のか？」

ポンド「ああ、そうだよ。でももういない」

ポンドは自らが生み出したオオカミヤミーの腹に腕を貫くとオオカミヤミーはセルメダルとなりばらける

オオカミヤミー「グッガ……」

ポンド「こんなに弱いならいないよ」

そしてポンドはセルメダルを全て取り込む

ポンド「あゝ、気分がいい」

その光景を見た映司は

映司「なんて奴だ……」

ポンドは立ち上がろうとした映司に近づき腕に巨大な針を出す

ポンド「じゃあね」

映司に向かい振り下ろす

アंक「映司!!」

映司「くっ」

するとポンドが吹き飛ばされる

ポンド「いつつ、なんだ? 今の?」

ポンドは振り替えるとそこには甲冑を装備したアインハルトがいた

映司「アインハルトちゃん！」

アインハルト「大丈夫ですか」

ポンド「はぁ邪魔すんなよ！」

先ほど出した針をアインハルトに向け投げ飛ばす
それを避けきれず肩を掠める

アインハルト「くっ！」

映司「アインハルトちゃん！！」

ポンドは不敵に笑い

ポンド「終わりだよ。お嬢ちゃん」

アインハルトが覚悟した瞬間

アインハルトとポンドとの間に光が走る

ポンド「なんだ？」

その光はアインハルトの腰にくる

光が弱くなるとそこにはセントがアंकに渡した物ヴィーズドライ
バーが捲きついていた

アインハルト「これは……………」

ポンド「それは封印の！！」

アंक「はっ、面白い！女これを使い！」

アंकはタカ・トラ・バッタのメダルをタカ以外を2枚ずつ渡す

アंक「映司！あいつにメダルを渡せ！」

映司「でも！」

アंक「いいから渡せ！！」

映司は起き上がりオーズドライバーにセットされている3枚のメダルをアインハルトに投げ渡しそれをキャッチする

アंक「女！それを映司が使ったみたいにやってみろ！」

アインハルトは頷き6枚のタカ・トラ・バツタを2枚ずつセットし
ヴィースキャナーをスライドさせ胸元に持ってくる

アインハルト「変身」

ヴィースキャナー『タカ！トラ！バツタ！タカ！トラ！バツタ！タ・
ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！！！！デュアル！！！！』

アインハルトが変身したのは6枚のメダルで変身する戦士仮面ライダーヴィーズデュアルタトバコンボだ

オーズとあまり代わりはないがオーズの胸にある各コンボの象徴が肩についており、オーズの場合タカのメダルはタカヘッドへとなり
オーズの頭となるがヴィーズの場合はタカは肩に装着されタカシヨ
ルダーとなっている

その姿を見たポンドは

ポンド「ヴィーズ…………、うおおおおおお！！」

ポンドはヴィーズとなったアインハルトに飛びかかる

映司「アインハルトちゃん!!」

ヴィーズは両腕のトラクロを展開しポンドのアゴを殴り飛ばす
そして6枚のメダルからトラのメダルを1枚取りだしカマキリと交
換しスキャンする

ヴィースキャナー『タカ!トラ!バツタ!タカ!カマキリ!バツタ
!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!タ・ト・バ!!!』

ヴィーズの左腕がカマキリアームへ変わる

ヴィーズ「すごい……」

ポンド「この女!舐めんじゃねえ!」

そしてポンドが両腕に巨大な針を持ちつつこんでくる
ポンドの体にカマキリソードを刺し貫通させる

ポンド「がああ」

そしてヴィーズはヴィースキャナーをスライドさせる

ヴィースキャナー『スキヤニング・チャージ!!』

カマキリソードを抜きカマキリアームにパワーを溜める

ヴィーズ「霸王断空拳(改)!!」

それがポンドの頭上から炸裂する

ポンド「うああああ!!」

アंक「やったか！」

ヴィーズ「いえ、逃げられました。ですがそのときこれを………」

アインハルトは手を広げるとハイエナ、キツネ、オオカミのコアメダルが1枚ずつ握られてある

アंक「ほうこれは儲けた。なかなかやるなお前。腹減った帰るぞ」

アंकはアインハルトからコアメダルを取り、アインハルトが映司を担ぎ戻った

ヴィーズの姿で

カウント・ザ・メダル6リオに迫る影と適合者と6枚メダルの覇王（後書き）

次回魔法少女リリカルなのは○○○

驚く皆様方

ヴィヴィオ「キャー、だれえ!!」

ヴィーズ「ヴィヴィオさん……………」

八神家登場

はやて「お久しぶりや、なのはちゃん、フェイトちゃん」

アイスが原因で喧嘩がエスカレートでの戦闘

オースキャナー『サイ!ゴリラ!ゾウ!サゴーズ……………サゴーズ!
!!』

ヴィースキャナー『ライオン!トラ!チーター!ハイエナ!キツネ
!オオカミ!ラッタ!ラーター!!ラトラーター!!イーエ!ツ
ネーオ!イエツネーオ!!!イエローコアコンプリート!!!』

枚数7八神家と○○○とVis

カウント・ザ・メダル7八神家とOOOとVis

映司が飛び出してから数分後食事の準備も出来上がり後は「いただきます」と食べるだけだったが映司達が一向に帰ってこない

リオ「映司さん達大丈夫かな………」

リオは映司達がヤミーを追ってからすぐに目を覚ましヴィヴィオ達と並んで座っていた

ウェンディ「そうっスね」

重い空気が漂う

するとエリオの瞳に人影が写る

エリオ「映司さん達帰ってきましたよ」

スバル「ホント！よかった」

空気が明るくなるがその人影が近づいてくる

まるでボディスーツ系の衣服を纏った者が映司を担ぐような画に見えた

そのためスバル、エリオ、ギンガ、ノーヴェは警戒体制に入り他は子供達を守るように陣形をとる

映司・ヴィーズ「？」

アंक「なんだ？」

ヴィヴィオ「キャー、だれえー!!」

ヴィヴィオが悲鳴をあげる

ヴィーズ「ヴィヴィオさん……」

ヴィヴィオ「えっ、その声。まさかアインハルトさん?!」

映司「あっ、アインハルトちゃん変身解くの忘れてる」

ヴィーズ「あっ、そうでした」

そしてヴィーズは少女の姿に戻る

ヴィヴィオ「アインハルトさん! どうしたんですかその姿」

アインハルト「いろいろ、ありまして。それは後ほど説明します」

映司「それよりリオちゃんは?」

リオ「あの……」

映司「あっ、リオちゃん大丈夫! 怪我ない?!」

リオ「はい、大丈夫です。それとありがとうございます!」

映司「ん? あー、気にしないでヤミー退治は俺の仕事みたいなものだしそれにリオちゃんに怪我がなくてよかった」

映司は笑顔でリオの語りかける

リオ「はい! ありがとうございます。さっ、ご飯の準備できていますよ、早く食べましょう」

リオは映司の袖を引っ張ってゆく

こうしてその日は暮れた

そして翌日

アルピーノ家の前には6人の女性と1人の男性がいた
それを映司、アंक以外が出迎えていた

はやて「お久しぶりや、なのはちゃん、フェイトちゃん」

ヴィータ「よお、久しぶりだなお前ら」

シグナム「ああ、懐かしいなテストロッサ」

シャル「本当ね」

映司「おはようございます。あの～その人達は？」

なのは「あっ、おはよう映司君」

はやて「君が火野さんですか？」

映司「あっ、はい……」

はやて「初めまして、八神はやてです」

ヴィータ「ヴィータだ」

シグナム「シグナムだ」

シャル「シャルです」

ザフィーラ「ザフィーラだ」

リイン「リインです」

アギト「アギトだ。よろしくな」

映司「うん。よろしくね」

一通り挨拶が終えたところで

フェイト「さあさあ、こんなところで挨拶もあれだし、それにそろそろ訓練の開始時間だよ」

はやて「そうやね。さっ、いこか」

そしてそれぞれは各場所へいったがヴィータは即座に冷蔵庫に向かいクーラーボックスからミッドでは有名なアイスクリームバリバリ君当たり付き1箱14本入りのBOX1400円を冷凍庫にしまう

ヴィータ「風呂上がりにみんなでたべよ」

大事そうに入れ笑顔でその場を去ると

アंक「アイスでも食うか」

アंकは冷凍庫の蓋を開ける、中には冷凍食品以外に先程ヴィータが入れたバリバリ君当たり付き一箱14本入りのBOX1400円に手を伸ばす

そしてアंकは箱から約3本取り出しビニールを破りビニールをゴミ箱へ投げ入れる

それから数分後

ヴィータ「あつ、忘れてた」

そして台所へ向かうと

ヴィータ「あああああああああ!!!」

そして映司とはやてが飛んできた

はやて「なんや!」

映司「どうしたの?!」

そこにはアंकがおりヴィータがアंकに飛びつき周りにはバリバリ君当たり付き一箱14本入りのBOX1400円のビニールが7、8枚散らかっている

アंक「映司、なんとかしろこれ!!」

映司「アंक!」

はやて「ヴィータも落ち着いて！」

ヴィータ「だってはやてこいつあたしが風呂上がりになんか食べようと思っていたアイス8本も食べやがったんだよ」

映司「そうなのか？」

アंक「しるか！！」

ヴィータ拳を握りアंकを殴る

ヴィータ「てめえ、食ってたじゃねえか！あたしが入った時までも食ってたしょ！！」

アंक「だったら名前でも書いておけ！」

ヴィータ「なに〜！よし、じゃあ、勝負だ負けた方がここの全員分アイス買いに行くそれでいいな」

アंक「上等だ！映司相手してやれ！ちょうどいいアインハルトの奴も混ぜてこのガキをたたきのめせ！」

ヴィータ「上等だかってこい！」

映司「ちよつと2人共！」

止めようとした映司だが止めきれず2対2のタッグチーム戦となった
チームは

映司／オーズ&アインハルト／ヴィーズ

ヴィータ&ヴィヴィオ

という変なチーム戦とで戦闘が開始されようとしていた

映司「はあ、なんでこんな事に……………」

アंक「映司、初っ端から本気で掛かれ」

アंकはクワガタ、ウナギ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウのメダルを映司に渡す

アインハルト「あの、私には……」

アंक「ああ、お前かお前にはこれだ」

そしてアंकはタカ、トラ、バッタを2枚づつライオン、チーター、
ハイエナ、キツネ、オオカミを1枚づつ渡す

アंक「絶対勝てよ！」

アインハルト「はい！」

アインハルトはやる気である

一方ヴィータ、ヴィヴィオサイドは

ヴィータ「よしヴィヴィオ勝つぞ！勝てば奴らが山ほどアイス勝つてきてくれるぞ」

ヴィヴィオ「いえ、べつにそっちはどうでもいいんですけど。アインハルトさんの新しい力見せてもらいますよ」

シグナム「今回は私が審判をする4人共かまわないか」

ヴィータ「おう、とにかく早く始めようぜ」

シグナム「ああ、では試合開始！！」

映司「変身！」

ヴィータ・ヴィヴィオ「セットアップ！」

アインハルト「セットアップ……変身」

オースキャナー『クワガタ！ウナギ！チーター！』

ヴィースキャナー『タカ！トラ！バッタ！タカ！トラ！バッタ！タ・

ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！！！！デュアル！！！！』

アイゼン『セットアップ！！』

ヴィヴィオバリアジャケットへはヴィータは騎士甲冑へ映司はオーズガタウータへヴィーズデュアルタトバへと変身する

ヴィータ「よし、かかって来い！ヴィヴィオはアインハルトの相手してやれ。あたしはあのクワガタ頭をやる！」

ヴィヴィオ「はい！」

ヴィータ「行くぞアイゼン！」

ヴィータの愛機グラーフアイゼンはカートリッジをロードし形状を大型ハンマーにする

ヴィータ「うおおおおお！」

オーズにもすごいスピードで接近しハンマーを振り下ろす

ヴィータ「ギガントハンマー！！！」

オーズ「！！！」

映司はそれを察知しウナギの鞭でヴィータのアイゼンを掴み取り上げるが

ヴィータ「うおりやあああ！！！」

オーズの顔面に蹴りが1発入る

オーズ「おわ！」

後ろに飛ばされ鞭に絡まれたいたアイゼンを取り返す

ヴィータ「どうだ！くっ（足が……痺れて動かねえ……）」

ヴィータの蹴りが入る瞬間オーズはクワガタの雷を使いヴィータの足に電撃を流し込み脚を麻痺させた

映司はチャンスだと思いドライバーのメダル3枚とサイ、ゴリラ、ゾウのメダルと入れ替えオースキャナーをスライドさせる

オースキャナー『サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ………サゴーズ！
！！』

オーズの姿がサゴーズコンボへと変化する

ヴィータ「変わった？！」

オーズの姿が変化したことに驚くヴィータ

ヴィータ「だけど、どんなのになってもいっしょだ！」

怒っている為冷静な判断ができないヴィータはオーズに突っ込んでいく

それにオーズはゴリラバコーンをヴィータに向かって放つ

ヴィータ「喰らうかそんなもん！！」

アイゼンを振り回しゴリラバコーンが1つ映司に向かうがもう1つはヴィータの顔面に直撃し草村へと飛ばされる

ヴィータ「ふぎゃー！」

そして映司に向かっていったもう1つのゴリラバコーンは足元に直

撃し変身が解除され後頭部から転び映司は気絶する

映司「いだ！」

映司／オーズVSヴィータ&アイゼン
結果引き分け

その一方ヴィヴィオとアインハルトは

ヴィヴィオ「はああ！」

外壁を破壊するヴィヴィオ
それを躲すアインハルトこと仮面ライダーヴィーズ

ヴィーズ「はああ、さすがヴィヴィオさん素早い攻撃。ですが！」

アインハルトは右サイドからタカとバッタメダルを抜き取りライオンとチーターメダルと入れ替え左サイドはバッタメダルを抜き取りオオカミメダルと入れ替える

ヴィースキャナー『ライオン！トラ！チーター！タカ！トラ！オオカミ！ラッタ！ラーター！！ラトラーター！！！！』

ヴィーズの姿はラトラータ&タトラオコンボに変身するがアインハルトはひざまずいてしまう

ヴィヴィオ「アインハルトさん！」

ヴィーズ「うっ（力が制御できない。どうすれば……まさかメダルの組み合わせの問題？なら）」

そして左サイドのタカとトラのメダルを抜き取りハイエナとキツネのメダルとチェンジしヴィースキャナーをスライドさせる

ヴィースキャナー『ライオン！トラ！チーター！ハイエナ！キツネ！オオカミ！ラッタ！ラーター！！ラトラーター！！イーエ！ツネーオ！イエツネーオ！！！！イエローコアコンプリート！！！！』

そしてヴィーズ最強フォームの1つ仮面ライダーヴィーズイエローコアコンプリートフォームへと変身した

そしてアインハルトは構え

ヴィーズ「行きますよ。ヴィヴィオさん」

ヴィヴィオ「はい！望むところです！」

カウント・ザ・メダル7八神家とOOOとVis（後書き）

次回魔法少女リリカルなのはOOO

続く激戦

ヴィーズ「はああああ！」

ヴィヴィオ「うああああ！」

現れる敵の根源

バンク「貴方は王の為に落命しなさい」

敵の真の能力

ルーレットダー『メダルルーレット！ホウオウ！カラスW！ペンギンW！』

枚数8激戦終結とルーレットと赤のメダル3枚

カウント・ザ・メダル8激戦終結とルーレットと赤のメダル3枚(前書き)

ダジャスピナー発売!

しかも今週タジャドル登場!!

録画しろよー!!!!

カウント・ザ・メダル8激戦終結とルーレットと赤のメダル3枚

アイスが原因で始まった戦いはオーズとヴィータのダウンで最終戦
アインハルトVSヴィヴィオの戦闘が繰り広げられていた

ヴィーズ「はああああ！」

ヴィヴィオ「うああああ！」

2人の拳が擦れあい火花が散る

ヴィーズ「くっ！」

そしてアインハルトは後ろへ跳びヴィヴィオから一定の距離を取る

ヴィーズ「はあ、はあ、はあ………（強いさすがヴィヴィオさんだ。
だけどさすがに体力ももうない……。勝負に出る！！）ライオン
シオルダー、アームストライク」

アインハルトが宣言するとライオンシオルダーは咆哮しアインハル
トの拳へと移動する

ヴィヴィオ（まさかアインハルトさん勝負に出る気じゃ……。……だ
ったら）

そしてヴィヴィオも腋の下で拳を構える

それと同時にアインハルトもヴィースキャナーをスライドさせる

ヴィースキャナー『イエローコア！！スキャニングチャージ！！！！』

ヴィーズ「霸王獅子断空拳!!」

ヴィヴィオ「ディバイーン・バスターーーーー!!」

2つの必殺技がぶつかり合う

そして中央で爆発し2人の変身が解除されその場で眠ってしまった

そしてアイスの一件はその時ちょうどメガースが買物に出ていたため頼み込んでアイスを買ってきて貰ったのであった
めでたしめでたし

アंक・ヴィータ「めでたくねえ!!」

その頃逃走したポンドはミッドのビルの影に隠れ潜んでいた

ポンド「くっ、コアを3枚も持って行かれた。ヴィーズの奴以前の時よりも強くなっていやがる。まあいいとりあえずあいつらと合流するのが先だ」

ポンドは立ち上がり歩き出そうとするが

???「させると思いますか」

若い女性の声が聞こえる
そしてポンドの背中から腕が生える
背中から腕を貫通された

ポンド「な……………にいい」

そして女は手を引き抜く

???「2枚ですか。まだ1枚ありますね」

そしてポンドはその女から距離をとり振り返るとポンドの表情が一変する

ポンド「お前は……………バンク!!何故お前が……………。まさかあいつが!」

バンク「ええ、王が復活されようとしています。それには貴方方のコアが必要です。ですから」

そういうとバンクの腰にセルメダルが集合し1つのベルトを作り出す
ベルトの中央はルーレットのようになっており
しかもベルトにはハウオウ、カラス2枚、ペンギン2枚の赤いコアメダルがすでに収納されている

バンク「貴方方は王の為に落命しろ。変身」

バンクは中央のそれを回転させる

ルーレッダー『メダルルーレット!ハウオウ!カラスW!ペンギンW!』

バンクの姿が紅蓮のライダー

仮面ライダールーヴィーズへと変身する

そして持っていた刀の鞘からルーヴィーズ専用武器、メダグレンバーを抜きポンドを切り付ける

ポンド「ぐあ!!」

傷口からセルメダルが飛び散る

ポンドは逃走を計りビルへ跳び移るが

ルーヴィーズ「逃がしません」

背中に紅蓮の翼が生え飛び出し上空のポンドを切り落とす

ポンド「ぐあ!!」

バンクは軽やかに着地する

ルーヴィーズ「この程度とは、そうでしたね貴方のコアは1枚、私
のコアは8枚敵うはずありませんね。それでは、消えなさい」

メダグレンバーの柄にセルメダルを3枚セットしレバーを倒すとク
リアになっているところにセルメダルが来るそれをルーレッダーを
取り外しオーズのメダジャリバーをオースキャナーでスキャンさせ
るようにしスキャンする

ルーレッダー『チェックメイト!! スキャニングチャージ!!!!!!』

ルーヴィーズ「はあ!!」

そしてポンドの体を一刀両断する

ポンド「ぐああああああ！！」

そしてポンドがメダルへと変化しバラける

ルーヴィーズ「鳥皇慚愧……灰になりなさい」

そして彼女は変身を解除しポンドの最後のコアメダルを探し出す

バンク「これで黄色のコアは6枚。王もお喜びになる。残り30枚。まずは王の元へ戻るとしよう」

そして彼女の姿は闇に消える

カウント・ザ・メダル8 激戦終結とルーレットと赤のメダル3枚（後書き）

次回魔法少女リリカルなのは○○○

紅蓮の使者襲来

バンク「探しました。オーズそしてヴィーズ」

発動する赤のメダルの力

オースキャナー『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！
！！』

ルーレッダー『メダルルーレット！ホウオウ！カラスW！ペンギン
W！』

枚数9鳥と赤のメダルと紅蓮のメダル

カウント・ザ・メダル9鳥と赤のメダルと紅蓮のメダル(前書き)

タジャ降・臨!

カウント・ザ・メダル9鳥と赤のメダルと紅蓮のメダル

魔法少女リリカルなのはOOO今までの3つの出来事

1つ映司はなのは達にオーズの存在を話す

2つリオに取り付いたポンドのヤミーが原因で新たなライダーヴィーズが誕生

3つそのポンドが同じグリードのバンクに倒されメダルを全て持って行かれた

アイス騒動から2日後映司、アंकこの2人がいた

アंक「さて、どうしたものか。現在俺達が持ってるコアは俺達の世界のは俺以外の各グリードは2枚づつ。そしてこっちに来て手に入ったメダルはドルからはクモのコアは1枚ポンドからは1枚1種類づつか」

アंकはいつものようにアイスを食いながら話す

映司「うん。他にもまだいるんだろアंक？」

アंक「ああ、まあどうせあいつらはアナロググリードだ。考え方も古いがああ2人は別だ」

映司「なんだよアंकあの2人って？」

アंक「1人は以前俺達が出会ったセントだ。もう1人は……………」

アंकは最後まで言わず何かに反応した

映司「最後はなんだよアंक？」

アंक「まで…………この気配、屑ヤミーかそれともう1つなんだ？」

映司「ヤミーが？とにかく行こうアंक！」

アंक「ああ、この気配も気になるしな……」

2人が飛び出そうとした瞬間

それから急いで現場に向かった

そしてそこには屑ヤミーの群れだった

映司「なんて数だ。アंकメダル」

アंकはメダルバインダーからクワガタ、トラ、バッタを映司に渡す

映司「えっ、これ？ま、いいか」

そしてドライバーを腰に巻きメダルをセットしスライドされた

映司「変身!!」

オースキャナー『クワガタ!トラ!バッタ!』

オーズに変身後映司は屑ヤミーの群れに飛び込みクワガタヘッドの能力を使い一掃した

オーズ「ふう、終わった」

が!

アंक「映司後ろだ!!」

オーズ「え?ぐあ!!」

映司の背中に炎の球体が直撃するが映司は即座に体制を立て直す

オーズ「なんだ！」

バンク「まさか今の攻撃を受け立っていられるとは感服したいします」

オーズ「お前は?!」

アंक「バンク………!!」

アंकは歯を軋ませながら言う

バンク「探しましたよ、オーズ、ヴィーズですが今はオーズだけです。まっ、いいでしょう」

オーズ「お前は?!」

バンクは一礼する

バンク「私は赤のコアのグリード。そのアंकと同じと考えてください」

アंक「はっ、なるほどな屑ヤミーを広めればとにかく俺の感で来るとふんだようだな」

バンク「ええ、そうです。私が欲しいのは銀粹のコアメダルですからヴィーズかオーズを狙っていればいずれ来ると思いましたね」

アंक「チッ、映司そいつを本気でこてんぱんにしてやれ！」

アंकは舌打ちをしカマキリのコアを映司に投げる

オーズ「わかった」

トラのコアとカマキリを入れ替えオースキャナーをスライドさせた

オースキャナー『クワガタ! カマキリ! バッタ! ガータ・ガタ・ガタキリバ! ガタキリバ!!!』

オーズ「うおおおおおおおおお！！！！」

歌の終了と同時に咆哮しバンクに向かって走り出す
さらに走りながら分身を生産する

バンク「ガタキリバ、ウヴァの能力ちからですか……なら私も」

そういうとバンクの姿が彼女の真の姿、グリードの姿になる
見た目はハウオウ、カラス、ペンギンを混ぜ合わせたようなものだ
った

さらに腰から剣を抜く

バンク「いきますよ……………」

そしてバンクはガタキリバコンボのオーズの中へ飛び込む
が

バンク「ひとつ…ふたつ…みつ…よっつ……………」

段々と分身したオーズを切り裂く
そして

バンク「よんじゅうく…ごじゅう…本体！！」オーズ「ぐあっ！
！」

オーズ本体も切り裂かれる

アंक「くっ、奴が相手では分が悪い仕方ない…映司コンボを変えて
応戦しろ！」

そう言うときアンの判断でライオンとチーターのメダルを映司に投げそれをキャッチする

そうすると緑のコア3枚を抜き取り黄色のコアを3枚入れ替える

オースキャナー『ライオン！トラ！チーター！ラッタ！ラーター！
！ラトラーター！！！！』

ラトラーターへと姿を変える

バンク「次はラトラーター、カザリのコンボですね」

呆れた口調で言う

するとオーズの頭部が光だす

ラトラーターの能力だ

バンク「くっ……………」

バンクは眩しさのあまり目を隠す

その瞬間映司はトラクローを展開し飛び込むが

バンク「甘いです……………よ！」

懐に入った瞬間下から切り上げられる

オーズ「ぐあ！」

アンク「映司！（ガタキリバでもラトラーターでもダメか）仕方ない
映司、サゴーズで踏ん張れ！」

さらにメダルバインダーからサイ・ゴリラ・ゾウのメダルを取り出し立ち上がった映司に投げ渡す

オーズ「わかった！」

黄色の3枚と入れ替えスキャンする

オースキャナー『サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ……………サゴーズ！
！！』

サゴーズへと変身する

バンク「やれやれ次はガメルのコンボサゴーズですか。全く芸のない方だ」

するとオーズはゴリラバコーンを放つ

バンク「言っておきましょう。その力では私を倒す事は出来ません。
……………秘技白百合！」

バンクは体制を低くし腰に剣を戻し一瞬でゴリラバコーン2つを4
つに切り裂いた

オーズ「えっ?!」

アंक「なんだと！」

その光景に2人は驚いていた

アंक「（どうする……………ガタキリバのラトラータ、サゴーズも通
用しなかった。ここはシャウタか？いやここは！）映司！」

アंकは自分の腕からあるコアを3枚取り出し投げる
それを映司はキャッチする

オーズ「アंकこれって！」

アंक「いいから使え今はそれしか手がない！」オーズ「わかった」

映司はメダルを全て抜き取り赤のコア3枚セットしスキャンさせた

オースキャナー『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！
！！』

そして変身したのは赤のメダルのコンボ仮面ライダーオーズタジャドルコンボだ

それを見たバンクは

バンク「赤のメダル……アंक貴方のメダルのコンボですか。ならば私も」

バンクの腰にセルメダルが纏わり付きベルトの形になる
そして中央のルーレットそれを回転させる

バンク「変身……」

ルーレッダー『メダルルーレット！ホウオウ！カラスW！ペンギンW！』

バンクも紅蓮のライダー、ルーヴィーズへと変身する

ルーヴィーズ「さあ、第2ラウンドといきましょうか」

カウント・ザ・メダル9鳥と赤のメダルと紅蓮のメダル（後書き）

すみませんが実は今他にも1つ作品を連絡していますんでその作品を重点的にやろうと思いますのでこっちの連絡は遅れますがちゃんと完結させます

カウント・ザ・メダルス10セルとバースと強奪されたコアメダル（前書き）

一ヶ月ぶりですね。たまに更新しますから忘れないでね

カウント・ザ・メダルス10セルとバースと強奪されたコアメダル

オーズがタジャドルへと姿を変え。バンクは彼女の二つ目の姿ルーヴィーズへとなった

二人は距離を縮める。それぞれの手にはメダジャリバーとメダグレンバーが握られている

そして風が吹きはじめると同時にルーヴィーズとなったバンクが切り付ける。それをスピナーで防御し押し返すと同時にメダジャリバーを振り下ろすがメダグレンバーの刃の腹部で止められる
そのような攻防が続いていた

（チツ、バンクの奴映司の体力を削る策にでたか。まずいグリードと人間じゃ体力に差がありすぎる。どうする……………）

アंकはそう考えているとメダグレンバーがオーズのオーランサークルを切り裂く

「ぐあ！」

「映司！」

倒れたオーズの首にメダグレンバーを突き付ける

「どうしますアंक？私が欲しいのは銀枠のコアメダルのみです。
貴方方の金枠のコアメダルではないのです。さ、渡しなさい」

ルーヴィーズはアंकに手を差し出す。アंकは仕方なくクモのコアとポンドのコアをだす

「素直でよろしい。ではそれを持ってきてください」

アंकはそのルーヴィーズに銀枠のコアメダルを手の平に置こうとした瞬間機械の音声が聞こえた。

『セルバースト』

その音声と同時にある声が聞こえた

「どけろアंक！」

その声のアंकはバックステップで下がった瞬間ルーヴィーズが赤い閃光の攻撃を受ける。その閃光の先を見るとそこにはバースの姿の伊達とバースバスターを構えた後藤だった

「大丈夫か火野」

「伊達さん、後藤さん！」

倒れた体を起こし二人の名を呼ぶ

「二人共どうしてここに？」

「それは後でなとりあえずまず。はあいつからだ」

バースはルーヴィーズの方を見る

「後藤ちゃん。火野を頼むわ俺はあいつの相手してるから」
「わかりました」

後藤はオーズに駆け寄り肩を貸す

バースはルーヴィーズの正面に立ちセルメダルを一枚取り出しバースロットに入れグリップアクセラレータを回すと中央のセルリアクターが開き輝きを放ち機械音を発音する

『ドリルアーム』

そして右腕のカプセルオーブから様々なネジ等が出現しバースの右腕にドリルが装着される

「そんじやお仕事開始だ」

右腕のドリルアームをルーヴィーズに向け殴りかかるとメデグレンバーで防御し弾く

「なかなかやるね。だったら」

バースは再びバースロットに入れグリップアクセラレータを回し中央のセルリアクターを開き輝きを放ち機械音を発音させる

『シヨベルアーム』

左腕のカプセルオーブから再び様々なパーツが出現しバースの左腕にシヨベルの先端が装備され両腕で殴りつける

「おら！よいしょー！」

ルーヴィーズの体にヒットし体制を崩しながら下がる

「なかなかやりますね。ですが目的の物のひとつは手に入れました」

ルーヴィーズの手にはクモのコアがあった

「では失礼します」

ルーヴィーズは赤い旋風が発生し姿を消した

「待て！」

バースはそれを覆うとしたが

「逃げられたか。それより」

バースは変身を解除し伊達の姿に戻る

「こりゃ大変だ。アンコどこか手当できる場所は」

「この先に家があるそこへ連れていけばいい」

「わかった。火野しっかりしろ」

伊達が声をかけながら肩を貸しアルピーノ邸へ急いだ

その場所から少し離れた場所ではセントがそれを見ていた

「やはりオーズじゃバンクに太刀打ちできないか。おそらくヴィー
ズも……。しかたないアレの完成をユーノ司書長殿に知らせよう」

そしてセントの姿は消えた

カウント・ザ・メダルス11 献立とヒトと黒いコア

バンクとの戦闘終了後重症を負った英司をアルピーノ邸へ連れて帰り、伊達が手当てをした。そして訓練をしていた管理局のメンバーはアルピーノ邸の食堂に集まっていた

「まさか火野があそこまでやられるとはな。アンコなんだあいつは」

「アンコじゃない。あいつは、バンク。ヴィーズの原型だ」

「ヴィーズの原型だと？」

後藤がそこに疑問を持つ

「ああ、バンクが変身した姿をルーヴィーズと言う。奴は俺と同じ鳥のコアメダルでできたグリードだ。あいつは自分のセルでドライバーを作り変身する厄介な奴だ。しかも忠誠心が異常なまでに高い」「忠誠っててことは誰かに仕えているの」

「奴が仕えているグリードはウォ、ンどのようなコアメダルかは知らないが……、欲しがっているコアは俺達の持っている金枠のコアじゃなく銀枠のコアだ」

「銀枠のコア……」

その場の全員が息を呑む

「とのかくだ。あいつらには銀のコアを渡すわけにはいかない」

伊達が仕切るとアンク以外が頷くと伊達の腹の虫になる

「あゝ、腹減ったな。メガヌさん」

伊達が台所のメガーヌを呼ぶ

「なにかしら？」

「おでん、無い？」

その言葉にアंकと後藤はやれやれという表情をしなのは組は笑いをこらえずいる者もいれば口がまがっている者もいる

（今夜はおでんかしら♪）

今夜の献立を決めたメガーヌお母さんだった
それから数時間後映司が目覚めました



ミッドのとある古城。そこには三つの影があった。ひとつはルーヴ
イズことバンク。もうひとつは彼女の仕えるグリードの王たる存
在のウォンだ。そして最後は巨大なタワー型の水晶だった

「で、どうよオーズは？」

「はい、彼なら私一人でも充分に戦えるでしょう。ただ………」

「ただ、なんだ？」

「途中から乱入してきたバースという者には手こずりそうです」

「バース？聞いたことねえな。そいつはなんで変身すんだ？」

「いえ、彼はセルメダルで変身します」

しばらく沈黙が続く

「あははははは、あはははははあはははははははははは！」

ウォンが甲高く笑う

「まさかお前がセルごときにのされるとは心底笑える」

「申し訳ございません」

「まあいい、オーズとヴィーズはほって置け奴らもこの世界に出て来るヤミーやグリードを消さなきゃならないからな。だからお前はセント共メダルに変えろいいな？」

「了解しました」

バンクは深々と頭を下げる。そしてウオンは背後の水晶をみる。その水晶の中には各銀棒のコアメダルが赤いコアと緑のコアは一枚づつ、黄色いコアと純白のコアも三枚づつ、そしてどす黒いコアが一枚が埋め込まれている

「もうそろそろだこの俺、ヒトの属性のコアが集結するのはな」

そして中央のどす黒いヒトのコアは光を放つ

その輝きはまるで人のもつ欲望を物語っているようにバンクの目には写った

カウント・ザ・メダルス12大事な話しと烏やミーと軽量系（前書き）

短く仕上げました。ですが次回はバトルの予定です。新しいグリー
ド登場です
ではどうぞ

カウント・ザ・メダルス12大事な話しと烏ヤミーと軽量系

バンクからの襲撃を受けたその日の夜
スクライア邸

「はー、今日も一日つかれたな」

ユーノがソファに座りながらコーヒーを飲み一息つくときチャイムが響き玄関の鍵を開ける

「はーい。あつ、セントさん。お帰りどこ行ってたの？」

「はい、ただいま帰りました。ユーノさん実はお話があります」

「大事な話のようだね。上がってて」

「すまない」

ユーノはセントと一緒にロビーへ行く

「で、話ってなに？」

「実は、奴が復活しそうなんです」

「奴って、禁断のコアメダルの存在？」

「ええ、バンクが表舞台に出てきたということはウォンが活発に動き始めるということ、以前もそうでしたからね」

「そうなんだ」

「ところであのシステムはまだできてないのか？」

「うん。もう少しで完成するってマリーさんが」

「そうですか、マリエルさんが」

「でも」

ユーノは鞆から小さい袋を取り出す

「メダルの解析はすんだから返しておいてって」

それをセントに渡すと袋の中身を取り出す。中にあったのは紫の銀
枠のメダル

「ありがとう。これでもともの力の三分の一が戻ります」

セントは出したコアメダルを自分に取り込む

「ふう」

「それと。よいしょ」

ユーノはもうひとつ鞆から袋を取り出す

「これ試作品なんだ」

ユーノはその袋をセントに渡しそれをあける

「これが？まだドライバーはできてないんだけど」

「なるほど、メダルは完成したということですね」

「うん」

「わかりました。今日は疲れました。今日は失礼します」

「うん。お休み」

セントはユーノに借りた部屋へ戻る



ウォンとバンクのアジトの古城の一室

「さて、どうしましょうか。とりあえず」

バンクはセルメダルを取り出す

「ヤミーを作って残りのコアの場所でも探しましょうか」

バンクは翼を広げメダルを左手の甲に入れる

「ぐっあ！ぐう！あっ……」

と奇声をあげる。と翼からハゲタカヤミーが出現する

「はあはあはあ……」

「大丈夫ですか。主」

「大丈夫だ。それよりわかっているな？」

「はい。私の任務は他のグリードの探索です」

「よろしい。行け！！」

「はっ！」

ハゲタカヤミーは窓から飛び出す

バンクはふらつききながら立ち上がる

「大変そうだなバンク」

「ウォン様！どうなされたのですか？」

ウォンが目の前にいると知るとバンクはウォンの前へ行きひざまずく

「どうもこうもねえ。何となく散歩してたらよお前の部屋からヤミーの気配して行っただけだ」

「申し訳ありません！」

「しかし大変だなく。ヤミー一匹作るのにそこまで体力を消費するとはね」

「申し訳ありません………」

「まあいいさ。ちゃんとやれよ」

「はい！」



次の日、ミッドに帰ってきたのはや英司

後藤と伊達は八神家に居候しつつ管理局の協力者扱いで所属

映司とアंकはナカジマ家から高町家へと生活の場所を変えた

で今、映司とアंकはミッドの公園にいた

「アंक聞きたい事がある」

「なんだ？」

「禁断のコアメダル何なんだ？」

「ふん、その話しか。以前にも言ったが禁断のコアは世界を破壊しかねない物だ復活するとうるくな事がない。ただ自分の欲望のみを追求し続ける化け物だ」

「そうなんだじゃ、バンクって何者？」

アंकは一瞬嫌な顔をした

「それは言いたくない………」

「なんでだよ」

映英司とアंकが戯れていると

「言いたくないよね。だってお姉さんだもんね」

声がした方に顔を向ける

「セント………」

「お姉さんてアंकふーん……。えっ?! アंकお前お姉さんいたのか!!」

映司はものすごく驚いている

「ああ、バンクは俺の姉だ……。だが勘違いするなよ単に俺より早く生まれて同じ属性ってだけの話しだ! それにセントなんのようだ。冷やかしにでもきたのか!!」

その言葉にセントは微笑む

「まさか、ぼくはこれを君達に渡しに着ただけだよ」

セントは先日ユーノから渡された袋を吊すように持つ

「なんだそりゃ?」

「自分の目で確かめなよ」

セントはそう言ってアंकに袋を投げる

「ぼくの用件はそれだけじゃあね」

セントは以前と同じように姿を消す

「ちっ、何しに來たんだあいつ。それより」

アंकは袋の中を確認する

「ああ？なんだこりゃ？」

「なにが入ってたんだよ」

アंकは黙って映司に袋を渡す

「見てみる。ただのガラクタだ」

映司はその袋を手に取り中を見ると

「なんだこれメダルかな？えっと……………」

映司は袋の中から二枚のメダルを取り出す。ひとつは金枠のパンダのメダル。もうひとつは赤い枠の何も描かれてないメダル

「これはなんだろうクマかパンダかな？でこっちがなんだろうなにも描かれてない……………？アंकどう思う？」

映司はアंकに聞いてみる

「はっ、俺が知るか。それよりも映司。ヤミーだ。結構近くにいます。ちやつちやつとメダルにしてやる」

アंकは走ってヤミーの元へ行った

「待てよアंक！」

映司もアंकを追い掛けた

そこから数メートル先のビルの屋上。そこにはコウモリ、モグラ、

ムササビの混ざった怪人が眺めていた

「ケケケ、アंकまさかお前がここにいるとはな。それにセントの奴もいたね。ケケケ面白いちょっと遊んでこよ」

そう言ってその怪人はコウモリの羽を広げ飛び去った

カウント・ザ・メダルズ13 パンダと擬似とリリカル（前書き）

今回はNEWコンボがでます

意見待ってます

ではどうぞ!!

カウント・ザ・メダルス13 パンダと擬似とリリカル

魔法少女リリカルなのはOOO今までの3つの出来事

1つバンクの襲撃を受ける

2つオーズの世界の伊達と後藤が参戦

3つセントが映司達と再び接触しある物を渡す

アंकと映司が走りだして数分後そこにはのモグラのヤミーが「壊す。管理局を壊す!」と呟きながら地上本部に向かっていた

「アंकあいつが!」

「ああ、どうやら欲望は管理局への復讐らしいな。なんでもいい、映司さっさと行ってメダルに両替だ」

アंकはタカ、トラ、バッタのメダルを映司に投げ渡す

「言われなくても」

映司もオーズドライバーを手に取り腰に充てベルトが装着する。そしてメダルを3枚セットしスキャンする

「変身!!」

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!タ・ト・バ!』

オーズはトラクロを展開しモグラヤミーに攻撃するとモグラヤミーも鋭い爪を回転させオーズを攻撃。攻撃されたオーズは膝をつく

「ぐあ！なんて頑丈な奴だ！」

「おお、やってるね」

映司は声のした方をみるとバースドライバーを装備した伊達とバーススターを構えた後藤とヴィースドライバーを装備したアインハルトがいた

「火野さん助太刀します。アंकさん」

アインハルトがアंकの名を呼ぶとアंकはホルダーからライオン、カマキリ、チーターを二枚ずつ渡す

それを受け取るとアインハルトはドライバーにセットしスキャンさせる
伊達もバースドライバーにセルメダルを入れるとグループアクセラレータを回す

「「変身！！」」

『ライオン！カマキリ！チーター！ライオン！カマキリ！チーター！デュアル！』

アインハルトはヴィースデュアルラキリバへ伊達はバースへ変身する

「よし、お仕事開始だ！」

バースはメダルを二枚セットしグループアクセラレータを二度回す

『ドリルアーム、クレーンアーム』

機械音の後バースの腕にクレーンアームが装備されさらにその先端

にドリルアームが装備される。バースはクレーンアームの先端のドリルアームを飛ばしモグラヤミーにダメージを与える。それをチャンスとしヴィーズがカマキリアームを展開し切り掛かる。モグラヤミーは火花を散らし転がる

「よし！一気に決めるか！」

バースが仕切るとオーズもヴィーズも頷き互いのスキヤナーを取りメダルをスキヤンさせる

『『スキヤニング・チャージ！！』』

バースもセルメダルを二枚連続で入れる

『セルバースト』

そしてバースはクレーン&ドリルアームでモグラヤミーに攻撃しヴィーズはチーターレッグで懐に入りカマキリアームで切り裂き、怯んだ隙を狙ってオーズは飛び上がり必殺技タトバキックを繰り出そうとしていたが

飛び上がった瞬間空中で背中を蹴られ墜落してしまう

「火野！！」

「火野さん！」

「映司！くっ！」

「ケケケ、ようアंक」

「バーツ……！」

そこにいたのはガメルとは正反対の軽量系のグリードバーツ。バー

ツはモグラヤミーの前に降り立つ

「まさかお前までいたとはな。まあ、ドルとポンドがいれば当然か」
「そういえばさポンドがなかなか帰ってこないんだ。殺ったの君達？」

バーツは四人を順番に指差す

「はっ、なんだ知らないのか。バンクの奴がポンドを殺った」
「えっ、バンクが？」

「そうだ。あいつの目的と一番欲望は知ってるな？」

「忠誠心……そういう事か」

バーツは呟く

「ケケケ、まあいいさとりあえず自分のヤミーを倒そうとしてくれたツケは返してもらおうか。君は行きなよこいつらはの相手は自分がやるからさ」

モグラヤミーは頷き再び地上本部を目指す。そしてバーツはコウモリの羽を広げオーズに鋭い爪で切り付ける

「ぐあ！」

バースやヴィーズも反撃したが弾かれてしまう
(どうする。奴には刃や銃は通用しない……。そうだ！！)

アंकは何かがひらめきオーズを呼んだ

「映司！さっきセントから貰ったメダルを使ってみろ！」

「えっ？これ」

オーズはセントから貰った袋を持つ

「でも」

「いいからやれ！」

オーズは頷きトラのメダルを抜きセントから貰ったメダルを入れスキャンする

『タカ！パンダ！バッタ！』

トラアームはパンダアームへと変化する。パンダメダルはユーノからの依頼でマリエルが独自に開発したメダル。言うならば擬似メダルだ

「なに？！グリードのコアじゃないメダルで変身だと？！」

パーツは焦りの表情を浮かべた。オーズはパンダクローを展開しバツタレグで一氣にパーツの胸を切り裂く

「映司、そいつはこれから先いたら面倒だここで潰しておけ！まだ三枚あっただろそれでキメろ！」

「わかった！」

オーズはドライバーからメダルを全て抜きセントから貰った残りの何も画かれていないメダル三枚をセットするとそのメダルに絵が浮かび上がった。そしてオーズはそれをスキャンする

『ナノハ！フェイト！ハヤテ！ナ・フェ・ハ！ナ・フェ・ハ！！ナ・

フェ・ハ！！！！リリカル！！！！」

オーズが変身したのはなのは、フェイト、はやての三人のデータを詰め込んだ擬似メダルを使用した姿。仮面ライダーオーズナフェハ・リリカルコンボ

カウント・ザ・メダルス14エースのメダルとデイと鳥の苦悩（前書き）

本日二度目の更新です

この小説でのハッピーバース・デイです！！意味は読めばわかります

カウント・ザ・メダルス14エースのメダルとディと鳥の苦悩

「なんだその姿は！」

パーツはオーズのその姿に焦っていたなぜなら存在しないコンボだから。パンダを使用したコンボさえイレギュラーだというのに次はありえないコンボになったオーズに正直焦っていた

オーズはセルメダルを空中に投げるとフェイトのデバイスバルディッシュ・サイズフォームの形になりオーズはキャッチする

そしてオーズは踏み込みパーツの身体を裂く

「はぁ！」

「ぎゃー!!！」

そして切り付けた瞬間メダルが飛び散る。アंकはその中にコアメダルがあると右手を飛ばしてパーツのコアメダルを四枚を掴み取る

「こいつは儲けたな」

バルディッシュの形をしていたセルメダルは 元に戻り割れてしまう

「すげあな……………」

バースの感想だ

「伊達さんここは俺が食い止めます。ですからヤミーを!!！」

「OK、わかった! いくよ後藤ちゃん」

「はい！」

後藤と伊達は先へ向かったヤミーの元へ向かった

「てめえ……………」

ブーツはコアメダルが抜き取られた事により彼の飛翔の翼であるコウモリの羽とその鎧がセルメダルとなり弾け飛ぶ

「くそえ……………」

オーズははやての堕天使の翼を広げ飛翔する。そして再びセルメダルを飛ばして次はレイジングハート・バスターモードの形にしメダルを再度スキャンする

『スキヤニングチャージ!!』

オーズはブーツをロックし中央に魔力を集中しそれを一気に解き放つ。なのはあの技をオーズは叫ぶ

「ディバイン・バスター!!」

桜色の光線はブーツを包む

「おのれええええ!! オーズ! アンクうううう!!」

オーズは地に降り立つが

「はあはあ、ケツケケケケケ!!!! ふざけるなよおおお人間風情が!!!!」

ブーツはまだ生きている。怒りに任せ叫ぶ狂う

「あいつまだ！」

「しぶとい奴だ！」

オーズもその場に残ったヴィーズも再び構えるが

「その程度にしておきなさい」

「「！？」」

その声の主は以前ドルと共に闘争したグリード、フランだ

「フラン姉！」

フランはバーツに歩み寄りながら話す

「バーツ退くわよ。今のあなたじゃ勝てないわ」

「くっ、わかった。そのコアメダル預けておく！」

バーツは食い下がりフランは水柱を上げ逃走する



その頃バーズはモグラヤミーと戦っていた

バーズバスターを連発しモグラヤミーにダメージを与える

「よしそろそろ止めだ！後藤ちゃんメダル五、六枚か投げてくんない？」

「はい！」

後藤はセルメダル掴み取りバーズに投げる。それをバーズはチャッ

チする

「サンキュ」

そしてバースはメダルをセットしグラップアクセラレータを回す。
それを合計で六度繰り返す

『クレーンアーム』

『ドリルアーム』

『キャタピラレッグ』

『ジョベルアーム』

『カッターウイング』

『ブレストキャノン』

その六種類の武装はバースの各装備所へ装備されバース最強のフォーム。バース・ディとなる

その姿を見たモグラヤミーは怯む

バース・ディは足のキャタピラで前進しモグラヤミーの正面にまで
行くとキャタピラレッグで蹴りクレーンアームと合体しているドリルアームを鞭のように叩き最後にドリルアームで貫く

そしてバース・ディはカッターウイングで空中へ飛び上がるとブレ
ストキャノンにエネルギーをチャージしそれをモグラヤミーに放つ
モグラヤミーは爆発しセルメダルへとなり伊達の相棒のゴリラカン
達がそれを回収する

「ふう、終わったな」

伊達はバースから戻り

「はい！」

「とりあえず火野とアンコとアインハルトちゃんと合流すっか」

「そうですね」

伊達達は映司達と合流して居候している八神家へ向かった



その日の夜

ウォン達の古城

「報告します。以前より搜索していたグリード三名発見しました」

バンクのグリード少年の姿をしたハゲタカヤミーが報告していた

「ご苦労様。少し休みなさい」

「はっ！勿体ないお言葉」

バンクはニコツと笑い椅子に座る

ギィと音になりドアが開く

「バンク様アップルパイが焼き上がりました」

少女の姿をしたペンギンヤミーがアップルパイを運んできた

「ありがとうございます」

「はい」

ペンギンヤミーは頬を赤らめる

「あなたもどう、お姉ちゃんの焼いたアップルパイ美味しいよ？」

ハゲタカヤミーに聞く

「はい！」

「バンク様おやさしい」

「当たり前じゃないだって家族みたなものじゃない」

「はい！ありがとうございます バンク様！」

「うん」

そしてペンギンヤミーはアップルパイを六等分しその一切れをハゲタカヤミーに渡そうとすると横から取られてしまう

「うーん……。上々だ」

ウォンがハゲタカヤミーに渡そうとしたアップルパイを食べながら言う

「ウォン様……。なんのようでしょうか」

「なに、ちよつとなそれにしてもいいヤミーだな」

ハゲタカヤミーを覗き込むように見る

「あつ、ありがとうございます………」

「使えるな……」

「それはどういう………？」

「まさか！」

ハゲタカヤミーはその言葉の意味がわからずいたがバンクはその意味がわかった

ウォンはセルメダルを取りだしハゲタカヤミーの額にメダルスロットを出現させセルメダルを入れる。バンクはそれを止めようとした

が間に合わなかった

「ぐあああああああああ！！！！」

ハゲタカヤミーは叫び声を上げる。ペンギンヤミーは怯えながらバンクに隠れバンクの表情は苦しそうであった。ウォンは嫌な笑みを浮かべている

そしてハゲタカヤミーはメダルに分解され新しい姿となる昆虫の姿、ヘレクレスオオカブトの姿をしていた

「完璧だ。よし今から俺の言うことを聞け！今から俺とグリードを狩りだ！！！」

「御意！」

そしてウォンとヘラクレスオオカブトヤミーは残りの三人を狩りに向かった

残された二人は黙々とアップルパイを食べた
ハゲタカヤミーに吊いの思いを込めて

カウント・ザ・メダルス14エースのメダルとディと鳥の苦悩（後書き）

バンクはどうでしたか？

あの娘は結構優しい設定にしました

時期に私の作品の人気投票をしようかなと思いますその時はよろしくお願いします

カウント・ザ・メダルズ15犠牲と非道と仮面の暴君（前書き）

皆さんお久しぶりです

一ヶ月ぶりの更新です。頑張りました

ではどうぞ!!

カウント・ザ・メダルス15犠牲と非道と仮面の暴君

モグラヤミーとバーツとの戦闘を終え映司達は伊達や後藤の居候先である八神家へお邪魔していた。はやて、シグナム、ヴィータ、リン、アギトは局の仕事でいないが今日は非番でシャルとザフィーラが留守番をしていた。ちなみに今ザフィーラとシャルは伊達達の帰還により買い物に出かけていた。ちなみにアインハルトはヴィヴィオ達との練習に戻ると言い、その場で解散したのだった

「それにしてもスゲーなこのメダル」

伊達はナノハメダルを眺めながら言う

「ほんとですよー、いやーこんなに強力なのに全く負担がないんですよ」

たしかに映司はコンボを使えば大抵は身体に後遺症が残る。だが銀枠のメダルとこのメダルはそれが全く見えない

「まっ、こっちもヤミー始末したし、セルメダルもこんなに貯まった。いつでもバースになって戦える。うん」

映司と伊達が賑やかな話をしていた。だがアंकと後藤はお互い睨みあっている

「おいアंकお前なんでさっきから機嫌悪いんだ？」

「ああ？さっきからこいつが妙に俺の事を睨みつけてくれるからな」

「後藤ちゃんもどうしたの？さっきから」

「じゃ、はっきりにいます。アंक、お前は800年前のオーズに

協力してそのオーズが暴走して封印されたんだったな」

「ああ」

「だったらヴィーズは一体なんなんだ？」

「「あ……………」」

映司と伊達は知らなかった。ヴィーズという存在の意味を

「オーズは800年前のとある王だと会長に聞いた。だがヴィーズという存在は会長のデータにも無いなぜだ？」

「あのおっさんのデータにあるかないかはしらんが、かつてのヴィーズは……………」

アंक以外の全員が息を呑む

「……………俺も知らん」

その場の全員がコケる

「お前ふざけているのか?!」

後藤の怒り

「実際知らねえから知ねえんだよ」

「だったらせめて禁断のコアメダルの事でもいい。なにかないのか……………」

「なにかねえ……………」

アंकは少し考え込む。すると思いついたかのように話し出す

「そういえば封印される前にセントの奴が言っていたな……………」

「「なに?!」」

「たしか……。あいつは暴君だ。気をつけろ、いずれお前達のコアメダルも取り込み自分の好きな欲望の世界を創造するかもしれない。とか言ってたなあ」

それから数分後にシャルとザフィーラが帰宅し昼食をいただき映司とアंकは帰っていった



とある廃棄されたビル。そこにはグリードが三人集まっていた

「ちっ、まさかお前がのされるとは思わなかったな。バーツ」

ドルは仁王立ちで言う

「まあね、まさかこの時代に人工的にメダルを創るとは思わなかった。おかげでコアメダルを四枚も持っていかれた」

「仕方がないわ。今回は私達の負けだったけど、次は取り返すわよドルのコアもバーツのコアもそれにポンドのコアもね」

「ああ、俺達は完全に復活してこの世界を代える!」

ドルの言葉でまたいつそう結束が強まる。だがそれを水を差す者が現れる

「はたしてそんなことができるのかねえ。お前達見たいな下級に」

「「!?!」」

三人は同時に声がする方を振り向くとそこにはグリードの王、ウォ

ンと彼のヤミー、ヘラクレスオオカブトヤミーがいた

「貴様………!!」

「なんで貴方が!？」

「なんでって当然君達のコアを貰いに来たにきまつてるだろ。さ、渡せ」

ウォンは手をだしコアメダルを要求する

「断る!!」

「ほお、お前は王である俺の命令に背くというわけか。面白い受けてやろう」

ウォンは自分の体内からヒトのコアメダルを取りだしどす黒い中央に窪みくぼのあるベルトを出現させる

「変身」

『ヒューマンコアセット完了、チェンジタイラント!!』

その窪みにメダルを嵌めると機械音声が発声しウォンの身体が漆黒の炎が包みそしてそれを振り払うとそこには暴君と呼ぶに相応しい姿があった。名を付けるなら仮面ライダータイラント

「まずい!」

パーツは口から黒い煙幕を吐く

「煙幕なんかで俺を撒けると思ってんのか？」

タイラントは腰に装備されているメダガブリューに類似しティラノ

の頭の変わりに骸骨になっている斧、メダスカラーを取り出す。それを一気に振り払い煙幕を払う。中央にはドルとフランの姿はなかったのはバーツただ一人だけだった

「ほお、お前が残ったか、バーツ」

「今の俺のコアメダルの枚数は一枚のみ俺がやられて全て揃うわけじゃない。それにお前にあの二人をやられるくらいなら俺が足止めたほうがましだ!!」

「ナメた口を聞くな下級風情が……。お前はあの雑魚共を追え」

タイラントの指示に従いヘラクレスオオカブトやミーはドルとフランを追った

「じゃあ、始めるとするか餓鬼!」

タイラントはバーツの目の前に移動し思い切りメダスカラーを振り下ろす

「ぐあ!」

その攻撃を受けたバーツの身体からセルメダルが何枚も飛び散り仰向けで倒れ込む

「どうしたでかい口叩いた割には手応えねえぞ!」

タイラントはバーツの腹を踏み付ける

「コアメダル一枚のお前じゃおもしろくない。失せろ」

メダスカラーにセルメダルを一枚スロットしレバーを引くとメダス

カラーはそのメダルの飲み込み

『メダルチャージレベル1!!』

「散れ」

タイラントはメダスカラーをバズーカのように持ち替えパーツの顔面に連射する

『タイラント・デス・オーバーロード!!』

「ぎゃあああああ!!」

パーツは顔面にタイラントの必殺技のひとつタイラント・デス・オーバーロードを放つ。パーツはメダルに分解されタイラントは変身を解除しウォンに戻る。そしてメダルの中からコウモリのコアメダルを探し出す

「一枚か、まあいいだろう。さて次はアंकの持っているメダルでも奪いに行くか」

ウォンは次の標的をアंकに絞った



「ぐるるる……」

ドルとフランを追ったヘラクレスオオカブトやミーは二人を見失ったがまだ二人を探していた。すると目の前に人影が視界に入る

「生憎ここから先はどうせんぼだ」

それは幻獣のグリードの姿のセントだった。ヘラクレスオオカブト
ヤミーも構え襲い掛かるが

「遅いね」

セントの固有武器、ドリルとスピアが融合したドリランサーに腹部
を貫通させられ爆発しメダルが飛び散る

「ウォンの奴まさかここまでのヤミーを造れるとはね。これだとア
ルカナの完成を急がせないといけなさそうだ」

セントはセルメダルを回収しスクライア邸へ帰還するのだった

カウント・ザ・メダルス16 恐竜と暴君と最強対最強（前書き）

本日二話目です。この小説についてあれがです！

カウント・ザ・メダルス16 恐竜と暴君と最強対最強

日曜の昼前

映司とヴィヴィオは買い物袋を持ち高町家の帰路を歩いていた。数キロ離れてアंकもいる

「すみません、映司さん買い物手伝わせてしまって」

「ううん気にしないで。俺も結構こういうの手伝うの好きだからさ」

このような世間話や自分達の趣味を話しあう二人。するとヴィヴィオの持つ袋に入っている林檎が転がり落ちる

「あ、待って〜!」

ヴィヴィオは転がっていく林檎を追い掛けると黒い服装の男がその林檎を拾う

「これ君の?」

「はい、ありがとうございます」

その男はヴィヴィオの買い物袋に林檎を戻す

「ヴィヴィオちゃん大丈夫?」

「はい、大丈夫です。このお兄さんに拾って貰えたおかげでなんとかなりました」

「そうなんだ」

映司はその男の方を向く

「ありがとうございます」

「いやいや別に俺はたいしたところはしてない」

「いえ、ありがとうございます」

映司はその男に頭を下げると

「映司離れろそいつは………!!」

アंकが走り出し映司とその男を離そうとする

「よう、アंक久しぶりだなあ」

その男はアंकに挨拶する。映司はアंकにその男は誰かと尋ねる

「アंक知り合いか？」

「お前バカか!! こいつは禁断のコアメダルのグリード、ウォンだ
!!」

「「え!？」」

当然ヴィヴィオも映司も驚く

「まさか敵!？ヴィヴィオちゃんアंकから離れないで！」

「はい！」

アंकはヴィヴィオを後ろにかばうようする

「話を聞かずに速戦闘体制に入る。好きだぜそういうのは」

映司は持っていた買い物袋をアंकに預けオーズドライバーを腰に
巻く、アंकはメダルを渡しメダルをセットし変身する

「変身!!」

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!タ・ト・バ!!』

映司はオーズ・タトバコンボになる

「はっ!おもしれえ。俺もそういうので相手してやるよ」

『ヒューマンコアセット完了、チェンジタイラント!!』

ウォンはベルトを出現させその窪みにヒトのコアメダルを嵌め機械音を発声させウォンの身体が漆黒の炎が包みそしてそれを振り払う。そしてウォンはタイラントへと姿を変える

「来い!」

タイラントは右手の親指を首に当てそれを右に引く。オーズはメダジャリバーを構え切り掛かるとタイラントもメダスカラーを取りだし刃と刃を軋ませる
そしてタイラントの拳がオーズの腹に入る

「ぐあ!」

オーズが怯むのと同時にセルメダルをセットしレバーを倒しバズーカの形で構える

『メダルチャージレベル1!!』

「一遍灰になっておけ」

『タイラント・デス・オーバーロード!!』

オーズはタイラント・デス・オーバーロードを避けるとその攻撃が当たったポールは灰になる

「なに!!」

「なんだと!!」

その場の光景を見た全員が肝を冷やした

「はっ、躲したか。だがそれも運が良かったにすぎない」

そしてタイラントは再びその手順を繰り返すがセットするセルメダルが二枚になっていた

『メダルチャージレベル2!!』

メダスカラーの刃が伸びる

『タイラント・チェック・ブレイク!!』

それを一気に振り下ろす。オーズもただ見ているだけじゃない

『トリプル! スキャニング・チャージ!!』

オーズもメダジャリバーでの必殺技、オーズバッシュを放つ

「セイヤー!!」

二つの必殺技がぶつかり合うが

「弱っ……………」

オーズは押し負け変身が解除される

「はっはっは!! 弱すぎる弱すぎるぞ。では死ね」

タイラントは一気にメダスカラーを振り下ろす

「映司!」

「映司さん!」

その言葉に反応するかのように映司の身体から三枚のメダルが飛び出しタイラントの一撃を阻止させその三枚はベルトに収納される

「なんだいったい……………?」

タイラントはためらったがそんな余裕はなかった。オースキャンナーが自動で空中に浮きその三枚をスキャンさせる

『プテラ! トリケラ! ティラノ! プッ・トツ・ティラーノ・ザウルス!!』

オーズは近代まで解放されなかった恐竜のコアメダルで変身した姿、オーズ・プトティラコンボとなる

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

この場にて恐竜の狂戦士と暴君との戦いが始まる

カウント・ザ・メダルス17暴走と幻獣コンボと手帳のなかみ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」

プトティラとなったオーズの咆哮。オーズは咆哮をあげているが映司に意識はあるようだ

「ほお、セントと同じ紫のコアか。前回の戦いで見せることなく終わったその能力^{ちから}見せてもらおうか!!!!」

タイラントはメガスカラーを振り上げオーズに突っ込む。オーズも腕を地中に差し込みそこからメダガブリューを取り戻す

「うおおおおおおお!!!!」

二つの刃が擦れ合い火花を散らす。オーズはタイラントを押し返す

「ほお、なかなかだ。だがまだ甘い」

タイラントは再びセルメダルを入れる

『メダルチャージレベル1!!!!タイラント・デス・オーバーロード
!!!!!!』

それに対抗するようにオーズもメダダガブリューにセルメダルを入れる

『ゴックン!』

メダガブリューをバズーカモードに切り替える

『プツ・トツ・ティラーノ！！ヒツサーツ！！！！』

オーズはプトティラの必殺技、ストレンドウムを発動する。そしてストレンドウムとタイラント・デス・オーバーロードがぶつかり合う

「うおおおおおおお！！！」

「らあああああああ！！！」

だがオーズがタイラント・デス・オーバーロードを押し切る

「ぐあ！！！」

タイラントは一気に吹き飛ばされ、立ち上がろうとする

「クソがあ！俺のコア三枚揃ってりやてめえなんざ餓鬼みたいなもんなのによお、ああ！！！」

タイラントは立ち上がる。オーズもそれに構えるが

「ぐっ……」

頭に激痛が走る。そしてプトティラの暴走が始まる

「ギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

それをみたタイラントは

「なんだ。暴走かあの野郎まだ完全に制御仕切れてないのか……。面白いここはまずひくか」

そしてタイラントは姿を消す。暴走したオーズはまず目に入ったものを攻撃し始める。最初にオーズの目に入ったのは、アंकとヴィオだった

「グルルルル……」

「まさか暴走か……」

オーズが全身する度二人は後ずさる。そしてオーズは一気に襲い掛かった
だがオレンジの魔力弾がオーズに直撃する

「管理局です！！速やかに武装を解除しなさい！！」

ティアナが駆け付ける

「お前等怪我はないか？」

「後は私達がなんとかするよ」

スバルとノーヴェもいる

「スバル、ノーヴェ！」

「さ、ここは危ないから早く逃げて！」

「ふざけるな！！あいつが貴様等ごときが相手にできるはずがない！暴走したオーズを止めれると思ってるのか！？」

オーズという単語にスバル、ティアナ、ノーヴェの耳が動く

「オーズって、まさかあれ映司さん？でもどうして……………」

「ウォンの奴との戦闘で変身してコントロールが効いてない。あいつのパワーが尽きるまで動かせば元に戻るはずだがどうだか……………」

アंकが的確なアドバイスをする

「わかった。ティア聞こえた？」

「ええ、三人で時間稼ぎするわ。手伝って!!」
「了解!!」

そして三人は暴走を止めるため時間稼ぎをした
だが、全ての攻撃は通用しない。ティアナのファントムブレイザー
もスバルのリボルバーナックルも効かない

「くっ、どうすれば……………」

オーズがティアナに牙をむく

「ガアアアアアアアアアアア!!」

「ティアああああ!!」

スバルの断末魔。ティアナにオーズの爪が届きそうになりティアナ
は伏せる。「ガキン!」という音が響く。だがティアナにはオーズ
の爪は届いていない。顔を上げると、馬の姿のグリードがいた

「大丈夫かい、執務官殿？」

「あなたは……………」

「セント!!」

アंकがセントの代わりに答える。セントはオーズを一気に押し倒す。セントは強制的に恐竜のコアを抜き取る

「アंक!!!」

セントはアंकの名を呼び、抜き取ったコアメダルをアंकに投げ渡す

そしてセントは自分からコア三枚を抜くと下半身の鎧がセルメダルとなりはじけ飛び、その三枚をドライバーへセットする。だがセントはオーズに蹴り飛ばされ壁に激突する

「ぐっ」

ティアナはセントに駆け寄る

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。それより策があるが載っててみる気ある？」

「…………。はい!!!」

ティアナはセントから策を聞きスバルとノーヴェに作戦を念話で伝える

作戦が開始された。スバルとノーヴェはウィングロードとエアライナーでオーズに近づく

「リボルバー…………」

二人のリボルバーナックルとリボルバースパイクを回転させ

「ナックル!!!」

「ブレイク!!」

必殺技を放つ。オーズに受け止められ二人は左右の後ろに飛ぶ。すると中央にはティアナがクロスミラージュを構えオーズに狙いを定めている。オーズはティアナに肩のウィンドスティンガーを伸ばす。だが貫通した、ティアナの幻影だった。そしてセントがオーズの後ろに回り込む

「捕まえた」

オーズは必死に抵抗すがセントは力を緩めない。そしてセントがスバル、ティアナ、ノーヴェに指示をだす

「今だ!!」

三人は抵抗するオーズの手に飛びかかりオースキャナーを持たせドライバーのメダルをスキャンさせると同時に四人は離れる

『ユニコーン!! バイコーン!! ペガサス!! ユツニ・バガース!!
レージェンド!!!』

オーズはプトティラからユニバガスに上書きするように変身し暴走が止まる。これが恐竜と同じで違う、架空の生物幻獣のコンボ、ユニバガスコンボ

オーズはユニバガスへと変身したがプトティラの後遺症で倒れる

「映司!!」

「映司さん!!」

スバル達はバリアジャケットを解除し、アंकとヴィヴィオ達は駆

け寄る。だがセントは人の姿に戻り、少し離れた場所からそれを見ていた。セントが去ろうとすると

「すみません」

「ん？」

ティアナがセントに声をかける

「なにかな執務官殿？」

「貴方には聞きたいことがたくさんあります。ご同行を」

「断るよ」

「え？」

セントは懷から手帳を出しページを捲りティアナに見せる

「これは……。わかりました。お氣をつけください」

「ありがとね。僕のコアは預けておくって言うておいて」

「はい」

そしてセントは去って行く。その代わりにスバルがティアナによってくる

「ティアいいの？」

「ええ、だって彼は、無限書庫の司書長だから」

「へ？」

そしてその場の全員は高町家へ帰宅した

カウント・ザ・メダルス18フェイトの不安と伊達の呼び出しと爬虫類の女（前

今回はヴィーズにちなんであらすじのアレ（仮面ライダーオーズ前
回までの3つの出来事ってアレ）を6つにしてみました

カウント・ザ・メダルス18フェイトの不安と伊達の呼び出しと爬虫類の女

魔法少女リリカルなのは〇〇〇今までの6つの出来事

1つセントが映司に四枚の擬似メダルを渡し、映司がそれを使用し
ナフェハコンボとなる

2つバンクが生み出したヤミーをウォンが自分のヤミーに再構築する
3つそのウォンが暴君の名を持つライダー、タイラントへと姿を変
え、グリードのブーツを倒す

4つそのウォンは映司達の前に現れ映司達は襲撃を受ける

5つピンチとなった映司に恐竜のコアメダルが現れ、オーズプトテ
イラコンボへとなる

6つ暴走したオーズを止めるべく、スバル、ティアナ、ノーヴェ、
セントの助けもありセントのコンボ、ユニバガスにし暴走を止める

高町家のロビー

そこにはふんずりかえるアंकとなのは、フェイト、ヴィヴィオを
始めスバル、ティアナ、ノーヴェ、後藤、伊達がいる

「伊達さん。火野の容態はどうなんですか？」

「なに、まったくもって問題なし。健康そのものだ。ただ寝てるだ
けだ、後は時期に起きるのを待つのみだ」

オーズはコンボを使えば、得にプトティラは変身すればだいたい五
分の確率で暴走するほどの危険なコンボだ。だがそれがまったく診
えない

「はっ！当たり前だ。なんせあいつはセントのコアを取り込みやが
ったからな」

「なんだと？」

そう、ユニバガスの変身が解除されるとセントのコア3枚は映司の体内へ入っていった

「どうやら銀粹のコアは俺達の金粹のコアの暴走する力を抑える事ができるらしいな。たいした物だ」

アंकは呆れ口調で言う

「確かにすごいけど……………」

フェイトは口ごもってしまう

「どうしたのフェイトちゃん」

「うん、だってそのセントっていう人が赤粹の私となのは、はやてのメダルを持ってきたんでしょ」

「ああ、こいつか？」

アंकは右手からなのは、フェイト、はやてのメダルを出す

「うん、一体誰がそんなメダル作ったのかもわからないし、どんな理由があるかもわからない。だからそのセントっていう人が少し怖い気もするんだ」

「フェイトちゃん……………」

「フェイトママ……………」

フェイトは深刻な表情になりなのはとヴィヴィオが心配する

「あの、それに関して私心当たりがあるんですが……………」

ティアナが口を開く

「ティアナイス！」

「うっさいからしばらく黙ってて」

「はい………」

スバルが親指を立てる。それをティアナは黙らせ、スバルはしょんぼりする

「本当、ティアナ？」

フェイトが聞く

「はい。明日案内します。ついて来てください。あとそれから伊達さん」

「ん？どうしたのティアナちゃん？」

「明日シャルマル先生がなにか話しがあると言っていました。本局の医務室に11時だそうです」

「OKわかった。そんじゃ俺達は帰るわ。今日ザフィーラと将棋する約束してるから、それに火野の容態も気になったしな。それじゃ失礼しました」

「失礼します」

「うん、今日はありがとうね」

「なに、たいしたことじゃありませんよ」

そして後藤と伊達は八神家へ帰宅する

「スバルそろそろ私達も」

「そうだねティア。なのはさん私達も失礼します」

「スバルとティアナもありがとうね」

「いえいえ、とんでもありません」

「では、失礼します。時間は後ほどお伝えします」

「わかった。お疲れ様、ティアナ」

「お疲れ様です、なのはさん、フェイトさん」

「ヴィヴィオもじゃあな」

「じゃあねノーヴェ、また明日」

スバル、ティアナ、ノーヴェもあるべき場所へ戻る
それから数分後に映司はケロッと目を覚ます



「はあはああの餓鬼い……………！」

大きな負傷を負ったウォンはアジトにしている古城の中央にあるクリスタルを殴る

「ウォン様あまり無理をすると傷が開きます」

バンクは動くはずのない体を無理矢理動かしているウォンを止めようとする

「るせえ……………。俺の体の事は俺が一番わかっている！！てめえみてえにセルメダルとコアメダルの集合体じゃねえんだよ！」

「……………！申し訳ございません！」

バンクはウォンの威圧にひざまずく

「足りない……………。やはり銀枠のコアでは俺の欲望を満たし切れな

い！」

「お困りのようね閣下」

「「!？」」

古城の入口から声が聞こえそつちにバンクとウォンは振り向く。そこには蛇の皮のジャケットを着、ワニや蜥蜴などの爬虫類の皮から作った衣類を主に着ているオレンジのロングヘアーの女がいた

「お前は……。ユーロなぜお前がここにいる？」

「別に私はただ好き勝手やっているだけ。それに昔は槍のバンクに盾のセント頭脳のユーロで言われていたほどのなかじゃない」

「そうだったな。でなんの用だ？ わざわざコアメダルを渡しに来た訳じゃないだろ？」

ウォンはユーロを睨みつける。ユーロは少し歩くと階段に腰掛ける

「いやなに、たいした用じゃないよ。そろそろ閣下が金枠のコアメダルを欲しがるころかなーって思ったから顔を出しただけ」

「ああん？ ふっ、そうだったな。貴様のヤミーの中で時間がたったセルメダルは訳のわからん能力をやどすんだったな」

「ビンゴ、あたりー。ちょうどここにそのセルメダルが約50枚あるよ」

ユーロは瓶詰になっているセルメダルを取り出す

「よし、それを俺によこせ!!」

ウォンはユーロにそのセルメダル50枚を要求したが

「いいよただし条件ね」

「条件だと？」

「うん、このセルメダルはバンクに使用させる事ともうひとつは……」

「ちっ！真を入れるな！さっさと言え！！」

ウォンは怒りで足元の岩を踏み付け粉碎する

「ウチを仲間にいれてくれないかな？」

「ほお、まさか貴様から仲間に入れてくれと言ってくるとはな」

「だって、今の状況じゃこっちが一番ゆーりそうだもん。当たり前じゃん」

「理由はなんでもいい。とにかくお前は使える奴だ一応置いておいてやる」

「サンキュー閣下」

「ただし裏切ったらお前を……」

「消すでしょ？」

ウォンが言うまえにユーロが答える

「わかっているならそれでいい。バンク」

「はっ！」

「ユーロのセルメダルを明日にでも取り込んでおけいいな？」

「はい！」

そしてウォンは去っていった

その後バンクはユーロの持つ瓶詰のセルメダルを全て取り込むのだった

カウント・ザ・メダルス19書庫と質問と知られている顔

無限書庫

それは数々の次元世界の記録されて書物等が納められている場所だ。そして管理局の依頼があればそこから書物を取り出し検索する事ができ、司書並びに司書長のみがその無限書物の物を触れられる事のできる。そのような場所だ。現在ユーノは司書長、ヴィヴィオ、オットーが司書の肩書を持っている。そして今回はなのは、フェイト、ティアナの無限書庫での人探し、グリードのひとりセントを探していた。昨日ウォンとの戦闘が終了後彼が見せた司書長の身分証明書を手がかりに

「本局執務官、ティアナ・ランスターです。捜査の依頼に来ました」

「同じく本局執務官、フェイト・T・ハラオウンです」

「同じく高町なのは、一等空尉です」

三人は順には無限書庫のシステムに音声確認をさせた

『確認しました。ようこそティアナ・ランスター執務官殿。フェイト・T・ハラオウン執務官殿。高町なのは一等空尉殿』

確認を済ませると、無限書庫への入口が開く

「行きましょう。なのはさん、フェイトさん」

「うん」

そして三人は無限書庫へ入っていく。しばらく歩くと意外な人物が二人、調べ物で来ており声をかけられる

「ティアナさん、なのはさん、フェイトさん。お久しぶりです」
「お久しぶりです。皆様」

その二人とは元ナンバーズ、N O・8とN O・12で現在、聖王教会の執事とシスターをやっているオットーとディードだ

「オットー、ディード久しぶり。今日はどうしたの？」

「はい、実は今日は少し調べ物を」

ティアナの質問にディードが丁寧に答える。さすがシスターだ

「調べ物？」

「実は以前、火野様から見せていただいたメダルの資料をここで見た記憶があるので探しに」

「なるほどね。それなら有力な情報を持ってるかもしれない人がいるわよ」

「本当ですか？」

「うん、どうする一緒に来る？」

「はい、ぜひ同行させてください」

「OK、じゃ、行きましょう」

オットーとディードを加え再び歩きだす。さらにそこからしばらく歩くとユーノが棚の前で調べ物をしている姿をなのはは発見する。手にはクロノからの依頼で何冊かの本を持っている

「あ、あれって。ユーノくん！」

ユーノはその声に一時調べ物の中断して振り返るとそこにはなのは達がいた

「ん？あ、なのは」

ユーノはゆっくりとおりて床に足をつける

「やあ、なのは、フェイト、ティアナにオットー、ディード久しぶりだね」

「久しぶりユーノ」

「お久しぶりです。ユーノさん」

「「ご無沙汰してます」」

なのは達は挨拶しあう。上からユーノ、フェイト、ティアナ、オットーとディードだ

「お義兄ちゃんからの依頼ユーノ？」

「うん。あらかた終わったから後はまとめてクロノへ渡せば終わりだし」

「ごめんねいつも」

フェイトは申し訳なさそうな表情で言う

「いやいや別にたいしたことじゃないよ。それにしてもなのは達は今日はどうして無限書庫に？」

「実はセントっていう司書さんに会いたんだけど今どこにいるかわからなくて。ユーノくん知ってる？」

「あー、セントさんなら今の時間だと休憩室にいるんじゃないかな。案内するよ」

「ほんと！？ありがとうございますユーノくん」

「うん」

そして一同は無限書庫の休憩室へ向かった

◆
無限書庫休憩室

そこには今ひとりの管理局の制服を着たセントが壁に背を預けており、右手には缶コーヒ―が握られている。しかも表情はなんだかせつなそうだ

「バンク……………。くっ！」

バンクの名を呟くとセントは悔しさのあまり缶コーヒ―を握り潰す。もちろん缶には穴が空き中のコーヒ―も流れ出し制服や手にかかる

「あ、いけない……………」

セントはポケットからティッシュを取り出し掛かったコーヒ―を拭き取り、缶捨てる。するとユーノ達が入っていく

「セントさん？あ、いた」

「ユーノさん？あなたはランスター執務官殿にハラOWN執務官、それに高町一等空尉殿まで、いったいどうしたのですか？」

セントはティアナ達の前に立ちティアナ達に尋ねる

「実は貴方にお聞きしたい事がありました」

「なるほどね。いいよ。僕が話せる事なら何でも話してあげる」

「ありがとうございます」

「立ってなんですから、座って聞きますよ」

「はい、すみません」

「いえ」

そしてなのは達は休憩室の椅子セントとユーノに向かい合うように座りティアナは質問を始めた

「では、まずひとつ目の質問です。貴方は何者ですか？」

「僕はセント。幻獣のグリード。コアの色は紫色だよ。次の質問は？」

セントは丁寧に話し次の質問を要求する

「はい、では次の質問です。あなたは今までどこにいたのですか？」

「僕は約800年程前、ヴィーズの力に封印さら現代の5ヶ月前に遺跡に眠っていた僕たちをこの時代の科学者が発見したらしくてね。それで復活した。その後、僕は4人のグリードに集中攻撃を受けてヴィーズドライバーを持って必死で逃げたけど、かなり大きな傷を負ってね、そこでユーノさんの家の前で倒れているところを助けてもらって、こうして生きていられるってわけ。その後、僕はユーノさんの補佐をしつつこうして無限書庫の司書長をやっているんだ。ま、司書長になったのはつい最近だけだね。それにけっこう僕はいろんなところで顔は知られてるんだ。クロノくんとも友達だしエイミイさんもロツサともいい親友だよ」

セントはビックリ仰天な返答をしてきた。それにセントがクロノ達の事を話している時の表情は笑顔だった

「お義兄ちゃんと知り合ってたんだ………」

「うん、つい先日でも食事に誘われたし」

「そうだったんですか」

クロノの親友と聞いてフェイトはセントに対する恐怖は安心へと変わった

「で、質問はこれだけ？」

「あ、すみません。次の質問いいですか？」

「どうぞ」

セントはあっさりと答える

「貴方が映司さんに渡した、なのはさん、フェイトさん、八神部隊長のメダルあれはいつたい？」

「ん？ ああ、あれの事。あれはねマリエル技官に新武装の相談で僕のメダルを一時的に貸して作った物なんだ」

「マリエルさんとも知り合いだったの！？」

まさかのマリエルとまで知り合いとは思っていなかったなのは達

「ええ、まあ、それで僕のユニコーン、バイコーン、ペガサスのコア3枚をマリエルさんに預けて作ってもらったんだ」

「そうだったんですか……………」

それを聞いたなのは、フェイト、ティアナ、オットー、デイドは驚きの連続で頭が混乱しそうになっている

「いまでも、他のメダルも開発してるしね」

「は、はあ……………」

「質問が終ならそろそろ仕事に戻らないと」

セントが席を立とうとすると、ティアナが引き止める

「ちょっと待ってください！」

「ん？なに？」

「あなたは私達の敵ですかそれとも味方ですか？」

「うーん。そうだな……………」

セントは少し悩むとすぐに思いつき口に出す

「君達の味方でありたいと思っているよ」

「そうですか、ありがとうございます」

セントを味方と判断できたのは達だった

「あ！そうそう忘れてた。」

仕事に戻ろうとしたセントはポケットから小さい袋を取り出す

「え？これは？」

フェイトの目の前にその袋を置く

「この中にはメダルが2枚あるから映司くんに渡しておいて。それと、『欲望の強さは思いの強さ』とも言っておいて。それじゃあね」

そしてセントは去って行く



本局医務室

11時

伊達はシャマルに呼び出され後藤と一緒に本局の医務室へ来ていた。

もちろん後藤と伊達は管理局の制服だ

「ごめんなさい。遅れました！」

シャマルは慌てて医務室へ入って来る。さっきまで局員の身体デュータをまとめていたせいで少し居眠りしてしまい、今の時間と言うわけだ

「別にいいですよ。俺達どうせヒマですから」

「そんなことはありません。お二人にはすごく助かってるんですから」

いい加減な伊達にシャマルはしっかりと言う

「で、今日俺を呼んだ理由はなんですか？」

伊達がそう言うときシャマルの目つきが変わり少し鋭くなる

「単刀直入にいいいます。伊達明さん。あなたはもうバースとして戦わないでください」

後藤と伊達にはそれが死刑判決を言い渡されるような感覚だった

カウント・ザ・メダルス20診断とバース継承とバンク襲来

「単刀直入にいいいます。伊達明さん。あなたはもうバースとして戦わないでください」

シャルマルから医師としての伊達への言葉

「へ!？」

伊達はつい口が開いてしまう。後藤は伊達の後ろで右手を頭に当てため息をつく

「それはどういう………」

伊達がシャルマルに聞き返すとシャルマルはため息をつき机のレントゲンを見る

「はあ、以前行った健康診断で写ったレントゲンを検証した結果。

あなたの頭部に銃弾が埋め込まれている事がわかりました。ですから激しい動きつまり、バースとして戦うのは非常に難しいでしょう」

「あー、やっぱりばれました?」

「ばれましたって知ってたの!？」

「ええ、まあ」

シャルマルは呆然としてしまう

「ですが俺は1億円貯めるまで諦めるつもりはありませんよ」

「あきらめないって、自分の命なのよ!？」

「たしかの俺の命です、俺の命だからこそこうして使っていきたい

のよ。俺には夢があるからな」

「夢……………」

シャルにはその夢という単語が胸に響いた

「ですが、私も医師、伊達さんも医師です。医師が大事にしないではいけないのは……………」

「自分の命でしょ」

「はい」

シャルは静かに答える

「だが、医師なら自分の命よりも患者の命がもっと大事なだ。そこ
のところわかってくれ」

伊達の真剣な目でその言葉をシャルに言う

「まったく、負けたわ。なのはちゃんといいはやてちゃんといいな
なたといいまったく頑固なんだからなら」

シャルは呆れてしまい、一つの案を伊達に話す

「ならこうしましょ、休職にして聖王教会系列の病院でしばらく様
子を見て銃弾を取り出す方法を考えましょう」

「それならまあ……………」

伊達もそれを了承する

「なら全は急げね」

シャルは立ち上がり病院に足を向けるが

「でもバースはどうしましょう。はやてちゃんから聞いたけどグライダーやヤミーってものすごく凶悪なのよね……。管理局で預かった方がいいのかしら？」

シャルがそう呟く。伊達が思わぬ発言をする

「それなら心配無用よ。後藤ちゃん」

「はい……？」

伊達は後藤を呼ぶ

「しばらく俺バースなれないから、バースのベルト後藤ちゃんにあげるわ」

「え!？」

「前にも言ったと思うけど、俺がピンチは後藤ちゃんのチャンスなんだから。それに最近疲れたしのんびりと入院生活をエンジョイするさ」

沈黙が続く

「わかりました。だったらバースの座も伊達さんの夢も俺が預かります」

「頼むわ」

「では、俺ははやてさんにこの事を伝えに行きます」

「おう、じゃあな。たまに見舞いに来てくれ。それと見舞いに来るときはおでんよろしく」

「いや、おでんはさすがに……。できれば持ってきます。失礼し

ます」

後藤は一礼し医務室を去り、はやてにこの事を伝えに行った

「伊達さん、私達もそろそろ」

「OK、シャマルさん」

伊達も病院に足向けしばらくは入院生活を送ることにした



その頃、とある洋館

ここはかつて鴻上ファウンデーションの開発担当でグリードのカザリと同行を共にし紫のコアを最初に取り込んだ、ドクター真木が幼少の頃暮らした場所だ

「あーん、んふふ♪」

その洋館の玄関先で人の姿をしたガメルがプラスチックの容器から菓子を食べている。するとガメルの目の前に赤いマントを羽織った女性が現れる



洋館の中ではドクター真木、カザリ、記憶の無いアंक、メズールの合計5人が各自好きな事をしていた。だがそれはすぐに破壊される。ドアが破壊されグリードの姿のガメルが投げ飛ばされ転がって来た、メズールはそれに駆け寄る

「ガメル、大丈夫？」

「痛いよメズール」

ガメルは甘えた口調になる。すると破壊されたドアの方から声が聞こえる

「まったく、相変わらずです。あなた方は」

その場の全員の視線が声に方に向ける。そこにいたのは

「やあ、久しぶりだね。バンク」

なのはの世界飛ばされた鳥のグリード、人の姿をしたバンクだった

カウント・ザ・メダルズ21挑発と逃走と新たな欲望（前書き）

活動報告でもしましたが

月下の草原でルーヴィーズが中央にいる

「魔法少女リリカルなのは○○○」

こちらを向きメダグレンバーを構え鳳凰の翼を広げる

「このあとすぐ!！」

ではどうぞ!！」

カウント・ザ・メダルズ21挑発と逃走と新たな欲望

真木が育った洋館

そこにはカザリ一派のカザリ、真木、真木の人形のキヨちゃん、記憶を失ったアंकロスト、メズール、ガメルとウォン一派のバンクは今対峙しようとしていた

「お知り合いですか？」

真木はバンク、いや銀の枠のコアメダルの存在じたい知らない

「まあね、そういえば800年前ヴィーズと戦っていてどこかへ行ったみたいだけど、どこに行ってたの？」

カザリは800年前にヴィーズとの戦いで消息を絶ったバンク達の事を聞きだそうとした

「遠くの次元の彼方ですよ」

「？」

バンクを除くその場の全員は意味がわからなかった。するとアंकロストが口を開く

「ねえ、誰？」

アंकロストには記憶が無い。というより、右腕のアंकの方にするすべての記憶があるのだ

「ん？ ああ、彼女はバンク。君のお姉さんだよ」

カザリがアंकロストにバンクはアंकにとってどのような存在かを教える

「僕の、お姉ちゃん……………」

アंकロストは求めるように右手を伸ばし少しずつ前進する
そしてバンクにアंकロストの手が届きそうになる

パン！

バンクはアंकロストの手を叩いた

「お姉ちゃん……………？」

「私に触れるな。偽物」

バンクは一瞬でメダグレンバーを抜きアंकロストを数度切り付け蹴り飛ばす。アंकロストは尻餅をついてしまう

「イタイ……………。お姉ちゃん……………」

アंकロストは再びバンクを求めるように手を伸ばすが

「何度も言わせるな。触れるな偽物！！」

その大声に合わせ、バンクはルーレッダーを出現させそれを回転させる

『メダルルーレット！　ホウオウ！　カラスW！　ペンギンW！』

「変身！」

バンクは炎に包まれルーヴィーズへと変身する

「お姉ちゃん……………」

アंकロストはまだバンクに手を伸ばす

「まだわからないの？あなたはアंकじゃないわ」

アंकロストは自分の存在を否定される

「アアアアアアアアアアアアアア！！！」

アंकロストは怒り狂いやみくもにルーヴィーズを襲い始めるがアंकロストの攻撃のすべてをバンクは華麗な動きで回避される。そしてルーヴィーズはその隙をつきアंकロストの腕を切り付けようとするが

ガキン！

という鈍い音がそれを止める。その正体は人の姿からグリードの本当の姿に戻ったカザリの爪だった。カザリはもう片方の爪をルーヴィーズへ突き刺そうとするとルーヴィーズはメダグレンバーを抜きバックステップで下がり立て膝になる

「面白い事をしますね。カザリ」

「まあね」

「二人というのも面白くない。メズール、ガメルあなた方もかかってきなさい」

「あら、いつてくれるじゃない」

「バンク、お前、倒す!!!!」

ルーヴィーズはメズールとガメルを挑発しそれに乗る二人。そしてカザリ、アंकロスト、メズール、ガメルはルーヴィーズに総攻撃を仕掛ける

だが、すべての攻撃は先程のアंकロストと同じくすべて回避する

「ふっ、当たらない攻撃を何度しても同じですよ?」

鼻で笑い4人を見下すルーヴィーズだが次の瞬間その場が一変する

「私もお手伝いしましょうか?」

真木はセルメダルを4枚を椅子や柱等に投げ込む。すると4体のヤミーが誕生する。ティラノヤミー、キマイラヤミー、ケルベロスヤミー、コカトリスヤミーが誕生しカザリ達に加勢する

(くっ、さすがにまずいですね。1対8とは部が悪いですね。ユーロから頂いたセルメダルは来るのに25枚使ってしまった。かくなるうえは……………!)

するとルーヴィーズは変身を解除しバンクの姿となり窓を突き破り逃走する。だがそれをヤミー達は追う。そしてバンクはしばらく走るとユーロからもらったオレンジに輝くセルメダルを空中に投げる。そのセルメダルは空中で円を描き黒い時空の入口を作る。実を言えば映司達が向こうの世界に行く前に倒したヤミーはバーツのヤミーで、しかもユーロのセルメダルが投与されているものだったのだ。そしてバンクは次元の入口を通りミッドチルダへ向かったが、ヤミー達もそれについて来てしまい、そのセルメダルは形を保てず塵と

なってしまう



次元の入口を抜けると日は落ちそこはなにもない草原であった。しかもそこからはウォン達が根城としている古城が見えていた

「帰ってこれましたか……。しかし、彼らから金梓のコアメダルは奪取できなかった。とりあえずウォン様に御報告を……。!?」

バンクはまず、ウォンにこの事を知らせようとしたが

ザン!!

と空気を切る音。それは真木が作り出したヤミー達だった

「最悪ですね……」

バンクはヤミーを見ると後ずさるように下がる。それもそのはず、バンクの弱点はセルメダルだ。セルメダルの力を使っている生物や機械などは彼女にとっては毒以外のなにものでもない
そしてティラノヤミー、キマイラヤミー、ケルベロスヤミー、コカトリスヤミーの4体は一斉にバンクに飛び掛かったが

『タイラント・デス・オーバードロード!!』

「「「!?!?!?」」」

その発音後コカトリスヤミーを除くすべてのヤミーが爆発し倒され、コカトリスヤミーは爆風で吹き飛ばされる

「よお、バンク。コアメダルは持って来なかったみたいだなあ」

声の主はタイラントに変身しているウォンだった

「申し訳ありません！」

バンクはタイラントにひざまずく

「まあいい、金枠はオーズとアंकから掻っ払えばいい。そのかわりおもしろいもん連れ込んだじゃねあの」

タイラントはコカトリスヤミーを睨みつける。コカトリスヤミーはそれに恐怖し逃げ出そうとするが

「はい、そこストップ」

コカトリスヤミーに蛇のような紐が縛られる。ユーロは腕だけをグリップの状態にし、自らの腕をムチのようにして対象物を縛り上げる技、バインド・スネークだ

「でかした、ユーロ。しっかり縛っておけ」

「お褒めの言葉ありがとう。閣下」

ウォンはタイラントから変身を解除するとコカトリスヤミーの額にメダルスロットを出現させる

「お前も俺の下僕となり、俺の腹心として存分に戦え」

なんとウォンはセルメダルではなく己のコアメダル、すなわちヒト

のコアメダルを挿入した。するとコカトリスヤミーは分解され新しい姿となりヒトのコアメダルが飛び出しウォンはそれを手に取り体内へ戻しコカトリスヤミーだったものを見る

「ほお、これは上出来だな」

ウォンはつい口元がにやけてしまう。コカトリスヤミーの新しい姿とは、顔にはガスマスクのような物を被り、鷲のような翼と爪、眼や肩からは蛇のような物が突き出し、そして腰には地球を掴む鷲の紋章が入った怪物となった

「こいつは使えそうだな。早速だがお前に命令してやる。オーズとアングの持っているコアメダルをすべて奪ってこい！それができない場合は金棒のコアは破壊しても構わん。セルメダルを数枚預ける、好きに使え」

ウォンはバンクに指示を出しセルメダルをその怪物に渡す

「行け！！」

バンクが指示を出すと怪物は立ち上がり咆哮し飛び去る

「ショオオオオオオオオオオオカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

カウント・ザ・メダルズ22バイトと誘いとメダルの整理（前書き）

活動報告でもやりましたが

背中合わせのオーズとバース

右手にはメダジャリバーとバースバスターを持ち

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そしてこちらを向いて構える

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス22バイトと誘いとメダルの整理

昼頃

「フフンフン♪」

ミッドの高町家からそう遠くないビル。そこから吊り下がるコンテナにはバイトで鼻歌混じりの歌を歌いながらビルの窓を清掃している映司の姿があった

「おい映司その耳障りな歌をやめろ？」

ちなみにアंकもいる。なぜ二人がバイトをしているのかと言うと生活費を稼ぐためである。さすがに成人男性の生活費をすべてなのはやフェイトに出してもらうわけにはいけない。だから映司はバイトをして高町家の家計の足しにしているのである。ナカジマ家でも同じだった

ちなみにアंकは人手が足りないという事で面接なしで速採用されているだけの状態で、映司がそのかわり倍の仕事をしているのだ

「別にいいだろ？ いい曲じゃない」

「知るか」

アंकはソッポを向く

するとコンテナの下から声が聞こえ映司が下を覗いてみるとそこにいたのは後藤だった

映司はすぐにコンテナを下ろし、後藤の元へ向かう

「どうしたんですか後藤さん？」

「今日は非番でな。だから差し入れだ」

後藤は持って来たビニール袋を映司に渡す

「ありがとうございます」

映司はビニール袋を受け取る

「それと話がある」

「話ですか？」

「ああ、重要な話だ」

「だったら少し待ってて下さい。もうそろそろしたらあがりなので」
「ああ、わかった」



「なんですか大事な話って？」

場所を近くの公園のベンチに移り映司と後藤。ちなみにアंकは先に帰った

「実はな、伊達さんの秘密が管理局にばれてしまったな」

「秘密って、あの？」

秘密というのは伊達の頭に入っている銃弾の事である

「ああ、だがシャルルさんが言うにはまずはいろいろ検査等をして
頃合いを見計らって銃弾の摘出手術をするらしい」

「手術って、大丈夫なんですか？」

「わからない。だが、俺は信じてみようと思う。この世界の医療技

術は地球よりも高い。大丈夫なはずだ」

「そうですね。あれっ、ていう事は……………」

映司は何かに気がついたようだ

「そのあいだは後藤さんがバースに？」

「ああ、ベルトも缶も伊達さんから借りてきた。大丈夫しばらくは俺がお前のサポートをする」

「そうですか、よろしくお願いします」

映司は後藤の手を掴み握手する

「ああ、こちらもしばらく世話になる」

後藤もそんな映司に返事を返し、ビニール袋からワイダーゼリーを2つ取りだし2人同時に啜る

「それと火野。今度行われる管理局のイベントを知っているか？」
「イベント？」

すると後藤はポケットから一枚のチラシを取り出す

「えーと『管理局戦技披露会』？」

「ああ、管理局の武装隊の魔導師が競い合う大会だそう。来週の日曜から始まるらしい。八神家の方々は出場するそうだから俺は見に行こうと思っているがお前はどうする？」

「うーん」

映司はしばらく考える

「そうですね。だったら俺も行きます」

「そうか」

「はい、ヴィヴィオちゃんやアインハルトちゃん達連れて応援に行こうと思います」

「わかった。だったら当日迎えに行くからな、準備して待っていてくれ」

「はい」

そして後藤はベンチから立ち上がり去って行く。映司もライドベンダーを走らせ高町家へ

その頃先に帰ったアंकは



先に帰ったアंकは暇だったためグリーンアップル社のOP idでアंकが持つ現在オーズとヴィーズが使えるメダルを整理していた

「現在俺達が見えるメダルは、クジャクとコンドルを除く金枠のコアはすべて2枚ずつ。銀枠のコアは9枚。しかもそのうち9枚が映司の体の中だ。取り出す事もできない。どうする………」

アंकはしばらく黙り考え込む

「まあ、なんとかなるだろ。とりあえずアイスでも食うか」

アंकは下の階の冷蔵庫からアイスを数本拝借するのだった

それから数日後管理局戦技披露会の日がやって来る。だが知らなかった悪という欲望が近づいていることに………

カウント・ザ・メダルス22バイトと誘いとメダルの整理(後書き)

最初から読んでもいったい誰がどのメダルを持っているかわからない人へ

オーズ、ヴィーズ

タカ×2、クジャク×1、コンドル×1、クワガタ×2、カマキリ×2、バッタ×2、ライオン×2、トラ×2、チーター×2、サイ×2、ゴリラ×2、ゾウ×2、シャチ×2、ウナギ×2、タコ×2、プテラ×2、トリケラ×2、ティラノ×2、コブラ×2、カメ×2、ワニ×2、ホウオウ×0、カラス×0、ペンギン×0、カブト×0、トンボ×0、クモ×0、サメ×0、エイ×0、イカ×0、コウモリ×1モグラ×2、ムササビ×1ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1、ハブ×0、クロコダイル×0、トカゲ×0、ナノハ×1、フェイト×1、ハヤテ×1、パンダ×1

ウオン

ヒト×1(ホウオウ×1、カラス×1、ペンギン×1、カブト×1、トンボ×1、クモ×1、サメ×1、エイ×1、イカ×1、コウモリ×1モグラ×1、ムササビ×1、ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1、ハブ×1、クロコダイル×1、トカゲ×1)、ホウオウ×1、クモ×1、ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、コウモリ×1、ムササビ×1

バンク

ホウオウ×1、カラス×2、ペンギン×2

ユーロ

ハブ×2、クロコダイル×2、トカゲ×2

セント

ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1

ドル

カブト×2、トンボ×2、クモ×1

フラン

サメ×2、エイ×2、イカ×2

変化しだい後書きに書きます

カウント・ザ・メダルス23戦技披露会と結婚宣言と開会式（前書き）

暗い空間の中、一定の距離を保ち背中を向けあう4人のオーズ（ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ）

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そしてそれぞれの正面を向き一斉に構える

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス23 戦技披露会と結婚宣言と開会式

戦技披露会当日の高町家の玄関先

そこには手荷物を持った映司にアंक、他にもヴィヴィオにアインハルト、リオ、コロナが集まっていた

「それにしても『戦技披露会』ってなのはさん達も出場するんだよね。大丈夫かな怪我とか……………」

つい声を漏らす映司

「大丈夫ですよ。デバイスの機能には非殺傷設定がありましたからね。その言葉の道理に身体にはダメージは残らないですが、バリアジャケットは破れたりします」

ヴィヴィオが腰に手をあて、エッヘンとポーズをとっている

「つまり怪我の心配はしなくていいってこと？」

「そうですね。軽い切り傷はあるかもしれませんが」

「骨を折ったりはまずありませんよ」

ヴィヴィオに釣られコロナ、リオも説明をする。すると大きい最大でも8人は乗れる黒いワゴン車が運転席を面して目の前で止ると運転席側の窓が開く

「火野、みんな迎えに来たぞ」

そのワゴン車を運転していたのは私服姿の後藤だった

「後藤さん。どうしたんですかこれ、高いんじゃない………?」

「安心しろただのレンタルだ。以外と安く借りることができた。それより早く乗れ。いい席が無くなるぞ」

「あつ、そうですね。みんな行くよ」

「」「はい!!」「」

ヴィヴィオは後部席のドアを開け映司達は乗り込んだ

「」「おじゃまします!」「」

「「邪魔します」」

ヴィヴィオ、リオ、コロナ、アインハルト、映司の順番で乗り込む

「アंक、お前行かないのか?」

なぜか乗らないアंकに声をかける映司

「先に行ってる。後で追い掛ける」

「そう? わかった。先行ってるぞ」

「ふっ、とっとなで行け」

そして映司はドアを閉める

「全員乗ったな。よし」

全員乗り込んだ事を確認した後藤は、懐からサングラス、穴空き手袋を取りだし、それを装備する

「さあ、振り切るぜ!」

そして後藤が運転する車に映司達を乗せて出発した
標準速度で



戦技披露会の開会式会場

そこには管理局の関係者がたくさんいた。本日出場する選手の家族や管理局での知人などなど

「うわー、いっぱいいるな。ん？」

あまりの人数に驚く映司。するとあきらかに映司達を呼ぶ声が聞こえる

「おーい、映司！」

それは以前世話になっていたナカジマ家の大黒柱、ゲンヤ・ナカジマ三佐だ。映司達はその声の元へ急ぐ。そこにはゲンヤだけじゃなく、スバルにティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウェンディ達も来ていた。映司はすぐにゲンヤに挨拶しに行く

「ゲンヤさん。お久しぶりです」

「おう、久しぶりだな。元気してたか？」

「はい。元気にいろいろ頑張ってます。ゲンヤさんは？」

「まあ、そこそこやってる。娘達を嫁にやるまでは死ねんからな。今度一杯どうだい？」

映司とゲンヤがそんな世間話をし終わると映司は後藤の隣へ座る。すると背後から声をかけられる。ヴィヴィオ達はそれに振り返る。

そこには制服姿のヴァイス・グランセリック、アルト・クラリエツタ、グリフィス・ロウラン、ルキノ・リリエの4人がいた

「よっ、ティアナにスバル、エリオにキャロ、他の連中も久しぶりだなお前等」

「ナカジマ三佐もお元気そうだなによりです」

「ヴィヴィオもおっきくなったね」

「ほんと、リボン可愛いよ」

ヴァイス、グリフィス、アルト、ルキノの順番だ

「ヴァイス陸曹もご無沙汰してます」

「よっ、お前さんも元気そうじゃねえか」

「ありがとうございます……」

ティアナはヴァイスに挨拶し、ゲンヤもグリフィスに言い返す。ヴィヴィオは照れ臭そうに言う。するとアルトがヴィヴィオに映司の事を聞く

「ねえ、ヴィヴィオあの人？」

「あ、待っててくださいいま紹介します。映司さん!!」

ヴィヴィオの声に映司がやって来き映司はヴァイス達4人に挨拶する

「初めまして火野映司です。よろしくお願いします」

映司は自己紹介をする

「こちらこそ。僕は次元航行部の事務官グリフィス・ロウランです。噂は兼ね兼ね」

「俺はヘリパイのヴァイス・グランセリックだよろしくな。映司」
「私はアルト、アルト・クラリエッタです。ナカジマ三佐やギンガさんが所属している108部隊のヘリパイロットです。よろしく」
「次元航行部隊のグリフィスくんの補佐のルキノ・リリエです。そして……」

ルキノはいきなりグリフィスの腕に抱き着く

「私達結婚してルキノ・ロウランになるんです」
「そんなんですか！？おめでとうございます！！」

映司の純粋な祝いの言葉に頬を赤らめるグリフィスとルキノ

「しかし、グリフィスまさかとは思うけど毎晩のようにルキノの事泣かせてんじゃないの？」

「ちょっ！？先輩！！」

ヴァイスの言葉で顔を顔をリングのように赤くする2人。アルトはその発言を止めさせようとする。それを聞かされたヴィヴィオも顔を赤くするが、映司はまったくなんの事かさっぱりわかっていない

「で？実際どうなのよ？」

「はい、最近はいつもより激しくて気持ちよく……」

「ルッルキノ！？そろそろ時間だよ早く席に着かないと！」

「はっ！そっそうだね！」

とんでもない事を言い出そうとしたルキノを正気に戻し近くの席に座る。だが座った後もお互いは手を握っていた。そんな中アルトはヴァイスの事を見つめていた

(いいなルキノ。私もヴァイス陸曹とあんな事やそんな事したいな
……………)

等と頬を赤くして考えていた

「ん？おいアルト、どうしたお前？」

ヴァイスはそんなアルトに声をかける

「なっ、なんでもありません！！さっもう時間ですよ席に着いてください！！」

「おっ、おう……………」

ヴァイスはアルトの言葉に押し負け席に座る。そして

「唐変木……………」

とアルトはつぶやいて席に座った。映司達も

「そろそろ始まるようですね。席に着いて待ってましょう」

「うん、そうだね」

映司とヴィヴィオは先程のナカジマ家やティアナ、エリオ、キャロの取っしておいてくれた席に座る
しばらくすると開会式が始まる。中央には局の武装隊の方々が整列している。すると列も前にある台にミゼット・クローベル提督が立ち開会の言葉を選手達に言う

「それでは各自、正々堂々と全力を尽くすよう。心掛けてください」
「」「」「はい！！」「」「」「」

返事と同時に会場に盛大な拍手が響き渡った



戦技披露会の会場より少し離れた場所の高いポールの上には顔にはガスマスクのような物を被り、鷲のような翼と爪、眼や肩からは蛇のような物が突き出し、そして腰には地球を掴む鷲の紋章が入った怪物が立っていた

「いいものを見つけた……………」

その怪物の言ういいものとは、目の前にある今戦技披露会を行っている会場だった

「あの場所にはものすごい欲望が渦巻いている。私のヤミーを作るのにはいい場所だ」

するとその怪物は黄金の翼をその会場に向かい広げ飛び去った

カウント・ザ・メダルス23戦技披露会と結婚宣言と開会式（後書き）

現在オーズ達の使えるメダルの種類です追加したりしていきます

オーズ、ヴィーズ

タカ×2、クジャク×1、コンドル×1、クワガタ×2、カマキリ×2、バツタ×2、ライオン×2、トラ×2、チーター×2、サイ×2、ゴリラ×2、ゾウ×2、シャチ×2、ウナギ×2、タコ×2、プテラ×2、トリケラ×2、ティラノ×2、コブラ×2、カメ×2、ワニ×2、ホウオウ×0、カラス×0、ペンギン×0、カブト×0、トンボ×0、クモ×0、サメ×0、エイ×0、イカ×0、コウモリ×1モグラ×2、ムササビ×1ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1、ハブ×0、クロコダイル×0、トカゲ×0、ナノハ×1、フェイト×1、ハヤテ×1、パンダ×1

ウオン

ヒト×1（ホウオウ×1、カラス×1、ペンギン×1、カブト×1、トンボ×1、クモ×1、サメ×1、エイ×1、イカ×1、コウモリ×1モグラ×1、ムササビ×1、ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1、ハブ×1、クロコダイル×1、トカゲ×1）、ホウオウ×1、クモ×1、ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、コウモリ×1、ムササビ×1

バンク

ホウオウ×1、カラス×2、ペンギン×2

ユーロ

ハブ×2、クロコダイル×2、トカゲ×2

セント

ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1

ドル

カブト×2、トンボ×2、クモ×1

フラン

サメ×2、エイ×2、イカ×2

わかりにくい方は教えてください

それと最初はこの戦技披露会の戦いではスバルVSノーヴェをやるうと思っていたのですが、調べてみると武装隊のものなので救助隊のスバルは出せませんでした。申し訳ありませんでは失礼します

カウント・ザ・メダルス24試合と侵入と悪の欲望（前書き）

シグナムとヴィータが背中合わせがレヴァンティンとグラーフアイゼンを握る

「魔法少女リリカルなのは○○○」

ふたりはこちらを向き構える

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス24試合と侵入と悪の欲望

「飛竜一閃!!」

第一試合から飛ばしていくシグナム

「わああああああ!!」

対戦相手は技をもろに受け吹き飛ばされる

「勝者、シグナム二等空尉!!」

アナウンスがシグナムの勝利を宣言し対戦相手は目を回しながら担架で運ばれる。試合を終えたシグナムは待機室へ移動し椅子に腰掛ける

「お疲れー、シグナム」

アギトはスポーツドリンクとタオルを持ってやって来る

「ああ、すまないな」

シグナムはアギトからそのふたつを受け取る

「それにしても凄かったな。こうババーン!とそれからズバーン!と。流石あたしのロードだ!」

「ふっ、褒めてもなにもでないぞ?」

シグナムはタオルで額を拭いながら言う

「そういえばもうヴィータの試合の時間だろ？」
「うん。さっき始まったみたい。ちょっと待ってて。ピツ、ポツ、パツと」

アギトはディスプレイを操作しヴィータの試合の映像を映し出す



「うおりゃあああああああ!!」

グラーフアイゼンギガントフォームを対戦相手に振り下ろす。だが対戦相手は耐え切れず地面にたたき付けられる

「勝者、ヴィータ二等空尉!!」

「うし!」

ヴィータはガッツポーズする。そして待機室へ戻るとリインがシグナムのところでしたアギトのようにドリンクとタオルを持ってくる

「ヴィータちゃんどうぞです」

「おう、サンキュー」

ヴィータはリインから受け取るとリインは準備の受続きに戻り、ヴィータは受け取ったタオルで汗を拭っているとシグナムからモニターでの通信が入る

「ん?どうしたシグナム?」

『いや、別にたいした用じゃないんだ。お前の調子を聞こうとおも

つてな』

「絶対調だ。心配すんなよ。それよりなのはお前の方のブロックらしいな」

『ああ』

「大丈夫なのかよ？前の決勝の時みたいにボロボロになってよー。あの後大変だったんだぞ」

『あの時はすまなかったな。大丈夫だ。勝つ自信はある』

「そうかい。まっ、頑張れよ」

『お前もな』

そしてお互いは通信を切るとリインがやって来る

「誰からですか？」

「ああ、シグナムからだよ。まったくあいつも心配性だな」

「ふふ、そうですね」

リインとヴィータはクスツと笑う

「そういえばもうそろそろでなのはさんの試合の時間じゃないですか？」

「そういえばそうだな」

「今開きますね」

リインはディスプレイを出現させなのはの試合を観戦しようとディスプレイモニターを出現させる



「レイジング・ハートのメンテナンスもいい感じに終わってますよ。なのはさん」

なのはのデバイスのチェックを今回買って出てくれたシャリオ、通称シャーリーはレイジング・ハートをなのはに渡す

「シャーリーありがとうね」

なのはは受けとったレイジング・ハートを杖のモードで展開する

「調子はどう、レイジング・ハート？」

『ノープログラム』

「そう？ だったら行こうか」

『イエス、マイマスター！』

そしてなのははバリアジャケットをエクセリオンモードで展開しヴィヴィオ達が見に来てくれている会場へ向かう



なのはの戦う会場の中央にひとり宙を浮き目を閉じ深呼吸をしている少女がいた。今回のなのはの対戦相手レイア・ミッシュ・メルファ三等空尉だ。彼女はミッド、ベルカの混合タイプで武器は短剣形のデバイスを所持している

（ふう、あたしは勝つ！ あたしは勝つ！ あたしは勝つ！！）

と心で暗示を賭けるレイア。するとなのはが入場してくる。なのはの入場で会場が歓声でいっそ盛り上がる

そしてアナウンスより試合開始のカウントが始まる

「5！ 4！ 3！ 2！ 1」

カウント0が宣言されシグナルも赤から青に変わる瞬間

ズガァン!!

とシールドを破壊し会場に侵入し砂煙が舞う。さらにその砂煙から銀色の薄い円形の板のようなものが投げ飛ばされる。大量のセルメダルだ



侵入してきたなにかのため、観覧席の一般の応援の人々は避難させられいたが

「ぐっあ……………」

「映司さんどうしたんですか!?!」

その時映司は身体の中にうごめくプテラ、トリケラ、ティラノ、ユニコーン、バイコーン、トライコーンの合計6種類のメダルがざわめき始める。それにヴィヴィオは駆け寄る

「ヴィヴィオちゃん大丈夫。アंक、メダル!」

映司はヴィヴィオを離れさせアंकにメダルを要求する

「はあ、どういう事だ?」

「いいから早く!ガタキリバで!!」

「よくわからんが……………」

アंकはクワガタ、カマキリ、バッタのメダルを受け取りオーズガ

タキリバコンボ変身する

「変身!!」

『クワガタ! カマキリ! バッタ! ガータ・ガタ・ガタキリバ!! ガタキリバ!!!』

すると砂煙の中から大量のセルメダルが投げ飛ばされる。オーズはガタキリバの能力で分身し飛んでくるセルメダルを片っ端から切り落とす

「火野!」

「映司さん! アンクさんメダルを!」

後藤もアインハルトも自らの変身ツールをセットしアインハルトはアंकにメダルを要求するとアंकは黄色いコンボのメダルと灰色のコンボのメダルを渡しアインハルトは、ライオン、トラ、チーター、ハイエナ、キツネ、オオカミのメダルをセットし、後藤もセルメダルをスロットしグラップアクセラレータを回転させる

「「変身!!」」

『カポーン!!』

『ライオン!トラ!チーター!ハイエナ!キツネ!オオカミ!ラッタ!ラーター!!ラトラーター!!イーエ!ツネーオ!イエツネーオ!!!イエローコアコンプリート!!!』

変身を完了するとバースもバースバスターにメダルをチャージし撃ち落とす。ヴィーズもトラクローとキツネクローを展開させメダルを弾く。その頃アंकは右手だけになりセルメダルを取り込む

「こりゃ大量だなあ」

だがオーズ達はすべてのセルメダルを破壊できたわけではない。カパーしきれなかった人々から数々のヤミーいや、怪人達が出現する。その姿は様々でショッカー戦闘員やグロンギ、イマジンまで様々な姿だった。その怪人達は中央の砂煙が舞っていた場所へ集まってくる。さらに会場は怪人共の出現でパニックに陥る

「あれを何とかしないと!」

オーズは分身を消滅させガタキリバコンボからタトバコンボになり言う

「ああ、それにはまず」

バースは視線をひとつに集中させる

「そうですね。やはりあそこになにかあるはずです」

ヴィーズ達が言っているのは先程、砂煙が舞った場所だ

「はい! 行きましょう!」

オーズはその場所へ向かおうとしたが

「待て映司」

アंकがそれと呼び止めるとアंकはクジャク、コンドル、シャチ、ウナギ、タコのメダルを渡す

「保険だ。持って行け」

「アंक、ありがとう！」

「とっとと行ってさっさと帰せ」

「わかってるよ！行ってくる！！」

そしてオーズは5枚のメダルを預かり三人のライダーはその場所へ向かった



「これは一体……？フェイトちゃん聞こえる？」

セルメダルを弾いて凌いだなのは会場内の医療室で待機していたフェイトに通信を繋ぐ。フェイトは駆け足で現場へ急いでいた

『こちらフェイト、なのは聞こえる？』

「うん、聞こえているよ。どうする？この状況かなりまずい事になったよ」

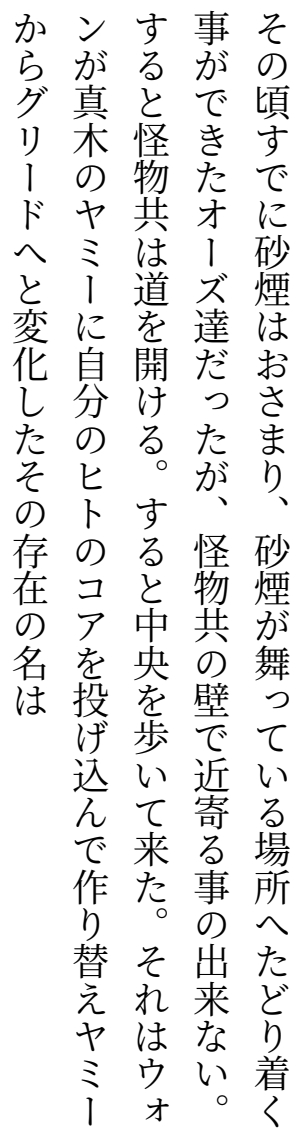
『うん、今私もそっちに向かっている。本局からはA A以上の魔導師は怪物の殲滅にあたれだって。映司さん達も戦っている私も戦わなきゃ！とにかくなのは会場内から怪物達を外に出さないようにして』

「了解！」

なのははフェイトからの通信を切る

「さていくよ！レイジング・ハート！！」

「OKマイマスター！！」



オーズとバースの声が重なる

「たしかショッカーグリードは1号さんと2号さんが倒したはず！」

確かにかつてシヨツカーグリードは1号と2号によつて倒されたグリードだ

「貴様等なんの話をしている。俺はウォン様に使える忠実な下僕だ。ウォン様を完全に復活させるのが我が使命だ!!」

このショットカーグリードは記憶がない。すなわちこいつは以前1号2号を追い詰め、1号、2号に倒されたショットカーグリードではないようだ

「さあ、貴様等を悪の目の前に跪かせてやる！ シヨオオオオオオオオオオオオッカアアアアアアア！」

209

シヨツカーグリードの咆哮に続き戦闘員や怪人達も高く声を上げる

カウント・ザ・メダルス25仲間と声援とライダーダマシー!! (前書き)

差し込む太陽の下、崖の上のオーズタマシーコンボ背を向けている

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そしてこちらを振り向き構える

「このあとすぐ!!!」

カウント・ザ・メダルス25仲間と声援とライダーダマシー!!

「行け!!」

シヨツカーグリードの命令で怪人達は一斉にオーズ、バース、ヴィーズに襲い掛かる。オーズはそれに反応してタカ、トラ、バツタのメダルを抜き取りシャチ、ウナギ、タコのメダルに入れ替えスキヤンする

『シャチ!ウナギ!タコ!シャシャシャウタ!!シャシャシャウタ!!!』

オーズは青のメダルのコンボシヤウタコンボへとなる。バースもセルメダルを4枚取り出しスロットしグラップアクセラレータを4度回す

『シヨベルアーム、カッターウイング、ドリルアーム、キャタピラレッグ』

バースは固有武装を4種類装備し、ヴィーズも両肩のライオンシヨルダーとハイエナシヨルダーを両腕に装備して3人は怪人達に立ち向かう



「はあ!おりゃ!セイヤー!!」

オーズはウナギムチを使い怪人共をひとまとめにしメダルをスキヤンする

『スキヤニングチャージ!!!!』

オーズは怪人達を縛り上げたまま飛び上がり、タコレッグの触手をドリルのように回転させ突っ込む必殺技、オクトバニツニユを繰り出し怪人共を倒す

「セイヤー!!!!」



バースもカッターウィングで飛翔し空の敵を叩く。両腕の強力な武器で空を飛ぶ怪人共に打撃を与える。ドリルで貫き、シヨベルでたたき付け、カッターで切り裂き、キャタピラで蹴り飛ばす。そしてあらかた空の敵を始末するとバースは地上に下り、更に2枚のセルメダルをスロットしグラップアクセラレータを回す

『クレインアーム、ブレストキャノン』

そしてバースはバース・ディとなる。そして怪人共に全ての武装のフルパワーを使い、目の前の敵を一掃する



ヴィーズも展開したライオンシヨルダーとハイエナシヨルダーを駆使し怪人共を次々と倒して行く。するとヴィーズは怪人共に囲まれてしまう

（数が多いです……。でしたら……）

ヴィーズは先程アंकから預かった。サイ、ゴリラ、ゾウ、コウモ

リ、モグラ、ムササビのコアメダルを取り出しベルトの黄色いコアから灰色のコアへチェンジしスキャンする

『サイ！ゴリラ！ゾウ！コウモリ！モグラ！ムササビ！サゴーズ……サゴーズ……！コグーサ……コグーサ……！グレーコアコンプリート……！』

ヴィーズはグレーコアコンプリートフォームへとなり、周囲の重力を完全に制御できるようになる

「はあああああああああああ……！！！」

ヴィーズいやアインハルトの咆哮。この咆哮を受けた怪人達は地面に吸い付くように倒れ、重力を一気に解放する。すると怪人達は一気に空中へ投げ出され落下して来る。ヴィーズはその隙にメダルをスキャンする

『グレーコア……！スキャンングチャージ……！！』

ヴィーズは体制を低くする

「霸王………」

両腕に力を溜め

「撃………」

足に踏ん張りをつけ

「重王破……！！！」

一気に解放する。両腕に溜められた力は落下して来る怪人共にゴリラバコーンとモグラドリルを1体の怪人に叩き込むと、技を受けず落下して来る怪人は連鎖するように爆発する



オーズ、バース、ヴィーズはこれまででたくさんの怪人を倒ていたが

「まだ、かなり残っているな……………」

3人は合流し背中合わせで構えをとる

「はい。やはり親を倒さない……………」

「だが、奴はかなり奥の方で高見の見物だ」

「やっぱり、こいつらを倒さないとあそこまで行けないって事です
ね……………。どうすれば……………」

3人が策をねっていると約10体程の怪人達が飛び上がりオーズ達に襲い掛かった。だがその怪人達は赤い光線に直撃し爆発する

「これはいいたい？」

オーズ達はその光線の先を見る。そこには心強い者達がいた

「スバル、ノーヴェ、ギンガさん、チンクさん、それにみんなも！
」

そこにいたのはバリアジャケットを纏った、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディ

の姿があつた。なんともここと強い援軍である

「助けに来たっスよ！」

「後は我々に任せてお前達は本陣を！」

「はい！後藤さん、アインハルトちゃん。行こう！！」

「ああ！」

「はい！」

チンクの指示に従いオーズ達はショックーグリードを倒しに向かう

「さて、おっぱじめようぜ。みんな！！」

「「「「「「「「おう！！！！」」」」」」」」

元機動六課のフォワード4人とナカジマ家の武装チームN2Rの激戦が始まった



避難が完了した観覧席。そこにはショックーグリードが高見の見物をしていた

「ふっ、これが人の欲望か？人とはなんとも愚かな存在だ。この世界はウォン様が支配すべきだ。ん？ぐっ！？」

ショックーグリードがそう呟いていると炎の弾とメダルの形状のエネルギー弾が直撃する。それはオーズタジャドルコンボのタジャスピナーから放たれる炎の弾とバースバスターから放たれるセルメダルのエネルギー弾だ
するとショックーグリードの目の前にオーズ達が立ち上がる

「貴様等あ……………」

ショットカーグリードは両手を広げ飛び出しバースとヴィーズを掴み上げ別のすぐにそばの別の会場へ連れて行かれる。そしてその場所に付くとバースとヴィーズを地面にたたき付ける

「きゃっ！」

「ぐあ！」

オーズもショットカーグリードに追いつく

「アインハルトちゃん！後藤さん！」

オーズはベルトからタカ、クジャク、コンドルの3枚を抜き取りタジャスピナーにそのメダル3枚をセットしレバーを引きオースキナーでメダルをスキャンさせる

『タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！！！』

オーズは不死鳥の姿となり鳥のコア3枚3種とセルメダル4枚でギガスキャンし放つ必殺技、マグナブレイズを放つ。だがショットカーグリードは瞬時に背後に回り込みオーズを蹴り落とす

「ぐあ！！」

空中のオーズは落下してしまう。そしてショットカーグリードは追いつき撃ちをかけるように更に炎の弾をオーズ、バース、ヴィーズに放つ

「うあああああ！！！！」

その攻撃を受けたバースとヴィーズの変身が解除され後藤とアインハルトに戻り倒れてしまう。後藤はもう一度変身しようとバースドライバーに手を伸ばすがショッカーグリードは鼻笑いでその手を踏み付ける

「ぐああああ!!」

後藤の悲鳴が響き渡る

「やめろ!!」

オーズはショッカーグリードに向かい進もうとすると

「映司さん!!」

この会場の観覧席からフェイトの声がオーズの耳に入る

「フェイトさん!?!なんでここに?」

するとフェイトはオーズに向かい小さな袋を投げる

「これを受けとって!!」

オーズはそれをキャッチし中を見る。その中には以前セントがフェイトに預けたなにも描かれていないメダルだった

「これってメダル?」

「セントさんから伝言!『欲望の強さは思いの強さ』だから……」

フェイトはお腹に力を溜めて一気に解放する

「頑張って！仮面ライダーあああああああああああああああああああああ
あああ！！！！」

フェイトの渾身の声援

「はい！」

そしてオーズは念じた。ショッカーグリッドを倒すための力

（それは！！）

そしてオーズはクジャク、コンドルを抜き取り、代わりにそのなにも描かれていないメダルをセットする。するとその1枚のメダルには桃のデザインが入り、もう1枚は地球を掴む鷲のデザインが入り、オーズはタカを含めたそのメダルをスキャンする

『タカ！イマジン！ショッカー！タマシー！タマシー！！タマシー！！！！ライダータマシー！！！！』

オーズは奇跡を呼び起こす無敵のコンボ、仮面ライダーオーズタマシーコンボへと姿を変える

カウント・ザ・メダルス25仲間と声援とライダーダマシー!! (後書き)

ついに出了よ!
タマシーが!!

カウント・ザ・メダルス26魂と決意と映司逮捕（前書き）

太陽のした映司が立っており、落ちてくる3枚のメダルをキャッチしベルトへ入れスキャンする

「魔法少女リリカルなのはOOO」

「変身!!」

そして仮面ライダーオーズタマシーコンボへ変身する

「このあとすぐ!!」

『タマシー!タマシー!!タマシー!!!ライダーダマシー!!!』

カウント・ザ・メダルス26魂と決意と映司逮捕

『タカ！イマジン！ショットカー！タマシー！タマシー！タマシー！……ライダーダマシー……！』

オーズの身体を炎がプロミネンスのように包み込む。すると通常のタカヘッドに、肩にはモモタロスの角のような武器としても使用できるオレノツノを装備し、本能で戦い腕力や握力は高いが細かい作業が苦手なイマジンアーム。脚部はコンドルレッグと類似したショットカーの技術力が集結し攻撃力や技の威力を跳ね上げるショットカーレッグ

この3種類のメダルとグリード、イマジン、ショットカーの3種類の怪人の能力が加わったコンボ。仮面ライダーオーズタマシーコンボとなる

「そつ、その姿は………！？」

ショットカーグリードは本能でかオーズのタマシーコンボに恐れ後ずさる。オーズもショットカーグリードが後ずさる度ゆつくりと前進する。ショットカーグリードはメダル状のエネルギー弾をオーズに放つがオーズはそれをまったく受け付けず、そのままゆつくりと前進してくる。そしてオーズは飛び上がりショットカーグリードを殴り飛ばす

「ぐあー！！」

ショットカーグリードは飛ばされ転がされ、オーズはその隙にメダルをスキャンする

『スキヤニングチャージ……！！』

するとオーズの手にショッカーメダルの姿をした砂状のエネルギー弾が出現し立ち上がるショッカーグリードへぶつけ、最後にタカメダルとイマジンメダルのエネルギー弾を放つ必殺技、魂ボンバーをショッカーグリードへ叩き込む

「セイヤー!!!」

ショッカーグリードは魂ボンバーを茂呂に受け、遠くに飛ばされる

「貴様あ……………!」

ショッカーグリードは立ち上がろうとするが

「使えないおもちゃだな。おい」

ゲシッ!!

と立ち上がろうとするショッカーグリードの腹部を蹴り飛ばす

「がはぁ!?!」

ショッカーグリードは自らを蹴った者の顔を見る。そこにいたのはユーロだった

「まったく、使えないおもちゃだね」

ゲシッ、ゲシッ、ゲシッと何度も何度もショッカーグリードの腹部を蹴る。オーズはショッカーグリードを追いつけ、それに追いつくとそこにはショッカーグリードを蹴り続けるユーロがいた

「君は……?」

「ん?」

ユーロはオーズの存在に気がつく

「あっ、オーズじゃん。はじめましてだね。あたしは爬虫類のグリード、ユーロよろしく」

ユーロはショッカーグリードに対する態度をケロッと変え自己紹介する。オーズはユーロがグリードだと知ると戦闘対戦に入る

「とりあえず、今日は戦う気ないからこのおもちゃ拾って帰るね」

ユーロは右腕のみを部分変化させショッカーグリードの身体を縛ると左腕の拳で地面を叩き岩壁を作りだす。オーズは壁の後ろを確認しに向かう

「いない……」

もうそこにはもうユーロとショッカーグリードの姿はなかった。そしてオーズは怪我をした後藤とアインハルトの元へ戻る



「後藤さん!アインハルトちゃん!大丈夫!?」

映司は変身を解除し戻って来る

「ああ、なんとかな」

「大丈夫です」

そこには応急処置をし終えた後藤とアインハルトの姿があった

「ふたりとも大丈夫なの!？」

「まあな、フェイトさんに応急処置はしてもらった。今フェイトさんは救護班を呼びに向かっている」

「よかった」

映司は安心し肩の力を緩める

「そういえばショッカーグリードはどうした？」

「実は仲間が現れて連れていかれました」

「そうか、なんにしても次合った時はこの借りは返させてもらう」

「はい。私も霸王の名において次は負けません!」

後藤とアインハルトは今回の敗北を得て、決意を新たにする。するとフェイトが担架を持った救護班の人達を連れて来て、後藤とアインハルトは救護班の指示に従い管理局が関係する、伊達の入院する病院に搬送される。そして残ったフェイトは映司に現在の状況を伝える

「映司さん、なのはやシグナム達のおかげで怪人達は確認されている全てをメダルとなり消滅し騒ぎはおさまりました」

「怪我人は大丈夫なの？」

「はい、怪我人は少しいますが重傷な患者はいませんし死者も0です」

その言葉を聞いた映司は少し悲しい表情をする

「そうですか……。ありがとう。フェイトさん」

「いえ、さあ、ヴィヴィオ達も外で待ってます。行きましょう」
「そうですね」

そして映司とフェイトは会場を後にする



ふたりが会場から外へ出るといきなり武装隊の魔導師達に囲まれる

「えっ？」

「これはいったい!？」

突然の出来事で戸惑うふたり。すると武装隊員のひとりが口を開く

「ハラOWN執務官! 早くその男に拘束してください!」

「ちょっと待って彼は……………」

フェイトはその武装隊員達に説明しようとすると、武装隊員達の壁を退けながらひとりの痩せ気味の管理局の制服を来た男が割って入ってくる。その男はレジアス・ゲイズ中将亡き後新たに中将の座に着いた男。テレジア・オーガスト中将だった

「おてがらだよ。ハラOWN執務官」

「どういう事ですか、テレジア・オーガスト中将……………」

するとテレジアは懷から1枚の紙を取り出す

「次元漂流者、火野映司。君をロストログア所持及び使用の疑い。
さらに今回の管理局戦技披露会の騒ぎの首謀者の疑いで、君を逮捕

する！」

「「えっ!?!」」

その言葉に映司とフェイトは驚く

「連行しろ」

テレジアの指示に数名の武装隊員が映司の両腕を掴み連行させる

カウント・ザ・メダルズ27 説得と映像と怒れる幻獣

魔法少女リリカルなのは〇〇〇今までの6つの出来事

1つなのはとフェイト、ティアナの3人はセントと話をするため。

無限書庫行きセントの事を聞き、メダルを2枚授かる

2つシャルは伊達に入院をすすめ伊達はそれを承諾し、伊達はバースを後藤に継承する

3つバンクはオーズの世界へ行き、カザリ、アंकロスト、メズール、ガメル、ドクター真木と戦い離脱。そして真木が放った4体のヤミーの1体がウォンの手によりシヨツカーグリードとして生まれ変わる

4つ後藤にすすめられ管理局が主催する戦技披露会にシヨツカーグリードが襲来。オーズ、バースそしてヴィーズはシヨツカーグリードと戦う

5つ以前セントから授かったメダルを使い、オーズはタマシーコンボへと姿を変える

そして6つ映司はコアメダルをロストログアと判断され、管理局に逮捕される

戦技披露会あと、地上本部の中将室

そこには火野映司の逮捕を否定する、クロノ・ハラOWN提督、フエイト・T・ハラOWN執務官の両名はテレジア・オーガスト中将に掛け合っていた

「納得がいきません！」

机を叩着付けるクロノ

「なぜ、火野映司を逮捕する必要があるのですか!？」

あの冷静なクロノが声を荒げて言う

「なぜ？当たり前前の事ではないかね。クロノ・ハラOWN提督。実際、彼はコアメダルというロストロギアの級の代物を所持していたのだよ。それを差し引いても彼はオーズという我々管理局の技術力では計り知れない力を持っている。フェイト執務官はどう思いますかな？」

テレジアはフェイトに自分の意見を聞く

「はい、確かに管理局、いえ、世界のルールに従った行動だと思います………」

その言葉を聞いたテレジアは余裕の笑みを浮かべる

「ですが、いまこのミッドチルダには最低でも6人のグリードという怪人が確認されています。現在2人倒されていますが、まだ6人残っている現状でオーズの協力を惜しむのはどうかと」

「では君は私の意見に反対という事でいいのかね？」

「はい」

テレジアは大きなため息をつくときディスプレイパネルを操作する。するとフェイト達の前に映し出されたのは、いままでオーズの戦闘映像だった。この世界初めドルと遭遇してから先程の戦闘のシヨッカー・グリードとの戦闘の全ての映像が表情されている

「これは………」

「これはいままでの戦いの映像だよ。得にこれを見たまえ」

そして表情された映像は、オーズがスバル、ティアナ、ノーヴェを襲っているものだった。つまり暴走したこの世界で初めて暴走したとき、紫のコアの力、プトティラの姿へなったときの映像だ

「これを見てもまだオーズの協力は安全な存在と言えるのかね？現にスバル・ナカジマ防災士長、ティアナ・ランスター執務官、N2Rのノーヴェ・ナカジマ。彼女達も実際襲われている。この現状でまだオーズの力を借りると言うのかね？」

「ですが！あれは、グリードの王という存在が現れたためやむおえず変身した姿です！あの姿が本性ではありません！！」

フェイトの必死の対応

「フェイト執務官それは私も知っている。暴走したのだから？報告にあった」

「でしたら何故？」

「その暴走のおかげで多少ですんだが街に被害がでている。暴走したから仕方ないでは済まされないのだよ」

「くっ……………」

フェイトはなにも言えない

「実際暴走確率の低いセルメダルがまだある。それにバースと言うものもあるのだから？ならばあれを量産してグリード共を始末すればいい。それにオーズ、いや、火野映司から確保したコアメダルを解析すれば現在管理局で開発を行っているメダルシステムをより強力に仕上げられるのではないかね？」

「「なっ！？」」

フェイトとクロノは驚いた。なぜなら映司から奪い取ったコアメダルを管理局で解析し我々が使用する。と言うテレジアに怒りさえ覚えた

「火野映司から奪ったコアメダルを我々が使用し戦力を拡大するなんて道理はありません!! あなたは数年前に起きたJS事件のような悪夢を再び起こそうというのですか!?!」

「それに後藤さんは、民間協力者です! 彼の持っているブーストライバーを勝手に解析し量産なんて事はどうかと思います!!」

「民間協力者? 笑わせないでくれたまえ」

「「なっ!?!」」

「彼の所持しているブーストライバーという物を所持しているのだよ。民間人とは違うのではないかね?」

「ですが……しかし……!!」

クロノはテレジアの言葉に反発する。テレジアは机を叩き立ち上がる

「もういい!! 君達には失望したよ!! 出て行きたまえ!!」

テレジアは怒声を上げ、ドアを指差す。するとドアに穴が空き、こじ開けられる

「失礼する……」

入ってきたのはセントだった

「なにかね君は? 私達は大事な話をしているんだ」

だがセントはテレジアの言葉を見もせずただテレジア目掛けて歩くだけだ。いつもは穏やかなセントだがいまは違うただただ怒れる獣の

ような雰囲気をつェイトとクロノは感じた。そしてテレジアの目の前に着くと

パァン！

という音が響き渡る。その音がなるのと同時にテレジアは叩き倒されテレジアは体を起こそうとするが、セントは強引に胸倉を掴む

「てめえはなんてことしてくれやがる？」

「なっ、何の事かね！？」

「惚けるな！！何故オーズを逮捕した！？」

「さっ、先程も彼等に言ったが火野映司はコアメダルというロストロギアを所持していたのだよ。そのような犯罪者を捕まえるのが我々の勤めのはずだ」

もっとも意見だ。だが怒れる幻獣の心を沈めるのは難しい話だ

「ロストロギア？はっ！笑わせるな！！いいか？コアメダルってのは我々グリードの魂だ！そんな大事な物をほいほいと人に預ける事が出来るか！ましてや解析するだど？ふざけた事を言ってるんじゃない！！」

言葉使いが非常に荒い、つェイトもクロノもその光景を見ているだけしかできなかった

「いいか！？この時空管理局の開発しているメダルシステムは誰がセルを提供していると思ってる！？この僕がわざわざ体を擦り減らしセルメダルを君達に提供してやっているんだよ！？いいかいま行われている欲望のこの戦争を終戦を迎えるためにはオーズの力が必要不可欠だ！この戦争に僕達が負ければ世界は崩落し、全てが消

え去る。いまから火野映司を釈放しろ、さもなくては貴様を親としお前の欲望を全てを食らいつくす!!! いいな!」

セントは掴んでいた手を離し出口へ向かう

「わかったな?」

「は……………い……………」

テレジアは弱々しい声で返事をする

「行きましょう。フェイトさん、クロノくん」

「うん……」

「ああ……」

そして3人は退席する。その後テレジアの命で火野映司は釈放され没収されていたオーズドライバーとメダルも全て本人の手元に戻ってきた。一方テレジアは数日後、管理局を逃げるように退職したという

カウント・ザ・メダルス28設計図と包囲と打ち上げられた赤鳥の女（前書き）

机の上に数々のカンドロイドが置かれている

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そして一斉に蓋が開きこちらへ向かい飛び込む

「このあとすぐ!!」

ではどうぞ!

カウント・ザ・メダルズ28 設計図と包囲と打ち上げられた赤鳥の女

深夜、地上本部の休憩室。現在そこにはフェイト、クロノ、そしてセントが席に着き休みをとっていた

「はあはあはあ……………」

息を切らすセント。先程の怒りのせいでかなり体力を消耗したためだ

「どうぞ」

フェイトは紙コップに入った水をセントは渡す

「ありがとうございます……………。ゴクッゴクッ。ふう……………」

セントはフェイトから紙コップを受け取り一気に飲み干し息を整える

「すまないね。さっきは取り乱した行動をしてしまった」

「たしかに先程の君の怒りようはかなりのものだった」

映司が会った時もなのは達が会った時のセントは落ち着いた雰囲気を出している。どこにでもいる好青年だった。だが先程のセントはどう見ても荒れ狂う獣と言ってもいい程だ

「まあ、オーズという存在がこの戦争を終わらす鍵だからね。それにコアメダルという存在をいじろうと考えたあの男にも腹がたつてね。なにより、映司君から取り上げたコアメダルを解析して管理体制を強めようとしたあの男の正義に反する発言も気に入らなかった」「そこは僕も腹立たしかったよ」

クロノもセントの意見に同意する。すると、プルプルプルとフェイトの端末が鳴る。なのはからの電話だ。そのためセントとクロノから離れフェイトは電話に出る

「そういえばメダルシステムの方は順調に進んでいるか？」

「ん？まあ、ぼちぼちとね。一応新しい装備はできているよ。見るかい？」

「いいのか？」

「企画、設計が僕とマリエルさんだからね。いいよ」

セントは棒状のディスプレイを取り出し表情し操作するとディスプレイパネルにはある企画書が表情される。それをクロノは取って見る

「『PROJECT INP、Arcana（プロジェクト、アルカナ）』？ いったいどういうものだ？」

「Mask D・Ride System・No、001。通称仮面ライダーアルカナ。セルメダルとオーズの持っているカンドロイドと一定の魔力を基準に数々の武装を使用できるような仕様のパワードスーツさ。バースMark2いったところだね。現在クラスとモグラとエイのカンドロイドの試作品が完成している。ディスプレイの2ページ目を見てみてよ」

クロノはディスプレイのページを操作して2ページ目を表情する。そこにはベルトの設定が細かく記入されていた。そのベルトの設定では中心にちょうどカンドロイドが入るようになっていた

「ここにカンドロイドをセットすれば変身できるし、アルカナの候補者はもう決まっているよ」

「そうなのか？」

するとセントはさらに別のディスプレイパネルを取り出すとそこには1人の女性が映し出された

「彼女はレイア・ミッシュ・メルファ三等空尉。魔法はミッド、ベルカ混合タイプ。別名ミッドの小清水亜美さ」

クロノは一瞬無表情になり、目頭をつまむ

「あー、小清水亜美だろ？ 僕も知っているよ。たしかスイートプリキュア？ だったか。スーパーヒーロータイムの次に放送しているやつで、以前放送していたハートキャッチというやつにはやけにフェイトと母さんに声が似ているキャラクターがいるってエイミィに聞いたよ」

「詳しいね」

「子供達が見てるんだよ」

「そう…」

途中から気の抜けた話になっていた。するとなのはと通信を終えたフェイトが帰ってくる

「どうしたの？」

先程からの状況を知らないフェイトが聞く

「いやなんでもなし。それより誰からだ？」

「なのはだよ。映司さん釈放されたからギンガとチンク、ディエチ、ウェンディが向かえに行ってくれたみたい」

「そうか。それにしても、火野映司君には申し訳のないことをした

な」

「そうだね。今度食事にでも誘ったら？ ナカジマ家の皆やティアナ、エリオ、キャロも呼んで」

「そうだな」

クロノは少し悩むと

「考えておくとするよ」

笑いながら今度映司達を食事に誘おうと思うクロノだったが。フェイトの目の前に突然ディスプレイモニターが出現し女性局員が映し出される。急な話らしい

「どうしましたか？」

フェイトが尋ねる。すると慌てた物言いのでフェイトに内容を伝える

『大変です！フェイト執務官！実はミッド市街地でグリードを発見！今チンクさんが抗戦中至急現場へ！！』

「了解！！直ちに現場へ急行します！」

『お願いします！』

フェイトは通信を切る

「お義兄ちゃん！」

「わかっている。フェイト君は早く行け。僕は魔導師部隊に応援を頼んでみる」

「うん！」

そしてフェイトは現場へ急行した

◆
フェイトに通信の入る少し前のとある車の中。運転席にギンガ、助手席にチンク、後部席に、イエチ、映司、ウエンデイの順番で座る。両手に花だ

「ギンガさんすみません。わざわざ向かえに来てもらって」

「気にしないでください、それに釈放されてよかったです」

「お前が捕まったと聞いたときは正直私も驚いた。大丈夫だったか？」

「まあ、慣れてるから。旅している時に不法侵入と間違われて逮捕されたりしているから」

と映司は笑いながら言う

「それでも良かったっスよ」

「そういえば今日父さん帰ってきてるし、今日の夜からしばらくお休みて言っていたねギン姉さん」

「そういえばそうね。映司さん今日は家に泊まって行きませんか？」

ギンガからのお泊りのお誘い

「え？いいんですか？」

「ええ、今夜はもう遅いですし、それに私達も今日は夕食をまだ食べないんです。どうします？」

「うーん、久しぶりにゲンヤさんとお話したいし。わかりましたではお言葉に甘えて」

「わかりました。ではなのはさんには私から連絡しておきます」

「お願いします」

「はい」

そしてギンガは車を走らせチンクが助手席から外を見る。その瞬間チンクの表情が一変する。何かを見つけたようだ

「姉上止めてくれ!!」

「え?」

「早く!!」

ギンガはちょうど目の前にあったパーキングエリアに入り車を駐車する。するとチンクは慌ててドアを開け飛び出していく

「ちょっと!?! チンク姉!!」

ディエチが叫ぶがチンクには聞こえない

「よくわからないけど追いかけるっスよ」

ウエンディも出てきて映司、ギンガ、ディエチ、ウィンディはチンクを追いかけたが映司は目の前にある物に足を止めてしまう

「あれ? どうしてここにライドベンダーが?」



ミッドのビルの裏路地。そこには2つの影があった。ひとつは緑の銀棒のコアメダルのグリード、ドル。もうひとつは青の銀棒のコアメダルのグリード、フラン。彼等は先日バンクにポンドをウォンにバーツを倒されて現在は2人で活動中だ

「ドル、これからはどうするの?」

「そうだな。さすがにこの姿のまま動き回るのもアレだ。ポンドのようにこの世界の人間達の姿で行動するか」

「そうね」

「それにあいつらの為にもまずはあの野郎から2人のコアメダルを回収する」

「ええ、その為にはまずはセルメダルね」

「そうだ。まずはセルメダルを溜め込み力をつける。そのためにはヤミーが必要だな。行くぞ」

ドルとフランの会話だ。するとドルの足元にナイフ、ステインガーが数本投げ込まれる

「なんだ!？」

ドルとフランは振り向くとそこには

「動くな! お前達は完全に包囲した! 動けば爆破する!」

銀髪の幼女体型のチンクだ。先程チンクの目にとまったのはドルとフランの姿だった

(とは言ったもののどうする? おとなしく投降するとも思えない)

少しづつチンクは足を動かしマンホールの前に立つといきなりマンホールの蓋が飛び上がり水が柱のようになる。フランが地下水道を操作したせいだ

「なんだ!？」

チンクは驚き後ずさる。水の柱が消滅すると目の前のドルが武器で

あるセルメダルで構築したスピアをチンク目掛けて投げ飛ばす。チンクは防御の体制に入ろうとしたが

（間に合わない！！）

スピアはチンクの心臓目掛けて投げ飛ばされる。死を覚悟したその瞬間電子音が響き渡る

『タカ！ウナギ！ショックー！』

ライドベンダーに乗って駆け付けたオーズタワーコンボが現れウナギムチでスピアを掴み上に投げ飛ばすとショックーレッグで破壊する

「くっ、オーズ……………。まさかお前が現れるとはフランここはひくぞ！」

「えええ！」

そしてドルとフランは路地の暗闇へ姿を消した。その後一辺を操作したがドルやフランの姿を発見することはできなかった

次の日

ミッドの港にひとりの女性が打ち上げられた。赤い羽を撒き散らし手には剣を持った執事服の美女

そう、その女性の名はバンク。赤い銀枠のコアメダルのグリードだ

カウント・ザ・メダルス29絶望と裏切りとビックリ発言（前書き）

背中合わせのバンクとユーロ。バンクの手にはメダグレンバー。ユーロの手には鋸のような剣

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そしてお互い素早く振り向き刃を交える

「このあとすぐ!！」

ではどうぞ!！」

カウント・ザ・メダルス29絶望と裏切りとビックリ発言

「ここは？」

バンクが目を覚ますとそこは白い天井、綺麗な部屋。ここは現在伊達や後藤、アインハルトが入院している病院の病室だ。バンクは頭を押さえながら体を起こす

「私はいったい……………」

バンクは何があったか状況を思いだそうとする

「そうだ私は……………!!」

バンクの表情が一瞬で変わる。それはまるで愛する者の死を見たような

「私は…………リンを…………。くっ！」

バンクは怒りと悔しさのあまり歯を食いしばる。すると病室のドアが開きふたりの男が入ってくる

「やあ、バンク久しぶりだね」

「ふん……………」

セントとアंकだった。映司やヴィヴィオ達がいなのはアंकいわくグリード水入らずで話したいとい事で伊達や後藤、アインハルトの病室へ見舞に行っている。だがバンクは管理局的には敵なのでアंकには録音機が持たされている

「アंक、セント。何故あなた達が？」

「実は今朝、浜辺に打ち上げられている君が発見されてね。ここに運んでもらったんだ」

「そう……………、ですか……………」

バンクは落ち込んだような姿になる

「おい、バンク何があった？」

「そうだね。僕もそこは気になるかな」

「そうね。話すわ、私があった出来事を……………」

そしてバンクは起きた出来事を全て話す



ミッドのとある古城。ウォン達のアジト。そしてその大広間の中央階段にひとり白髪の少年が立て膝で階段を椅子の変わりにして巨大な水晶を背に座っている

（チッ、まさかあのヤローが負けるとな。グリードと言っても所詮は偽物のグリードか。セルが足りないなあいつに渡ししぎたか？仕方ないバンクかユーロにヤミー作らせてそいつ狩るか。ん？あれは）
ウォンが立ち上がりヤミー作りを催促しに行こうとすると目の前に小さい少女が食事等の仕事をしている。バンクが作ったペンギンヤミーだ

（面白れえ……………）

その頃バンクはペンギンヤミーを探していた

「リンー？あれ、どこ行ったのかな？あの娘………」

リンというのはバンクがつけたペンギンヤミーの名だ。すると旋律が響き渡る

「きゃあああああああ！！！」

「今のリンの声？何があったの？」

バンクは走り出しリンの叫び声の元、大広間へ向かう。すると彼女の目に入りこんだ光景は

「リン……？リン！！！」

ウォンがリンの背中から腕を貫いている光景だった

「お母さん………」

リンは最後に封印された言葉を残しセルメダルへとなる。つまりリンは死んだ

「うわあああああああああ！！！！！」

バンクは怒り狂い、ルーヴィーズの姿ではなくグリードの姿でウォンに鋭い爪で襲い掛かる

「貴様あああああ！！！」

「あん？」

その爪は簡単に止められる

「なにやっぺんだお前？主に向かってよ」

「うるさい！貴様なぞもう主ではない！！」

「はあ、そうかい。だったら消えろ」

ウォンはメダスカラーを出現させバンクを切りつけようとするがバンクはそれを察して飛び上がり水晶の前に立つ

「へえ、なかなかやるな流石。だが遊びはおしまいだぜ。てめえが裏切るのはわかっていたんだよ。忠誠のバンクいや、色欲のバンクさんよ」

「！！何故その名を……」

バンクは自分の真の名を知っているウォンに驚いていた。ウォンは鼻で笑い右手の指で頭を数回ノックする

「俺はお前等全員のコアを取り込んでるんだ。全部とは言えんがお前の記憶も少し取り込んでるだけ」

ウォンは余裕の表情で言う

（くっ、どうする。あいつは私では太刀打ちできないせめてあの人と合流できれば……。そのためには！）

バンクは水晶へ振り向き中で眠っているクモのコアメダルを水晶を砕き抜き取る

「貴様俺のコアを！許さん！！」

ウォンはコアを奪い取ったバンクを始末しに向かおうとするとオレンジ色の鞭がバンクを外へ吹き飛ばす。ユーロの仕業だ

「あーらら、飛んでちゃった。閣下あの裏切り者始末してくるからここで待っててよ」

するとユーロはバンクが開けた穴を通り外へ行く

そして森林の中へ入るとバンクを発見したユーロは一方的にバンクを痛めつける。しかもその姿はグリードではなく人のままだった

「はあはあ……………」

「あれま。この程度なの？もっと齒ごたえ欲しいなつまらないよ！」

ユーロは鞭を槍のように伸ばしバンクの体を貫きホウオウ、ペンギンのコアメダルを1枚づつ奪い取る

「ラッキーコアメダルゲット。さてドルのコアも返して貰おうか」

するとユーロは鋸のような剣を出し一步步みよる。バンクはそれにゆっくりと下がる

そして崖へ差し掛かる。後ろは海落ちればただでは済まない。そしてユーロは最後の一太刀を繰り出す

「じゃあね」

バンクはセルメダルをばらまきながら切り付けられ海に転落する。その際コアメダルを1枚奪われてしまう

「またまたラッキーバンクから3枚もコアメダルを取っちゃったよ。じょうできじょうでき♪」

そしてユーロは城へ戻る

その後バンクは浜辺へ打ち上げられ今の状態へいたる



事の全てをアंकとセントは聞かされた

「なるほどそんな事が……。でも君が無事で良かった」

「セントさん………」

セントはそつとバンクの手を取る

「つらい思いさせてごめんね。これからは一緒にいよう。大丈夫だ僕が守るよ」

「セントさん………」

セントのその言葉でバンクの頬が赤くなる

「おい！なにピンク色の空気出してんだ気持ち悪いんだよ！！」

大きな声で怒鳴るアंक

「あらあらアंक。あなたお姉ちゃんが取られてセントさんに嫉妬かしら？」

「はあ、どういう意味だ！？くだらん！」

アंकは取り乱し、持ってきたアイスを取り出し豪快に開け口へ頬

カウント・ザ・メダルズ29絶望と裏切りとビツクリ発言(後書き)

カウント・ザ・メダルズ！現在オーズ達が見えるメダルは！！

オーズ、ヴィーズタカ×2、クジャク×1、コンドル×1、クワガタ×2、カマキリ×2、バッタ×2、ライオン×2、トラ×2、チーター×2、サイ×2、ゴリラ×2、ゾウ×2、シャチ×2、ウナギ×2、タコ×2、プテラ×2、トリケラ×2、ティラノ×2、コブラ×2、カメ×2、ワニ×2、ホウオウ×0、カラス×0、ペンギン×0、カブト×0、トンボ×0、クモ×0、サメ×0、エイ×0、イカ×0、コウモリ×1モグラ×2、ムササビ×1ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1、ハブ×0、クロコダイル×0、トカゲ×0、ナノハ×1、フェイト×1、ハヤテ×1、パンダ×1、イマジン×1、シヨツカー×1

バンク

ホウオウ×0、カラス×1、ペンギン×1、クモ×1

ウォン

ヒト×1(ホウオウ×1、カラス×1、ペンギン×1、カブト×1、トンボ×1、クモ×1、サメ×1、エイ×1、イカ×1、コウモリ×1モグラ×1、ムササビ×1、ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1、ハブ×1、クロコダイル×1、トカゲ×1)、ホウオウ×1、ハイエナ×1、キツネ×1、オオカミ×1、コウモリ×1、ムササビ×1

ユーロ

ハブ×2、クロコダイル×2、トカゲ×2、ホウオウ×1、カラス

×1、ペンギン×1

セント

ユニコーン×1、バイコーン×1、ペガサス×1

ドル

カブト×2、トンボ×2、クモ×1

フラン

サメ×2、エイ×2、イカ×2

カウント・ザ・メダルス30見舞いと説教と起こりえぬ予言（前書き）

今回はネタが浮かばなかったので使いまわしです。すみません

背中合わせのオーズとバース右手にはメダジャリバーとバースバスターを持ち

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そしてこちらを向いて構える

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス30見舞いと説教と起こりえぬ予言

アंकとセントがバンクから話をしている時、映司とヴィヴィオは入院したアインハルチと後藤、伊達の見舞いに来ていた

「失礼しまーす」

伊達と書かれたプレートの病室のドアをゆっくりと開ける映司。ちなみにズッシリと重いスポーツバッグを持っている

「おう。久しぶりだな火野。それにヴィヴィオちゃん」

「お久しぶりです。ヴィヴィオさん」

「よう、火野」

なぜか全員揃っている。しかも手にはトランプを持っていた

「後藤さん、アインハルトちゃん大丈夫なんですか!？」

映司は驚き、2人は中へ入っていく

「ああ、だいぶ良くなった。俺とアインハルトちゃんは明日には退院だ」

映司の問いに後藤が答える

「なら、いいんですけど……。そういえば伊達さん。これ言われていたお見舞いの品です」

映司は持ってきたバックを下ろし伊達へ渡す。伊達は持っていたト

ランプを置きそれを受け取る

「おう、サンキュ」

伊達は映司から受け取るとすぐに中を確認する。中には缶のおでんが入っていた。しかもデザインにはなんとバースのイラストがプリントされており、側面にはセルメダルの裏がデザインされている。缶を良くみると様々な台詞が書かれている。人差し指を立てたバースが「これだけ稼がないといけないから」や「悪いね」。これも真正銘のお仕事だから」や「おでん、ない？」等の台詞が書かれている。そうこれが現在の管理局名物バース印のおでん缶だった。伊達のプロデュースより生まれ、それ以来食事の時間のない局員達もこれを愛用している。もちろんなのにもフェイトこれを食べておいしいと言っている伊達はおでん缶をひとつ取り出す

「いただきますーす」

そして缶を開けバックに同封されていた割り箸を使い食べはじめる

「でも大丈夫なんですか？入院中なのに勝手に食べて？」

「らいじょう、ぶらいじょうぶ」

「食べるか喋るかどちらかにしてください」

後藤がきつい言い方で言うと、伊達は口の中の物を飲み込む

「大丈夫、大丈夫。ほら実際俺にダメージがあるのは頭だけなんだからさ、医者にも勝手に食っていいって言われてるから」

「そうですか」

映司は安心する。ちなみに後藤達が映司が逮捕されて事を聞かない

のは、釈放されたのが捕まった日だったためニュースにもならず管理局上層部もその事実を揉み消したためである。するとアंकの声が院内が響き渡る

「はああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

その叫びは映司達の耳にも入った

「今の声アंक？なにがあったんだ？後藤さん、伊達さん、アインハルトちゃん失礼します！」

映司はなにがあったかを確認するべくアंकの元へ行こうとする

「おう、行ってこい」

「はい！ありがとうございます！」

映司は走りバンクの病室へ向かう



「どうしたアंक！？アंक！？」

映司がバンクの病室にたどり着くとそこには目を見開き口がぽっかりと開いたアंकの姿があった。そして映司は肩を叩いたり、揺すったりしてアंकに正気に戻させた

「はっ！？俺はいったい……………」

アंकはしばらく考えると先程の事を思い出す

「そういえばどういうことだ！説明しろ！！」

映司はそんなアंकを押さえ付けて止めようとする

「落ち着けて！なにがあったんでか？」

映司は現状が知りたくなりセントとバンクに聞いてみる

「いや、得になにも……。多分僕達が結婚しているっていうところになったのかな？」

セントがそう答えるとアंकが怒声を上げる

「てめえ！なに变なことやってやがる！！」

「まず、お前は落ち着けて！！」

「チッ！！」

押さえ付けていた映司はアंकを離す。そしてアंकは仏頂面のまま椅子に腰掛ける。映司がセントになにがあったかを聞く

「あの……。詳しく聞かせてください」

「実はね。僕達は800年前に誕生してからしばらくするうちに僕とバンクは愛しあってしまっただけね。こっちの世界に来てから短期間だけで夫婦として生活していた。この事実はウォンも他のグリード達も知らないよ」

「そうなんですか！？おめでとうございます！！」

映司は他人の事なのに自分の事かのように言う

「ありがとう」

バンクは微笑みながら返す。だが映司は違和感を覚える。それはバンクの性格だった。以前映司達が会った時のバンクは冷酷で残忍な性格のように見えたが今はすごく綺麗な女性に見えた

「あの、バンクさんって……………」

映司が聞こうとするとセントが察して答える

「あー、バンクの性格の事だね」

「あ、はい」

「バンクは本当はいい娘なんだ。僕達の作戦のために協力してもらってあの性格を演出してもらったわけさ。ウォンを倒すためにね」

「という事は……………」

「そう。バンクはウォンの一派でのスパイをしていたんだ」

映司はセントの言葉で納得する

「そうなんですか。それじゃ……………」

「うん。彼女は最初から僕達の仲間さ。そしてバンクはこれからヤミーやウォン達を倒すのに協力してくれるよ」

「そうなんですか。よろしくお願いします!!」 「こちらこそよろしくね」

映司が手を差し出すとバンクはそれを取り握手する。すると関西弁混じりの声が聞こえる

「なるほどな事情はだいたいわかったよ」

その声の正体ははやてだった。そして後ろにはシスター・シャツハが怒りに燃えていた

「映司くんとアंकにはこれから説教の時間な」

「え？」

映司はゆっくりとシャツハと顔を合わせる

「火野さん！！アंकさん！！ここをどこだと思ってるんですか！！！」

「はいー！！！」

その後映司は病院内を走り回った事を、アंकは大声を出した事でじつくりとシャツハに絞られた

その後はやてとの話し合いによりバンクの処罰が決まった

それは管理局でセントの下に着いて無限書庫や開発の手伝いをする事。そしてこれから先出現するグリードやヤミーをオーズ達と一緒に倒しながら罪を償うとうものだった。これにより正式にバンクは映司達の仲間となった



聖王教会の一室、騎士団長室。聖王教会騎士団長、カリム・グラシアの部屋で執務室である

「これは!!」

ダンと机を叩き立ち上がる。カリムは持っている古い紙を見て青ざめている

「これは大変な事が起きるかもしれない……」

そこに印されているものはカリムの能力、プロフェンティ・シュリフティン。暗号文形式で書き出され、これから起こるかもしれない出来事が書き記されているものだ。そしてこれには時期に起こる欲望と欲望がぶつかり合う戦争が記されている

カウント・ザ・メダルス30見舞いと説教と起こりえぬ予言（後書き）

出来心で作りました。嘘CMです。ではどうぞ
DXルーヴィーズドライブー

「オーズ!!!」

メダルをセットするバンク

「赤いメダルをセット!!!」

それに手をあて回転させ、ルーヴィーズに変身する

『ホウオウ!カラスW!ペンギンW!』

「これが!銀枠の赤いメダルの力だ!さらに!」

ルーヴィーズは3枚種類メダルを抜きアングのメダルをセットし回転させる

「アングのメダルで最強フォームへ!!!DXルーヴィーズドライブー発売中!!!」

ルーレッダーが中央に表情される

「そしてメダグレンバーも!」

画面が切り替わりメダグレンバーが表情される

カウント・ザ・メダルス31自販機と誘拐と運命のタロット戦士（前書き）

後藤が立ちベルトを巻く

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そしてメダルをスロットしグラップアクセラレータを回し、変身を完了しバースバスターを構える

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス31自販機と誘拐と運命のタロット戦士

映司達の朝は早い。なのはやフェイトは管理局の仕事で家を開ける日が多く、ヴィヴィオも休日となればトレーニングに明け暮れる日々。もちろん映司もバイトで忙しいだが今日は休日！つまりお休みだ！

現在の時間は早朝7時、海辺の歩道。そこにはジャージ姿のヴィヴィオと映司の姿があった。ヴィヴィオのジョギングに付き合っているようである。もちろんクリスも一緒だ

「はあはあ……………」

長時間のジョギングのせいで息を切らすヴィヴィオ

「ヴィヴィオちゃん大丈夫？少し休まない？」

「は、はい……………お願いします……………はあはあ……………」

映司は疲れているヴィヴィオを背負い近くのベンチに座らせ、額に出発前に用意した冷えタオルを載せる

「ちょっと飲み物買ってくるから待ってて」

「はい、お願いしま〜す……………」

額にタオルを載せたヴィヴィオが目を回した状態で頼む。クリスは携帯していた団扇でヴィヴィオを仰ぐ。映司は急いで飲み物を買うに行く。映司がいなくなるとひとりの少女が声をかける

「あれ？ヴィヴィオさん？」

ヴィヴィオもそれに反応し、タオルを退かし顔を確認する

「ミウラさん？」



「自販機、自販機と……………」

映司は周囲にジュースの自動販売機を探していた

「あった！」

そして自販機を見つけ小銭を取りだしジュースを買おうとすると隣の自販機には映司にとっては顔なじみの男がいた

「あれ？後藤さん？」

「ん？火野？どうしてここにいる？」

そこにいたのは先日病院を退院した後藤だった

「ヴィヴィオちゃんのジョギングに付き合っていて。後藤さんはひとりですか？」

「いや、ザフィーラのまな弟子と一緒に走って来た。ベンチで待っててもらっている」

「そうですか。だったら早く戻ってあげましょう」

「そうだな。ん？」

後藤は目の前の自販機を見て固まる

「どうしました後藤さん？あ……………」

映司もその自販機を覗いてみるとんでもない事が起きていた。それは『つめたくい』と表情されているジュースは全て売切れで、残っているのはおしること暑い缶コーヒーだけだった

「後藤さんでしたらこっちの自販機を。あ……………」

映司は自分が買おうとしている自販機を見て固まる

「火野？どうした。あ……………」

復活した後藤は映司の買おうとしている自販機を覗くとその中のものは。カラスカン、エイカン、オオカミカンとい物ばかり。つまりこれは

（（ライドベンダーだああああああ！！））

映司と後藤は膝から崩れ落ち、両手を着いたポーズとなり、歎いた。それから数分後まともな自販機を見つけジュースを買うことができた



「ただいま……………」

汗だくの状態で映司と後藤は帰ってきた

「映司さん、お帰りなさい」

ヴィヴィオは映司達がジュースを買いに行っている間に体力を回復したようである

「大丈夫ですか？」

「暑くてもうムリ……………」

映司は倒れる。そして後藤も

「後藤さんありがとうございます。大丈夫ですか……………」

「ああ、大丈夫だ……………」

後藤も倒れる

「「だっ、大丈夫ですか!？」」

ヴィヴィオとミウラが同時に言う。そして2人は立ち上がりベンチに腰掛ける

「大丈夫だよ。それよりあの娘は？」

映司はミウラの存在に気がつく

「あの娘はミウラさん、ミウラ・リナルディさん。ザフィーラのところまで修行している娘です」

「そうなんだ」

そして映司はミウラに手を差し出す

「初めまして。俺は火野映司です。よろしくね」

「いいえ!こちらこそ!ミウラ・リナルディです!よろしく願います!」

彼女は上がりしようなため慌てたような物言いになってしまう

「そういえばさっきなにか話してたよね？ なにか約束でもしたの？」

笑顔で聞く映司にミウラが落ち着き答える

「い、いえ。実はミッドを持ってきたので、一緒に格闘の練習はどうかと誘っていたんです」

「そうなの？ だったら俺と後藤さんは見てるから練習してていいよ。いいですよね後藤さん？」

映司は半死状態で顔面にタオルを被っている後藤に聞いてみると、後藤は親指を立てOKの合図する

「いいってさ」

「わかりました。ありがとうございます！」

そして後藤は顔のタオルを下ろし、4人はジュースの蓋を空け、同時に一気に飲む

「」「」「プハァ。うまい！！」「」



数時間後の海岸。場所をベンチから移動して風通しのよい海岸へ移動しヴィヴィオとミウラはミッド打ちの練習をしているのを映司と後藤は見ていた

「それにしても凄いですね。ヴィヴィオちゃん達」

「そうだな。きっと将来は有望な格闘家か管理局の魔導師だな」

「それか、可愛くて綺麗なお嫁さんね」

「「え？」」

映司と後藤の会話に入ってくる。声に振り向くと。そこにいたのは私服でエプロン、そして買い物カゴを持ったバンクの姿があった

「こんにちは。映司さん、後藤さん」

「あれバンクさんどうしたんですか？こんな所で？」

映司はバンクがなぜいるかと聞くと、バンクはエプロンのポケットから1枚のチラシを出す。それを映司は読み上げる

「えーと、本日オープンより、30分のタイムセール実施中主婦の皆様さんお急ぎを」

読み終わるとバンクはバックの中身を見せる。中に入っていたのはタイムセールで安くなっている品物ばかりだった

「それでも私は主婦ですから」

バンクは誇らしげに言う。すると映司、後藤のゴリラカン、バンクがなにかに反応する

「これは……………」

「ヤミーですね。しかも近い。波長は青。という事はフ란のヤミーですね」

「行くぞ！」

「「はい！」」

そして3人は立ち上がりヤミーの元へ行こうとする

「ヴィヴィオちゃん！ミウラちゃん！ヤミーが出たんだ！ちょっと行ってくるね！！」

ヴィヴィオにヤミーが出たことを伝える

「わかりました！気をつけてください！」

ヴィヴィオはそう叫ぶと映司と後藤はヤミーの元へ急ぐ。だがバンクはヴィヴィオ達の前に行き、買い物カゴを置く

「これお願いね！」

「は、はい！！」

ヴィヴィオが返事するとバンクは急いで映司達の後を追う。そして誰もいなくなる。するとヴィヴィオとミウラは後ろから手を回され、薬を嗅がされ、気を失ってしまう



そして途中でヤミーの気配を感じたアंकとアインハルトと合流しヤミーが出たと思われる川辺へやって来る。そこには大量の魚の形をしたピラニアヤミーの群れがいた

「ざっと数えて400だな。映司、アインハルトさっさとメダルに両替してやれ」

アंकはメダルを取りだし映司にラトラータのメダル。アインハルトにはガタキリバのメダル2枚づつを渡す

「はい！いきますよティオ」

「ニャー！」

「武装形態！！」

アインハルトは自ずからのデバイスのティオを使い武装形態へとなる

「言われなくてもね」

そして映司とアインハルトはメダルをセットした後藤もセルメダルを
スロットしグランプアクセラレータを回転させる

「「変身！！！」」

『ライオン！トラ！チーター！ラッタ！ラーター！！ラトラーター
！！！！』

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガータ・ガタ・ガタキリバ！ガタ
キリバ！！デュアル！！』

『カポーン！！』

映司はオーズラトラータへ、アインハルトはヴィーズデュアルガタ
キリバへ、後藤はバースへ変身を完了する

「なら私も！」

バンクもグリードの姿へと変身する

「よし行こう！」

「おう！」

「「はい！！！」」

そしてヤミーを殲滅しに向かう

オーズはトラクローを展開し切り付けピラニアヤミーをメダルにしていく。バースもドリルアーム、カッターウィング、シヨベルアーム、キャタピラレッグを展開しヤミーを次々と倒していく。ヴィーゾはガタキリバの分身能力を活用しヤミーを倒すバンクも次々とヤミーを倒していき、全てのヤミーが倒し終える。だが、アंकは不思議に思った

「妙だ。呆気ないすぎる……。どういうことだ？」

「さすがアंक鋭いな。それにバンク。お前そちに付いたのか。面白い光景だな」

アंकは聞き覚えのある声に全員が振り向く。そこには距離をおきドルとフランがいた。しかも手には縄で縛られているヴィヴィオとミウラがいた

「ヴィヴィオちゃん！ミウラちゃん！」

「貴様等！」

オーズとバースは怒りを覚えた

「まあ、待って交換条件よ」

「交換条件？」

「そうだ。俺達はお前達の持っているポンドとバーツのコアが欲しい。だから金髪の餓鬼をポンドのコアともう片方をバーツのコアと交換だ。いいな？。言っておくが逆らえばこいつらを殺す。まずは変身を解除しろ」

ドルはヴィヴィオとミウラの首にナイフを当てるとヴィヴィオとミウラの目には涙が流れた

「待て！わかった！言う通にするよ」

そしてオーズ達は人の姿に戻る

「おい、映司どういふつもりだ！」

アंकは怒声を上げるが

「アंक！黙ってなさい」

「チツ……………」

バンクによって黙らせられる

「アंकお前の持っているポンドとパーツのコアをヴィーズの餓鬼に渡せ」

ドルはアインハルトを指名しメダルを持ってくるよう指示する。アंकもそれに従いメダルをアインハルトへ渡す

「よし。そのままメダルを持ってこい半分まで来たらまずは茶髪の餓鬼を離す。渡し終えたら金髪の餓鬼を離す。いいな？」

アインハルトは黙って頷く

「よし、持ってこい」

アインハルトは黙ってドルとフランへ持っていく。半分まで達するとミウラを離す。そしてアインハルトはドルの目の前へたどり着きドルへ合計7枚のメダルが渡ってしまう。と同時にヴィヴィオを離

すが

「悪いがヴィーズ、お前には死んでもらう！！」

ドルの爪がアインハルトを襲う。しかしバン！バン！と銃声が鳴り背後からドルを撃ち抜く。そしてドルから2枚のコアメダルが飛び出し、アंकは右手を飛ばしてそれをキャッチする

「こいつは儲けたな」

そしてドルは振り返るとそこにはボディスーツを着用し、胸にはギリシャ文字で12を表す文字のXIIが記入され、スナイパーライフルを持ち、右手にはベルトを巻きそのベルトの中央には缶がセツトされた奴がいた

「先輩方すみません。おっくれました」

「なんだ貴様はあ……………」

傷を負い怒り始めたドルが聞く

「私は、世界を愛し、運命を導くタロットの戦士。仮面ライダーアルカナただいま参上！」

カウント・ザ・メダルス31自販機と誘拐と運命のタロット戦士（後書き）

戦闘シーンは適当な気がします

満足していただけましたでしょうか？

新ライダーアルカナも加わり物語は更にヒートアップします
次回もお楽しみに

カウント・ザ・メダルス32カンと亜種ヤミーと燃える業火（前書き）

缶ジュースを飲む赤髪の少女、レイア。こちらを向き

「魔法少女リリカルなのはOOO」

Dカンを取りだしベルトへセットし横へ回す

「このあとすぐ!」

カウント・ザ・メダルス32カンと亜種ヤミーと燃える業火

「私は、世界を愛し、運命を導くタロットの戦士。仮面ライダーアルカナただいま参上!」

アルカナは手を差し出すようなポーズをする

「きまった」

アルカナはポーズがきまってジーンときていた。そして手に持っていたライフルは消滅する

「あれがアルカナ……」

「後藤さん、知ってるんですか」

「ああ、現在管理局で開発が進められているメダルシステムを使用したバリアジャケット。仮面ライダーアルカナ……」

後藤は一応資料で見たためどのような存在かは知っていた。それを映司に話す

「後藤先輩!これ!」

アルカナは持ってきていたケースを後藤へ投げ、後藤はそれをキャッチし蓋を空けるとそこにはセルメダルが大量に入っていた

「使ってください!」

「ふっ、ありがたかつかせてもらう!」

後藤は再びバーストライバーを腰に巻きセルメダルをスロットしグ

ラップアクセラレータを回しバースへと変身する

『カポーン！』

バースとアルカナは同時にドルとフランに戦いを仕掛ける

「よし！だったら俺達も！アंकメダル！」

映司は先程とは違うメダルをアंकに要求するとバンクが映司の肩に触れる

「待ってください、映司さん。これをどうぞ」

バンクは映司にメダルを渡す。ウォン達のアジトから逃げるときに奪っていったクモのコアメダルだ

「いいんですか？」

「はい、つかってください。アंकわかってるわね？」

「ああ、あたりまえだ！」

返事をするアंकは映司に先程ドルから飛び出した、カブトとトンボのメダルを投げ渡す

「これ？なるほどそういうことね」

映司は腰にオーズドライバーを巻きカブト、トンボ、クモのコアメダルをセットする。そして武装形態のアインハルトもヴィーゾドライバーを腰に巻き、クワガタ、カマキリ、バッタのメダルを2枚ずつセットしお互いはスキャンする

「変身！！」

『カブト！トンボ！クモ！カーブ・カブ・カブトンモ！！カブトンモ！！』

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガータ・ガタ・ガタキリバ！ガタキリバ！！！デュアル！！』

オーズはドルのコアメダルでカブトンモへ、ヴィーズはウヴァのコアで再びデュアルガタキリバへ変身しドル達と戦いを始める



バースとアルカナはフランと戦っていた

バースはクレーン&ドリルアームでフランを攻撃するが、それを水をぶつけ流す。アルカナは左手首に装備されたカンドロイドとセルメダルをセットするディスプレイパネル、アルカナトランサーにセルメダルを16枚をスロットしDと書かれた缶、Dカンをアルカナトランサーにセットする

『セルチャージ・NO、XVI・カン・ランス！！』

すると電子音の発音の終了と同時にセットしたDカンが飛び出し槍の形となりアルカナはそれを手に取り走り出す

「おおおおりゃああああ！！」

そして背後からフランを突き刺す

「きゃあ！？」

そしてフランは吹き飛ばされサメとエイのコアメダルを落としそれ

をささつとアルカナは拾い、再びDカンを取り出し続いて7枚のセルメダルをスロットさせると両手にキャノン砲が出現する

『セルチャージ・NO、?11・カン・チャリオット!!』

「いきますよ!後藤先輩!」

「ああ!」

バースはセルメダルをスロットし、ブレストキャノンを出現させ続いてセルメダルを2枚を連続でスロットする

『ブレストキャノン!セルバースト!!』

アルカナもベルトの中央のDカンを取り外し右側のカンスロットヘスロットする

『カンバースト!!』

そしてバースとアルカナは必殺技をフランに叩き込む

「「シュート!!」」

フランはバースとアルカナの赤い閃光に包まれそうになると、フランは水の柱を出現させ攻撃力を下げるが下げただけで攻撃は通ってしまう

「きゃあああああああ!!」



オーズとヴィーズもドルと戦闘を行っていた

ドルの怒涛の一撃をオーズはトンボトンファーで防御しカブトヘッドの角で押し返す

「セイヤー!!」

「うお!？」

ドルは押し返され、着地すると同時にオーズ目掛けと飛び掛かるとヴィーズがカマキリソードを構える切り付ける

「はっ!!」

「ぐあ!」

ドルは吹き飛ばされ転がる

「映司さん。きめましょう!」

「うん!」

お互いはそれぞれのメダルをオースキャナーとヴィースキャナーでスキャンする

『『スキャンングチャージ!!!』』

そしてオーズとヴィーズは飛び上がり、単体でのカブトンモキックとガタキリバキックを放つが少しズレて当たる

「ぐああ!!」



オーズ達の必殺技を最小限で留めたドルとフラン。フランはドルの

肩を担ぐ。ライダー達も横一列に並んで構える

「しぶといな。次こそとどめだ！」

バースはバースバスターを構える。すると巨大なクモのヤミーが出現する。だがクモだけではない

「やっと来たか。俺とフランのヤミーが」

そう、このヤミーはドルがフランにセルメダルを投げ込み作ったヤミー。良く見るとエイの鋭いと尾と背に硬い甲羅を背負っている。すなわちエイグモヤミーだ

「あなたはあいつらの相手をして！」

フランが指示を出すとフランは水柱でドルとフランを包み逃走する。それと同時にエイグモヤミーはオーズ達を襲い掛かる

「キシヤアアアアアアア！！！」

右手の鋭いエイの尾でオーズ達を突き刺そうとするエイグモヤミー。バースはバースバスターでダメージを与えようと応戦するがその攻撃の一切を受け付けない

ヴィーズもガタキリバの分身で応戦するが次々と分身は倒されていく

「くっ、強すぎる。だが諦めない！うっ！？」

オーズはそう言うと、オーズの体から紫の光を放ち3枚のメダルが飛び出しベルトへ収納され、スキャンする

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プツ・トツ・ティラーノ・ザウルス！！』

オーズはプトティラコンボへと姿を変え、メダガブリューを地面から抜き出す。するとバンクがオーズに並ぶように立つ

「私も負けていけないわね」

バンクはそう言うと、ルーヴィーズドライバーを出現させ、ルーレツダーを回転させる

「変身！！」

『メダルルーレット！タカ！クジャク！コンドル！カラス！ペンギン！インフェルノ！！！！』

バンクはルーヴィーズの最強の姿、インフェルノフォームへと姿を変え、メダグレンバーの切っ先をエイグモヤミーへ向ける

「行きますよ……………」

カウント・ザ・メダルス32カンと亜種ヤミーと燃える業火（後書き）

今日実はビックリなことがありました！

活動報告の方に書きましたので意見ください！

カウント・ザ・メダルス33甲羅とベンダーと騎士団長からの伝言（前書き）

佇むオーズプトティラコンボ

「魔法少女リリカルなのは○○○」

するといきなり地面に腕を突っ込み、メダガブリューを取り出し、
メダガブリューを高く上げ咆哮する

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス33甲羅とベンダーと騎士団長からの伝言

深紅の焰に身を包むルーヴィーズインフェルノフォーム。なぜ彼女がアंकのメダルを持っているのかというと、エイグモヤミーの出現した直後に遡る

「アंक！貴方のメダルを貸して！」

バンクはアंकのタカ、クジャク、コンドルのメダルを要求する

「はぁ！？ふざけんな！！誰がお前なんか……」

アंकは嫌そうな顔をしてそっぽを向く。するとブチッという音と共に鬼が現れる

「アंक！貴方お姉ちゃんの言うこと聞けないの！？」

バンクの綺麗な赤い髪がゆらゆらと揺れ背後には炎がメラメラと燃えるようにアंकには見え、さらにバンクの怒鳴り声が響き、アंकはそれにびくつきメダルを渡してしまう

「たく、貸すただぞ……」

「ええ、わかっている」

そして今の現状へいたる

「キシヤアアアアアア！」

エイグモヤミーは咆哮すると同時に巨大なエイの尾でオーズ達を串

刺しにしかかる。オーズやバースやヴィーズ、ルーヴィーズ、アルカナはそれに応戦しエイグモヤミーを攻撃するが腕の甲羅で弾かれる

「硬い。あの甲羅をなんとかしないと」

膝をつき策をねるバース

「そうだ！こんな時のための……。あつた！」

するとアルカナはある2つのカンドロイドを取り出す

「映司さん！これを受け取ってください！」

アルカナはそのカンドロイドを映司に投げ渡す

「これは！？」

「それはNEWトリケラカンとNEWプテラカンです！それを開けてライドベンダーに！」

そしてオーズはアルカナの指示に従い、蓋を開ける。するとトリケラカンは巨大化してアングの乗ってきたライドベンダーと合体し2本の角とトリケラトプスの頭を持ったマシンへと変化する

「これは！？」

「それはトリケライドベンダー。プティラコンボ専用マシンです！さあ、どうぞ！」

「わかった！ありがとう！」

オーズはアルカナに礼を言うトリケライドベンダーにまたがりエンジンをかける。するとトリケライドベンダーはまるで火に油を注いだように動き出す

「よし！行くぞ！！」

オーズはハンドルを回して進みだし、坂をつかってエイグモヤミーに突っ込む

「セイヤー！！」

エイグモヤミーは腕でその攻撃を防御し跳ね返す。だがエイグモヤミーの両腕の甲羅に罅が入る。つまりトリケライドベンダーの角はそれ程の強度を持った代物という事になる。そしてバースはチャンスと悟りバースバスターのポッド、セルバレット外し銃口にセットする

『セルバースト！！！！』

そしてバースは必殺技、セルバーストをエイグモヤミーの罅が入った甲羅に向けて放つ。さらにヴィーズもそれに続いて高く飛び上がり、カマキリソードを展開。メダルをスキャンする

『スキヤニングチャージ！！！！』

ヴィーズもデュアルガタキリバの必殺技、深緑断罪拳を放つ

「はああああああ！！！！」

2人の技が炸裂し、腕のエイの甲羅と尾を破壊する。さらにアルカナはエイグモヤミーを後ろから狙っていた。カン・チャリオットのエネルギーをマックスにして

「食らいな！カン・チャリオットフルチャージバースト！！」
『カンバースト！！！！』

そして背中から撃ち抜かれたエイグモヤミーの背中の中も破壊される。さらにオーズはトリケライドベンダーからNEWトリケラカンを外し、NEWプテラカンの蓋を空ける。するとNEWプテラカンは頭、翼を2つ、尾の4つのパーツに分裂しライドベンダーに装着され、プテライドベンダーとなり、オーズを乗せたプテライドベンダーは高く空へ飛ぶ。バンクも同じように紅蓮の炎の翼を広げ高く飛びオーズと並ぶ

「バンクさん、きめましょう！」
「ええ！」

そしてオーズはメダガブリューにセルメダルを食わせ、バンクはメダグレンバーにセルメダルを入れルーレッダーでスキャンする

『ゴックン！！！！』
『チェックメイト・スキヤニングチェージ！！！！』

そして一気にオーズとルーヴィーズは急降下し、必殺技、オーズのグランド・オブ・レイジルーヴィーズは炎をメダグレンバーに強力な炎を纏わせる奥義、落花炎月覇でエイグモヤミーを切り裂く。そしてエイグモヤミーは爆発し大量のセルメダルへとなる。そしてバースはセルメダルを回収し全員変身を解除する。安全な場所に隠れていたヴィヴィオとミウラも姿を表し変身を解除したアルカナ、レイアの元へ向かう

「「あの……………」」
「ん、なに？」
「「助けていただきありがとうございます！ありがとうございました！！」」

ヴィヴィオとミウラは深々と頭を下げる。レイアは微笑み2人の頭を撫でながら言う

「うん、助かってよかった、よかった。怪我はない？」

「はい！」

「大丈夫です！」

「そ、なら安心」

レイアは言葉通りに安心していると映司が声をかける

「ありがとうございます。え〜と……」

「レイアです。レイア・ミツシュ・メルファ三等空尉です。一応管理局の人間です」

「そうなんだ。でも助けてくれてありがとう。君がいなかったら俺達やられてました。けどなんで君がカンドロイドを……」

レイアは突然映司の鼻の先に人差し指をあて黙らせると、次は妖艶な笑みを浮かべ自分の鼻先に人差し指をあてる

「それは後ほど。実は映司先輩とアंक先輩。貴方方に伝言があります」

「伝言？」

「はい、今日の15時頃に聖王教会へ行ってください。騎士カリム達が待っているそうです」

そしてこれによりこの先の戦いの通過点と結末を知るかもしれない予言を聞く事になる

カウント・ザ・メダルス33甲羅とベンダーと騎士団長からの伝言（後書き）

実は現在物語が進むにつれ決め台詞を考えています。これは一応サンプルのつもりです

オーズ「3つの欲望を重ね。破壊者を守護者に変える者。仮面ライダーオーズ！」

バース「欲望を制御し、その力を解放する者。仮面ライダーバース！」

ヴィーズ「6つの力を身にまとい、悪を砕くこの霸王の鉄拳。仮面ライダーヴィーズ」

ルーヴィーズ「深淵の業火に身を包み、愛の力で世界を守る。仮面ライダールーヴィーズ」

アルカナ「世界を愛し、運命を導くタロット戦士。仮面ライダーアルカナ」

タイラント「全てのコアそろいし時、人の欲望が暴君の姿を刻み込む。仮面ライダータイラント」

以上です。いけんがあればお願いします
では失礼します

カウント・ザ・メダルス34聖王教会再びと予言と交わりし欲望の王（前書き）

ライドベンダーで走行する。オーズ

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

坂から飛び降り目の前で着地する

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス34 聖王教会再びと予言と交わりし欲望の王

魔法少女リリカルなのは○○○今までの6つの出来事

1つテレジアに対するセントの怒りにより、映は釈放される

2つ釈放された映司を迎えに行った、チンク達の目の前にドルとフランが出現しそれを襲われていたチンクをオーズは助ける

3つ浜辺には打ち上げられたバンクはウォンの所で起きた出来事をアंक達にはなす

4つなんとバンクとセントは結婚していた事を映司達は知る

5つヴィヴィオ達とのトレーニングのさなか、ヤミーがとドル、フランが出現しヴィヴィオとミウラは人質取られ、ポンドとバーツのコアメダルを要求する

6つそして新たなライダー、アルカナに救われ、ヤミーを殲滅し新たな武装を手にするが、黄色と灰色のコアメダルは奪われてしまう

15時頃

映司とアंकはレイアの伝言で現在聖王教会の前にいた。するとふたりのシスターがやって来

「こんにちは、久しぶり映司さん」

「セインも久しぶり。元気だった？」

「うん、元気も元気ハツラツって感じだよ」

「そう。で、その娘は？」

映司はセインの横にいる小さなシスターに目を向ける

「あー、そういえばシャンテとは初めてだったね。ほら、自己紹介して」

「はい！。シャンテ・アピニオンです！よろしく！」

シャンテはハイテンションで自己紹介する

「シャンテちゃんだね。俺は火野映司。よろしくね。そうだアंक
お前も自己紹介しろって」

映司はアंकにも自己紹介をするように言うがアंकは「知るか！」
と言ってそっぽを向く

「まあ、とりあえず教会の中を案内するよ。ついて来て。騎士カリ
ムとシスターシャツハが待っているから」

「わかった。よろしくね」

「うん、ちゃんとして来てね」

そしてセインとシャンテは映司とアंकを案内する。その間セイン
とシャンテはオーズとしての戦いの歴史を映司に聞いたとか聞か
なかったとか

そしてプレートに会議室と書かれた扉の前に着き、セインはノック
する

「騎士カリム、シスターシャツハ。火野映司様とアंक様をお連れ
しました」

セインは少し大きめの声で言う

「はい。どうぞ」

扉の向こうの返事を確認するとセインは扉を開け、映司とアंकは
中へ入っていく。すると金髪の女性とシスター服のショートで赤紫
の髪の女性が歩み寄ってくる

「お待ちしております。私は聖王教会騎士団長、カリム・グラシアです。噂はかねがね聞いています。でっ、こっちは」

「初めまして。聖王教会修道騎士、シスターシャツハです」

カリムとシャツハは自己紹介をし、シャツハは軽く礼をする

「初めまして、火野映司です。よろしくお願いします」

映司は手を差し出す

「いえ、こちらこそよろしくお願いします」

カリムはその手を握る。そして映司はアंकにもう一度自己紹介するように言う

「アंक、ほら自己紹介して」

「知らん……」

アंकは腕を組みそれ以上話そうとはしない。すると映司はアंकの耳元である言葉をつぶやく。その内容とは、「ちゃんと自己紹介しないと、バンクさんに言い付けるぞ」だった。聖王教会に来る前にバンクから「アंकの事でなにか困った時があったら私の名前をだしてみなさい。だけどほどほどにね」と言われたのでやってみると、アंकの表情が一変し自己紹介を始めた

「グリードのアंकだ……」

汗だくの右手でシャツハに差し出す

「こちらこそご丁寧に。大丈夫ですか？」

なぜシャツハがこういうかと言うとアंकの手が震えていたからだ。それ程にバンクの影響力は大きいと言うことになる

「だ、大丈夫だ。気にするな………」

「はぁ………」

シャツハは本当に大丈夫？かとマジで心配していた

「立ち話もなんですし、お茶でもいかがですか？」

「ありがとうございます」

「はい、シャツハ案内してあげて」

「かしこまりました。騎士カリム」

映司とアंकはシャツハに案内され、会議室の椅子に座り、カリムは映司達の正面に座り、シャツハは映司達のカップに紅茶を注ぐ

「あ、ありがとうございます」

「いえ」

シャツハは映司に笑顔で返すとポットを置きカリムの後ろに立つ。

そして映司が一口紅茶を口にする

「あ、これおいしいですね」

「でしょ？私この紅茶好きなの」

「そうなんですか？俺もいろいろなところ旅していろんなところでごちそうしてもらいましたけど、こんなにおいしいのは初めてです。きつと茶番だけじゃなく、シャツハさんの入れかたが上手なんですね」

「い、いえそんな滅相もないない!!」

シャツハは褒められて頬を赤くし言う

「だとしてもよかったじゃない。シャツハ」

「は、はい……………」

カリムはシャツハに微笑んで言う。カリムも紅茶を口にしカップと置くと真剣な表情になる

「火野さん、アंकさん。実は私が貴方方をお呼びした理由を言います」

「はい」

「それは私が持っている能力に関係があります」

「能力？」

「はい、私の能力プロフェンティ・シュリフティン。古代ベルカ語で暗号文形式で記された予言です」

「予言ですか？」

カリムは黙って頷く

「ええ。当たる確率は低いのです。まあ、よく当たる占い程度に考えておいてください」

「はあ……………」

「そして最近文章によくある言葉があります。欲望の王と……………」

カリムは一枚の紙を取り出しそれを読み上げる

「『虫の王、海の女王、犬の王、げっ歯の王が交わりし時、交わりし欲望の王が誕生する。その王は3度の下僕を生み出す。さらに別

の世界の欲望の王、意志をつぐ戦士、正義を貫く霸王、愛の炎を身に宿す鳥、運命を導く戦士がそれを交わりし欲望の王の企みを打ち砕く。3度目の企み打ち砕きし時、人の暴君と橙の爬虫の女王、悪の欲望が現れ、交わりし欲望の王を死にいたらしめ、欲望の王は幻の獣の力と記憶に刻まれた破壊する炎の魔神のピースを暴君は手中に納める。それを糧とし2つ目の人の欲望が完成する。そして爬虫の女王の裏切りにより、人の暴君は死に爬虫の女王が暴君の名を受け継ぐ。後に爬虫の女王の言葉により、かつての封印の地に向かう欲望の王達。そしてその場にて爬虫の女王、悪の王が姿を現し幻獣の王、愛の炎を身に宿す鳥は落命する。これにより3つ目の人の欲望が完成する。欲望の王達は立ち向かうが、完成した暴君に薙ぎ倒され、欲望の王は悪の王の手によりさらわれ。そしてまだ見ぬ仮面の戦士により悪の欲望を打ち砕く。そして友の元へ駆け付けた欲望の王は暴君と化した爬虫の女王へ決闘を仕掛ける。だが、欲望の王は暴君の力により平伏せられる。そして暴君は魔神の力を使い欲望を増幅させ暴走し破壊の限りを尽くす。だが運命を導く戦士の導きにより欲望の王と正義を貫く霸王が交わりし時、全ての欲望をひとつにまとめ、暴君は地へ帰るであろう』と……………」

それを黙って息を吞んで映司は聞いていた

「なるほどな、つまり欲望の王はオーズ、映司。意志をつぐ戦士はバース、後藤。正義を貫く霸王はヴィーズ、アインハルト。愛の炎を身に宿す鳥はルーヴィーズ、バンク。運命を導く戦士はアルカナ、レイアと言ったところだろ。おそらく、人の暴君はウォン、爬虫の女王は以前映司遭遇したユーロ、悪の欲望はショッカーグリードだろうな」

アंकはあの長文から5人の戦士の名前を上げ、さらに敵の名前も上げる

「それに数ヶ所わからん部分があるな」

アंकは予言の内容を考える

「現在、ミッドチルダ全域に管理局はメダルを使ったシステムをセッティングしています。現在は後藤さんの協力でライドベンドーを量産しています。そして現在もカンドロイドの生産をセントさんと一緒に考えています」

「あー……………」

映司はなぜこちらの世界にメダルシステムがあるのかわからなかったがこれによりそれが解消された。そしてカリムは映司にひとつの問い掛けをする

「最後に質問です」

「はい」

「これから我々に協力していただけますか？」

「はい、俺は手を伸ばせるところはうんと伸ばして、最後までになんがあるうと諦めません」

「俺は理由はどうあれ、映司がやるならなんでもするつもりだ」

カリムはこの時核心した。彼らこの世界を救う存在になれる。と

「わかりました。ありがとうございます。さっ、お茶が冷めてしまわないうちにどうぞ」

「はい。いただきます」

その後映司達はカリムと楽しくお茶会をした
一方ドルとフランは……………



現在は夜、そして廃墟ビルの中。そこには重傷を負ったドルとフランがいた

「はあはあ……」

「ドル。貴方大丈夫なの？」

壊れかけている机の上に座り、肩を掴んでいるドルの身を案じるフラン

「なんとかな。それよりあいつらのコアはあるか？」

「ええ、7枚取り返したわ」

「そうか」

「で、これからどうするの？セルメダルは足りないからポンドとバーツは復活できないわ」

その通りである。実際ドルとフランが作ったヤミーのセルメダルはオーズや管理局が回収した。復活の為のセルが不足している

「ああ、だがいい案を思いついた」

「案、どんな？」

ドルの言葉にフランは聞き返す

「現在の俺達はかなり不利な状態に立たされている。この状態でウオンに攻め込まれれば、一瞬で終わるそのためには俺達4人がひとつの存在になればいい。と思う」

「ひとつの存在って………」

「俺がお前全員のコアを吸収する」

「え？」

ドルの言葉に驚きを覚えるフラン

「それが嫌なら、お前が俺達全員のコアを吸収する。それしか手はない。そんな気がする。だから……」

「わかったわ。しばらく、私とポンド、パーツのコアは預けるわ」

「いいのか？」

「ええ、そのかわり、ちゃんと生き残ってね」

「約束する」

するとフランの姿はバラバラとなりセルメダルとコアメダルとなる

「約束する。フラン、ポンド、パーツ！！絶対生き残る！！」

そしてドルはフラン、ポンド、パーツのコア全てを取り込む。するとドルの姿が変貌する。それはまるでキメラと言っているいいものだった

「これは！？力がみなぎる！！フラン、ポンド、パーツお前達の力使わせてもらうぞ！！ウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

そしてドルは咆哮を上げる。そしてこれがカリムの予言に出ていた、交わりし欲望の王であった

カウント・ザ・メダルス34聖王教会再びと予言と交わりし欲望の王（後書き）

どうも皆さん、永遠の仮面戦士です

実は私は思っていたのです。私の小説の文章力でキャラクターの見た目がイメージ出来るかどうかと……

そこで私は思いました。みてみんなページを持っているのだからキャラクターをアップしようと。ということなのでどんなキャラクターか知りたい人は教えてください。書きますので

それではさらば!!

カウント・ザ・メダルス35海と温泉と悪望（前書き）

波打つ崖の上にアルカナが背を向ける

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

そしてこっちを向き両手を広げたポーズをする

「このあとすぐ!!!」

カウント・ザ・メダルス35海と温泉と悪望

映司とアंकがカリムから予言を聞かされてから数週間がたち……
そして今映司達は、目の前には白い砂浜。清んだ青い水。所々に出
店が出ている。そうつまりその場所は

「「海だあああああ!!」「」」

ヴィヴィオ、リオ、コロナは嬉しい悲鳴を上げて梅へダイブする。
アインハルトもヴィヴィオを追う。浜辺にはパーカーを着た映司と
アंक。水着姿のギンガ、ノーヴェ、チンク、ウエンディ、ディエ
チのナカジマ家の人達と、ノーヴェの友人、ミヤカ・シエベルが海
にギンガが当たった『13名様ご招待2泊3日の温泉旅行』に来てい
た。つまり映司達はお呼ばれという事になる。ちなみにスバルとゲ
ンヤは「ごめん。実はその日訓練合宿が入ってるんだ。私の変わり
にヴィヴィオや映司さん達誘って」とスバル。「その日大事な会議
があるからお前達で行ってこい」とゲンヤ。という事でこの2人は
来ていない

「子供達は元気があっていいね」

「そうですね」

ヴィヴィオ達を見て映司とレイアが呟く。その頃後ろの方では

「それにしても私がいてよかったのか？家族の旅行では？」

「問題ないだろ？それを言うなら家の姉がひとりいないし、それに
くさんいたほうが楽しいし。な？」

「……………済まない」

ミヤカはクスツと笑い言う。そんなノーヴェとミヤカの会話だった

「で、なにやるっスか？」

「そうだね……。ビーチバレーなんていいんじゃない？ みんなで
さ」

ウィンディの問いにディエチが答える

「いいではないか。よし姉もまぜてくれ」

「楽しそうね。私もまぜてもらおうかしら」

「よし、じゃ私も。ミヤカちゃんはどうする？」

「たまにはいいかもな、私も参加させてもらう」

「へえ、面白そうだね。俺もやっていいかな？ アンクどうする？」

「フン、知るか」

チンク、ギンガ、ノーヴェ、ミヤカ、映司、アンの順番で言う。

アンクはそう言うのと、映司が稼いだバイト代でアイスを買に行く

「行っちゃった……。レイアさんはどうします？」

映司は次にレイアに聞いてみる

「そうですね。いいですよ。映司先輩勝負としゃれこみましょう
！」

「はい、やるからには負けませんよ！」

密かに燃える映司とレイアだった。するとヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナがやって来て、ヴィヴィオはノーヴェに話し掛ける

「どうしたんですか？ なにかやるんですか？」

「ああ、今からビーチバレーで対戦しようと思ってたんだよ。そう
だお前達もやるか？」

「いいんですか？」

「おう。メンバーが9人でどう分ければいいか困ってたんだよ。だ
からどうだ？」

「「「はい、お願いします！！」「」」」

ヴィヴィオ達は頭を下げて言う

「よし！ じゃ、チーム分けだな。ちょっと待っててくれ」

ノーヴェはチームを決めるべく、映司達と相談した。その結果、A
チームは映司、アインハルト、コロナ、ギンガ、ノーヴェ、ウエン
ディ。Bチームはヴィヴィオ、チンク、ディエチ、リオ、ミヤカ、
レイアのチーム分けとなった。そして試合は始まる

「よし行くっスよ。えい！」

ウエンディのサーブがチンク目掛けて落ちてくる

「任せろ！ ディエチ！」

チンクはアンダーでボールを打ち上げ、ディエチに渡す

「レイアさん！」

ディエチはレイアにトスでボールを上げる。レイアはジャンプして
アタックを放つ

「OK! くらえ! レイアスペシャル!」

勢いよくレイアのアタックが映司へ向かう。そして映司はそれを打ち上げノーヴェへ繋げる

「ノーヴェ!」

「おう!」

高く上がったボールをノーヴェは飛び、ボールをたたき付けるがごとく放つ。ボールは誰も上げる事が出来ず、砂浜のフィールドに穴を空ける。これで1対0。続いてAチーム、再びウエンディのサーブ

「おりゃっス!」

ウエンディのサーブはリオに向かって落ちていく。リオはそのボールをトスで上げる

「あわわ! ヴィヴィオさん!」

慌てながらもリオはヴィヴィオにそのボールを上げる

「はい! ミヤカさん!」

ヴィヴィオもミヤカにトスでボールを上げる

「はあ!!」

ミヤカは高く飛びノーヴェ目掛けてアタックを打ち込む。ノーヴェはミヤカのアタックをアンダーを受け止めるがボールがズレてラインの外へ飛び出す。つまりはワンタッチ。Bチームに得点を許して

しまう

「ふふ、なかなかやるねミヤカちゃん」

ノーヴェの友としての言葉

「ナカジマちゃんもねばるね。流石私の友だ」

「ありがとう。だけど……」

「ああ、試合は始まったばかりだ!!」

そしてビーチバレーは終了した

結果は34対36とマッチポイント、21点と、というとんでもない試合となり、Bチームの勝利で幕は下りた



それから数時間後、だいたい6時頃。夕日の差し込む男湯、つまり温泉である。形式は露天風呂で岩作りの雰囲気は映司の心を日本に思わせた

「はぁ〜ごくらくごくらく♪」

「お前はじじいか？」

映司は温泉に浸かりながらマツタリとした事を言った映司にツッコミを入れるアंक。アंकは浴衣姿で手には豆乳ソフトを持っており湯には浸からず、木製のベンチに腰掛けている

「いいじゃない。たまにはこういうのも」

「はっ、知るか」

アंकはそう吐き捨てるソフトクリームをカブリつく

「そう言っているけどアंक。そんなにアイス食べてると身体に悪いし、夕食食べれなくなるよ？」

「別にいらん」

「デザートには古代ベルカスペシャルアイスだってさ俺のもあげようと思ってたにな」

映司そういうとアंकは約20秒間硬直する

「映司。その話本当だろうな？」

「う、うん。『完食後のメニュー』だってパンフレットに出てたよ」「しかたない。晩飯も食ってやるか。映司、さっきの約束忘れるなよ」

「わかってるって」

男湯での映司とアंकの会話だった

一方女湯

「「「いや、ごくらくごくらく」」」」

ノーヴェ以外のナカジマ4姉妹が映司と同じ事を言っていた。その頃レイアはお盆に浮いた熱燗の酒をぐいっと呑んでいた。年齢は21なので問題は無い。ヴィヴィオ達子供はサウナに行っている

「ぷはぁ、うまい。ギンガさんもいかがですか？」

「そうね少し頂こうかしら？」

「あいよっと」

レイアはグラスすれすれに酒を入れギンガへ渡し、乾杯をして飲み

交わす

「うまい！」

「おいしい！」

2人の声が重なる。チンク、ディエチ、ウエンディ達はその頃マツタリと会話をしていた

「いやー、いい湯スねー」

「まったく。本当にいい」

「そうだなー」

ウエンディ、ディエチ、チンクの順番で言う。ディエチはあることに気がつく

「そういえばノーヴェとミヤカさんは？」

実はこの場にはノーヴェとミヤカはいない

「ああ、あの2人なら後からくるっ言ってたっスよ」

「恐らく、友人同士、水入らずで裸の付き合いをしたいのだろ」

「ふーん、まあ、仲いいからね。あの2人」

3人はマツタリとした口調で言った



たくさんの部屋に内『ナカジマ家御一行様』と張り紙のしてある3部屋のひとつの畳の部屋。そこはギンガ、ノーヴェ、チンク、ディエチ、ウエンディ、そしてミヤカの部屋である。そして暗い部屋の

中心にひとりの少女が正座を精神統一していた。ミヤカだ。ノーヴェは土産を買いに行っていていない。静にただただ静に黙って正座をしているだけだった。すると不自然に窓が開く

「?」

ミヤカは黙って剣を構える。だがなにもない、誰もいない。ミヤカが警戒を溶き構えを緩めると、ミヤカの額にメダルスロットが出現しセルメダルが投げ込まれる

「その悪望解放しろ」



温泉から上がった映司はアंकと一緒に土産を見ていた

「なにがいいかな?なのはさん達へのお土産」

「知るか」

映司が土産を選んでいると映司とアंकがなにかの気配を感じる。
ヤミーの気配だ

「映司。ヤミーだ」

「わかってる。行こう!」

「ああ」

そして2人はヤミーの元へ向かう。その道中の廊下でノーヴェと出会う

「どうした?そんな急いで?」

「大変だノーヴェ、ヤミーが出たんだ」

「マジか？わかった。私も手伝うぜ」

「ありがとう！」

そしてヤミーが出現した場所へたどり着く

「ここってノーヴェ達の部屋？」

「待てよ、たしか中にはミヤカが！」

「なんだって！？アंक！」

「ああ」

アंकはシャチ、クジャク、タコのメダルを渡す。そして変身せずに扉を開けて突入する。すると中にはミヤカが倒れていた

「ミヤカちゃん！！」

ノーヴェはミヤカに駆け寄る。回りには赤い羽が散らばっていて、しかも窓が空いている。映司はヤミーが外へ逃げたと思い変身する

「変身！！」

『シャチ！クジャク！タコ！』

映司はオーズシャジャタコンボとなり窓から飛び降りる

そして残されたノーヴェとアंक

「ミヤカちゃん！ミヤカちゃん！クソッ！どうすれば！」

ミヤカを大事な友を守ることの出来なかった自分を悔やむノーヴェ

「どけ……」

「え？」

アंकはノーヴェのその場を退けるように言うが、退けようとしな
いノーヴェにアंकは無理矢理ミヤカの首筋を見ようとする。そこ
には蛇のような痣があった。アंकにはその正体がわかったオレン
ジのコアを持つグリードの存在が

「この痣は、やはりあいつか……。あの蛇女が！」

だが映司はヤミーを見つける事が出来ず。戻って来るのもうし
ばらくしてから事だった

カウント・ザ・メダルス36検証と特性と後藤のターン（前書き）

噴水が舞い上がる公園に後藤が噴水に背を向け立つ

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

そしてバーストライバーを腰に巻きバースへ変身する

「変身!!」

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス36検証と特性と後藤のターン

温泉旅館のとある一室。そこには布団を敷き、それに寝ているミヤカ。ギンガ、チンクは持ってきた管理局の制服に着替え現場検証しウェンディとディエチは窓の外を検証している。ヴィヴィオ、ノーヴェ、リオ、コ罗纳はミヤカの看病をしている。アंकはヤミーを追いかけたオーズを追いかけて今はいないそして現場。現場には散らかされた赤い羽、そしてミヤカの首に出ている蛇の痣が手がかりとして捜査している

「この赤い羽って……。まさかアंकさんの!？」

「だけど、それにしても黄色過ぎないか？」

「そうね。そういわれてみれば……………」

ギンガが持っている羽は確かに黄色い。赤いというより、オレンジに近く着色されている

「一応これも証拠のひとつ。取っておきましょう」

「ああ」

チンクはポリ袋を取り出し、手袋をしてその羽を入れる

「他に荒らされた形跡は無いわね」

「そのようだな」

チンクは一通り部屋を見回す。すると映司とアंकが帰ってくる

「ただいま戻りました」

「お帰りなさい。ヤミーは？」

映司はただ黙って首を横に振る。つまり逃げられた。ということになる

「そうですか。ありがとうございます……………」

ギンガは軽く礼をする

「姉上、とりあえず、外にいる妹達を下がらせましょう。レイア殿がその羽の後を辿ってくれているのだから」

「そうね」

ギンガは外で検証しているウエンディとディエチに通信を繋ぎ2人を呼ぶ。その時、映司とアंकは

「アंकお前何か知っているんじゃないの？」

「ん？」

「いや、なんとなくそんな気がして……………」

「はっ、鋭いな。お前の中の紫のメダルが溶け込み始めたって証拠だな。ああ、知ってる。あのヤミーは誰のなのかな」

映司の予想どおりにアंकは逃げたヤミーの創造主を知っていた

「教えてくれないか？」

「仕方ないか。おい、お前等！」

アंकは大声を出し、ギンガとチンクを呼ぶ

「今から今回のヤミーのタイプを教えてやる。耳かっぽじってよく聞け」

ギンガとチンクは黙って頷く

「今回のヤミーを造ったのは間違いなくユーロの奴のだ」

「ユーロって、まさか……」

「ああ、お前が捕まる前に遭遇したって奴だ。奴の造るヤミーは人の悪望を糧とする」

「「悪望？」」

3人は『悪望』と聞き慣れない言葉を聞く

「悪望というのは、人間が捨てた欲望の事だ」

「人が捨て欲望？」

「ああ、お前にもあっただろう。ガキの頃、欲しかったり、やりたかったりすること。さらにはその人間の『悪』という行動をユーロのヤミーはそれを解放し親の身体には爬虫類の生物の痣がでる。しかもヤミーの親の意識を乗せた状態だ。ヤミーのすることは親も見ているし、感覚にもでる」

「それって！」

「ああ、かなりまずい。罪を犯した善人、必要の無い物や事を手に入れた人間はどうなるかわかるよなあ？」

3人は頷き、チンクが呟く

「つまり、絶望に落ちる」

「ああ、だからたちが悪いんだよあいつは……」

アंकは言い終えると、そばの座椅子にふんずりかえるように腰掛ける。それと同時にギンガが口を開く

「それだと、何故この羽が散らばっているのかよね」

ギンガは足元に落ちている羽を1枚拾う

「恐らくだが、ユーロはバンクのコア3枚を取り込んでいるんだろう」

「でもユーロはウォンに忠誠を誓っているのではないか？」

チンクがそう口にする

「多分あいつはウォンに忠誠は誓っていないだろ」

「え？でも……………」

映司がアंकにそう思うのか？聞こうとすると、アंकは鼻で笑い、カリムから聞いた予言の一文を読み上げる。映司達には聞こえない声で

「フツ、『爬虫の女王の裏切り』か」

「え？なんだって？」

映司が聞き返そうとすると、プルルと通信が鳴る。赤い羽の後を辿っていたレイアからだ。それをギンガがでる

「もしもし、ええ。ええ。なんですって!!」

連絡を受けたギンガはレイアからの報告で大声を上げる

「ギンガさんどうしたんですか！」

ギンガはそっと振り返り映司と目を合わせる

「ヤミーの目的がわかりました。狙いはミウラちゃんです……………」



その頃、ヤミーに意識を取り込まれたミヤカは心で願った。助けて。殺してくれ。死にたい。このような化け物に私が屈するなら、死んでしまいたい……………。と。そして、ヤミーの手には炎の球体状に溜められていく。そして民家に向けて投げようとする。その民家はミウラの家だ

（あの家は……………。まさか！やめろ！あの娘は、ミウラは関係ない！私の友に、ライバルに手を出すな！！頼む、誰か！助けて！！）

ミヤカの決死の願い。そしてヤミーの炎の弾を投げ飛ばそうとする。その瞬間。ヤミーは何者かに蹴り飛ばされる

「間に合ったか」

ヤミーを蹴り飛ばしたのは管理局の制服に右手にはバースバスターを持った男、後藤だ

ヤミーは即座に立ち上がる。それと同時に後藤はバースドライブを巻き、メダルをスロットし、グリップアクセラレータを回す

『カポーン！！』

後藤はバースへ変身しバースバスターの銃口をヤミーに向ける

「ここからは俺のターンだ！」

カウント・ザ・メダルス37頼れぬ支援と進化する誕生と友としての言葉(前書

噴水を背に佇むバース

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そしてハッピー・アーマードをセットしフォームチェンジする

「このあとすぐ!!!」

カウント・ザ・メダルス37頼れぬ支援と進化する誕生と友としての言葉

『ドリルアーム』

バースは右腕にドリルアームを装着してヤミー、ホウオウヘビヤミーと交戦中だ。ガン！ガン！と鈍い音を立てながらヤミーの身体からセルメダルが飛び散る。そしてとどめをさそうとするバースはドリルアームをしまい、ブレストキャノンを装着する

『ブレストキャノン』

そして次の瞬間。ブレストキャノンの砲門が切り裂かれる

「なに？」

バースはホウオウヘビヤミーの右手を見る。すると右手には刀が握られていた。ユーロの造るヤミーの最後の能力。それは親の特徴を引き継ぐ事ができる。そしてミヤカは居合の達人。天瞳流抜刀居合剣士だ。

つまりホウオウヘビヤミーはミヤカの使うことのできる奥義を全て使える。そしてホウオウヘビヤミーはバースを2度、3度と切り付ける。ミヤカの剣捌きで

「ぐあ！」

声を上げ吹き飛ぶバース。そしてやっと、ライドベンダーに乗ってレイアが駆け付ける

「後藤先輩！待っててください今から私も……………」

レイアはゴソゴソとアルカナドライバーを探すが……

「無い……。まさか!？」

そうそのまさかである。彼女は当時慌てていたため、大事なアルカナドライバーを忘れたのだ

「これだと、後藤先輩のサポート係りの私の役目が……。なにかないの!？」

レイアは再びあさるがなにも出ない。仕方なくライドベンダーをバイクモードから自販機モードへ戻してカンドロイドでもサポートしようとしたその時、レイアの眼にあるものが写る

「なに？ ハッピー・アーマード？ これだ!」

ハッピー・アーマードと書かれたカンドロイドがあった。そしてセルメダルを入れそのボタンを押すと、そのカンドロイドが出てくる

「お願い! 逆転のアイテムを!」

レイアは恐る恐る蓋を空ける。空けるが変形せずそのカンドロイドの中にはメモリーカードとケーブルに繋がれた小道具と紙が入っていた。その紙には『バースへ渡し、メモリーカードをスロットしろ』とだけ書いてある

「なんだかよくわからないけど。とりあえず!」

そしてレイアはバースへその小道具とメモリーカードを投げ渡す

「後藤先輩、これを!!」

バースはレイアの声に気づきそれをキャッチする

「そのメモリーカードをベルトにセットしてください!」

バースは頷くとそのメモリーカードをベルトへセットする。するとバースの頭に膨大なデータ量が流れる。その中にはその小道具、ハッピー・アーマードの使い方も記されてある。バースはそれを理解する

「なるほどな。そういうことか」

そしてハッピー・アーマードをベルトのカプセルオーブとスロット口にセットし、合計6枚のセルメダルをスロットしグラップアクセラレータを回す

『カポーン!! バース・ディ・インフォメーション・ハッピー・アーマード!!!!』

すると胸、両腕、両足、身体、背中のカプセルオーブからセルメダルカラーのアーマーが出現し出現した部所に装着される。これがバースのこの世界の新たな姿。仮面ライダーバース・ディ・アーマードだ。さらにバースはサソリの柄のセルメダルを合計10枚スロットし、その枚数と同じ数グラップアクセラレータを回す

『バース! チェンジ・スコーピオン!!』

するとバースの身体の色がサソリのコアメダルの色である。黒となり、右手のカプセルオーブから数々の部品が出現し槍の形となり、

体制を低くし槍、スコープオン・ジャベリンを構える

「行くぞ！」

バースは走りだし、ハウオウヘビヤミーと間合いを詰め、スコープオン・ジャベリンでヤミーを貫く！！

スコープオン・ジャベリンには特殊な能力がある。それはセルメダルへ毒を打ち込む。これはヤミーやグリードの構築しているセルメダルの構築のバランスを崩す事のできる。つまりこれを数打ち込まれると、ヤミーやグリードは身体を保つことのできなくなる。バースはそれを何度も打ち込む。2度、3度、4度、5度と容赦なくスコープオン・ジャベリンでハウオウヘビヤミーを貫く

そしてハウオウヘビヤミーの身体が黒に染まる。つまり身体中に毒が回りきった事を意味する。バースは、その隙をつきセルメダルを2枚スロットする

『セル・クライマックス！！』

バースは高く飛び、ハウオウヘビヤミー目掛けまっすぐと投げる！そしてスコープオン・ジャベリンはハウオウヘビヤミーを貫通させ、爆発しセルメダルへとバラける

それを見たバースはクレインアームでセルメダルを回収し、変形を解除し後藤へ戻ると、ハッピー・アーマードが壊れてしまう

「やはり、データどうり1度きりの使用か。毎回ベンダーから買わなくてはな」

後藤はそう呟く、ハッピー・アーマードは強力がいえ、1度使えば壊れてしまう。その為使用の為にはライドベンダーからセルメダルで買わなくてはいけない。そして戦いが終わった事でレイアが後藤へ駆け寄る

「後藤先輩！やりましたね！」

「ああ、だがお前に言いたい事がある」

「え……………」

レイアの表情が凍り付き、後藤は息を吸い込む

「ドライバーを忘れるとはどういうことだぁ!？」

「ひいひい!!」

今の後藤の表情は鬼のようだった。そのせいでレイアは逃げ出す

「コラ!! 待てレイア!!」

その後レイアは捕まり、後藤の長い説教を食らったそうだ



バースがヤミーを倒して数分後。ミヤカが寝ている部屋。ミヤカは目を覚まし頭を抑えゆっくりと起き上がる

「ここは？私は一体？」

それに看病していたノーヴェ達が気がつく

「ミヤカちゃん！」

「「「ミヤカさん!」」」

ノーヴェとヴィヴィオ達の声が重なる

「皆どうした血相変えて？」

いまいちミヤカは状況がわかっていなかった

「ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ悪いけど、ギン姉達にミヤカが起きた事伝え来てくれるか？」

「あ、はい」

「悪いな」

そして4人はギン達へミヤカが目を覚ました事を伝えに行く。そしてノーヴェはミヤカの横に胡座で座り首筋を見る。そこにはもう蛇の痣はなかった

「どうした？」

「いや、なんでもない」

ミヤカは少し落ち込んだ表情になる

「ナカジマちゃん、ひとつ聞いてくれないか？」

「いいよ」

ノーヴェは静かに答える

「夢の話なんだが。もしも、私が私の意識とは無関係に人を襲い、傷けつけ、死へ追い込んだ時、君は私をそれでも友と呼んでくれるか？」

ノーヴェはその言葉を聞くと鼻で笑いこう答えた

「当たり前だろ。ミヤカちゃんはなにがあろうと私のライバルであ

り友達だよ」

その言葉を聞いたミヤカはクスツと笑い感謝の言葉を述べる

「ありがとう」

「うるせえ……」

ノーヴェは顔を真っ赤て言う

「さ、まだ私達晩御飯まだだからさ、これから旅館の外へ食べに行くけど一緒に行こうぜ」

「ああ、お供させてもらうよ」

その後ノーヴェ達は外の居酒屋で盛り上がったとき。ついでに居酒屋に名前は『羽垂素出以』バフスデイだったとか



その頃、崖かひとりの少女が海を眺めていた。ユーロだ。手にはバシクから奪ったコアメダルが握られてある

「はあ、やられちゃったか。私のヤミー」

そう呟くとユーロはそのコアメダルを身体に取り込む

「まあ、いいや。今度は私も出なくちゃね。楽しみ、楽しみ〜と」

そしてユーロはオレンジの大きな布を被り姿を消す

カウント・ザ・メダルス38不良とアイスと血塗られた刃（前書き）

背中を合わせるバースとアルカナ。手にはバースバスターとX11
カン・ライフルを握る

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そして狙いをこっちに定めて放つ

「このあとすぐ!」

カウント・ザ・メダルス38不良とアイスと血塗られた刃

ミッドの中央都市、クラナガン。現在その街道を歩く男がいた。緑のジャケツト、青いベルト、灰色の靴、黄色いシャツのオールバックの男。ドルだ

（やはり、ここはいいな。欲望が渦巻いていて、ヤミーを造りやすい）

ドルは以前、黄色のコアメダルのポンド。灰色のコアメダルのバーツ。青のコアメダルのフランのメダル、合計14枚を取り込んでいる。だが暴走する危険性はない。なぜならばオーズが金枠のウヴァ達のコアメダルを使った後でドル達の銀枠のコアメダルを使えば、銀枠のコアメダルがそれを吸収し後遺症を完全にカットする事ができる。それを知っているドルだからこそこの姿になることをためらわずになることができるのだ

ドルは黙りながら街道をまっすぐと歩きつつ、ヤミーの親に相応しい人間を探していた

その時、ドンツと肩と肩がぶつかり合う

「あああ？」

ドルとぶつかったのは不良の少年だった。数は役5人いる

「おい、オッサン。なにぶつかっておいて挨拶も無しか？」

「……………」

不良の少年の言葉にドルは答えない

「おいおい。なんか言えよ」

不良の少年の仲間が言うがドルはだんまりを続ける

「ここじゃ、人目につく。裏の方で話しようか？」

不良の少年達はドルを囲むようにし、ビルの裏へ連れていく。だが、その空間からはバキッ！バコッ！などの鈍い音が響く

「この程度か？」

ドルは無傷だ。不良の少年達がボロボロの状態で倒れている

「助けてくれ……………」

ドルとぶつかった少年がはいずりながらドルのズボンの裾を掴む

「触るな」

ドルは足を払い、その少年の顔を蹴り飛ばす

「ぐあ！」

そしてドルは5人を見回す。ドルはニヤツと笑うと少年のひとりにセルメダルを投げ込む。すると1匹のヤミー、ヒョウザメヤミーが誕生する

「後は……………」

次にドルはぶつかった少年に目を向ける。そしてその少年にも

セルメダルを投げ込む。その少年の悲鳴が響いた

「ぎゃあああああああああ！！！！」



2泊3日の温泉旅行から帰ってきた映司はバイトの日々を過ごしていた

「いらっしやいませー。アイスクヤデーいかがですかー？」

季節は夏。アイスが恋しくなる季節だ。そして映司は公園で麦藁帽子を被りアイスクヤンデーを売っていた。アंकは近くのベンチで寝そべっている。するとひとりの少女が映司の売っているアイスを買いに来た

「4本くれないか？」

「はい、800円ね」

「おう。はい800円」

「まいどうも」

映司はその少女にアイスクヤンデーを4本渡す。すると映司とアंकがある気配を察知する。ヤミーの気配だ。ベンチで寝そべっていたアंकは起き上がり映司の元へ向かう

「映司、ヤミーだ。結構近いぞ」

「うん、いこう。あーでも……………」

映司はあるものに視線を向ける。アイスの入ったクーラーボックスだ

「これどうしよう………」

クーラーボックスを抱える映司。それを見ていた少女は

「オレ達がみててやろうか？」

「え、いいの？」

「ああ、困った時はお互い様っていうだろ？」

「ありがとう！」

「でも後で1本おごってくれよな」

「うん！わかった。ありがとう！」

そして映司とアंकはヤミーの元へ急いだ。映司達がいなくなると3人の不良の姿をした少女達が現れる

「どうしたんですかリーダー？」

「ん？いや、別になんもない。さ、張り切ってアイス売るぞ！！」

この少女こそ、インターミルドで第5位の称号を持った少女。ハリ・トライベツカだ



飛び出した映司とアंकはヤミーが出現したと思われる場所へたどり着く。どこかの廃工場だ

「映司気をつけろよ」

「アंकこそ」

お互いが背中合わせで周囲の気配を感じようとした。その瞬間、ヒョウザメヤミーが2人に襲い掛かる

2人はヤミーの攻撃を回避して、映司はベルトをセットしアंकはメダルを3枚投げて、映司はそれをキャッチしベルトに入れ、変身する

「変身!!」

『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!タ・ト・バ!
!!』

映司はオーズタトバコンボとなりヒョウザメヤミーをトラクローで攻撃する

「は!はあ!」

だがヒョウザメヤミーはそれを受け流し蹴りをしかける。その蹴りがオーズの腹部へ入る

「ぐあ!」

蹴られたオーズは少し距離をとりアंकにメダルを要求する

「アंक、メダル!ゴリラで!」

アंकは映司の指示に従いゴリラのメダルを渡す

『タカ!ゴリラ!バツタ!』

オーズはタカゴリバとなりゴリラバコンで殴り続ける。だがヒョウザメヤミーはそれも受け流す。するとヒョウザメヤミーにメダル状の弾丸が直撃する。バースバスターの弾丸、つまり後藤とレイアだ

「遅くなった。すまない！」

「ここからは私達もはりきります！」

そして後藤はバースドライブをレイアはアルカナドライブを腰に巻く。後藤はセルメダルをレイアはDカンを取り出しセットし、後藤はグリップアクセラレータを回し、レイアはセットしたDカン
を横へ倒す

「「変身！！」」

『カポーン！！』

『プシュッ！！』

後藤はバースへ、レイアはアルカナへ変身する。バースはメダルポッドをバースバスターへ装填し、それを連発しながら撃つ。アルカナもDカンとセルメダル12枚セットしカン・ライフルを出現させる

『セルチャージ・NO、X11・カン・ライフル』

アルカナは低くしゃがみライフルの昇順をヒョウザメヤミーに合わせ、バースはバースバスターを構えながらヒョウザメヤミーへ走りつつ接近する。そしてメダルが尽きるとバースはアルカナへ指示を出し、セルメダルを渡すよう指示をだす

「弾が切れた。レイア、セルメダルを！」

「了解！」

レイアはカン・ライフルに収納かのようなカン、Sカンを設定しバースへ向けて撃つ。バースの元へたどり着くと小さいパラシュートが開きバースの手元に下りてくる。バースはそれを手にとり蓋を開けると、中にはセルメダルが詰まっていた。バースはそのセルメダ

ルをメダルポッドに入れ、再びバースバスターを連写する。もちろんアルカナも狙撃する。だがヤミーはオーズ目掛けて攻撃する。だがはその隙にオーズはタトバコンボへ戻りメダルをスキャンする

『スキヤニングチャージ!!』

オーズの足がバツタのように変形し、そのバネを生かして飛び上がるとヤミーとオーズとの間に赤、黄、緑の円が出現しオーズは背中から赤い羽のようなが出現し、それを広げ、円をくぐり抜ける
バースもメダルポッドを銃口へセットし、狙いをヒョウザメヤミーへ定める

『セルバースト』

そして2人は同時に必殺技をヒョウザメヤミーへ向けて放つ!!

ヒョウザメヤミーはオーズとバースの必殺技を受けてセルメダルへとなる

オーズは戦いが終わった事で変身を解除する

「ふう、終わった。さてバイトに戻らないと。う!？」

突如、映司は背中に痛みを感じる。ブシャツと音とともに大量の血液が吹き出す。映司の後ろにはカマキリモグラヤミーがいた。手には刃を持ち、その刃には血が塗られていた。ベツタリと映司の血が

「火野!!」

「映司先輩!!」

「映司!!」

カウント・ザ・メダルス39恐竜の狂戦士再びと紫のコアメダルと未来の映像

アंकがタカ2枚、トラ2枚、バッタ2枚を投げる

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

それをアインハルトがキャッチしヴィーズデュアルタトバへと変身する

「変身!!」

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス39 恐竜の狂戦士再びと紫のコアメダルと未来の映像

ザンッ！

という音とともにアंक、バース、アルカナの断末魔が響く
映司の後ろにはカマキリモグラヤミーがいた

「ついにオーズを殺ったか」

低い声がアंक達の耳に入る。ドルだ

「ドル貴様あ……………」

アंकは額にシワを寄せる

「俺も知らなかったが、別の奴のコアを取り込むと、別のヤミーの造り方と、特製を受け継ぐんだな」

「まさかお前！あいつらのコアを！！」

「ああ、フランにポンドそしてバーツのコアは今全て俺の中にある」

アंकはその時理解した、カリムから聞いた予言の一部の『交わりし欲望の王』。つまりこれは4つの属性のコアを吸収したドルということに

そしてドルは倒れている映司の横へ行く。するとドルは映司の身体を踏み付ける

「こんな奴に今まででこずっていたとはな。ハッキリ言ってヘドが出る」

そしてドルはグリードの姿へ変身し、ポンドの主力武器の巨大針を出現させ、映司の心臓目掛けて一直線に下す！

「死ね！」

アंक、バース、アルカナはドルを止めようとするが間に合わないだが、ガキンツ！という音がドルの針を弾く。それは映司の中から飛び出した紫色の3枚のコアメダルだった

ドルは即座に下がる。すると映司の身体がゆっくりと浮かび上がりベルトにそのメダルが収納され、映司の目が紫に輝く。そしてそのベルトの3枚のコアメダルをスキャンする

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プツ・トツ・ティラーノ・ザウルース！！』

映司はオーズプトティラコンボへ変身するが、様子がおかしい

「ガアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「なんだこいつは！？」

咆哮を上げるオーズ。その咆哮で廃工場の窓ガラスが割れ、バース達はその威圧に堪えていた。つまり現在のオーズは完全暴走状態である。カマキリモグラヤミーに傷を負わされ映司の意識は今では飛んでいる状態だ。単にオーズは本能で行動する、狂戦士の状態だ。その姿を見たドルはその威圧に圧倒され後ずさる。そしてオーズは標的を絞る。最初選ばれたのは、運良くアंकでも、バースでも、アルカナでも、ドルでもない。カマキリモグラヤミーだった。オーズはメダガブリューを地面から抜き出し、カマキリモグラヤミーへ向かい走り出す

「グラアアアアアアッ！！！」

オーズは暴走し、カマキリモグラヤミーに襲い掛かる
ザン！ザン！ザン！と何度も斬りつけるオーズ。その度メダルが飛び散る

「チッ。これはやばいな……。ここは逃げるが勝ちか」

プトティラの姿を見たドルは怖気づき逃亡する

「ドル、待て！」

逃亡するドルをアंकは追う。そして

『スキヤニングチャージ！！！！』

オーズは紫のメダルをスキャンする。すると、トリケラメダルのワインドステインガーでカマキリモグラヤミーを凍結させ、ティラノメダルのテイルディバイダーでカマキリモグラヤミーを粉々に粉砕する

そしてヤミーを倒したは次に攻撃対象がバースとアルカナへと変更される

「まずい、レイア。あれは持ってるか？」
「もちろん」

アルカナはカンをひとつ取り出しバースへ渡す。バースはそれを受け取り蓋を開けると中には、ハッピー・アーマードが入っていた。バースは即座にハッピー・アーマードをベルトにセットしセルメダ

ルを6枚スロットする

『カポーン！！バース・ディ・インフォメーション・ハッピー・アイマード！！！！』

体中のカプセルオーブから6つのアーマーが飛び出し、装着される。そしてバースはティラノのセルメダルを10枚スロットする

『バース！チェンジ・ティラノ！！』

バースの両腕、両足に巨大な爪。腰にティラノザウルスのをもした尾が武装され、バース身体の色がティラノメダルの色である紫へとなる。それと同時にオーズはメダガブリューを握り、咆哮とともにバースへ襲い掛かる

「グラアアアアアアアア！！！」

バースもすぐさまティラノクローからビーム状の長さ30cm程の刃ティラノ・ディスネイルを発動しオーズのメダガブリューによる攻撃を防ぐ。そしてバースもそれに負けんとティラノ・ディスネイルで対抗する

そしてアルカナもカン・ライフフルで狙撃してサポートするが、プトティラの装甲は硬く、ダメージになっているのかわからない

その時以前伊達から貰ったゴリラカンが作動してアインハルトが駆け付ける。だがアインハルトはその光景を見て啞然となる。オーズがバースと戦うというありえない現状に

「とりあえず、変身を……………。アंकさんは？」

オーズがいるならアंकもいるはずなのだが、辺りをを見回してみ

でもアंकの姿はない。先程ドルを追い掛けてしまったためその場にはいない

「どうすれば……………」

アインハルトはなににもできない自分を悔やむ。武装形態となってもオーズプトティラとは天と地の差だ。そんな事アインハルトにはわかってる事だったが。するとオーズの身体から6枚のコアメダルが飛び出しアインハルトの目の前で止まり、それを手で添えるようにつくりとおりにくる。それは紫のコアメダル。6種、6枚が全て揃った状態でアインハルトの手に収まる

そしてアインハルトは覚悟を決め、その6枚をヴィーズドライバーへセットしスキャンする

『プテラ！トリケラ！ティラノ！ユニコーン！バイコーン！ペガサス！プツ・トツ・ティラーノ・ザウルス！！ユツニ・バガース！！レージェーンド！！！パープルコアコンプリート！！！！』

アインハルトはヴィーズパープルコアコンプリートフォームへととなり、右半身はプテラシヨルダーとなり左右にプテラウィングが展開され、腕にはトリケラアームのワイルドステインガー、脚にはティルディバイダー。左半身にはユニコーンシヨルダーとなりユニコーンとプテラの頭にユニコーンスピアが伸び、手首にバイコーンアームのデュアルランス、脚のペガサスレッグの翼はティラノレッグにまで影響を与え、左右の脚に二枚づつのペガウィングスがひらかれる。これは破壊者のプトティラと対をなす、調和のユニバガスの融合コンボだ。そしてヴィーズはオーズへ後ろからと飛び掛かる

「はぁぁぁぁぁー！！」

ヴィーズの咆哮に振り返るオーズ。オーズはメダガブリューにセルメダルを喰わせエネルギーを溜める。ヴィーズもバイコンアームのデュアルランスを伸ばしそれを相殺されデュアルランスとメダガブリューは吹き飛ぶ。これにより攻撃対象がバースからヴィーズへと変更された

「グルルルグラアアアアアアアアアアアアアアア！」

雄叫びとともに鋭い爪でヴィーズに襲い掛かる。ヴィーズはそれを軽く流しオーランサークルの部所に一撃入れ吹き飛ばす

（霸王空破断（仮）！！）

オーズは強い。だが接近戦、しかも格闘ならヴィーズいや、アインハルトを凌ぐ者は少ない、さらにいまのアインハルトは紫のコアメダルを身に宿している。これでは、なのはのスターライトブレイカーを受け止める事も可能だ

さらにヴィーズは飛び出しオーズの目の前へ移動するとトリケラアームに全身の力を混め一気に解放する

「はあ！！」

「グア！！」

オーズは吹き飛ばされ工場の壁に激突する。そしてゆらりと立ち上がり、メダルをスキャンする

『スキヤニングチャージ！！！！』

オーズは右腕にコアメダルの力を込め、必殺技、ザウラーブローを発動する。ヴィーズも同じようにメダルをスキャンする

『パープルコア!! スキヤニングチャージ!!!!』

ヴィーズの右腕にも紫のコアメダルの力が溜められていく。そして
ヴィーズは必殺技、霸王断空拳はおうだんくうけんを発動する。そして

「はあああああああああああ!!!!」

「がああああああああああ!!!!」

ふたつの拳がぶつかり合う

その瞬間、空間が歪み、全員にある映像が2つ頭に流れ込む

1つ目はオーズを含めた数々の世界のライダー達が黒いなにかと戦
う映像

2つ目は洞窟のような場所でオレンジの炎を纏う巨大なライダーと、
44種類のコアメダルを取り込んだオーズの映像だった

その映像が終わると強大な爆発とともにオーズとヴィーズ、バース、
アルカナは吹き飛び変身が解除され、廃工場は半壊した

その頃アंकは……………

カウント・ザ・メダルス39 恐竜の狂戦士再びと紫のコアメダルと未来の映像

実は今、なやんでいます

それは……………

レッツゴー仮面ライダーシリーズを始めるかどうかです!!

いますぐはじめるか、連載が一段落してからはじめるかどうかです
意見があればお願いします

カウント・ザ・メダルス40銀枠対決と相談と出場宣言（前書き）

またネタが浮かびませんでした
すません……………

暗い空間の中、一定の距離を保ち背中を向けあう4人のオーズ（ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、シャウタ）

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そしてそれぞれの正面を向き一斉に構える

「このあとすぐ!」

カウント・ザ・メダルス40 銀枠対決と相談と出場宣言

アंकが逃走したドルを追いかけるとそこは木が生い茂る林だった

「チッ、どこ行きやがった……」

アंकは辺りを見回し言う

すると、屑ヤミー共がアंकに向かって飛び込んでくると同時に、人の姿でドルも姿を現す

「そういえば、お前は俺のコアを持っていたからな。この場で返してもらおうか。行け」

ドルが合図を出すと、屑ヤミー達は奇声を発しながらゾンビのようにアंकへ近づく。アंकも戦闘態勢に入る。だが屑ヤミー達は炎の斬撃により破壊される

「なんだ？」

アंकは飛んできたの先を見る。そこにはヘルメットを被って、ライドベンダーにふたり乗りで来た、セントとバンクだった。セントが運転し、バンクの手にはメダグレンバーが握られている

「アंक、大丈夫！」

バンクはヘルメットを取り、アंकへ駆け寄る

「大丈夫？ 怪我不い？」

バンクは心配そうにアंकに聞く

「余計なマネを……………」

ボソッとアंकは呟く。ブチッという音とともにバンクの手がアंकの頬へ伸びる

「お姉ちゃんが心配してあげたのにい！！」

バンクはアंकの頬をつまみ伸び縮み引っ張る

「いでえ！いででえ！！無理に引っ張るな！！」

アंकはあまりの痛みに声を上げる

「まあ、その程度にしてあげれば？」

ポンッとセントがバンクの肩に手を叩くと、バンクは頬を赤くして恥ずかしそうな仕草をしつつアंकから手を離す

「そ、そうね。私が大人げなかったわ。アंक、ごめんなさい」

相変わらず乙女である

「今度やったら承知しないぞ」

「ええ、今度貴方が反抗してきたら頭に踵落とし決めてあげるわ♪」

「おい……………」

「おい」、その一言に尽きる

「…………。茶番は終わったか？」

とドルが呆れた表情で言う。まあ、確かにくだらない茶番であった。がバンク達にとっては家族でのスキンシップのようなものである。アंक、バンク、セントは本気になりドルを睨む

「ええ、今終わったわ」

「さて、どう始末してやろうか？」

バンク、アंकの順番で言う

バンクはルーヴィーズドライバーを出現させ、アंकからタカ、クジャク、コンドルのメダルを1枚ずつ借りる

「変身…」

『メダルルーレット！タカ！クジャク！コンドル！カラス！ペンギン！インフェルノ！！！！』

バンクはルーヴィーズインフェルノフォームへと姿を変え、セントとドルもグリードの姿へ変身する。すれあう空気の中、戦いが始まる。が

ガッ！！

という音がそれを邪魔する。アंक達とドルとの間に一本の剣が突き刺さる。刺々しく、まるでワニの牙のような剣。ユーロの剣だ

「はい。ストップ、ストップ！！」

パンパンと手を叩きながらユーロが姿を現す

「ユーロ……………」

齒を軋ませながら呟き、剣先をユーロへ向けるルーヴィーズ

「どー、どー、どー。落ち着きなってバンク。今日は戦いに来たわけじゃないからさ」

「なにを、私からコアを奪っておいて、どの口が言う！！」

「この口♪」

「きつ、貴様！！」

飛び出そうとするルーヴィーズを止める

「セントさん……………」

振り向くルーヴィーズにセントはただ首を横に振る

「で、何のようだ。わざわざ時間を割いて来るような奴じゃいだろお前は」

「まーね。だけど、今回の私はただの暇つぶし。城にいてもやることねーし、ヤミー造って遊ぶのもアレだし。と思ってたらあんたらがこんなところでどんちゃん騒ぎしてたから顔だしただけ。だけど………」

ユーロは全員の顔を見回す

「銀棒のコアを持っている奴が全員いるじゃん。て、ゆうことは刈り入れ時ってこと！！！」

するとユーロは腕を部分展開し右腕のバインド・スネークをバンクに向かって繰り出す。だがキン、キンという音が連続で鳴り、バイ

ンド・スネークが砕かれてゆく

「なに？」

ユーロが手を下げると、そこにはセントが紫色のバースバスターを構えていた。そのバースバスターは魔力を凝縮してセルメダルとともに発射することができるよう新しく開発されたいわば、バースバスター改だ。もちろんこの武器はバースも使用できる

「チッ、舐めたまねを……………」

ユーロはバインド・スネークを消し、数歩下がる。すると

「うおおおおおお!!」

雄叫びとともにドルはユーロへ襲い掛かる

だがそれはヒラリと躲される。それをきっかけにルーヴィーズとセントも特攻する

「はっ！」

「ふっ！」

「らぁ！」

ルーヴィーズはメダグレンバーで、セントは一定の距離を取りバースバスター改で応戦、ドルはランスとポンドの針で全員でユーロを攻撃を仕掛ける。がその攻撃全てが回避される。蛇のような動きでするとザンツ!とドルの身体が切り裂かれる

「ぐあっ！」

ドルの身体は宙を浮きメダルが数枚飛び散る。アंकは右手を飛ばして飛び散ったメダルを取ろうとし、その隙をつきユーロもジャンプしてメダルをキャッチし、ついでに先程投げた、剣を拾い、背を向け地に立つ

「へえ、オオカミにカブト、クモか。コアメダルゲッツ」

ユーロは指に挟んで見せつける。アंकの手にはイカのメダルが1枚ある

「くっ、やられた……………。ここは逃げるか……………」

そう呟くとドルは逃走する

そしてユーロはセント達に向き合う

「続いて、赤と紫入りまゝす」

ニヤツといやらしい笑みを浮かべる。すると

『クレーンアーム』

「!？」

バースのクレーンアームのシュプリガーハリケーンがユーロを襲われ、膝をつく

「いっつ、なんだ？」

ユーロはその先を見る。そこにはライドベンダーに騎乗しながら颯爽と現れたバースだった

「遅れてすまない！」

バースは軽く謝罪する。アंकは映司がいないことに気がつく

「映司はどうした!？」

「火野はレイアに任せて今病院に行っている。アインハルトちゃんも一緒だ」

バースはアंक達に知らせる。その間にユーロは立ち上がり両腕のバインド・スネークをバースに放つ。右手のバイト・スネークはクレーンアームに絡み付き、左手のバイト・スネークはバース本体を狙う

「もらった!！」

「どうかな？」

「なに？」

バインド・スネークがバースに直撃しそうになった。その瞬間『カア』という鳴き声がバインド・スネークを切り裂く。それはこちらの世界で初めて開発されたカンドロイド第1号、カラスカン。カラスカンはバースとアルカナの発する電波によって動かすことができる。もちろん単独行動も可能だが、現在のこれは、バースの頭で動かしている状態だ

「後藤くん!！」

するとセントはバースの名を叫び、バースバスター改を投げる

「はい!はあ!！」

バースもそれに反応しクレーンアームを切り離し、ジャンプする。
そしてバースバスター改をキャッチすると同時にカッターウィング
を開く

そしてメダルポッドを銃口にセットする。もちろん空中で

『セルバースト』

その発音が響きユーロは逃げようとするが。もう遅い。バースはユ
ーロにセルバーストを放つ!!

「シュート!!!」

バースがトリガーを引くのと同時に、ユーロは舌打ちし地面に手を
付き、巨大な岩壁を出現させる
バースは構いもせずそれを貫く
巨大な爆発が発生し岩壁は粉々に破壊される

「チッ、ここまでか……」

ユーロはそう言い残すと姿を消す

バースは地に着き変身を解除、ユーロのいた場所に行くが

「逃げられたか……。これは……」

後藤は足元に落ちていた物を拾う。そこにはハウオウとハブのコ
アが落ちていた。おそらく、セルバーストの衝撃でユーロからこぼ
れ落ちたのだろう。後藤はそれを拾い、アंकとバンクに渡す

「アंक、バンクさん」

「ふん……」

「ありがとうございます」

アंकはそっぽを向き後藤からメダルを受けとる。バンクは礼を言
ってメダルを受け取る。メダルはそれぞれ、アंकはメダルホルダ
ーへ収納、バンクは体内へ取り込む。そして後藤は渡し終わるとセ
ントの元へ行く

「セントさん」

「なんだい後藤くん」

「実は話があります。聞いてくれますか？」

「……。わかった。だがここじゃあれだ、局へ戻ってからね」

「はい……」

後藤は返事して頷く。そして後藤は話した。44種類全てのコアメ
ダルを取り込んだオーズの存在を……

その頃公園では



「はあ。おせえなあいつ……」

その頃ハリー・トライベツカとその舎弟リンダ、ルカ、ミアの3人
は映司から預かったアイスクヤディーを交代しながら販売していた。
今はルカの時間だ

「そうですね」

残った3人はベンチでバテていた。アイスクヤディーを食べなが

ら。もちろんちゃんとその代金は払ってある
すると

「あれ、ハリー番長？」

ハリーは振り返ると、そこには、ヴィヴィオ、リオ、コロナの3人
がいた

「皆さんもお久しぶりです」

ヴィヴィオが挨拶すると

ハリーは『よっ！』と右手を上げ、舎弟のリンダ、ルカ、ミヤも揃
って右手を上げる

「おう、お前等も元気そうだな」

「はい！毎日練習して鍛えてます！！」

「そうかい。頑張ってるな」

ハリーは立ち上がり、3人の頭を順番に撫でていく。そしてなにを
思い出したように言い始める

「お、そいやさお前ら今年もでるのか？俺は今年もでるぜ」

そういつてハリーはあるチラシを出す。青い背景。中心に大きくコ
ロシウムが印刷。左右に武道家が蹴りを放っている絵。そして『I・
C』と大きく書かれた文字。そうつまりそのチラシは

「はい！私達今年も出ます！」

「「「インターミルド・チャンピオンシップに！！！」」」

カウント・ザ・メダルス41食卓と復活と銀の聖本（前書き）

燃える業火の中変身前のバンクが中央で佇む

「魔法少女リリカルなのは○○○」

ゆっくり振り向きルーヴィーズ（インフェルノフォーム）へ

「このあとすぐ!!!」

カウント・ザ・メダルズ41食卓と復活と銀の聖本

「インターミルド・チャンピオンシップ？」

病院から帰ってからすぐに、公園に戻ってアイスクャンデーを売ってくれたハリーたちからクーラーボックスを受け取りアイスをご馳走して、今日の収入を本社に渡しに行ったが。ハリーにバイトを変わってもらったことがバレ、もちろんクビとなった

が、そんなことをいちいち気にしているほど映司の肝は小さくない明日にはまた新しいバイト先を探そうと思った

高町家の食卓。映司は箸を銜えながら言う

「はい、10歳から19歳までの子たちが出場してそれぞれの能力を全力で解放できる場所です」

「そう、インターミルドで強い子って本当に強いものね」

なのはとフェイトが順番に言う

「じつは去年私も出てるんです！」

「へえ、すごいね。どこまでいけたの？」

映司がそう聞くと、ヴィヴィオの顔からサァーと血の気が引いてき箸を置き、膝をかかえちよこーんとなってしまう

「あれ、どうしたの？」

映司は全員の顔を見回してみる。するとアंकがポンツと肩を置き

「バカが……」

「え？」

映司は哑然とした
その頃、後藤は



スクライア家・セントの自室

そこでは後藤とセントと向かい会うように座布団に座っていた

「44枚のコアを取り込んだオーズね。うーん………」

セントは顎を触りながら考える

「はい。どういうこと知りたくて。セントさんならなにか知っているのではないかと思ひまして」

「うん、確かに心当たりはある」

「本当ですか!？」

「ああ」

後藤に返事をする、セントは立ち上がり本棚から1冊の本を取り出す。銀色で表紙にはセフィロトの木のような感じで描かれている本だ。そしてその本のページをペラペラとめくる。そしてセントはめばしいページをみつける

「あったあったこれだ。『金と銀交わりし時、欲望の王が世の全ての欲望を断ち切らん。全ての欲望を身に纏い王の名の元、全てがひれ伏すであろう………』」

セントはゆっくりとその本の一文を読み上げる

「それは………?」

「これかい、これは僕たち銀枠のグリードのコアメダルを造った錬金術師が書き残した本だよ」

「ということは!？」

「そう、800年前に書かれたものだよ。僕たちの事がだいたいのもとも書いてあるし、僕たちに関係のある予言もちよくちよくと書かれてある」

セントはその本を後藤に渡す。後藤はその本を数ページめくるが、書かれている文字は全て古代文字。読み上げることができない

「……………」

「あはは、さすがに読めないよね」

「はい……………」

後藤は本をセントへ返す。そしてコンコンと2度セントの部屋のドアがノックされる

「はい」

セントが返事し返すと、ゆっくりとドアが開く。それはお玉を持ち、エプロン姿で、髪が落ちないようにと髪をくくっているバンクだった

「セントさん。夕食できましたから早く来て下さい」

「わかった。今行くよ」

「はい、後藤さん。今日は食べていってください」

「いえ俺は……………」

「後藤くん、固いこと言わないで、食べていきなよ」

「いえ俺は!」

その後、後藤はスクライア家の食卓で甘い甘い空気の中食事をいただく事になってしまった。後藤が言うには「あの空間は、生クリームを直接飲まされる程甘かった」と述べていたという



とある廃ビル。そこには緑のコートを着た男、ドルがいた。だが

「クソッ！クソッ！クソッ！！」

かなり荒れている。机をガンガンと蹴りまくる

「舐めたマネしやがって！！」

そういうとドルはそばの酒のビンを取り、ぐびぐびと飲む

「クソッ、どうする！あの野郎共！！」

空になったビンを投げ、パリーンといい音を上げながら割れる。するとドルの頭に声が響く

（ドル、少し落ち着いて）

「この声はフランか！？」

なんと声の主はフランだった

「どういう事だなぜお前の声が？」

（おそらく、あなたが私達のコアメダルを積極的に取り込んだせいだと思うわ）

「なるほどな。ということはいずれポンドやバーツの声も聞こえるようになるのか？」

（多分ね。そしてドル、あなたは少し落ち着なさい）

「だが！現在俺達のコアは数枚奪われた！どうすれば……………」

弱気になるドル。するとフランが声を出す

（安心して、これからは私もあなたの中から一緒に作戦を考えるわ。再びよろしくね。ドル）

「これから頼むフラン！」

（ええ、まずはセルメダルね。セルメダルを貯めましょう）

「ああ。よし、そのためにはヤミーだな。行くぞフラン！！」

（ふふふ、わかっているわよ）

再び蘇ったフランとともに新たな作戦を考えたドルであった。後の2体が復活するのも時間の問題である



「ふーん。なるほどね。そういうこと……………」

古城の自室でウォンは1冊の本を読んでいた。椅子に腰掛けながら、ずーとその本とにらめっこしている。しかもその本はセントが持っている物と同じ物だ

「ふう、まったく。なんで俺達を生み出した錬金術師ってのはこうもアホばかりなのかねえコアメダルなんか造ってよ。これならあの頃みたいに人間してた方がマシよ。まあいいや、とりあえず……………」

そしてウォンはその本を閉じる

[illegible]

ウオンは甲高い声で笑う

だが、その光景を影からこっそりと見ている女性がいた。そのことをウォンは知るよしもなかった

カウント・ザ・メダルス42映像の話と孫と封印された欲望（前書き）

落ちてくるセルメダル

「魔法少女リリカルなのは○○○」

すると全てのセルメダルが割れ、屑ヤミーが誕生する

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス42映像の話と孫と封印された欲望

次の日

とあるミッドの綺麗な水が流れる橋の上。そこにはふたつの影があった。ひとつはオーズこと、火野映司。もうひとつはバースこと、後藤慎太郎だ

「火野、お前はと思う。あの映像のオーズを」
ヴィジョン

映司と後藤は以前、オーズが暴走した時に見た映像、44枚のコアが融合したオーズの話をしている

「そうですね。オーズだからまず間違いなく俺です。今はなんとも言えません」

「そうか。ならお前の持つ紫のコアの力で銀枠のメダルを砕く。と
いうのはできないのか？」

後藤は映司の体内に眠る、紫のメダルの力を使って銀枠のメダルを砕けばウォンは完全にはならない。と付け加える

「ムリ、じゃないですかね」

「どうしてだ？」

「俺も実はセントさんに聞いたんですけど。『銀のコアには金のメダルを無力に近い存在にすることができ。今僕のコアが君のグリード化進行を止めているから紫のプテラ、トリケラ、ティラノのメダルの力は使えない』だそうです」

「そうか……。やはり俺達でなんとか食い止める必要があるな」

「はい。俺に後藤さん、アインハルトちゃん、バンクさん、レイアさん皆いれば心強いですし、大丈夫です。なんとかかりますよ」

「そうだな」

そう言って後藤は持っていたコーヒーに口をつける



「さて、どうしたものか……」

ドルはひとり、いや正式には体内で蘇ったフランとふたりで海辺に
ヤミーの親になりそうな人間を探していた

（あの人間なんてどう？）

フランは小さい子供の方を見て言う

「いや、だめだ。あれには欲望があるようでない。いいヤミーは生
まれないだろう」

（そうね。だったらあれなんてどう、面白そうだけど？）
「ん？」

フランが次に見たのは海辺を歩いている青髪ショートで銀色の管理
局の制服を着た女性、スバル・ナカジマだ。となりには10歳くら
いの茶髪の少年を連れている。その子は以前スバルが保護した少年。
名をトーマ・アヴェニールという

「ねえ、スウちゃん」

「ん、なに？」

「今から、スウちゃんの家族に会うんだよね」
「うん」

「楽しみだなく。スウちゃんの家族の会うの」

トーマは照れながら頬を掻く。そんなトーマをスバルはニコニコと笑顔で見る

「その欲望解放しろ！」

「トーマ！ トーマ！ どうしたの、 トーマ！！」

「そのガキには俺のヤミーの親になってもらった」

「そのガキの欲望が開花するのが楽しみだ」

「きつ、貴様 ああああああああああああああああああああ
ああああああああああ！！！」

スバルはドルに殴りかかる
リボルバーナックルをフル回転させ、カードリッジを全て使用して
全力で殴りかかる
が、ドルは怪人体となりドルは右手を前に突き出す
そしてドオオンという音が響く。その音に周りの人たちも逃げ出す
だがスバルの拳は……

「その程度か？」

「な!？」

届いていなかった

するとドルはスバルを持ち上げかかと落しを繰り返す
ズドオオンという音を立て地面に減り込む

そしてドルはトーマへより、服の衿を掴み肩へ担ぐ

「悪いがこのガキは貰っていく。面白そうだからな」

と吐き捨て、緑と青、灰、黄の布を身につつみ姿を消す

「ト、トーマ……………!!」

スバルは薄れゆく意識の中トーマへ決死に手を伸ばすがそれは叶わ
ず、気を失う

そしてドルはアジトへ帰りつく

ドルは机を4つ程繋げ会議用の机のようにし、トーマをそこにのせ
る。ドルは大きなソファにデカデカと腰掛ける

（どうしてこの子連れてきたの？）

「あ？」

フランはなぜトーマを連れてきたか問う

「このガキはまだ欲望が育ちきっていない。いや、このガキは大きな欲望をひとつ封印している。それを解放しないではないだろ？ 今寄生したヤミーが声をかけている。解放されればいいヤミーが生まれるだろう」

ドルは笑いながら言う

「なるほどそういうことね」

トントントツと足音を立てながら階段を上ってくる
その声にドルは警戒体制に入る

「ユーロ！」

「よっ！」

ユーロは左手を中指と薬指を閉じたポーズに言う

「貴様！ 何しに来た！！」

ドルはユーロに大きな声で吠える

ユーロはすました表情をして口を開く

「べっつに。ただ面白そうな事してるなって思っただけ」

ユーロはじとじとした目でトーマを見る。そしてドルの正面に空いていたソファに座る

「まさか、あんたが憤怒のドルが冷静に欲望を見極めることができるとはね。お母さん安心したー」

「誰がお母さんだー!!」

勝手な事を言うユーロにドルが怒鳴る

「で、どうする気なのその子？」

「ふっ、決まってる。メダルが貯まるまで様子を見る」

「そっ。だったらこんなのはどうか？」

するとヤミーに寄生され息が荒いトーマにユーロはセルメダルを投げ込む

するとトーマの腹の位置から1体のヤミー、ウメヘビカモメヤミーが誕生する。さらにそれと同時にトーマをセルメダルがつつみセルメダル色のハイエナイカヤミーも誕生する。それを見届けるとユーロは立ち上がり階段の方へ歩いて行く

「欲望を持っていない人間を親に持ち、そのヤミーを親に持つようするに孫と同じ位置のヤミー」

ユーロは壁に手を掛けて言う

そして笑いながら「面白いじゃない」と付け加える

「そのヤミーはあげるよ。命令を君に従えというのにしておいた。好きに使いなよ。じゃね」

そーい残すと階段を下りていく

「チッ、あのヤローどういうつもりだ……。まあいいこれで」
(計画の第一段階はクリアしたってことよね)

「ああ」

ドルは口を歪めて言う

「ユーロくれるっていうんなら使わせてもらおうぞ、このヤミー。後はお前達しだいだ。まかさたぞ」

ヤミー2体は同時に頷き壁から飛び出す

そしてドルは先程座っていたソファに腰掛け、呟く

「後はセルメダルだ。最終戦争を起こして俺達の世界を実現させてやる」

カウント・ザ・メダルス43お盆とアंकバトルとどうしようもない状況(前

背を向け佇むアंक

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そして一気に翼を広げる

「このあとすぐ!」

カウント・ザ・メダルス43お盆とアंकバトルとどうしようもない状況

真っ暗闇の空間

ただ中心にひとり佇むスバル

(ここどこ……………?)

スバルはなにも考えずにまっすぐ歩く。ゆりっくり、一歩ずつ
すると目の前にひとりの少女が現れる。オレンジ髪でツインテール
の少女。15歳の頃のティアナ・ランスターだ

「ティア……………」

スバルは小さい声をだし手を伸ばす。そっと
だが彼女は振り向きもせず走り出してしまう
そして手をそっと下ろした、ゆりっくりまっすぐ歩きはじめる
次にまた目の前に赤髪でショートカットの少女がいた。ノーヴェだ
スバルは走り出しノーヴェの肩を叩く

「ノーヴェ！」

それに反応しノーヴェはゆっくり振り向く
だがスバルが触れた瞬間ノーヴェはセルメダルにチャリンという音
を何度もたてながらばらけていく

(違うこれはノーヴェの偽物……………)

そう思いながらまたまっすぐ歩いていく
するとまたスバルの目の前にある人物が現れる

それはトーマ・アヴェニールその人だ

「トーマ!!」

スバルは走り出す。全力で

あの子に近づくにつれスバルには笑顔が蘇る
そしてスバルはトーマに抱き着く

「大丈夫、怪我とかしてない？」

スバルは抱き着きながらトーマに聞く
すると

グサツ!!

とスバルは腹に痛みを感じ触れてみた
痛い。とスバルは呟く

触れた手には真っ赤な血がいっぱいにあふれていた
スバルは腹を押さえながら、トーマから離れる。トーマの顔は笑顔
だった。しかも満面な笑みで手にはスバルを刺したと思われる包丁
まで持っている

「トーマ………。私だよスウちゃんだよ! わからないの!？」

スバルは叫び涙を流す。この涙は腹の痛みからではない。トーマへ
の思いからのものだ

するとトーマはクククッと笑い、身体をセルメダルがつつまこむ
その姿は「ドル」あいつだった

「トーマ………?」

スバルはそう眩し脱力し膝をついてしまう

するとドルはセルメダルのスピアを出現させ矛先をスバルの胸に定め

「「じゃあね、スウちゃん」」

と言い残しスバルの胸を貫いた。その声は二重でドルとトーマの声が重なってスバルには聞こえた

そしてスバルは胸から血を流し横になった

身体は徐々に冷たくなり、息もしていない、目には精気さえも感じられない。そうスバル・ナカジマは『死んだ』のだ

愛する、子の手によって……………



「うあああああああああ！！！！」

とスバルは叫び声を上げ飛びつくように身体を起こす。身体は汗がべったりと張り付き、顔にも汗が滝のように流れていく

「夢……………?」

スバルは辺りを見回す。そこはスバルが借りているアパートの寝室だった

するとガチャッとドアが明けられる

「目、覚めた?」

ティアナだった。手にはお盆、その上には湯気が立ち上るコーヒ―

が入ったカップが2つを持ってやって来る

「ティア？」

「なに？」

ティアナは返事を返すとカップをスバルへ渡す

「本物？」

ブチッ！と音とともにスバルの頭にお盆チョップが炸裂する

「誰が偽物よ！誰が！！」

お盆を持ったまま腕を組むティアナ

「ゴッ、ゴメン……………」

頭を押さえながら謝罪する

「まったく。で、なにがあったのよ？」

ティアナは椅子に腰掛けスバルに聞く

「トーマ、トーマは！？」

スバルは飛び掛かるように言うが

「落ち着きなさい。いま管理局がトーマを探しているわ。おそらくグリードの仕業だろうから映司さんに後藤さんも手伝ってくれてる。あんたはおとなしく寝てなさい」

ティアナは人差し指でスバルの額をコツンと押すとスバルは後ろに倒れる

「ぴぎゃー!!痛いよティア」

「うっさい。怪我人に黙って休む!!」

「はい……………」

返事を返すと少しの沈黙が続く
そして

「ねえ、ティア……………」

「なによ?」

「もしもさ、好きな人が怪物でしかもその人が私達の事を襲ってきたらティアはどうする……………?」

「はあ……………」

スバルの質問にため息でティアナは返し、言葉を発する

「私はそんな事になったら多分クロス・ミラージュで撃ち抜くでしょうね。たとえどんな人であっても……………」

「そう……………」

スバルは悲しい表情になる

「でも、私は私、あんたはあんたよ。あんたが信じるなら、あんたがやりたいようにやりなさい。それがスバル・ナカジマでしょうが!!」

「ティア……………。ありがとう」

「うっさい……………!」

頬を赤らめソッポ向くティアナに対しスバルは

「ティアのツンデレ」

の言葉を言った瞬間

「あんた次は平でいくわよ？」



「チッ、なんだあ。この妙な気配は？」

アंकは自らの赤い翼を広げミッドの空を飛びまわる。そしてアंकはスバルが襲われた海辺の灯台の入り口前に降り立つ
すると、銀色の腕がアंकを襲う。ハイエナイカヤミーの腕だ

「!？」

アंकはすかさずその腕を回避する

「ほお、お前か妙な気配の正体は……」

するとアंकは眼球を見開くと赤く光る。そしてヤミーの体内を探る。するとんでもないことがアंकにはわかった

「なるほどなあ。どういうことかよくわかった（チッ、面倒だ……
…）」

アंकは策を考えだそうとするが

「ウガアアアアアアア！」

ハイエナイカヤミーは咆哮し、アंकに襲い掛かる

「くっ！」

アंकはなんとか攻撃を回避したが、肩をやられてしまう。そしてタカカンをつたを空け空中へ投げタカモードへ変形する

「至急映司を呼んでこい！」

アंकに指示にタカカンは従い映司を呼びに行く

「タカカンの奴が映司をよんでくるまでしばらくかかる。さて、どうあいてしてやろうか？」

するとアंकは右腕を怪人体にする。つまり本気モードだ

さらに赤い翼を大きく広げる。翼からは赤い羽がチラチラと散らばり、アंकはハイエナイカヤミーにプレッシャーを与える

だがハイエナイカヤミーは振り払いアंकにイカの触手を伸ばすだがアंकはその全てを受け止める。しかも右腕一本で

アंकは腐ってもグリード棒つきアイスである、棒なしのヤミーに遅れはとらない。そしてアंकはグイツと触手を引っ張り自分の元まで寄せるとカチャツと音をたてながらハイエナイカヤミーの腹になにか金属の固まりをあてる

それはピストル、つまり銃だ。泉慎吾は刑事だ。拳銃を一丁携帯している。アंकはなにかあったときのために一応その拳銃を拝借していたのだ

そして、ダンッ！ダンッ！！ダンッ！！と3度鈍い音が響く。ア

ンクが発砲したためだ。あいにくと弾は足へ減り込んでいる
アंकは自分が所持していたことをバレないようにするため、すぐ
海へ拳銃を投げ捨てる。よろめくハイエナイカヤミーの腹を膝で数
度蹴りを入れる

「ぐあー！」

最後にハイエナイカヤミーの身体を蹴り飛ばす

「こんなもんか？」

アंकがそう呟くとブォン！とたて映司が到着し、ヘルメットをと
りアंकの元へいく

「ごめんアंक、遅くなった」

「まったくだ。その分あいつから取り返せ」

「ああ」

アंकはタカ、パンダ、タコのメダルを映司に渡す

映司も素早くオーズドライバーを取り出し腰にセット。続いてタカ、
パンダ、タコのメダルをセットしオーズキャナーでスキャンする

「変身！！」

『タカ！パンダ！タコ！』

映司は仮面ライダーオーズタカパンタへ変身しパンダクローを展開
し切り掛かる

「はあ、セイヤー！！」

火花を散らせながらぶっ飛ばされるハイエナイカヤミー

「よし！とどめだ！！」

オーズがとどめをさそうとした瞬間

「待て！映司！！」

アंकが中断させる

「え、どうしてだよアंक？」

「タカの眼でそいつの中探ってみろ！」

「う、うん」

するとオーズはタカヘッドのタカの眼を使いハイエナイカヤミーの体内を探る。するとオーズの目に入ったものは

「人がいる！しかも子供！！」

オーズは後悔するところだった。ヤミーに取り付かれた人が死ぬところだったのだから

「なんとかしてあの子を助けないと！」

「無駄だ。あのヤミー完全に親と同化してる。引き離すのは難しい」
「そんな……………」

オーズとアंकにはなすすべがない。さらにアंकは追い撃ちをかけるかのように言う

「あれをなんとかする策はあるが、2分ノ1の確率だ。失敗しても、

このままあのヤミ―を潰しても、中のガキは死ぬぞ」

カウント・ザ・メダルス44巨大と避難と赤きコンボ（前書き）

屑ヤミーを斬さくタトバコンボのオーズにアंकがメダルを投げ

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

ベルトヘセットしタジャドルコンボへ

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス44巨大と避難と赤きコンボ

「死ぬって？そんな！」

「ああ、危なかったなあ。そのまま攻撃していればアウトだったなあ」

「わかっている！でもどうすれば……ぐあ！？」

突然、オーズは強烈なダメージに襲われる。それはハイエナイカヤミの放ったイカの形をしたミサイルがオーズに直撃したのだ。そしてドボンと音をたてオーズは海に落ちる

一応足はタコなので大丈夫だが、タカヘッドとパンダアームであるため海での戦いでは不釣り合いだ

するとハイエナイカヤミは自身の身体を巨大化させ、巨大なハイエナに下半身がイカの頭、ハイエナの指先はイカの触手という異様な化け物へと変貌する。化け物と化したハイエナイカヤミは雄叫びとともに海へ飛び込む。だが、動く気配がない

「まずいな……。映司メダルチェンジだ！！」

アंकはそう叫び、シャチのメダルを投げる

「アंक、サンキュ！」

映司会はタカメダルを抜きシャチと入れ替えメダルをスキャンする

『シャチ！パンダ！タコ！』

オーズはシャパンタコンボへ変身する

「映司！青のメダルを預けるなんとか持ちこたえとけ！」

「お前どこいくつもりだよ！」

「言っただろ！策があるってな。それまでそいつ押さえてろ！！」

そしてアंकは続いてウナギ、サメ、エイ、イカのメダルを投げる

「俺がくるまでコンボは使うな！わかったな！」

そう言ってアंकは映司が乗ってきたライドベンダーに乗り、どこかへ行ってしまふ

それと同時に後藤が駆け付ける

「火野！大丈夫か！」

「後藤さん！！」

「待ってろ今引き上げる」

「ありがとうございます！！」

後藤はすぐにオーズから一番近いポイントへ行引き上げる

「それにしてもなんだあれは？」

「ヤミーです。暴走とは思いますが、かなり危険な状態です」

「どういうことだ？」

「実は中に子供が取り込まれていて、下手すれば死ぬってアंकが……」

「そうか、なら迂闊には攻撃できないな。かと言って、ほおっておく訳にもいかない………そういえばアंकはどうした？」

後藤はアंकがないことにやっと気がつく

「アंकは今、策があるって言ってどこかへ行ってしまったんです」

「そうか。あいつが策があるって言うなら。大丈夫だろ。それより……」

後藤はハイエナイカヤミーを睨みつける

「あいつをなんとかしないとな」

すると後藤は通信機を取り出しレイアに連絡を入れる

「レイアか？俺だ。これから海辺のヤミーを俺と火野で抑える。お前は一般人の避難を頼む。……ああ、了解した」

後藤は通信を終えると通信機をしまい、バースドラバーを腰に巻く

「行くぞ火野」

「はい、後藤さん」

そして後藤はセルメダルを1枚取り出しメダルをスロットしてグランプアクセラレータを回転させ

「変身！！」

仮面ライダーバースへ変身する

そしてバースは買い置きしておいたハッピー・アーマードと開封しベルトにセットし仮面ライダーバース・ディ・アーマードへと変身する

『カポーン！！バース・ディ・インフォメーション・ハッピー・アーマード！！！！』

さらに、シャチのセルメダルを10枚スロットする

『バース！チェンジ・キラーホエール！！』

バースの身体の色がシャチのコアメダルの色の青となり、全身のカプセルオーブから水面を移動するためのヒレが複数装着される

「行くぞ火野！」

「はい！」

そしてふたりは海の巨大ハイエナイカヤミーとに立ち向かう

「セイヤー！！！」

「はあああああ！！！」



「怪物よー！！！」

「逃げろ！潰されるぞ！！！」

「助けてくれー！」

と町は巨大化したハイエナイカヤミーによってパニックに陥っていた

「皆様管理局の指示に従い速やかに避難してください！！！」

管理局員も全力で市民を避難させていた。その中には後藤の要請でレイアもいた

「く、あんな大きい奴、後藤先輩と映司先輩で大丈夫かな？私もいますぐにでも行ってアルカナでサポートしたい。けど……………」

アルカナドライバーは今はないと呟く。アルカナドライバーはまだ管理局では試作機だ検査やパワーアップの為数週間に一度セントに預ける事になっている。そのため今はない
するとブォン！と音をたて1台のバイクがレイアの元へ来る。アंकだ

アंकはレイアの目の前で止まりヘルメットを外す

「おい、確かお前レイアとか言ったな！」

「はい、レイア・ミッシュ・メルファです！アंक先輩」

レイアはつい敬礼してアंकに答える

「今はなんでもいい。それよりバンクの奴を見なかったか？」

「バンクさんすぐそこで避難誘導の手伝いをしてくれてます！！」

「そうか、じゃあな！」

そしてアंकはバイクを走らせバンクの元へ急いだ

「まだ、たくさんいるわね。早くしないと………」

とバンクは呟くするとアंकがバンクの前でライドベンダーを止め、ヘルメットのバイザーを上げる

「バンク、やっとみつけた」

「アंकあなた何やってるの？映司さんは！？」

「あいつならヤミーと交戦中だ。だがあのヤミー少し特殊でなあ。

お前の力を借りたい」

「私の？」

「ああ、お前の持つヤミーとその親を切り離す力を持つコアメダル

をな」

「仕方ないわね」

バンクはアंक右手に手を差し出すと自分の持つ、ホウオウ、カラス、ペンギンの合計3枚を渡す

「確かに預かった」

そしてアंकはヘルメットのバイザーを下ろし、エンジンをかけ走り出す

「頼むわよ。仮面ライダー……………」

バイクは最後にそう呟いた。アंकの後ろ姿を見守りながら



「サメ！エイ！タコ！」

オーズとバース巨大ハイエナイカヤミーと戦闘に入っていた。オーズはジャンプしサエタコンボとなりエイスティングでヤミーを貫こうとするが

「グオオオオオオオオオオオン！！！」

雄叫びが響き指先のイカの触手でオーズを海にたたき付ける。オーズは青の亜種コンボ。海での戦いにはいい足の側面に装備されたキラープレーターでバースもバースバスターでハイエナイカヤミーを撃つが対象が大きすぎるためダメージが与えられているのかわからない

「デカすぎる。こいつが陸に上がる前に何とかしないと」

焦るバース。すると海に落ちたオーズが合流する

「後藤さん、大変です！」

「どうした！」

「さっき落ちた時、サメの頭の臭覚でセルメダル探ってみたんですけど。こいつイカの頭の部分で海の生き物補色してるんです！」

「なんだと!？」

「しかもその度セルメダルの臭いが段々濃くなってかなり危険です！」

「確かに、海の生物がこいつに全て食い尽くされるかもしれん。早くなんとかしないと………」

オーズとバースがそんな会話をしているとハイエナイカヤミーは再び雄叫びを上げふたりをたたき付けられ、オーズは海岸へ打ち上げられ、バースはイカの触手に捕まえられる

「後藤さん!!」

するとアंकが駆け付ける

「アंकお前いったいどこ行ってたんだよ!!」

映司はアंकに怒鳴り付ける勢いで言うが、アंकはそれを無視し、自分が話し出す

「映司、こいつを使え」

そういつてアंकが取り出したのはハウオウ、カラス、ペンギンの

銀枠の赤いメダル3枚だ

「アंकこれ!？」

「いまはこう言ってるヒマはないだろ。とつとあの気色悪い怪物潰してこい。犬とイカ臭いんだよ」

「ああ、だったら遠慮なく使わせてもらおうよ」

そう言うとおズはアंकからそのメダル3枚を借り受けベルトへセツトしオースキャナーでメダルスキャンする

『ホウオウ!カラス!ペンギン!ホーラスーギンー!!!』

カウント・ザ・メダルス45聖鳥とサソリと消えたセル（前書き）

タジャドルコンボが炎弾をやミーに放ち

「魔法少女リリカルなのは○○○」

瞬時にホーラスギンへコンボチェンジしメダグレンバーで敵を切り裂く

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス45聖鳥とサソリと消えたセル

『ホウオウ！カラス！ペンギン！ホーラスーギンー！！！』

オーズがスキャンしたメダルはバンクのメダル。つまりアंकと対をなす赤のメダルだ

頭には鳳凰の尾をもしたフェニックステイルが後頭部から伸び、肩には鳥の黒い翼をもしたレイヴンシオルダーに右手にはメダグレンバー、足は人鳥の身体がそのまま武装化したペンギンレッグが装着されたコンボ。仮面ライダーオーズホーラスギンコンボだ

オーズは赤の配色が施されたフェネクスウイングを展開し飛び立ち、イカの触手に囚われたバースを救出。ハイエナイカヤミーは触手を斬られた痛みから後ろに向かって倒れる

オーズはその後海岸へバース連れていき、海岸に下ろす。その間にバースの装着されていたハッピー・アーマードが戦闘の衝撃に堪えられなくなりピキッ音をたて破壊されバースに戻る

「お前、火野なのか？」

「はい。いまから子供を助けに行きます。後藤さんは休んでいてください」

「わかった。頼むぞ」

「はい！！」

オーズはアंक達に背を向けるとフェネクスウイングを展開し空中へ飛び出し、一気に降下し起き上がりとしていたハイエナイカヤミーに脳天にペンギンレッグでのカカト落としが炸裂する

さらに空中半回転をしメダグレンバーで額を突き刺すと傷口からはセルメダルがあふれるように飛び出しオーズは一時離脱する
それを見ていたバースは

「すごい、これなら勝てる!!」

と海岸でガッツポーズをした。だが次の瞬間

「シャアアアアアア!!」

と蛇の鳴き声を真似たような奇声を発しながら1匹の怪人、ウミヘビカモメヤミーがバースに牙をむき襲い掛かる。バースは軽やかな動きで回避する

「なんだこいつ!？」

「そいつはヤミーに囚われているガキのヤミーだな。まさかひとりの人間から2体のヤミーが生まれるとわな」

「なんでもいい!とりあえずは……」

バースは自分が乗って来たライドベンダーを睨み、それに誘導しながらバースは戦闘を開始する

オーズはセルメダルをメダグレンバーにメダルを3枚スロットしオースキャナーでスキャンする

『チェックメイト!! スキャンングチャージ!!!!』

メダグレンバーに強力な炎を纏わせバンクの奥義、落花炎月覇を衝撃波として放つが、傷は浅くダメージは低い
だが傷口からトーマの体が姿を現す

「いまだ!!」

オーズは一気に急降下しトーマの手をとり離脱、トーマを安全な場

所へ連れて行くき、オーズはハイエナイカヤミーの元へ戻る

バースも右腕にドリルアームを展開しウミヘビカモメヤミー殴る。

そして最後に思い切り左で殴り飛ばす

その隙をつきバースはライドベンダーをバイクモードからベンダーモードへ変形しライドベンダーからセルメダルを根こそぎ取りセルメダルをあるだけの枚数スロット、約1000枚をスロットするとバースの全ユニットが出現、そして合体しCLAWS・サソリを召喚する

CLAWS・サソリはバースの身体と連動しウミヘビカモメヤミーに襲い掛かる

オーズはメダグレンバーを構え空中で目にも止まらぬ速度での剣技を連続で何度も繰り出す

バースも地上にいるウミヘビカモメヤミーに大きなダメージを与えるとバースバスターのメダルポッドを銃口にセットする。オーズも3枚の赤いメダルをスキャンする

『セルバースト!!!!』

『スキヤニングチャージ!!!!』

バースは銃口をウミヘビカモメヤミーに向け必殺技セルバーストを発動する。オーズは上空に一気に上昇。そしてオーズの足の形状が変化し膝からペンギンの頭をもした突起物が出現しフェネクスウィングで一気に降下する必殺技、インフェルノドロップをハイエナイカヤミーに叩き込む

「セイヤーあああああ!!!!」

「はあああああ!!!!」

そして2体はふたりの必殺技を受け同時に爆発しセルメダルへと飛び散り、海へ散らばる

その後、トーマは病院へ搬送され一命をとりとめ、赤い銀梓のコア3枚は映司の手からバンクへ帰った
だがひとつ妙な事が起こっていた
それはオーズとバースが倒したヤミーのセルメダルを回収しに向かったが、回収した管理局員からの報告によると、セルメダルは1枚もなかったという報告だった……



数時間後のナカジマ家

「「おかわり!!」」

いまは食事中的ようだ。で、いまの声はスバルと退院したトーマだ。茶碗の中身がなくなったのでギンガに茶碗を向ける
ちなみに映司と後藤もいる。トーマを助け出した恩人であるがふたりはそんなことは気にしてないがスバルが食事に誘ったためお言葉に甘えて来ている。アंकは「くだらん」という理由でいない

「はいはい、順番ね」

ギンガはニコニコした表情でトーマから茶碗を受け取りご飯をよそいそれをトーマに返すとトーマはガツガツと食べはじめる。その光景を映司と後藤を含む全員が唾然とした表情で眺めていた

「大丈夫なのか?そんなにガツガツ食って……」

ノーヴェは心配してトーマに言うが

「大丈夫。昨日からほとんど食べてないし、なんでかすごく腹減っ

てるんだ」

「そ、そうか………」

「まあ、男の子だし、たくさん食べるのはいいことだわな」

そう言ってゲンヤは酒の入ったグラスを口へ持っていく

「そうだよ！食べる事はいいことだ！」

とスバルは言うが

「お前は食いすぎな」

「えっ!？」

とゲンヤに言われるスバルだった

するとチンクが口を開く

「そういえば火野、お前は今度の管理局のイベント知っているか？」

「管理局のイベント？」

「そう、5日後に行われる『特別感謝管理局ご招待』というのだが。地上本部を中心に各部体を周るという特別な行事だ」

「へー。という事は………」

映司は米を箸でつまんでいた後藤に視線を向ける

「後藤さんもでるんですか？」

「ん？まあな。俺は108部隊の所属扱いだからな。お前は来るのか？」

「そうですね。3日間あるのなら楽しそうですね。行ってみようと思います」

「そうか………」

後藤はテーブルの料理を口へ持っていく。するとギンガが

「あのー、お話はそこまでにしておかないと………」

ギンガはゆつくりとテーブルの料理を見る

「なくなっちゃいますよ?」

テーブルの料理はほとんどなかった

「「あああああああああ!!!」」

映司とこうしてナカジマ家に光が戻ってきた



廃墟のビルのソファ

そこにはひとりの男が踏ん反り返っていた
するとドアをコンコンとだれかがノックする。それは

「帰ったわよ」

実体を持ったフランだった。フランがなぜ肉体を持っているのかは、早朝の戦いの前にあの海域にフランのコアメダルを単位の枚数を配置しオーズとバースが倒した2体のヤミーのセルメダルを吸収し一時的に元の姿に戻ったのだ

「ごくろうだったなフラン。お前にそのような仕事をさせるとは………」

「気にしないでいいわ。それより、早く私を戻してちょうだい」
「ああ、わかった」

するとドルは両腕を大きく開くと怪人体に変身しフ란のメダルを
全て吸収する

（戦いが終わるまではこの姿のほうがいいものね）
「そうかもな」

ドルは怪人体から人間体に戻ると再びソファに腰掛ける

（で、これからどうするのドル？）
「そうだな。とりあえずはこれだな」

ドルはそう言うのと懷から1枚のチラシを取り出す。そこには「特別
感謝管理局ご招待」と大きく書かれていた

「このだ。この日に今まで計画していたアレを実行する」
（ついにこの日が！）

「そうだ。この日が俺達とオーズとの最終決戦の日になるだろう」

ドルは立ち上がり、セルメダルを1枚取り出す。そして自分に投入
する

するとドルの腹部分から1体のヤミーが誕生する。その姿は4種類
の生物を融合させたモノだった。クモ、サメ、オオカミ、コウモリ
の4匹を融合させた生物。クサオオモリヤミーが誕生する

「こいつと俺達全員でオーズ、バース、ヴィーズ、バンク、アルカ
ナを叩き潰す！！」

カウント・ザ・メダルス46喫茶と祭と最終戦争（前書き）

噴水を背に佇むバース

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

そしてハッピー・アーマードをセットしフォームチェンジする

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス46喫茶と祭と最終戦争

先日起きたハイエナイカヤミーの事件は『巨大暴走ヤミー事件』として収集された

それから5日後映司、ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナそしてアंकはゲンヤが指揮をとる108部隊へ来ていた

「「「うおおー!!!」」」

今日は『特別感謝管理局ご招待』の会場になっていた。108部隊だけでなく地上本部の入り口付近には出店も営業しているそれはそうと、『特別感謝管理局ご招待』とはこの小説オリジナルの行事で、一般の方々にいろいろなサービスをする行事であるその108部隊は現在

「「「いらっしやいませ!!!」」」

喫茶店になっていた

そして店員の女性がひとりがやって来る

「いらっしやいませ108喫茶へ。テーブルへ案内します!!!」

映司達6人は店員の女性に従い席へ案内される

「どうぞこちらです」

案内されると、映司、アंक、ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナの順番で座りメニューを見はじめる

「えっと、俺はなににしようかな」

映司はそう呟きメニューを眺めている。と

「皆、よく来てくれた」

そこには人数分のお冷やを持ってきたウェ이터姿の後藤だった

「後藤さん。結構さまになってますね」

「まあな。ナカジマ三佐が俺用のオーダーメイドだと言っていた」

「そうなんですか」

後藤と映司がそんな会話をしているとアंकが荒い口調で言う

「おい映司！」

「どうしたんだよアंक？」

「さっさとメニューをよこせ。後がつかえてるんだよ」

「ゴメンゴメン。はい」

「チッ、たくっ」

映司からメニューをうばっ……、もとい受け取りページをめくる。
その間に後藤は全員にお冷やを並べ終える

「で、注文は決まったか？」

後藤はボールペンとメモ帳を取り出しメニューを聞く

「俺はこの108特製アイスだ!!」

「私はギャラクシーパフェ！」

「私はアールグレイを……」

「えーと私はこのN2R特製ケーキを!!」

「じゃ私は、カポーンケーキをひとつ！」

「俺は、水をおかわり……………」

上からアंक、ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ、映司の順番で言う

だが後藤はなにかが引っ掛かった

「火野、お前やっぱり……………」

後藤は声に出さなかったが心で「味覚が」と言う。映司のグリード化はセントのコアメダルの力で押さえ込んでいるが、すでに進行してしまったグリード化を戻すことはできない。後藤は頭をボールペンの数度掻くと注文を確認する

「注文は特製アイスひとつ、ギャラクシーパフェひとつ、アールグレイひとつ、特製ケーキひとつ、カポーンケーキひとつ、そして和風餡蜜をひとつだな」

注文の中身がひとつ多くなっていた

「後藤さん、俺は……………」

映司がそう言うとき後藤はため息をつきメモ帳を閉じて言う

「いいから食っておけ、俺からのおごりだ」

「後藤さん……………。ありがとうございます」

「ああ、俺はこれを厨房に出して来るから、ゆっくりしていつてくれ」

「「「はーい！！」」」

後藤の言葉にヴィヴィオ、リオ、コロナの3人はいい返事を返す
そしてテーブルの全員で喫茶店を出た後の事を話し合うことになった

「映司さんこれからどうします？」

「そうだね。なのはさん達はなにやってるんだっけ？」

「えっと、なのはママとフェイトママはシャーリーさん達とフリー
マーケットやるって言っていましたよ。こんなの」

鞆を探り、取り出したのは手作りの小さなウサギのマスコットだった

「伊達さんは病院の許可貰って、はやてさんとタコ焼きとおでんの
出店やるって言ってた」

「ミウラちゃんもお手伝いしてるんだよね」

「そうらしいね」

このように賑やかな会話がこの席では行われており数分後それぞれ
のメニューが届きそれを食べ終わると地上本部へ足を運ぶ映司達だ
った



そのころ地上本部から離れた森では怪人体のドルとクサオオモリヤ
ミーが並んで立っていた

「わいわい、キャーキャー楽しそうだな」

（そうね。でもこれから私達の起こす事で全てがひっくり返るわね）

「ああ、そうだな。いくぞ……………」

ドル達は動き出す。戦争を起こす為に

◆
「いらっしゃい!!」

地上本部前の一軒の出店。そこには『伊達印の狸タコ焼き&おでん』と幕には書かれていた
ちなみに今の声は伊達のである

「お客さん、なににします?」

「そうですね。餅巾着とちくわ、それとタコ焼きひとつ」

「あいよ!はやてちゃん巾着とちくわ、タコ焼き1つづつ!!」

注文を聞くと伊達は後ろの方で仕込みをしているはやてとリインに伝える

「はいはい!」

はやてとリインは素早く餅巾着とちくわをトレーに、タコ焼きを専用のケースに入れる

「ほい、お待ち!!」

伊達ははやてから品物を受け取るとビニールに入れ客に渡す

「はい、おまちど。合計840ポイントね」

説明が遅れたがポイントとはこの『特別感謝管理局ご招待』にのみ使うことができるカードで、開始から終了まで管理局関係の店全てで使える。ポイントは入口付近で現金と交換できるのだ

「はい、ありがとうございます」

客は商品を受け取りポイントカードを渡すとそのまま去っていく

「ふう、売れ行きも順調だな」

額を拭う伊達。ちなみに見た目は腹巻、に鉢巻きというスタイルだ

「せやな」

「リインはくたくたですう」

「そうですね」

はやてはエプロンで手を拭きながら言う

リインとミウラは椅子に腰掛ける。ちなみにリインは等身大サイズだ

「まあ、いつもの任務よりたまにはこんな仕事もいいじゃねーの」

「せやな。最近、デスクワークが多いせいで腰や肩と腰が痛いんよ」

あははと笑いながら言うはやて

「はやてちゃんも歳ですかね」

「リインそんなこと言う娘は夕食無しやで」

「それだけはかんべんしてほしいですう」

はやてには頭が上がらないリインだった



その頃なのは、フェイト、シャーリーのフリマは

「いらっしやい」

小さい出店で地面にはブルーシートを敷き、後ろの方ではなのはとシャーリーがダンボールの開封をしてみた。そして客としてやってきた小さい少女に笑顔で声をかけるフェイト

「えーとね。あのウサギさんください」

「はい、500ポイントね」

フェイトは結構大きいウサギのぬいぐるみを少女に渡す

「ありがとうお姉ちゃん。はいお金」

「毎度ありがとうね」

「うん、ママー!!」

少女はポイントを渡すと母親の元へ走っていく。フェイトはそれを手を振って見送る

すると後ろで作った商品をダンボール詰めを開封し終えたなのはとシャーリーがやって来る

「フェイトちゃんただいまー」

「ダンボールの開封終わりました」

「お疲れ様なのは、シャーリー」

そしてなのはとシャーリーはフェイトの横に座る

「フェイトちゃんどう売れ行きは？」

「いい感じじゃないかな。小さい子供に人気あるからねなのはのぬいぐるみ」

「褒めてもなにも出ないよ」
「ふふふ」

なのは、フェイトの順番で会話が続く

するとシャーリーが立ち上り靴を穿く、それにフェイトが気がつく

「どうしたのシャーリー？」

「いえ、フェイトさん。なにか飲み物でもと思いまして。フェイトさんとなのはさんはどうします？」

「私はコーヒー」

「私はミルクティーを」

「はい。なのはさんはコーヒー、フェイトさんはミルクティーですね。では行ってきます」

「はい」

「いってらっしゃい」

シャーリーは駆け足で3人分の飲み物を買いに行く

シャーリーがいなくなるとなのはとフェイトは懐かしそうに話をします

「本当に懐かしいねフェイトちゃん」

「そうだね。なのは」

「私達中学までしか通ってなかったし、アリサやすずかは高校へ進学して大学。卒業してからもバシバシお仕事してるからね」

「うん。それにこの行事、学校の文化祭みたいで楽しいしね」

「そうだね」

なのはとフェイトは思いで話をしていた
すると2人の夫婦が姿を現す

「こんにちは」

「ご無沙汰しています」

セントとバンクだった

「セントさん、バンクさんも」

「いらっしやい。なにか捜し物？」

フェイトがふたりに問う

「いや、何となくね。ぼくはスクライア司書長に暇を貰ってね。この明日までは休暇扱いだよ」

セントは笑顔で言う

「ということはバンクさんも？」

「はい。私も『たまには仕事を忘れて夫婦でのんびりしてくれ』とクロノさんが」

バンクは頬を赤らめ照れながら言う。以前のクールなバンクは一体どこへ行ったのかな？

「うるさい!!」

バンクは天に向かって怒鳴る

「どうしたの!？」

セントの言葉でハッとバンクは我に戻る

「なんでもありません。ごめんなさい」

バンクはぺこりと頭を下げる

するとセントはとんでもないことを口に出して言う

「ところでなのはさーん」

「はい？」

「スクライア司書長と最近どうなの？」

「にゃっ!？」

セントの言葉になのはは超驚く

「なっ、何言ってるんですかセントさん!？」

「いやね。スクライア司書長いつもなのはさんの写真手帳に入れて持ち運んでいるからどうなのかな♪いつも写真みてはため息ばかりだね」

セントは呆れ口調で言う。なのはは顔を林檎より真っ赤にして恥ずかしがる

そしてバンクはなのはの肩の高さまで屈み、右手をポンツとなのはの肩に置く

「大丈夫です」

「バンクさん……………」

「愛があればいずれかならず!」

バンクはすげー優しい笑顔で返す
続いてフェイトは左肩に手を置く

「頑張ってるのは。私応援するから!」

フェイトも優しい笑顔で返される

「だから………」

なのはが声を出そうとした瞬間

「キャアアアアアアア！！！」

ひとりの客の悲鳴で全てが打ち碎かれる
それは欲望の進撃だった



ー108喫茶ー

「なんですって！？」

耳に携帯電話を当てながら叫ぶ後藤。伊達と通話してる

『ヤバいことになってる。1000以上の屑ヤミーが管理局本部に押し寄せてきている！！いまは武装隊の連中とバンクさん達と後藤ちゃんの後輩のレイアちゃんが応戦してくれているがいつまで続るか正直わからん。後藤ちゃんも早く来てくれ！！』

「はい！わかりました。ただちに向かいます！！」

後藤は伊達との通信を切る

そんな様子の後藤に後ろから映司がやって来る

「どうしたんですか後藤さん？」

後藤はサッと振り返る

「火野か。大変だ実は今伊達さんからの連絡を受けたんだが、管理局地上本部に屑ヤミーが押し寄せている」

「え!？」

「いま、武装隊の隊員とバンクさん達とレイアが食い止めている。俺達も急ごう」

「はい! アンク!!」

映司は返事をするすぐにアンクを呼ぶ

「わかっている聞こえた。いくぞ」

そしてアンクはまっすぐドアを開ける

「後藤さん、俺達も行きましょう」

「ああ」

映司と後藤も現場に向かおうとした瞬間

「待ってください。私も行きます」

アインハルトもやって来る

「アインハルトちゃん……。だけど……」

映司は迷ったどうするべきか。屑ヤミーの群れに小さい少女を戦いに巻き込むべきか
そして決断する

「わかった！行こう！！」

「はい！！」

そして映司はアインハルトと共に戦う事を決断する

「ヴィヴィオちゃん、皆ちょっと俺達出てくるから、ここから動かないでね！！」

「あ、はい。わかりました。気をつけて……………」

「うん、ありがとう！よし、行こうアインハルトちゃん、後藤さん！！」

「ああ！！」

「はい！！」

そして映司、アンク、後藤、アインハルトは屑ヤミーが押し寄せている地上本部へ急ぐのだった

カウント・ザ・メダルス47避難とプロトと伊達リ・バース（前書き）

佇む伊達、そしてプロトバースのベルトを巻きメダルをスロットし
グラップアクセラレータを回転

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そしてプロトバースへ

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス47避難とプロトと伊達リ・バース

現在、地上本部の入口付近では大規模な戦闘が行われていたのは、フェイト、はやてが3ヶ所で指揮をとり、武装隊の局員を総動員し押し寄せる屑ヤミーを撃退させようとする

その最前線に伊達、とバンク、レイアの3人が応戦する
バンクは変身せずメダグレンバーで1体つつ切り裂け、レイアもアルカナへ変身しアルカナの武装『No、XX・カン・ブレード』を握り屑ヤミーと応戦していた

「クソッ、きりがない！」

伊達はバースバスターを握り屑ヤミーを打ち抜く。すると

「ええーん！ ママー！！」

伊達は逃げ遅れたのはが作ったぬいぐるみを持った女の子を発見する

「おいおい！ 嘘だろ！？」

伊達はすぐ走り出し屑ヤミーの壁を突破しつつ少女の元へ急ぐ

「邪魔だ！ どけえ！！」

伊達はバースバスターで屑ヤミーを打ち抜いたり、蹴り飛ばしたりして少女の元へたどり着く

「大丈夫だ。恐かったな」

「うん………」

少女に声をかける伊達。その少女を安全な場所へ連れていこうと抱き抱え振り返ると

「アア………」

屑ヤミーが真後ろにいた

伊達はその子を抱え後ろを向き屈くするとブォンという音が屑ヤミーを吹っ飛ばす。それはライドベンダーにまたがったバースだった

「伊達さん、大丈夫ですか！？その子は？」

「ああ、大丈夫だ。すぐそこに避難所が設置されたからこの子届けて来るわ」

「お願いします」

「そういえば火野達は？」

「火野とアインハルトちゃんと俺で3ヶ所に別れて現在交戦中です」

「そうか、わかった。じゃ俺は行くけど後頼んだよ後藤ちゃん！」

「はい！！」

伊達はその子を避難所へ届けに行った



『トリプル！！スキヤニングチャージ！！！！』

タトバコンボのオーズはメダジャリバーから放たれる空間すら切り裂く剣劇、オーズバッシュを屑ヤミー共に放つ

「くっ、きりがいい……」

するとオーズの目が紫に光り地面に腕を突き刺しメダガブリューを取り出しメダルを1枚食わせ頭をあげる

『ゴックン!! タタバ!!!!』

メダルを飲み込む音声と現在のコンボ名を発するとカラオケのタトバコンボの歌が流れる

そしてメダガブリューをスイングするような斬激、グラント・オブ・レイジを放つ

「ふう、だいたい片付いたな」

オーズは気をゆるめ肩の力を抜くと、後ろの方にはいたアंकが言う

「映司、気をつけてろ。なんか来る」

「え？」

オーズはメダジャリバーとメダガブリューを二刀流で構え感覚を研ぎ澄ませる。アंकも同等に腕を怪人化させる
そして、トントントンと静かな足音が響く

オーズ達はその方に体を向ける。そこには人の姿をしたドルがいた

「久しぶりだな。オーズ、アंक」

ドルは鼻で笑い声を出す

「どうだ。この祭は？」

「「祭？」」

「そう祭だ。屑ヤミー共が花火で俺が主催者。まさに祭だろう？」

その言葉を聞いたアंकはボソッと「くだらんと」呟き、オーズは

「ふざけるな!!!何が祭だ!!!祭というのは、人々が笑い、喜び、楽しむものだ!!!こんな戦争みたいなのは祭じゃない!!!!!!」

激怒していた

そしてドルはハアとため息をつく

「そうか、残念だ。だったらこの場で消えろ!!!!!!」

そうするとドルは怪人体へ変身する

オーズも素早く反応し構えをとる

「映司、こいつには生半可な攻撃は通用しない。これでコンボチェンジだ!!!」

そう言ってアंकが投げたのは銀枠の青のメダルだった

「わかった。使わせてもらうよ」

そしてオーズは走り出しコンボチェンジする

『サメ!エイ!イカ!サッササエーカ!!!サッササエーカ!!!!!!』

オーズはサエーカコンボとなりドルへ突っ込む



「数が多すぎる!!」

リンリンリン!!と音をたてながらバースバスターを連射するバースすると赤い斬撃が屑ヤミー共を一刀両断する。アルカナの必殺技カ
ン・ブレードでのカンバーストだ

「後藤先輩!!」

「レイアか。お前が担当してていた方の屑ヤミーはどうした？」

「あらかた片付いたので、後藤先輩のサポートに」

「そうか。だがこっちはまだかなりいるな」

「そうですね」

バースは押し寄せる屑ヤミーの前に立ち、セルメダルをスロットし
グランプアクセラレータを回転させ、ブレストキャノンを装備する
さらにセルメダルを2枚連続でスロットする

『セルバースト!!』

その発音と同時にブレストキャノンにエネルギーがチャージされそ
れを一気に解放する!!

ズドオオン!!と音をたて屑ヤミーを一掃する。が突如1体のクモ
とサメとオオカミそしてコウモリの融合したヤミー、クサオオモリ
ヤミーが姿を現す

「」「貴様等。よくも我々の同報を消してくれたな。叩き潰す!
!!!!」

4つの声が重なった声を発するクサオオモリヤミーはゆっくりと前
進する

「レイア、後方支援頼むぞ」

「はい！」

するとバースは突進し、アルカナはカン・ブレードを消滅させ、Dカンを取り出しアルカナトランサーにセットそれからセルメダルを7枚スロットし『XII・カン・ライフル』を出現させ後方支援の体制に入る

バースも突進しながらセルメダルを2枚スロットする

『キヤタピラレッグ！ドリルアーム！』

バースはキヤタピラレッグを装着し間合いを詰めるとドリルアームを回転させ殴ろうとするが、その拳は軽々と止められる

さらにその拳を払いのけると衝撃波を放つ

バースとアルカナは吹き飛ばされ変身が解除され倒れてしまう

「なんていう力だ………」

地面を叩き悔しそうに言う後藤

「」「ふっふっふ。みたか我が力を！！」「」

勝ち誇った物言いをするクサオオモリヤミー

その最中メダルタンクを担いだ伊達が駆けつける

「後藤ちゃん、レイアちゃん！！」

すると伊達は鋭い眼力でクサオオモリヤミーを睨む

「お前がやったんだな……………」

「「「そうだ!! 貴様もやられに来たのか?」」「」」

「いや、俺は……………」

するとメダルタンクから1本のベルトを取り出すそのベルトは……………

「稼ぎにた!!」

後藤の目にそのベルトが飛び込む

「それは、プロトバースの!?! なぜ……………」

「あ、これ? これね鴻上会長に黙って借りてきちゃった」

「伊達さん……………」

ハアとため息をつきあきれた表情でいう後藤

「まあ、いいから。全員でいくよ後藤ちゃん、レイアちゃん!!」

そして2人はサッと立ち上がり伊達の横に並び

「「おう!!」」

と雄たけびを上げる。3人は同時にベルトを巻き後藤と伊達はセルメダルをスロットしグラップアクレレータを回転させる、レイアはDカンセットし横に倒す

「「「変身!!」」」

『『カポーン!!』』

『プシュ!!』

そして後藤はバースへ、伊達はプロトバースへ、レイアはアルカナへ変身しアルカナが前に出る

「世界を愛し、運命を導くタロットの戦士。仮面ライダーアルカナ
！！」

アルカナは右手を天にかざし、それを胸に持ってきて、それを一気に右の方向に払うポーズを取る
続いてプロトバースが前にでる

「これだけ稼いで命救い。欲望制御で力を解放する奴。仮面ライダー
プロトバース！！」

指で1億のポーズをし天を指す。そしてそれを拳にしゆっくりと下へおろし肩まで来ると一気に拳にしそれを突き出す
さらにバースも前へ出る

「あの人（伊達）の意思をつぎ、世界を守る戦士。仮面ライダーバース！！」

バースは左手を前に突出し、それを肩の下へ持ってきて、続いて右手を天にかざし胸へ持っていく

「全員まとめてセルで行くぜ！！」
「おう！！」

中央のプロトバースはクサオオモリヤミーを指さし、バースとアルカナは声を上げる
そしてバースはカッターウィング、クレーンアーム、ドリルアーム、

シヨベルアームを装備。プロトバースはバースバスターを構え、アルカナは巨大な黒い鎌、『XIII・カン・サイズ』を装備しクサオオモリヤミーに攻撃したす

「はああああ!!」

バースはクレーンアームからドリルアームを飛ばしクサオオモリヤミーを固定。さらに上空からのクレーンアームでの打撃を食らわせ、さらにキャタピラレッグを装備し蹴り飛ばしドリルアームを切り離し地面に足を付く

だがまだ攻撃は続く。プロトバースはバースバスターの弾が切れるまで連射する

そして弾が切れると同時にアルカナはカン・サイズを肩に突き刺すそしてアルカナトランサーにセルメダルを9枚とDカンを設定する

『セルチャージ・NO・IX・カン・バレット』

の発音後、Dカンは小型拳銃の形状をとりアルカナはそれをつかみクサオオモリヤミーに5発の銃弾を浴びせる。そして一定の距離にアルカナは離れ、バースバスター改を取り出しメダルの入ったメダルポッドを発射口にセットする

プロトバースはブレストキャノンを展開しセルメダルを2枚連続でスロットする

バースもブレストキャノンを展開しバース・ディとなりセルバツシユモードを発動する

『『セルバースト!!!!!!』』

「おりゃああああああああ!!!!」

「はああああああああ!!!!」

「うおおおおおお!!!!」

3人は必殺技セルバーストとブレストキャノンシュートをクサオオモリヤミーに叩き込む

「「「バカな!!この私(俺)(我)(ボク)がああああああ
あああああああ!!!!」」」

そしてクサオオモリヤミーは爆発しセルメダルへとバラける
その後バース達は中央に集まった

「やったな!」

「「はい!!」」

プロトバースが右手を掲げると、バースとレイアもそれにつられ右手を掲げ、勝利する
一方オーズは……



ドルはオーズを探していた。いやいわけではない。サエーカ
の能力で空気中の水分に溶け込んでいるのだ。攻撃時のみ姿を現す
ことができる

「チッ、フランのコアで遊びやがって……」

と呟くドル。するとドルの背後の空気が乱れ、オーズサエーカ
コンボの腕が伸びる。エイのメダルの特徴はメダルの結合を悪くする
効果がある。これを連続で繰り出せばグリードだろうと致命傷になる。
だが

（ドル。後ろよ）

「ああ、わかってる!!」

フランの言葉でドルは回転蹴りをオーズに繰り出す。その蹴りはオーズの首へヒットし叩きつけられオーランサークルを踏みつけられる

「この程度か……」

そしてドルはオーズドライバーのフランのコア、サメ、エイ、イカのメダルを抜き取り、オーズの変身が解除される

「さて後は……」

ドルはアंकの方へ向く

「お前の持っている俺達のコア返してもらおう」

「チッ……」

アंकはメダルホルダー隠しながらをゆっくり後ずさる
すると

「映司くん!!」

セントが駆けつける

「これを使え!!」

セントは映司に1枚のメダルを投げる。映司はゆっくり起き上がりそれをキャッチする

「これは……………」

映司はセントを見ると、セントはただ首を縦に振るだけだった
そして映司はタカとそのメダルそしてバツタのメダルをオーズドラ
イバーに入れそのメダルをスキャンする

『タカ！ エリオ！ バツタ！』

カウント・ザ・メダルス48連続チェンジとリリカルメダルとナフエハ・リリカ

ネタが浮かばなかったので過去のやつを

ライドベンダーで走行する。オーズ

「魔法少女リリカルなのは○○○」

坂から飛び降り目の前で着地する

「このあとすぐ!!」

ちなみに本日2話目です!!

頑張りました!ではどうぞ!!

『タカ！エリオ！バツタ！』

オーズはスキャンすると頭は通常のタカヘッド。足も通常のバツタレッグだが、新しくスキャンしたメダルはあの機動六課、ライトニング3、のエリオ・モンディアルのメダルを使ったコンボ、オーズタエリバコンボへと変身する

オーズには大きなフェイトメダルと同等の白いマントが備わり肩から腕にかけて真っ赤なエリオのバリアジャケットの裾が装着され、エリオの相棒ストラーダのレプリカを装備されている。レプリカだが本物のストラーダと同等の力を持っている

「なんだその姿は！？」

その姿を見たドルは動揺して後ずさる

オーズはバツタレッグで大きく飛び上がりストラーダのブースターを使いドルへ急降下する

「セイヤー！！」

ドルもセルメダルでランスを作り上げストラーダと正面から衝突させる

弾かれたオーズは空中で回転しながら着地する

「映司くん次はこのメダルだ！！アंक、ゾウのメダルを」

「俺に命令するな！！」

セントは次にまた違うメダルを投げ、アंकに指示を出す。アंक

は文句言いつつもゾウのメダルをオーズへ投げる

オーズはそれをキャッチするとエリオとバッタのメダルを抜き取り、新しいメダルとゾウのメダルをセットしスキャンする

『タカ！ ヴィータ！ ゾウ！』

次にオーズがスキャンしたのは夜天の守護騎士、ヴィータのメダルを使ったコンボオーズタヴィーゾコンボヘチェンジする。肩にはヴィータが赤いウサギのぬいぐるみの頭も装着され、もちろんグラーフアイゼンもちやんと握られている

オーズタヴィーゾコンボは持っていたグラーフアイゼンを巨大ハンマーモードのギガントフォームにし一気に振り下ろす。ゾウのメダルにしたのは踏ん張りを付けるためだ

「くっ！」

ドルはポンドの針を取り出し針とランスを盾にその攻撃を弾くがダメージはあり、よろめいている

その隙をつきセントはまた違うメダルを投げる

「次はこれ！ アンク、チーターを」

「チッ……………」

セントは次に青いメダルを投げアンクはもう逆らうのは面倒なので黙って従う

オーズはメダルをキャッチしヴィータとゾウのメダルを抜き取り新しいメダルとチーターのメダルをセットしスキャンする

『タカ！ スバル！ チーター！』

次にオーズはオーズタスバターコンボだ
スバル・ナカジマの母から受け継いだリボルバーナックルとスバル
がバリアジャケットの時着ている白いジャケットも着用し、左手の
甲にはマッハキャリバーをもしたクリスタルが埋め込まれている
そしてチーターの足を使いものすごいスピードでドルの懐に入る

「しまった！」

ドルは防御の体制に入るが遅い

「リボルバーキャノン！！」

ドルの腹にスバルの技リボルバーキャノンが一発入る。それにより
ドルは吹き飛ばされ壁に激突する

さらにセントは別のメダルをオーズへ投げる

「次はこれだ！アंक、メダルはタコを」

「……………」

次にセントが投げたのは橙色のメダルだった。アंकは黙ってタコ
のメダルを投げる

オーズはそれをキャッチしスバルとチーターのメダルを抜き取り橙
のメダルとタコのメダルをスキャンする

『タカ！ティアナ！タコ！』

オーズが次にスキャンしたメダルはティアナ・ランスターのメダル
だった。スバルメダルと同じジャケットを着て、腰にはクロスする
ようにベルトが巻かれる。さらにそこから2つのホルスターが垂れ、
中にはティアナの相棒クロスミラージュもセットされている

そしてタコの足を地面と吸着させるとホルスターからクロスミラー
ジュを抜きドルに向かって連射する

オレンジの魔力の弾丸がドルの体を打ち抜くだがドルはフランの能
力である水を操る能力で水柱を作り防御する

またまたセントは新しいメダルをオーズへ投げアंकへ指示を出す

「次はこれだ！アंक、コンドルを頼む！！」

「はぁ……………。何枚あんだよ……………」

といいつつもちゃんとコンドルのメダルを投げる

オーズはそれをキャッチしメダルをスキャンする。次のメダルは桃
色に近い赤のメダルだった

そしてティアナとタコのメダルを抜き、そのメダルとコンドルのメ
ダルをセットしメダルをスキャンする

『タカ！シグナム！コンドル！』

次に使われたメダルは烈火の将のシグナムのメダルだ。手にはしか
と愛剣レヴァンティンが握られている。ただひとつ違う点は、赤い
炎の羽が生えているところだった。つまりアギトとユニゾンしてい
る状態のメダルということになる

そしてその羽とコンドルメダルの脚力を使いドルとの間合いを詰め、
そして

「飛竜一閃！！」

レヴァンティンには炎が灯り、シグナムの必殺技剣技、飛竜一閃を
叩き込む

それはドルの肩から入りドルの体に傷を与える。だが

「邪魔だあ！！」

ドルはオーズを蹴り飛ばす

オーズはドルから離れた位置に着地する
するとまたセントが桃色のメダルを投げる

「よし次はこれだ！アंक、ショッカーのメダルを」

「ショッカーはあいつが持ってる！！」

アंकはイライラしたため怒鳴った口調で言う

そしてオーズはその桃色のメダルをキャッチするとシグナムとコンドルのメダルを抜き桃色のメダルとショッカーのメダルをセットにする

『タカ！キャロ！ショッカー！』

次にオーズがチェンジしたのはオーズタキャシーコンボだ

エリオメダルと同じマントを装着し肩から腕にかけてキャロのバリアジャケットの桃色の裾が装備される

するとオーズの目の前に桃色の召喚魔法陣が出現する。キャロはアルザスの竜の巫女。つまり竜召喚が可能だ。ドルは防御の体制に入る

そして魔法陣から出てきたのは……

「ここはどこですか？」

テーブルと椅子、そしてキヨちゃん。つまり彼は、ドクター真木だった！！

「」「」「……………」

オーズ、アंक、セント、ドルの表情が青ざめる
ていゆか何故ドクター真木が出てきたんだ？

キャロの召喚できるのは竜。竜………、恐竜？オーズは紫のコアを
体内に持っている。ということは、つまり恐竜！そしてオーズの体
内には紫の恐竜のコア！！まさか引き合ったのか？

そんなことは構わずドクター真木はキヨちゃんを肩にませオーズの
方を向く

「火野くん。これはいったいどういうことでしょう？」

「えーと説明は後で！それより今はあいつを！！」

するとドクター真木はドルへ視線を向ける

「わかりました。いいでしょう。今回だけ貴方方の助けになりました
よう」

するとドクター真木は紫のオーラを発しグリードの姿へ変身する
そしてドクター真木は全てを無に帰す衝撃波をドルに放つ

「ぐあ！」

ドルの周囲の物は消滅し、衝撃波に耐え切れなかったドルは吹き飛
ばされる

そしてドクター真木は人間の姿に戻るとの足元に桃色の召喚魔法陣
が出現する

「今回はありがとうございます！」

オーズは頭を下げる。ドクター真木は動揺してキョロキョロと回り

を見はじめる

「私の出番はこれだけですか!？」

ドクター真木はズブズブと魔法陣に吸い込まれていく

「待ってください。やめてください。やめなさい!やあああああめろおおおおお!!！」

ドクター真木は元の世界へ帰った

そしてさらにセントはオーズに2枚のメダルを投げ渡す

「映司くん、これが最後だ!」

オーズはそれをキャッチするとキャロとショッカーのメダルを抜きその2枚のメダルをスキャンする

『タカ!イングヴァルト!オリヴィエ!』

続いてオーズが変身したのはかつて古代ベルカの聖王、オリヴィエと覇王、イングバルトの伝説を徹底的に調べ上げた作ったメダルだったするとオーズは姿を消す

ドルは先程のドクター真木の衝撃波を受け立ち上がる

「どこへいった」

ドルは周囲を見回す。そして後ろに振り向くとそこには構えをとったオーズがいた

「覇王断空拳!!」

オーズが放ったのはアインハルトの奥義、霸王断空拳。霸王の力を
持ったメダルの効力でこの技を放つことができる

ドルはその技を防御するが100m離れた場所まで吹き飛ばされる
そしてセントから最後の指示が来る

「映司くん！最後はなのはさん達のメダルでチェックメイトだ！！」
「はい！！」

そしてタカ、イングヴァルト、オリヴィエのメダルを抜き、次に入
れたのは以前セントからもらい受けたなのは、フェイト、はやての
メダルだ。そしてその3枚をスキャンする

『ナノハ！フェイト！ハヤテ！ナ・フェ・ハ！ナ・フェ・ハ！！ナ・
フェ・ハ！！！！リリカル！！！！』

オーズはナフェハコンボへコンボチェンジする。そして再度メダル
をスキャンする

『スキヤニングチャージ！！！！』

するとオーズの姿が消える。違うフェイトのスピードで目に見えな
いだけだ

そしてオーズが移動したのは

「どこへいった！？」

「ここだよ」

「！？」

ドルの正面にしゃがんだ場所だった
そしてオーズは必殺技を放つ

「ナフェハ……………」

まずはドルに向かいディバインバスターを放ち上空へ浮かせその先
へサッと移動しバルディツユのザンバーを構える

「リリカル……………」

そしてザンバーを振り下ろし地面に向かわせる。だがその先にはす
でにオーズがおり、はやての黒い魔法陣を展開すしドル目掛けディ
アボリック・エミツションを放つ

「スリー……!!」

この技の組み合わせを『ナフェハ・リリカル・スリー』という

「うあああああああああ!!!! バカなこのオレがあああああ
あああああああ!!!!」

ドルは爆発しコアとセルにバラけ、オーズ地に足をつきタトバコン
ボへ戻る

「よし映司よくやった」

アंकは口だけで感謝しメダルを広いに行こうとすると鞭のような
ものに襲われる

「ぐっ!? なんだ……………」

すると奥の方から2人の男と女が現れる
オーズはスツと構えその2人に構える
その2人の名は……………

「ウォン、ユーロオ……………」

カウント・ザ・メダルス49爬虫類と最強対最強再びと新たな欲望の王（前巻

プテラの翼とティラノの尾を展開するオーズプトティラコンボ

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

そして正面に向かい冷気を放つ

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス49 爬虫類と最強対最強再びと新たな欲望の王

ウォンとユーロ

このふたりはグリードの中でも最強の部類に入る

特にウォンは合計63枚の銀枠のコアメダルを取り込むことで真の姿へとなる。まさに銀枠のグリードの王

ウォンはそのまま元ドルだったメダルの山からコアメダルだけ抜き取る

「これでほとんどの銀のメダルが俺の手に入った。あとは……………」

ウォンはにやりと笑うとオーズ、アंक、セントををじつと睨む。

オーズの体内にはプティラのコア以外に、セントのユニバガスのコアもグリード化を抑えるために取り込んでいる。アंकも銀枠のコアメダルを所持し、セントは銀枠のしかも紫のコアメダルのグリードだ

「お前たちのメダルだけだな」

「私も手伝いましょうか？」

「お前は黙って見ている」

「はい」

ユーロは崩れた岩に座り込み見物の体制に入る

そしてウォンは1本のベルトを出現させる

「さて、久々に俺も暴れさせてもらおうかあ!!」

『ヒューマンコアセット完了、チェンジタイラント!!』

ウォンはベルトの窪みにヒトのコアメダルをセットすると身体を漆

黒の炎が包みこむ。それを振り払うとウォンは仮面ライダータイラントへ姿を変える

「行くぜ……」

タイラントは腕を上げどす黒い炎を灯す

オーズはアंक達の前に出て構える。するとアंकはやむをえず3枚のメダルを投げる

「映司こいつを使い!!」

アंकの投げたメダルをキャッチするとオーズはベルトのメダルを抜きキャッチしたメダルをセットしスキャンする

『コブラ! カメ! ワニ! ブラカ! ワニ!!!!』

オーズが変身したのは、800年前の錬金術師ガラにより作られ、江戸時代にて徳川吉宗から貰い受けた爬虫類のメダルで変身した、オーズブラカワニコンボだ

オーズは両前腕部のカメラームに装着されているゴウラガードナー前に出すように構える

それを見たタイラントは鼻で笑う

「おいユーロ。あのコンボお前のメダルに対をなすメダルだよな」

「そうですね。ものすごく気分が悪いですねえ」

ユーロは目を細めオーズを睨む

「ふっ、まあいい。俺から行くぞ」

タイラントはザッと地面を蹴りオーズの前に飛び出しオーズを殴るだがオーズはゴウラガードナーからエナジーシールドを展開しタイラントの拳を弾く
その後、バックステップで後ろに飛びメダスカラーを取り出しオーズへ斬りかかる
だがオーズは右足を大きく振り上げソウデッドサイザーから発するエネルギーによりワニの頭部を模したエフェクトが飛び出しメダスカラーに噛みついた。が

「甘い……」

タイラントは足を使って足払いをしオーズは倒れてワニの頭部は消滅し、オーズは背中から倒れてしまう

タイラントはメダスカラーの口を閉じ、坂手持ちにしオーズを思い切り突き刺そうとする

オーズはすかさず横に転がりその攻撃を回避する

するとオーズは近くに転がっていた恐らく今回の管理局の行事での商品だと思われる笛を見つけそれを拾う

「蛇は苦手だけど、いまそんなこと言っている場合じゃない」

オーズはそう言うと言口に当て笛を吹く。するとターバンのように巻かれているコブラヘッドのコブラを実体化させて操る技、カペロブラッシュを発動する

そのコブラはオーズの笛の音に従いタイラントに襲い掛かる

「そんな事もできるのか。俺もできるぜ」

するとタイラントはメダスカラーにセルメダルを3枚食わせる

『メダルチャージレベル3!!!タイラント・スカル・ロード!!!!』

するとメダスカラーの髑髏と刃が分裂し背骨から髑髏が伸び、コブラと髑髏の戦いになる

『シャアアアアアアアアアアア!!!!』

『H a A A A A A A A A A A!!!!』

コブラは伸びる背骨に噛みつき髑髏はコブラの胴に食らいつく
このような戦いが続きオーズのコブラが押し負ける

コブラはオーズのコブラヘッドに戻る、するとタイラントはメダルを1枚メダルをメダスカラーに食わせる

『メダルチャージレベル1!!!タイラント・デス・オーバーロード!!!!』

『終わりだなオーズ。消えろタイラント・デス・オーバーロード!!!!』

メダスカラーをバズーカモードに持ち替えタイラントの必殺技のひとつ『タイラント・デス・オーバーロード』をオーズへ叩き込む

「うああああああああ!!!!」

オーズはもろにその攻撃を受ける

「映司!!!!」

「映司くん!!!!」

それにアंकとセントが声を上げる
オーズは正面から倒れる。そしてタイラントはオーズの背中を踏み

つける

「万事休すだなオーズ。ん…………。なんだこの気配は…………」

タイラントは妙な気配に感づき目を赤に点滅させる。するとタイラントの目に写ったのは

「これはこれは。こいつこんな化け物を記憶に宿していたのか。面白いは俺達がもらっていく」

タイラントは踏みつけたままオーズの頭に触れる。するとタイラントのてには4つのアイテムがあった

ひとつはダブルの世界でのメモリーメモリ、残りはエビ、カニ、サソリの黒いコアメダルだった

つまりそのアイテムは仮面ライダーコアを誕生させるものだそれと同時にオーズの変身が解除される

「ユーロ!!」

タイラントがユーロの名を呼ぶとその4つをユーロへ投げ、ユーロはそれをキャッチする

「なにこれ？」

「面白いもんだ。お前にくれてやる」

「サンキュー閣下」

そう言うとユーロはメモリとメダルを懐にしまう

そしてタイラントは映司に視線を戻す

すると3枚のコアメダルが映司から飛び出す

「これは？まさか！？」

タイラントはそれにのけぞる

映司は足がどけられると立ち上がる。ベルトに飛び出したメダルが収納され、それを映司はスキャンする

「変身！！」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プツ・トツ・ティラーノ・ザウル
ース！！』

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

映司がオーズプトティラコンボへの変身完了と同時にプテラの翼を大きく広げ、ティルディバイダーの尾を出現させ雄叫びを上げ、メダガブリューを取り出す

それに対しタイラントもメダスカラーを持ち、構える

平行するように移動しつつその距離は縮める

一定の距離まで縮まるとお互い飛び出しメダガブリューとメダスカラーの刃が交わる

ガキン！ガキン！ガキン！と音を立てながら刃と刃が火花を散らす
そしてお互いは後ろに飛びタイラントはメダスカラーにセルメダルを食わせる

『メダルチャージレベル1！！タイラント・デス・オーバーロード
！！！！』

メダスカラーをバズーカモードに切り替え、『タイラント・デス・
オーバーロード』の発射体制をとる

オーズもメダガブリューに合計4枚のセルメダルを食わせる

『ガブ！ガブ！ガブ！ガブ！ゴックン！！プツ・トツ・ティラーノ
！！ヒッサーツ！！！！』

オーズも『ストレンドウム』の発射の体制に入る
お互い発射口を向けると同時にトリガーを引く

「はああああああああああああああああああ！！！！！！」

「らああああああああああああああああああ！！！！！！」

『ストレンドウム』と『タイラント・デス・オーバーロード』の
紫と黒の波動が正面からぶつかり合う
そして砂煙が舞う

「はあ、はあやったか？」

砂煙でタイラントは正面がよく見えていない。すると砂煙の中から
一直線にタイラントの足に向かって冷気の波動が伸びタイラントの
足に触れタイラントの膝まで氷漬けになる

「これは！？」

タイラントは足が凍って動けない

すると砂煙が一気に晴れ、その正面にはプテラの翼を広げティラーノ
の尾を振り回すオーズがいた

そしてオーズは一気に上空へ飛び空中でセルメダルをメダガブリュ
ーに食わせ、一気にタイラントめがけ振り下ろす

「セイヤああああああああああ！！！！！！！！」

タイラントは右肩から左脇の下まで大きな斬撃を受ける

「ぐあー!!」

それと同時に足の氷が溶け変身を解除しつつゆっくり後ろへ下がる

「バカな…………。この俺が!!!」

「ウォン、それが欲望だけに縋ったお前の限界だ!」

オーズはそうウォンに言うがウォンはオーズを鋭い眼力で睥む

「ふざけるなよ…………!! 貴様ごときが! 俺に口答えを…………がぁ
!! なにぃ…………」

ウォンは胸に痛みを感じ顔を下すと胸からは真っ赤な血が服に広がり、そして刺々しい剣が胸からつきでる。ウォンは首をひねるとそこにいたのはウォンの腹心、ユーロだった

「はーい。閣下もうおしまい」

「ユーロ貴様ぁ…………」

「この戦いも、あんたの命もね」

そう言うとユーロは剣を一気にウォンから引き抜き、ウォンは前から倒れる

そしてユーロの手にはウォンが持っていた全てのコアがあり、それを全て取り込む

「じゃあね閣下」

ユーロの最後の一言にウォンは散った

カウント・ザ・メダルス50狂いと過去と悲しみの女（前書き）

月下の草原でルーヴィーズが中央にいる

「魔法少女リリカルなのは○○○」

こちらを向きメダグレンバーを構え鳳凰の翼を広げる

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルズ50狂いと過去と悲しみの女

ユーロは血が垂れる剣を振るいウォンの血を払う

オーズやアंक達はその光景を黙って見ているだけだった
するとユーロはドスンとウォンの背を踏み付ける。そして

[illegible]

高い笑い声を上げる。さらにユーロはウォンを何度も何度も踏み付ける

「死んだ！死にあがった！！あの無敵って言われたウォンの奴簡単にくたばりあがった！！！！ざまーねえなあ！！！！」

まるでユーロとは思えない言動だ。その最中変身を解除した後藤と伊達、バンク、レイアそしてアインハルトが駆け付ける

「おいこれはどういうことだ………?」

その光景を見た後藤はオーズに問う

「お、俺にもサッパリ……」

オーズ達はその光景を眺めているしかなかったが

「ユーロ……ゲハッ！ き……さまあ……」

ウォンはまだ生きていた。地にはいつくばり血を吐きながら

「あれま、まだ生きてたの？ しぶといね。だったら引導を渡してあげるわ」

ウォンを見下しそう言うところ、ユーロはヒトのコアメダルを取り出す。それと同時に1本のベルト、タイラントのベルトが出現した

「変身」

『ヒューマンコアセット完了、チェンジタイラント!!!』

ユーロはベルトの中央の窪みにヒトのコアメダルをセットする。すると身体を橙の炎が包み、それを振り払う。するとユーロは仮面ライダータイラントに変身を完了する

だが装甲の色が黒からオレンジに変化していた

そしてメダスカラーを取り出しセルメダルを4枚食わせる

『メダルチャージレベル4!!! タイラント・バインド・チェーン！』

その発音と同時にタイラントは足を退けると地面から4本の鎖が飛び出しウォンを宙に浮かせ拘束する

さらにタイラントはメダスカラーにセルメダルを1枚食わせる

『メダルチャージレベル1!!! タイラント・デス・オーバーロード
!!!!!!』

タイラントはなんのためらいもなくで砲門をウォンへ向ける

「じゃあね。元閣下♪」

トリガーを引くと砲門からオレンジの光線が発射され、ウォンを体を貫き灰に帰す

タイラントはウォンを灰なった事を確認すると変身を解除しユーロへ戻る

そしてアインハルトに視線を向ける

「初めましてだね。今のヴィーズさん。どう先輩に会った感想は？」

「先輩……？まさか！？」

アインハルトは目を見開く

「そ、私が800年前のヴィーズよ」

ユーロは額に手を当てそれを一気に上にあげ、額を特徴とする髪型し下を向く

「元ヴィーズだと？」

「どうということだ？」

後藤の問いにユーロは顔を上げ答える

「私とセント、バンクの3人はウォンの下で、槍のバンクに盾のセント頭脳のユーロとしてつかえていた」

するとユーロは語りだす。800年前にこっちに来てからの出来事を

「あの頃の私はウォンの命令に従って、ヴィーズに変身して、ドルやらフランやらポンドやらバーツやらからコアメダル巻き上げるために毎日あいつらの尻追いけてたのよ」

やれやれというポーズをとる
そんなユーロに伊達が問う

「だったらなぜ、ウォンを消したんだ。しかも跡形もなくなるように」

「ん？ ああ、それね。だってそうじゃん。あいつだけ人間してるんだよ。腹もたつての」

「人間？」

その場のユーロとセント以外の全員の頭に『?』が浮かび上がる。するとセントが前に出る

「セントさん……？」

「はあ、だったらぼくも話すよ。銀のコアメダルは全て僕とユーロが作った!!!!」

「なっ！！！！」

その場の全員が驚く

「セントさんそれはいい！？」

「私からも話しましょう」

「バンクさん？」

オーズが声を上げるとセントの代りにバンクが話をし始める

「私やドル達は800年前にコアメダルを作らせようとした王の下で働く者でした。私は騎士団長、ドルは槍騎士、フランは医者、ポンドは弓兵、バーツは隠密者として王に仕えました。私たちはその中でも優秀な部類の人間として生活しました」

「人間って、まさかバンクさんたちは……………」

「はい。人間でした。もちろんセントさんもユーロもドル達も……………」

バンクは沈んだ表情でいう

「私達は数々の勲章を手に入れた。そして私の人間としての最後の勲章はコアメダルでした。王はセントさんのコアメダルを私たちに生みこみグリードにしたんです。セントさんは私たちをグリードにしたことに罪の意識を感じ、自らにメダルを埋め込んだのです」

「そしてぼくはグリードになりある物を作ったんだ」

「それがヴィーズのベルト……………」

アインハルトの言葉にセントは頷く

「ヴィーズの力はオーズと対をなすようにぼくが開発し、作り上げたベルトだ。だけどそのベルトのせいで1つの怪物を誕生させてしまった」

「それがウォン……………！」

セントの言葉を理解したオーズはその名を口にする。そしてユーロが言葉を出す

「そう。当時グリードでなかった私はヴィーズに選ばれ残っていた。私は銀の枠のメダルを使いウォンの命令でメダルを集めるため戦った。ある時ウォンの命令に逆らった私は奴と戦った。まあ、その時のことは忘れていたっぼいけどね。で、その最中ヴィーズの力と私の橙のメダルが共鳴し、暴走。そのせいで私はグリードになってしまった。幸いセントが作ったコアは完成していて、五感は奪われずあいつを倒すことができた。それから私はこの体を維持させるため

たくさんのヤミーを作りつつ、人間に戻るために研究したけど……」

するとユーロは下唇を噛み血が流れる

「戻ることはできなかった！！当時私にも好きな人がいた、その人との子も授かった！！なのにグリードになったとあの人に知られた時！！その姿を見られた時！！私はどうしたかわかるか！！！！お前らのように愛し愛でることのできない私の気持ちかわかるか！？セント、バンク！！だから私は許さないお前たちを！！そして私は人に戻る。このヒトのコアを使えば必ず！！」

狂った言いかたをし怒りにまかせた汚い物言いになる

「だからもうよお前たちのメダル！！！！」

ユーロは手を精一杯伸ばしメダルを奪うことを宣言する

するとユーロは森に飛び込み姿をくらます

その後この出来事は全て管理局に伝わり、この騒動は収集された大きな傷跡を残して……………

カウント・ザ・メダルス51会議と準備と信頼できる仲間（前書き）

佇むユーロ

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そしてヒトのコアをセットしてタイラントへ

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルズ51会議と準備と信頼できる仲間

ドルの襲撃から1週間後

前回の戦いでほとんどの銀のメダルがウォンが死にユーロの手に渡った。そしてユーロがタイラントの力を受け継ぎ、仮面ライダーコアのメダルがユーロの手の内にあるという最悪な状況になっていた。現在は地上本部の会議室で映司、アंक、なのは、フェイト、はやて、アインハルト、後藤、伊達、レイア、シグナム、ヴィータ、リン、アギト、スバル、ティアナ、ギンガ、ノーヴェ、チンク、ウエンディ、ディエチ、エリオ、キャロ、バンク、セントが今後の策をねるため集合していた。そしてはやてが話を始める

「で、これからの策をどうするかやけど。なにかいい案ある人はおらんか？」

「はい」

はやての問いにすぐに手を上げたのはセントだった

「じゃ、セントさんどうぞ」

セントはスツと立ち上がり口を開く

「では、コホン。実は数日前あるこんな物が送られてきた」

そう言ってセントが懐からだしたのは1枚のDVDだ
それを手前の機械にセットすると中央に大きなモニターが出現し、そこに写っていたのはほかでもないユーロだ。ユーロは椅子に座り喋り出す

『えーみなさんこんばんは。私はユーロ、見ての通りグリードです。私が今回このビデオを送ったのは他でもないメダルの返して貰いたいのです。現在私はほとんどのメダルを所持しています。そこで取引、4日後に私は私達が封印されていた場所で待ってるから銀のコアメダルを全て持って来て下さい。その日が過ぎれば私はミッドチルダに私のヤミーを送り込むつもりでいるからね。じゃあこれにて失礼。4日後待ってるからちゃんと来てよね。いい返事待ってるよ』

喋り終わると映像は消える

「ふざけたたまねをしたもんだなユーロの奴」

その映像を見たアंकはボソッとそう呟く

「そうやな。セントさんこれが送られてきたのはいつ頃や？」

「2日前です」

「2日前ゆうことは取引は明日でゆうことやな」

はやては顎に触れる

「そういえばセントさんが封印されてた場所ってどこなん？」

するとミッドの全体の地図が出現する

「えっと、たしかここです」

「そこは………」

そう言ってセントが指を指したのは古代遺跡のある場所だった

「そこってたしか遺跡の伝説があったよねはやてちゃん」

「せや、ここは昔から1番アルハザードに近いと言われている場所や」

「アルハザード………」

なのはの言葉にはやてが答え、フェイトは『アルハザード』という言葉聞いて奥歯を強く噛む

「アルハザードってなんですか？」

もちろんその知識がない映司疑問に思いはやてに聞く

「ああ、アルハザードっていうのは………」

はやてが話だそうとしたら。先走り、フェイトが語りだす

「アルハザードは忘れられた都市とも呼ばれ古代ベルカより前から存在し、時を操り、死者を蘇らす技術があるとされた場所です」

「それはなんとも大それた都市だな」

「ですね。死者を蘇らせる方法なんか存在するはずがないのに………」

フェイトの説明後、伊達、後藤がそれぞれの感想をいう

「そうだね………」

その言葉を聞いたフェイトは沈んだ表情になる
するとドンとはやてが机を叩き立ち上がる

「ともかくや！決戦は明日や！！各自今日中にできる事をやっておいてほしいんや。以上で会議を終わる各自解散！！」

会議は終了し皆は各自のやるべき事をするのであった



アインハルトは午後から日課のヴィヴィオ達との訓練に性をだしていた

「ふっ！はっ！」

空気を切る拳の音

（決戦は明日。勝っ！勝って私は私の道を行く！！！！）

そして拳を引き一気に突き出す

「はっ！！覇王断空拳！！！！」



その日の夜とある居酒屋のカウンター席

「おやじ！！もう一杯！！」

「あいよ！」

伊達と後藤は最後の夜と一緒に飲んでいた
伊達は居酒屋のおやじにビールを注文する

「伊達さん。飲み過ぎないでください」

「わーてるわーってるよ」

伊達はすでにへらへらし始めていた
するとガラガラと音をたてまたひとり客がやって来る

「後藤せんくばい。伊達せんくばい？」

伊達に呼ばれレイアもやって来たのだ

「あー、伊達先輩もうベロンベロンですね」

「ああ、明日の戦いに差し支えなければいいが……」

「大丈夫じゃないですか？ 結構アルコール度数低いやつ飲んでますし」

「そうか、じゃあレイア俺達も飲むか？」

「はい！」

そしてレイアは後藤の隣に座り共に酒を酌み交わすのだった



管理局の開発室

そこにはセントが今ディスプレイに表示された内容を整理していた
するとコンコンとドアがノックされる

「どうぞ」

「失礼します。セントさん」

そう言って入って来たのは妻のバンクだ。手にはコーヒーを2つ持
っている

「どうぞ」

「ありがとう」

セントはそう言うとき計を見る

「少し休憩するか」

セントは立ち上がりふたりはその部屋のソファに腰掛ける

「セントさん。私の話聞いてくれますか？」

「いいよ」

「私なんだかわかる気がするんです。あの娘の気持ち」

「あの娘ってユーロ？」

「はい、私もセントさんもユーロもグリードです。あの娘はきっと最初から苦しんでいたんですよ。好きな人には捨てられ孕むんだ子供はお腹の中で死んだ。だからずっと苦しんでいたんですよあの娘も……」

「そうだね。だからぼく達であの娘を救ってあげるべきなんだよ。

ぼく達の手で」

「そうですねセントさん」

そしてふたりはそっと唇を近づけ愛し合う者同士の大人のキスをし、ふたりはその場でそっと交わった



高町家の屋根の上

そこにはふたりの青年がいた。ひとり火野映司。もうひとはア
ンクだ

アंकは屋根に立ち、映司は腰掛け星空を眺めている

「なあアंकこれで終わるんだよな。この戦いも……………」

「さあな、負けるかもしれないぞ？」

「そうだな。だけど」

そう言うとき映司はパンパンと尻についたゴミなどを払い立つ

「お前はそんなつもりはないだろ？」

その言葉を聞くとアंकは鼻で笑って言う

「ふっ、当たり前だ。お前もそんなつもりはないだろ？」

「まああね」

それから少しの沈黙が訪れ、そして

「映司、明日は必ず勝つぞ」

「ああ、わかってる」

そしてアंकは右手を怪人体にし映司とクロスするように右腕同士をぶつけ合う



そして決戦当日高町家からこっそり出る映司とアंक

なのは達には内緒での出発。つまりふたりでケリをつけようとしているのだ

「映司。準備はいいな？」

「うん」

アंकに返事をするふたりはあらかじめ準備していたライドベンダーに乗り黙って進む

今日は霧が濃くなっていた、そのためライトをつけ走っている。すると目の前に6つの人影が姿を現す

映司とアंकはライドベンダーから下りその人影を確かめる。そしてそこにいたのは

「伊達さんに後藤さん、バンクさん、セントさん、レイアさん、それにアインハルトちゃん？みんなどうして……」

すると伊達は映司の前にでる

「火野歯食いしばれ」

伊達の静かな怒り。そして映司を思い切りぶん殴る

映司はぶっ飛ばされ地面に顔から倒れる。そしてその映司の胸倉を伊達は引っ張る

「火野。なんでお前は人を頼らない仲間を頼らない！！俺達はなんだ赤の他人か？いや違う。少なくとも俺達は数々の激戦をくぐり抜けてきた仲間だろう。だから俺達はお前を頼りもするし、助けもする」

そして伊達は胸倉を離し映司に手を差し出す

「だから。お前も俺達を頼ってくれ」

「伊達さん……」

映司はその手を掴み立ち上がると後藤も前にでる

「火野」

「後藤さん」

「確かに俺は始めはお前を毛嫌いしていた。だが今は違うお前は俺達と一緒に戦ってきた仲間だ」

後藤が言い終えると次にレイアが映司の前にでる

「火野先輩」

「レイアさん」

「私は昔仲間に頼るなんて事は一切せずに生きてきましたが、今は違います。後藤先輩も伊達先輩も、もちろん映司先輩もれっきとした仲間です」

レイアが言い終える次にバンクとセントが前にでる

「映司さん」

「セントさん、バンクさん」

「私も最初仕方なく敵として前に現れました。ですが今は映司さん達に感謝しています。皆様のおかげでこうしていられるのですから」
「それにこれはぼく達の蒔た種だ。最後もぼく達で収穫するよ」

ふたりが言い終えると最後にアインハルトが前にでる

「映司さん」

「アインハルトちゃん」

「私が初めて映司さんと会ったのはノーヴェさんとの訓練のときでしたね。私はあの時あたなの戦いを見て凄いの一言につきました。そして今はヴィーズという力を与えられ、今はこうして皆さんと肩

を並べる事のできるくらい強くなりました。ですから私も連れていってください!!」

そして全員から各自が持っていた言葉を聞いた映司は

「わかった! みんな俺と一緒に戦ってください!!」

「「「「おう!!!!」」」」

映司の言葉で団結を新たにしたメンバーはユーロが待つ遺跡へ向かった

カウント・ザ・メダルス52遺跡と決着と宇宙からの白いライダー？（前書き）

久しぶりな気がします

すみませんでした！！

ではお約束のジャンクションを

背を向ける頭がロケットのような白いライダー

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そして一気に右腕を上突き出す

「このあとすぐ！！」

カウント・ザ・メダルス52遺跡と決着と宇宙からの白いライダー？

「なんやて映司くん達が！？」

現在はやてはなのはから連絡を受け、着替えに取り掛かったとこだ

『うん。さっき部屋を覗いてみたらもぬけの殻で。たぶん……………』

「ケリをつけに行ったんやね。私達もさっさと準備して映司君達追うよ。なのはちゃん他みんなに連絡お願いな」

「うん！」

はやてはそういうと端末を切り着替えに戻る

「まっててな映司君、後藤君！！」



「ここか……………」

映司達は大きな壁の前に立っていた。セントは前に出て右手で壁に触れる

「はい、この壁はおそらくユーロがセルメダルで構築したものでしょう」

「なんとかなるのか？」

壁に触れているセントに後藤が問う

「問題ありません」

そう答えるとセントの触れているカ所から順にセルメダルの結合が融解されセルメダルとなり散らばる。壁の向こうは遺跡へ繋がる洞窟のようになっていた

「さて、行きましょう」

そしてセントはその洞窟へ入る。映司達もセントを後ろから追いかける

洞窟の中は階段になっておりそれをゆっくり下りていくと大きな遺跡が姿を表す

「すごい……………」

「いや、ほんとに……………」

映司の言った感想に伊達もつい声を漏らす

「ようこそグリード・アルカディアへ」

その言葉とともに手を叩きながらひとりの女性が現れる。ユーロだ全員はとっさに構え、アंकはタカ、トラ、バツタのメダルを映司に渡す

「遠いところまでお疲れ様」

『ふふっ』と妖艶な笑みを浮かべながら言う

「面倒だから手っ取り早くいくよ。さ、メダルをちょうだい。私は人間に戻るんだから」

そう言ってユーロは手を前に差し出す。だが映司達の決断は

「悪いけど、渡せない……………」

映司はそう答える。ユーロは首をガクンと倒したため息をつく

「はぁ……。そうくるとはそう思ってたけど……。まさか私が思ってたのと同じ言葉とはね……。まあいいわ」

するとユーロの腰にタイラントのベルトが巻かれる

「メダル、1枚残らずねこそぎ貰うだけだから……………」

『ヒューマンコアセット完了、チェンジタイラント!!』

ユーロはタイラントへ変身する

「ふふ」

映司達もそれぞれのベルトを巻き変身しようとしたが

「させないよ」

パチンと指を鳴らすと

「シヨオオオオオオオオカアアアアアアア!!」

と雄叫びを上げながら1体のグリードが姿を表す。以前ウォンが創造したグリード、シヨッカーグリードだ

シヨッカーグリードは映司とアインハルトの肩を掴むとどこかへ飛び去ってしまう

「映司!」

映司を呼ぶアンの声

「オーズとヴィーズはやかいだからよそへいってもらおうとする」
「ユーロオ!!!」

映司とアインハルトが連れていかれるのを後藤達は見ているしか出来なかった
すると『チャリンチャリン』と音がしバンの足に何かがぶつかる。
それはカラスとペンギンのコアメダルだった
バンはそれをスツと拾い、タイラントを見る

「バン、あの時の決着をつけましょう」
「わかったわ。いいわよ」

バンは腰にセルメダルでルーヴィーズのベルトを出現させる。そんなバンにセントは声をあげる

「バン!」
「セントさん。お願いします。ここは私と彼女での一騎打ちをさせてください」
「……。わかった」
「ありがとうございます」

するとバンは前に出、2枚のコアメダルをセットしルーレッダーを回転させる

『メダルルーレット! ホウオウ! カラスW! ペンギンW!』

バンクは深紅の炎に身を包み仮面ライダーブルーヴィーズへと姿を変える。そしてルーヴィーズはメダグレンバーを構えタイラントと向かい合わせて構える

「行くわよ。ユーロ!!!!」

「来なさい。バンク!!!!」

その言葉同士が開始のゴングとなり、タイラントもメダスカラーを握りルーヴィーズとの直接対決の幕が下ろされた



「うわああああああ!!」

その頃映司とアインハルトはショッカーグリードに捕まり別の場所へ連れていかれたのだ。ショッカーグリードが連れてきた場所は遺跡からそう遠くない草原だった

そして飛んでいるショッカーグリードはほとぼりの地面との高さで両手を離して地面にふたりを落とす

アインハルトは地面に着地するが映司は頭から落ちる

「大丈夫ですか!?!」

アインハルトは映司に駆け寄る

「うん、なんとか。それより」

映司は立ち上がりふたりは睨む。ひとつの対象物、ショッカーグリードを

「そういえばお前もいたんだったな」

映司とアインハルトはサッと戦闘体制に入る

「ふん、以前貴様にやられて以来出てなかったからなヒマで仕方なかった」

「あーそー。でもなんでお前はユーロに従ってるんだ。俺の知っているショッカーグリードは忠誠心が強いはずなんだけどな………」

「ああ、そのことか。俺はヒトのコアによって創造^{つくられた}つまり俺の主はヒトのコアを所持するものだ」

「なるほどね。よくわかった」

そういうと映司は先程アंकから受けとったタカ、トラ、バツタではなくいつも映司が持っているイマジンとショッカーのメダルとタカのメダルをベルトにセットしオースキャナーでスキャンする

「変身……！」

『タカ！イマジン！ショッカー！タマシー！タマシー！！タマシー……！！ライダーダマシー……！！』

映司はショッカーグリードに對をなすグリード、イマジン、ショッカー3つの怪人の力を得たコンボ、オーズタマシーコンボへと変身する

そしてアインハルトも

「武装形態………」

「ニャアアアアア……！」

アインハルトがそう呟くと相棒であるティオが肩から飛び出しアイ

ンハルトは武装形態へと姿を変える。本当はヴィーズに変身したいが、ヴィーズに使用するメダルは計6枚。映司が使用しているメダルを含めても5枚変身はできない

そのために武装形態へなった

そしてオーズとアインハルトはショッカーグリード向け走り出す
ショッカーグリードもそれに対抗しようと大きく腕と翼を広げる
だが次の瞬間！！

ズドオオオオン！！！！

という音がオーズ達とショッカーグリードの間に落ち砂煙りが舞う
砂煙りが晴れるとそこには後頭部から落ちたようなポーズをしている人、いや白いライダーがいた
そのライダーはボタンと倒れるとサッと起き上がる

「まったくまたこのパターンかよ。ついてねえな俺……………」

そう呟きながらついたホコリを払う
オーズにはそれが誰なのかわかった

「君は！！」

オーズは走り出し白いライダーに駆け寄る

「大丈夫かい？」

「おう、大丈夫大丈夫。こんなもんかすり傷にもなってねーよ。な
っ仮面ライダーオーズ」

その白いライダーはオーズのオレノツノにポンと手を置く

「俺も会いたかったよ。仮面ライダーフォーゼ」

カウント・ザ・メダルス53スイッチとモジュールと翼をもがれた朱鳥（前書き）

翼を広げ背を向けるバンク（人間体）

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そして羽が散らばりメダルになる

「このあとすぐ………」

カウント・ザ・メダルス53スイッチとモジュールと翼をもがれた朱鳥

「仮面ライダーフォーゼだと!?!」

ショッカーグリードは彼の新たな敵であるフォーゼに身構える
アインハルトはオーズ達に駆け寄る

「映司さん。彼は?」

「彼はフォーゼ。俺達と同じ仮面ライダーだよ」

「仮面ライダー!?!」

アインハルトはフォーゼの顔をじつと見る

「なに?」

「いえ……(ロケット?)」

アインハルトはそう思った
そんなことをしていると

「貴様ら、俺をコケにしているのか?」

ショッカーグリードはたいそうご機嫌斜めのようにだ

「おっ悪い悪い。別にバカにしてるんじゃないからさ」

フォーゼは振り返えって言う

「じゃ、行くぜ」

フォーゼはそう言うのとベルトの2番右のスイッチ、アストロスイッチを押す

『ロ・ケ・ツ・ト・オン』

するとフォーゼの右腕にオレンジ色のロケット、『ロケットモジュール』が出現し、そのブースターを使いショットカーグリードを殴り飛ばす

「ロケットライダーパンチ!!!」

「ぐあ!!!」

ショットカーグリードはフォーゼの拳を受け後ろに吹き飛ばす。だがショットカーグリードは空中で回転し着地する

「おのれえ!!!」

着地と同時に両腕からメダル状のエネルギー弾をオーズに放つが

「そうきたか!」

フォーゼは次に右から1番目のスイッチを押す

『ラン・ン・チャ・ー・オン』

すると足に青いミサイルランチャー、『ランチャーモジュール』が右足に出現する

「おら! 全弾発射!!!」

ズドドドオ！！！！と音を立てランチャーモジュールからミサイルが発射される

ミサイルはメダル状のエネルギー弾と衝突し爆発。そして爆風が起りお互いの視界遮られる

「くっ、前が見えん……！」

ショッカーグリードは両腕で爆風を払うとそこには『魂ボンバー』を発動したオーズがいた

「しまった！？」

「セイヤああああああああああ！！！！！！！！！！」

オーズは魂ボンバーをショッカーグリードの叩き込むがショッカーグリードは耐え抜き煙が彼をまとう

「はあはあ、ざまあねえ………」

ボロボロになりながらそう呟くが

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！！！！』

という歌が耳ショッカーグリードの入るさらに

『スキヤニングチャージ！！！！』

『ロ・ケ・ツ・トオン・ド・リ・ル・リミットブレイク！！！！』

空中ではオーズはタトバキックを発動。フォーゼは左から1番目のスイッチを押し『ロケットモジュール』と『ドリルモジュール』を

◆
ガキン、ガキンと鈍い音を立てながらルーヴィーズことバンクと、タイラントことユーロが互いの刃を交えていた

「なかなかやるねバンクさすがだよ」

「ありがとうただけ言っておくわ」

そしてタイラントはメダスカラーにセルメダルを2枚食わせる

『メダルチャージレベル2！！タイラント・チェック・ブレイク！』

メダスカラーの口を閉じ頭部から出ている刃が伸びそれを横から振り下ろす

「ふっ！！」

バンクは赤い翼を出現させ空へ飛び上がりその攻撃を回避するが

「かかった……」

タイラントはそう呟くとメダスカラーに今度は4枚のセルメダルを食わせる

『メダルチャージレベル4！！タイラント・バインド・チェーン！』

その発音後4方向の遺跡の壁の空間が歪みそこから1本ずつ鎖が飛び出しルーヴィーズを拘束する

ルーヴィーズは鎖を引きちぎろうともがくがその鎖は切りことができない
さらに追い打ちをかけるようにタイラントはセルメダルを1枚食わせる

『メダルチャージレベル1!!! タイラント・デス・オーバーロード
!!!』

その発音にルーヴィーズは振り向く。タイラントはすでにメダスカラーをバズーカモードに切り替えていた

「じゃあね。バンク」

そう言うとタイラントは『タイラント・デス・オーバーロード』をルーヴィーズめがけ放つ
ルーヴィーズはもろにそれを受け地上に落下する

「バンク!!!」

愛する妻が負けた瞬間に声を上げるセント
ズドンと音を立てルーヴィーズは落ち、バンクの姿へ戻る
それと同時にタイラントはバンクの前に立つ

「これで終わりだね。バンク」

するとバンクはキッした表情になり一瞬で怪人体に変身し顔めがけて手を伸ばすが

ドス!!!

カウント・ザ・メダルス54 墮ちし天馬と紫の敗北と揃いし銀のコアメダル（前

散らばる銀のコアメダル

「魔法少女リリカルなのは○○○」

そして全てが融合し3枚のヒトのコアへ

「このあとすぐ………」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プツ・トツ・ティラーノ・ザウルス……！』

「うおおおおおおおおおおおおお……！！」

オーズはプトティラコンボへチェンジする

そしてアインハルトはヴィーズドライバーを取り出し6枚のメダルをセットしヴィーズへ変身する

「変身……！！！」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！ユニコーン！バイコーン！ペガサス！プツ・トツ・ティラーノ・ザウルス……！！ユツニ・バガース……！！レージェンド……！！パープルコアコンプリート……！！』

アインハルトはヴィーズパープルコアコンプリートへ変身する
すると後藤と伊達もオーズ達に並ぶように立つ

「火野、俺達も加勢する！」

後藤がそうとふたりは互いのバースドライバーを腰に巻きセルメダルを構えると

「待て……！！」

と響くセントの声

「セントさん？」

「ここからは紫の戦いになる。何が起るか分からない。ここはぼく達3人でやる。後藤くん達は引っ込んでいてくれ。映司くんと一緒に来た君も手は出さないほうがいい」

フォーゼは頷き、後藤は

「はい……わかり……ました………」

今のセントの表情は以前テレジアに対し怒った時の顔だ
つまりその顔に恐怖をおぼえ言葉がつまったのだ

「へえ。まさかあんたがでるとはね。バンクが消えたから立ち直るのに時間がかかると思っていたのに」

「あいにくと、ここに来る前にすでに覚悟はしておいたからね。バンクが消えるのもぼくが消えるのもあったことさ」

そう言うとセントの身体をセントはグリード体に変身し、ドリランサーを構える

「行くぞ!!」

ドリランサーの矛先をドリルのように回転させ突進するセント
オーズもメダガブリューを地面からつかみだし、ヴィーズも天より
デュアルスピアを召喚し3人はタイラントへ向かい走り出す

「ふっ………」

タイラントも「面白い」と呟く3人目掛けて走り出す
メダスカラーを振り回し3人から攻撃対象をセントに絞り特攻する

「はあ！」

タイラントはセントに向かって斧を振り下ろすがセントはドリラン

サーを盾にし防御する

オーズとヴィーズはタイラントの後ろの方でジャンプしメダガブリューとデュアルスピアで背後からダメージを与えようとするが、タイラントはメダスカラーを落とし、セントを蹴り飛ばすと振り返ってオーズとヴィーズの刃を受け止める

そしてオーズとヴィーズを思いっきり投げ飛ばす。オーズとヴィーズは壁に激突する

だがセントも負けていない

「はあああああああああ!!!!」

ドリランサーを回転させタイラントを貫こうとするが、タイラントは素早い動きで全ての攻撃を回避する。だがタイラントは避けているだけではない

ドシュ!!!!

と音をたてセントは腹に一撃もらってしまう

「くっ……………!!」

そして一気にタイラントは拳を引くと手には3枚のコアメダルがあった

セントは倒れ人間体へ戻ってしまう

「ゴメン……………バン…ク……………」

そう言い残すとセントはセルメダルになってしまう

「セントさん!!!まさか、そんな!?!」

これでセントも消滅してしまった。そしてタイラントの次のターゲットをヴィーズに変更する

「次はお前だあああああああ！！！！！」

タイラントは全力で走り出す

オーズはヴィーズとタイラントの間に立ちメダガブリューにセルメダルを食わせ『ストレンドウム』を発動する

『プツ・トツ・ティラーノ！！ヒツサーツ！！！！』

とメダガブリューは発音しオーズはバズーカモードへ切り替える

「邪魔だああああああああ！！！！」

その音を聞いたタイラントはまだ走るのをやめない

そしてオーズはメダガブリューのトリガーを引くと発射口から紫の波動が一直線に伸びタイラントを包み込むが

「邪魔をするなど言っただろお！？」

タイラントは執念で『ストレンドウム』を受けつつもメダガブリューの発射口を掴む

そしてタイラント右足での蹴りがオーズの首にヒットする

「ぐあ！！！」

オーズはタイラントの蹴りを受け壁に激突し、変身が解除される

「映司さん!!」

ヴィーズはオーズを助けに向かおうとしたが目の前にタイラントが立ちはだかる

ヴィーズはデュアルスピアでの突きを繰り出すがそのすべてを素早い動きでかわされる

そしてタイラントから距離をとるとデュアルスピアを投げ捨てメダルをスキャンする

『パープルコア!! スキャニングチャージ!!』

ヴィーズは必殺技『霸王空断拳』を発動し右腕にアインハルト自信の力と紫のコアの力を融合させ『霸王空断拳』をタイラントへ繰り出す。だがタイラントは無抵抗だ

ズドオオオオオオン!!!!

と響く打撃音。ヴィーズとタイラントは砂煙りで覆われる

「やったか!？」

後藤はそういうと、徐々に砂煙りは晴れていく。その光景とは……
タイラントがヴィーズの『霸王空断拳』を受け止めていた

「こんなもののなの? 今のヴィーズの実力は!!!!」
「うぐ!!!」

タイラントは腹部へ膝蹴りを受ける。そしてタイラントはヴィーズドライバーに触れ変身を強制解除させアインハルトへ戻ると膝から

崩れ落ち、タイラントはドライバーのユニコーン、バイコーン、ペガサスのメダルを抜き取り先程セントを消して奪ったメダルと今奪ったメダルを宙へ投げるとそれをキャッチするようにしメダルを取り込むと持っていたヴィーゾドライバーを足元に落としザッザッとアंक、後藤、伊達、レイア、フォーゼに少し離れた位置で立つ

後藤、伊達、レイアは前に出て変身の体制に入りフォーゼは前にでるがタイラントは右腕を前に突き出す

「アंकお前のメダル貰うよ!!!」

「!？」

タイラントがそう言うのとアंकの右腕が浮き上がりタイラントはメダルを吸収し始める

「アंक!!!」

「ちよっ、おい!アンコ!!!」

「アंक先輩!!!」

フォーゼ以外の3人はアंकの腕を押さえメダルを吸収されないようにするが

「ムダムダ♪」

マスクの下でニヤッと笑って言う

するとアंकの持つ銀のコアメダルがすべて飛び出しタイラントは1枚ずつゆっくりと吸収していく

すると、タイラントは黒い波動を放たれタイラントのベルトの窪みにヒトのコアメダルが3枚セットされ

『ヒューマンコアフルコンプチェンジ!!! グリッド!!!!!!』

この発音後、タイラントの身体を7色のオーラを纏う。そしてタイラントはそのオーラを振り払うと巨大な大剣、ゼクスカリバーを握っていた

「さあ、最後の戦いと洒落込もうじゃない。オーズ、ヴィーズ、バース、プロトバース、アルカナ全員まとめてかかってこい!!!!!!」

カウント・ザ・メダルス55変身できない者と自爆と誕生せし炎の破壊神（前書

膝を突き倒れるタイラント。すると炎の玉が出現し

「魔法少女リリカルなのはOOO」

腕が伸びタイラントを飲み込む

「このあとすぐ………」

カウント・ザ・メダルス55変身できない者と自爆と誕生せし炎の破壊神

「さあ、最後の戦いと洒落込もうじゃない。オーズ、ヴィーズ、バース、プロトバース、アルカナ全員まとめてかかってこい！！！！！」

ゼクスカリバーを振り回し言う。ゼクスカリバーとは黒い剣だ。ヒトのコアが3枚そろったタイラントが使用できる、まさにタイラント専用のファイナル・ウェポンと言ったところだ

「完全体!?!」

壁に激突し変身を解除させられた映司は壁に倒れこみタイラントの姿をみて言う

そして後藤、伊達、レイアはあらかじめ巻いていたベルトにセルメダルとDカンセットし変身する

「「「変身!!」」」

『『カポーン!!!!』』

『プシュ!!!!』

後藤はバースへ、伊達はプロトバースへ、レイアはアルカナへ変身しフォーゼと共にタイラントに向かい走り出す

映司も立ち上がり変身する

「変身!!」

『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!!タ・ト・バ!!!!』

映司はオーズタトバコンボへ変身しメダジャリバーとメダガブリュ

一の二刀流でタイラントに向かい走り出す

「アंकさん、メダルを!!」

アインハルトも変身しようとベルトを腰に当てるが、ベルト状にならず腰に巻かれない

先程強制的に変身を解除させられ、しかもメダルを抜き取られたつまりアインハルトはヴィーズの能力に捨てられたのだ

「そんな………」

アインハルトは変身できず膝から倒れ泣きじゃくる

「チッ……!!」

そんな姿を見かねたアंकはグリード体に変身しオーズ達に加勢する

『ドリルアーム!!』

バースは『ドリルアーム』を展開しタイラントを殴るように振り回すだが、タイラントは軽い身のこなしでバースの攻撃全てを回避する

『クレーンアーム!!』

プロトバースも『クレーンアーム』を展開しシュプリガーハリケーンをたたきつけようとするが、ワイヤー部分を切断されタイラントは腕からフランの水の塊をプロトバースへ投げつける

プロトバースはもろにその攻撃を受ける

フォーゼは『ロケットモジュール』を展開し殴りかかるがヒラリと躲しゼクスカリバーで背を打撃し地面に叩きつける

ズドン！！と背後からタイラントは襲われ、右肩から左脇腹に強い拳激を受ける

この技を使える唯一の拳士はこの世にたったひとり、アインハルト・スラトス彼女のみだ

「き、貴様！！！」

タイラントは右腕のゼクスカリバーを後ろに振り回すがアインハルトは自分から後ろに飛び剣劇を避ける

この隙にオーズ、アインハルト、バース、プロトバース、フォーゼ、アルカナは一か所に集まった

アंकは壁にもたれかかり左肩を抑えている

「はあはあ。まさか、私が不意を突かれるとはね……………」

『霸王空断拳』により大きなダメージを受けた

「あいつ今ダメージを受けましたよね？」

バースは思った。「なぜ今の攻撃は受けたのか？」とそして確信した「奴の弱点は背中だ。背中 of 装甲は腕や身体 of 装甲より、かなり薄いのだ」と

「でもどうする。たぶんこれ以上は背中には攻撃させないようになるはずだあいつは」

「そうですね。どうすれば……………」

オーズ達は策をねるがなかなかいい案が思いつかない……………すると、アルカナがタイラントに向かい走り出す

「レイア、どうするつもりだ!？」

「これから自分が自爆して、奴の動きを抑えます! そのうちに攻撃を! ! !」

「待て! !」

バースはアルカナを止めようとしたがアルカナは聞く耳を持たずアルカナの最終能力『ファイナルセルチャージ・NO、0・カン・デストラクトボム』を発動する

アルカナは走りながらDカンをアルカナトランサーにセットする

『ファイナルセルチャージ・NO、0・カン・デストラクトボム! ! !』

その発音後アルカナのボディが赤く点滅しタイラントに抱き着く

「貴様! 離せ! 離せ! !」

タイラントは必死で抵抗するが

「悪いけど離さない! !」

アルカナも必死でタイラントを押さえつける

そしてカウントが始まる

『5・4・3……』

カウントが『3』を宣言するとアルカナの背の装甲がパージしレイアの姿が現れ、レイアはアルカナのスーツを残し後ろの逃げる

『……2・1・0』

カウントが『0』を宣言するとアルカナのスーツは爆発しタイラントを灰色の煙が身を包む

「やったか!?!」

レイアはこのこの爆発で倒せるかと思ったがタイラントはまだ生きていた

「なめたマネしやがって、貴様は潰す!!!!!!」

「させるか!!!!!!」

「!?!」

タイラントは後ろから声が聞こえたため振り向くと、そこにはバースとプロトバースのふたりがブレストキャノンを展開し『ブレストキャノン・シュート』をユーロへ叩き込む

「なめあがって!!!!!!」

タイラントは地面に手を付き岩壁を出現させる

「「はああああああああああああああ!!!!!!」」

バースとプロトバースは『ブレストキャノン』のエネルギーが尽きるまで発射する

だがタイラントの後ろでは

『スキヤニング・チャージ!!!!!!』

「!?!」

オーズが必殺技、『タトバキック』をタイラントに放つ

「セイヤあああああああああ！！！！」

タイラントは振り返る隙も与えず背後から必殺キックを受け前に倒れ変身が解除されユーロに戻る、岩壁はバースとプロトバースによって破壊された

そしてオーズ達はアインハルト達の元へ急いだが……………



（負けた？私が？負けた……………）

ユーロは薄れ行く意識の中にいた

（どうして私が負けた？ヒトのコアを3枚持って、完全な姿になったのに……………。力が欲しい、あいつらを血祭りにできる力を！！！）

ユーロは欲した。『力』を圧倒的な全てを無にする力を……………

（ナンジハ、ワレヲノゾムカ？）

ユーロの頭に響く声

（えー！？）

（ナンジガ、チカラヲホッスルナラワレガソノチカラをサズケテヤロウ…………。タダシ、イノチノホシヨウハシナイ。ソレデイイナ？）

頭に響く声は何かはわからなかったがユーロはハッキリと言う

(いいだろう、よこせ！お前の力を！！！)
(ヨカロウ！！)



変身を解除したユーロを捕まえようとバースが手錠をはめようとしたその瞬間
ユーロのからだはムクリと起き上がる

「なに！？」

オーズ達も戦闘体制に入る
ユーロの身体が宙に浮き、懷から4つのアイテム、以前映司の記憶から具現化し奪い取ったエビ、カニ、サソリのコアメダルとメモリーのメモリ。そしてヒトのコアメダルが3枚出現しそれら全ては宙で円を書きつつユーロの身体へ入り込む

『変身！！！！』

その声と同時にユーロはタイラントへ変身する。そして身体を炎が包み込んだ

その炎は徐々に大きくなる
すると炎から腕と足が伸びる。その腕はまるで炎に覆われたタイラントの腕のようだ。だらに炎のようになったタイラントの身体も出現し

最後に頭も姿を現す。その姿がまるで……

『ぬわあああああああああ！！！！』

ユーロだったものは大声で叫ぶ

『我は、この者の願により復活をとげた真の欲望の仮面ライダー！
！！負の感情を糧とし、深い欲により我は蘇った！！我が名は、仮
面ライダーコアタイラント！！！！』

カウント・ザ・メダルス56フルコンボと己の欲望と超タトバ（前書き）

正面に並び立つオーズ全コンボ

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

そしていっせいに構える

「このあとすぐ!！」

カウント・ザ・メダルス56フルコンボと己の欲望と超タトバ

仮面ライダーコアタイラント

それはユーロの欲望によりウォンが具現化したメモリとメダルとタイラントとゼクスカリバーの闇の力が融合した、まさに究極のネガライダーだ

そしてこのコアタイラントこそ以前、オーズ達が見た映像の巨大なライダーの正体だ

コアタイラントはじつとオーズを見る

『久しいな、仮面ライダーオーズ!!』

コアタイラントはオーズの存在を知っている。それもそのはずだ。なぜならこのコアはオーズの記憶から具現化した物だ。つまり、オーズやダブルと戦った仮面ライダーコアなのだ

『あの時はよくも我を倒してくれた!今度は我が貴様を倒す番だ!!』

コアタイラントは巨大な右腕をオーズ達へ振り下ろす

オーズ達はそれ进行とか回避しオーズはアークの元へ行き、バースとプロトバースはアインハルトとレイアを連れて二手に分かれる

『うぬう……、ちょこまかと!!』

コアタイラントは辺りが暗いせいかオーズ達を探し出すのに手間取っていた

その頃物陰に隠れていたオーズとアークはふたりで策をねっていた

「アंकどうするあいつ？あいつが前俺たちが倒したコアなら、お前のメダルで何とかならないか？」

「無理だろうな。あいつは今ユーロというグリードと63のコアメダルを取り込んでいる。おそらく、通用しないだろうな」

「そんな……」

オーズは絶望しそうに下を向くが

「だったら、俺のだけじゃなければいい」
「え？」

そう言ってアंकが取り出したのはメダルホルダーだった

「映司、フルコンボであいつ片付けてこい！！！」

「わかった！！」

オーズはメダルホルダーを受け取り緑のクワガタ、カマキリ、バッタのメダルをセットしそのメダルをスキャンする

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガータ・ガタ・ガタキリバ！ガタキリバ！！！』

緑に発光しオーズがガタキリバコンボへと変身し、8人に分身する。だがコアタイラントの目にもその緑の光が入る

『そこかあ、ふんぬううう！！！！』

コアタイラントはオーズ達の方を向き。殴りかかるが

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガータ・ガタ・ガタキリバ！ガタ

キリバ！！！！！』

『ライオン！トラ！チーター！ラッタ！ラーター！！ラトラーター！！！！』

『サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ……サゴーズ！！！！』

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！！！！』

『シャチ！ウナギ！タコ！シャシャシャウタ！！シャシャシャウタ！！！！』

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プツ・トツ・ティラーノ・ザウルース！！！！』

『コブラ！カメ！ワニ！ブラカ〜ワニ！！！！』

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！！！！』

その拳は8つのオーランサークルに弾かれる。そしてコアタイラントはよろめきながら後ろに下がりそのオーズの光景を見る

『なんだ、その姿は！？』

コアタイラントの目に入ったのはオーズガタキリバコンボ、オーズラトラーターコンボ、オーズサゴーズコンボ、オーズタジャドルコンボ、オーズシャウタコンボ、オーズプティラコンボ、オーズブラカワニコンボ、そしてオーズタトバコンボだ

そして8人のオーズは同時にメダルをスキャンする

『『『『『スキヤニング・チャージ！！！！』』』』』

オーズの目の前に『OOO』と3つのOのマークが出現し全オーズは同時に攻撃を仕掛ける
その頃バース、プロトバース、アインハルト、レイアの4人も物陰に隠れオーズが8種類のコンボに変身するとバースたち動き出した

「伊達さん、俺たちも行きましょう」

「おう!!」

バースは自分で使おうとしていた『ハッピー・アーマード』をプロトバースに渡す

「使い方がわかりますよね」

「大丈夫、大丈夫。お父さんちゃんとわかってるから」

プロトバースは親指を立てる

「誰がお父さんですか」

バースは「はあ」とため息をつくともダルを連続で6枚スロットし『グリップアクセラレータ』を回転させる

『クレーンアーム、ドリルアーム、キャタピラレッグ、ジョベルアーム、カッターウィング、ブレストキャノン』

バースはバース・デイへと完全装着する。プロトバースも『ハッピー・アーマード』をベルトにセットしバース・デイ・アーマードへと変身する

『カポーン!! バース・デイ・インフォメーション・ハッピー・アーマード!!!!』

「さーて続いてはっと!」

プロトバースは続いてタカのセルメダルを10枚をスロットする

『バース！チェンジ・イーグル！！』

プロトバースの装甲がタカメダルの赤へと変化し巨大なタカの翼を広げる

「行くよ後藤ちゃん！！」

「はい！！レイア、フォーゼ」

「はい！！」

「ん？」

「アインハルトちゃんを頼む」

「わかりました！！」

「おう！」

後藤はレイアとフォーゼにアインハルトを預けるとカッターウィングで飛翔し、プロトバースと共にコアタイラントへ挑む
そしてオーズはコアタイラントとの戦闘の真っ最中だった

オーズガタキリバコンボはクワガタヘッドからの稲妻で攻撃しつつ、
カマキリソードで切り付ける

オーズラトラーターコンボはトラクローを展開し何度も切り裂き、
チーターレッグで翻弄する

オーズサゴーズコンボはサイヘッドの角で突撃し、ゴリラバコーン
で何度も殴る

オーズスタジャドルコンボはタジャスピナーを駆使しコアタイラント
へ攻撃する

オーズシャウタコンボはシャチヘッドからの水流を放ちつつウナギ
ムチで何度もたたく

オーズプトティラコンボはプテラウィングで空へ飛び、冷気を発し、
ワイルドステインガーで貫き、メダガブリューで切り裂く

オーズブラカワニコンボはコブラヘッドからコブラを召喚し、ワニ
レッグで何度も蹴る

「でもそんなことをしたら、皆さんは!!」

(構いません、遠慮なくお願いします)

「わかりました!!!」

返事を返すとバンクとセント声は聞こえなくなる

そしてオーズは思った、『あいつに勝ちたい!世界を守りたい!!この手が届くなら全力で届く、力がほしい!!!』そう思った。その瞬間、アインハルトの持っていたヴィーズドライバーが光し宙に浮く

「これは……」

アインハルトとレイアは啞然と見ていた。そしてヴィーズドライバーはそのままオーズの元へ飛んで行き、オーズの目の前で止まると、オーズドライバーのバックルが外れ宙に浮きそしてクワガタ、カマキリ、バッタ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、タカ、クジャク、コンドル、シャチ、ウナギ、タコ、プテラ、トリケラ、ティラノ、コブラ、カメ、ワニ、イマジン、ショッカーのメダルはそれぞれのコンボのオーランサークルの柄のメダルとなりガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、タジャドル、シャウタ、プトティラのメダルはヴィーズドライバーにセットされる

さらにヒトのコアメダルは黒から白になり、ブラカワニ、タマシーそしてヒトのメダルはオーズドライバーにセットされる

そしてヴィーズドライバーの中央にあいている空間にオーズドライバーが収納されオーズの腰に戻り、右斜めに倒すと、オーズは全てのメダルをスキャンする

『ガタキリバ!!』

右肩にガタキリバのオーランサークルが出現

『ラトラーター!!』

右腕にラトラーターのオーランサークルが出現

『サゴーズ!!』

右足にサゴーズのオーランサークルが出現

『タジャドル!!』

左肩にタジャドルのオーランサークルが出現

『シャウタ!!』

右腕にシャウタのオーランサークルが出現

『プトティラ!!』

右足にプトティラのオーランサークルが出現

『ブラカワニ!!』

頭にブラカワニのオーランサークルが出現

『タマシー!!』

胸にタマシーのオーランサークルが出現

『ヒト!!』

最後に両足の間にヒトのコアメダルの紋章が出現する

そして全てのオーランサークルが融合し黄金に光るタトバコンボの
オーランサークルとなりオーズの胸の紋章になる

『『タ・ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！！』』』

オーズは超タトバコンボへと姿を変えるのだ

このオーズこそ以前映司達が見た映像の44種類のコアメダルを取り
込んだ姿だ

カウント・ザ・メダルス57チェンジ・ザ・メダルスとオーランサークルと欲望

構えるオーズ超タトバコンボ

「魔法少女リリカルなのはOOO」

そして飛び上がり超タトバキックを放つ

「このあとすぐ!!」

カウント・ザ・メダルス57チェンジ・ザ・メダルスとオーランサークルと欲望

超タトバコンボ

それは、全てのコアメダルを取り込んだ、無限を超えたオーズだ
姿は黄金に光るタトバコンボだが、肩、肘、膝、背中にそれぞれ小型オーランが付け加えられている

コアタイラントはオーズに拳を向ける

『ぬあああああああ!!!!』

オーズはかわそうとせずただ立ち尽くす

コアタイラントの拳がオーズに届きそうになると

『ゴリラ!』

と発音すると、オーズの右腕のオーランにゴリラの紋章が出現し、
右手首にゴリラバコンが装着され、コアタイラントを迎え撃つ
コアタイラントの拳はゴリラバコンに押し負け、足を滑らせ背中
から倒れる
さらに、バツタレッグで高くジャンプする。特定の高さまで飛び上
がると

『ワニ!クロコダイル!』

と発音し右足にワニの紋章、左足にクロコダイルの紋章が各個所の
オーランに出現しコアタイラントに向かい両足にワニとクロコダイ
ルのエフェクトを出現させコアタイラントに噛みつき、巨大なコア
タイラントの体に着地する

超タトバコンボの特性は全てのメダルの力を最高まで引き上げるこ

とができるのだ。しかもクワガタなら頭という法則をぶち破り、全個所に好きにそのメダルの力を装備できる

『ぐおおお……。なめるなあ!!』

コアタイラントは体の上のオーズを左腕で掴もうとするが

『カマキリ!』

と発音され、コアタイラントの腕が体から引き離される

オーズの左腕のオーランにカマキリの紋章がつけられ左手首にカマキリソードがついている

そのカマキリソードで左腕を切断したのだ

『ぐおおお……。腕があああ!!!!』

右腕で切断された個所を抑えるコアタイラント。そして体を起こすと、オーズはジャンプし地面に着地する

コアタイラントはオーズを踏みつけようと左足を上げ、踏みつけようとするが

『チーター!オオカミ!』

両足に右足にチーター、左足にオオカミの紋章が出現し、足が振り下ろされる

コアタイラントは足を上げるとオーズの姿がない

『なぬ!?どこへ消えた!?』

きよろきよろと周囲を見回す

「ここだ!!」

コアタイラントは背後から声がし振り向くとそこには両肩にプテラ、背中にクジャク、両膝にペガサスの紋章が出現しおり、空中を飛んでいた

さらにコアタイラントの顔面まで降下すると

『コンドル!ペンギン!』

ペガサスの紋章はコンドルとペンギンの紋章とチェンジし爪先とかかのクローでコアタイラントの顔面を縦に切り裂き

『ティラノ!』

プテラのエクスターナルフィンで飛翔しつつ背中の中紋章がクジャクからティラノに変わるとティラノのテイルディバイダーが出現しその尾で顔面を叩きつける

『ぬおお……』

左腕を抑えていた右腕はあまりの痛さに顔を抑える
これで胸への隙ができる。オーズは胸へ飛び込み

『ハイエナ!』

左腕のオーランがハイエナの紋章となり『X』の字でトラクローと同時に胸を切り裂く

『ぐおおお!!』

と声を上げるとコアタイラントは屍餅をきオーズはクモの能力で壁に吸着する

そして、右肩にタカの紋章、右肘にクジャクの紋章、右膝にコンドルの紋章、左肩にホウオウ、左肘にカラスの紋章、左膝にペンギンの紋章、さらに背中にはタジャドルとホーラスギンの融合した紋章が出現する

『タカ！トラ！バッタ！タカ！クジャク！コンドル！ホウオウ！カラス！ペンギン！タ・ト・バ！！！！タ〜ジャ〜ドル〜！！！！ホ〜ラス〜ギン〜！！！！』

オーズは『タトバ』・『タジャドル』・『ホーラスギン』の合計9枚のメダルで変身した姿だ

そしてオーズは右腕のタジャスピナーを自動回転させ、遺跡の天井めがけて飛ぶ

『クワガタ！ライオン！サイ！シャチ！プテラ！コブラ！タカ！エレメントスキャン！！！！』

オーズは超タトバでのタジャスピナーを使用した必殺技『エレメントギガ』を発動し天井を破壊し空まで飛ぶ

その姿はこっちに向かっていているなのは達の目にも止まった

「あれは、映司さん！？」

となのはは声を上げた

オーズは空を超え、宇宙まで飛び出すとオーズは超タトバの基本形態に戻り、ベルトのメダルをスキャンする

『フルコンプ!!! スキャニングチャージ!!!!』

するとオーズからコアタイラントに目がけ『ガタキリバ』・『カブトンモ』・『ラトラーター』・『イエツネーオ』・『サゴーズ』・『コグーサ』・『シャウタ』・『サエーカ』・『ブラカワニ』・『ハダイカゲ』・『プটেイラ』・『ユニバガス』・『タジャドル』・『ホーラスギン』・『タトバ』、全てのオーランサークルが出現しそれをオーズは通過するようにコアタイラント目がけて超タトバの必殺技『超タトバキック』を発動する

「セイヤああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

オーズがオーランサークルを通過するたび黄金に光るコンボがオーランサークルを通過していく。
そして最後に『タトバ』のオーランサークルを通過しコアタイラントに直撃する

『ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!』

コアタイラントは『超タトバキック』を受け、爆発する
エビ、カニ、サソリ、メモリーのメモリはコアタイラントの体内からはじけ飛び、破壊さる。オーズ以外の全員は遺跡の外へ脱出していた

コアタイラントの爆炎はオーズが破壊した天井から吹き上がった

「おいおい、大丈夫なのか、火野は?」

伊達はその光景を見て声を漏らす

そして

「みんな!!」

伊達たちは振り返るとそこには突入部隊のなのは達がいた
はやてはアंक達を見回すが、映司がいない

「映司君は？まさか!？」

はやては「映司がまさかあの爆発に巻き込まれた」と思い遺跡の入り口を覗くと

「みんな……………」

そこには映司がいた

「映司君!」

「映司さん!」

「火野君!」

「火野さん!」

全員が映司の名を呼ぶ

「ただいま……………」

映司はただそういうと、なのは達の元へ歩み寄るが
ガタツと音が遺跡の入り口から聞こえる
全員そつちを向く

「逃がさないよ…………、オーズ……………」

そこには、ボロボロの姿のユーロがいた。からだからセルメダルをこぼしている

それに映司達は構えるがアंकが口を開く

「映司あれはもうダメだ。あいつ崩れるぞ」

「え……………」

映司はアंकの言った言葉に疑問を覚えた

ユーロは映司に手を伸ばしゆっくりと前に一歩ずつ前進する

「はぁ、はぁ、まだだ。まだ私は終わらない……………。終わってたまるか……………。私は人に戻るんだ。私はただ幸せになりたかったの……………」

ユーロは最後まで言いえぬまま、身体は崩れ落ち、ヒトのコアメダルが飛び出しヒトのコアは割れる

その場の全員はユーロが消えるのをただ見ているしかなかった

その後この事件は『グリード・ザ・メダルズ事件』と呼ばれることとなった

カウント・ザ・ラストメダル墓石とさよならと試合開始（前書き）

背を向け去っていく映司とアंक、後藤、伊達

「魔法少女リリカルなのは〇〇〇」

そして全員が肩を組んで元の世界へ

「最終回このあとすぐ!!」

カウント・ザ・ラストメダルス墓石とさよならと試合開始

『グリード・ザ・メダルス事件』から数日後

ポートフォール・メモリアルガーデン。そこにはスバルの母、クイント・ナカジマやティアナの兄、ディーダ・ランスター等が安らかに眠る土地である

そしてその場の海に面している場所にはふたつの墓石が立っていた。ひとつには「バンク・グリード安らかに眠る」、もうひとつには「セント・グリード安らかに眠る」と刻まれている

つまり『グリード・ザ・メダルス事件』で落命したグリード、バンクとセントの夫婦が肉体はないが、この場に眠っている

さらにふたりの墓石の前にはふたりの青年がいた。映司とアंकだ。アंकの手には赤と白い花が詰まれている。映司は屈みふたりの墓石に黙祷を捧げていた

「まさか人間てのは生きているかどうか曖昧なグリードに墓を与え
るとはな」

「いいじゃないかアंक」

黙祷を終えた映司は立ち上がりアंकの肩に手を置く

「お前のお姉さんもここでずっと眠ることになるんだ。少し寂しい
けどね……………」

「知るか……………」

「さ、行こう。そろそろ約束の時間だ」

「ああ……………」

そして映司はライドベンダー駐車してある駐車場へ向かう
アंकはふたりの墓石を向き持っていた花束を海へ向かって投げる

「じゃあな。バカ姉貴、セント……」

とアंकは言い残しその場を去り、映司と共に管理局地上本部へ向かう



数時間後、管理局地上本部ではある装置が置かれていた。それは映司達を元の世界へ帰還させるためのものだ。そして映司達の帰還をなのは達や聖王教会、ルーテシア達は送り出そうと集まっていた

「みんないままでありがとう」

映司はアंक、後藤、伊達を代表して言う

「それにしてもこの装置ちゃんと俺達の世界に帰れるようになってんのか？」

装置を眺めて言うアंक

「大丈夫ですよ。銀のコアメダルの力を利用して次元の壁をこじ開ける装置らしいです。セントさんが設計した物だし、一応メンテナンスも終えていますよ」

ユーノがアंकの問いに答える

「そのそのコアメダルもヴィーズの力もメダルシステムもちゃんと管理局で管理する。安心してな。ライドベンダーとかにいたっては博物館に送られるかもな♪」

はやてが今後のコアメダルとメダルシステムの事をニコニコしながら言う

「そうですか。なら安心して俺達も行けます」

「さよか」

そしてなのは達は順番に映司達に別れの言葉を告げる

「元の世界に戻っても私達の事忘れんなよ」

頬をかきながらのノーヴェの別れの言葉

「さらばだな。お前達の事は一生忘れない」

微笑みながらのチンクの別れの言葉

「さよならっスね。兄いにみんな。また会えるといいっスね。うぐっ……………」

泣きじゃくりながら言うウェンディの言葉

「さよならだね。また会える日を待っているよ」

笑顔で最後のディエチの言葉

「気をつけてください。私達はいつも応援しています」

微笑みながらのギンガの言葉

「また会えるとうれしいです。その時はまた私の家に来て下さい」

笑顔でのスバルの最後の言葉

「また会えるかわからないけど、会えたらいいわね」

会える事を信じるティアナの言葉

「じゃあな。今度また一緒に酒飲もうや」

酒を飲みかわす事を約束するゲンヤの言葉

「また会えるといいですね」

「その時は旅の話を聞かせてください」

エリオとキャロの最後の別れの言葉

「また会いましょ。連絡してくればアイス用意しておくわよ♪」

ニヤニヤと言うルーテシアの言葉

「身体には気をつけてくださいね」

映司達の身体の心配するシャマルの言葉

「じゃーな。またガチンコしようぜ」

またオーズと勝負する約束をするヴィータの言葉

「さらばだな。再び会える事を願っている」

再び会える事を信じるザフィーラの言葉

「さらばだ。今度は私とも手合わせ願いたいな」

勝負の約束をするシグナムの言葉

「じゃ、先輩方おたっしやで！また会える日を待ってます！！」

レイアの再開を信じる言葉

「みなさんさよならですう」

「また会えるといいな」

はやてとリインの再開を信じる最後の言葉

「じゃあねみんな。怪我や病気には気をつけてね」

フェイトの身を気にかけた言葉

「さよならだね。向こうに戻っても私達の事忘れないで、全力全開で頑張ってね」

なのはの別れの言葉

「みなさん！ありがとうございました！！これからも頑張ってくださいー！！」

元氣いっぱいと言うリオの言葉

「私もみなさんの事は忘れません。頑張ってください」

優しく微笑みながらいうコロナの最後の言葉

「じゃ、みなさん私さよならとはいいいません！また会えると信じてますから」

再開を信じるヴィヴィオの言葉

「みなさんありがとうございます。みなさんのおかげで私はこうしていられます。ですからみなさんもこれから頑張ってください。また会える日を心から待っています」

そしてアインハルトの感謝と再開の言葉

「みなさん……本当にお世話になりました！！これかもオーズとして全身全霊で戦って行こうと思います！！！」

映司のなのは達との別れの言葉

「じゃあな………」

アंकはソッポ向いて言うが内心まんざらでもない最後の言葉

「ではみなさんありがとうございます。これからはバースとして、世界を守り続けようと思います！！！」

後藤のこれからの決意の言葉

「んじゃ、長いこと世話になったけど。みんなありがとね」

伊達の感謝の言葉

こうしてお互いの言葉を送り会っている間に装置の準備が完了した。銀のメダルは装置を囲むように『O』の字を描きセットされている。そしてユーノの指示に従って映司、アंक、後藤、伊達はプレートの上に立つ

「それでは転送します。スイッチオン!!」

ユーノがスイッチを押すと銀のメダルが光だし映司達の姿が消える元の世界に帰ったのだ

映司達の存在が消えるとその場の全員は解散し仕事に戻ったが、アインハルトは空を見上げていた

「アインハルトさん? どうしたんですか?」

ヴィヴィオがアインハルトに声をかけるとアインハルトは振り返る

「いえなんでもありません」

アインハルトは再び空を見上げこう心で呟いた
(さよなら。映司さん)



それから数分後映司達は元の世界に帰ってきていた

「帰ってきたんだなアंक」

「ああ、そうらしいな」

そう言うと映司は空を見上げる

「なー、アंक」

「なんだ？」

「やっぱり空ってどこの世界も青いんだな」

「はっ、らしいな」

アंकは映司言葉に吐き捨てぎみな口調で言う

「それより映司。ヤミーだ結構近い」

「よし、行こう!!」

そして映司とアंकは気配を頼りにヤミーの元へ向かった

魔法少女リリカルなのは○○○

それは少女と出会い。その少女と戦い。そして仲間を増やし、友を増やし、家族を増やし、世界を救ったとある欲望のない男の物語

そしてこの男を待つ試練は？

この男を待つ強敵は？

そしてこの男が失った欲望とは？

それから数ヶ月後
ミッドのドーム
そこではとある大会が開催されていた

「これよりミッドインターナショナルシップ決勝戦を開催します！
！！」

中央で審判が仕切ると会場から盛大な拍手になる

「選手入場！赤コーナー！高町ヴィヴィオ！！！！」

拍手の波の中ヴィヴィオは真つすぐと会場の中央へ向かう

「青コーナー！アインハルト・ストラトス！！！」

アインハルトも髪をなびかせながら中央へ向かう
そして両者睨み合い、構えをとる

「この時がいよいよやって来ましたがねアインハルトさん！！」
「そうですね。ですが私は負けませんよヴィヴィオさん！！」

そして試合開始のゴングは鳴らされた

「霸王断空拳！！！」

「ディバイン・バスター！！！」

お互いはお互いの必殺技を出し合い最後の最後まで全力全開で戦ったのだった

魔法少女リリカルなのはOOOこれにて終幕とさせていただきます
タ・ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！！！！

カウント・ザ・ラストメダル墓石とさよならと試合開始（後書き）

リリなの〇〇〇最終回

みなさんのおかげでなんとか最終回を迎えることができました！！
皆様の感想、アイディアのおかげでこうしてリリなの〇〇〇は最後
を迎える事ができた訳ですが

最終回をおきになにか新しい作品やNOVELとしてリリなの〇
〇〇のライダーを主役にした短編ストーリーを考えたりしたいと思
います

これも皆様のおかげであります
ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3883p/>

魔法少女リリカルなのは〇〇〇

2011年11月16日19時55分発行